新選組日記

永倉新八日記・島田 魁日記を読む

PHP新書 257

木村幸比古

Kimura Sachihiko

PHP SHINSHO

Table of Contents

新選組日記

永倉新八日記・島田魁日記を読む

木村幸比古

はじめに

新選組には一種の男の美学がある。近藤勇、土方歳三、沖田総司らは武州多摩で剣の腕を磨き、国家の大事に志を抱き、一振の剣を握って幕府浪士組に加わり京都に入った。入洛した近藤がその決意を一首したためた。

事あらばわれも都の村人と
なりてやすめん皇すめら御み心こころ

近藤の本意は攘夷にあり、その精神は「尊王佐幕」であった。徳川への忠義は「誠」一字に秘められ純粋無垢な心をもって新選組を組織した。しかし、武士への異常なまでの憧れから時として過激極まりない行為に走り修羅の群れのようにみられた。
男社会特有のほとばしる精神力、逞しい行動力、あるときは酒を酌くみ交わし口角あわ飛ばし国家を論じ合った。立場こそかわれど勤王志士と比べ国を憂うる心に遜色はなかった。
峻しゅん烈れつな隊規のもと血の粛清がくり返され、実像と虚像があいまって歴史からうとんぜられてきた。
一つには評価できうる文献史料が少なかったことに加え、映画、小説の世界でダークな面ばかりが誂か伝でんされ、いつしか虚像の新選組像が出来あがってしまったきらいがある。
新選組を弁駁する史料が見つかれば違った見解もおのずから生まれてくる。研究者間で最も注目された史料に、新選組の幹部のひとり永倉新八の幻の手記『浪士文久報国記事』がある。この手記の一部分は歴史書に散見するものの、ながらくその所在は不明のままであった。平成十年、友人の多田敏捷氏が偶然にも見つけ入手、著者に鑑定を依頼してこられた。かつて永倉の史料を霊山歴史館で展示したことがあり、幻の手記三冊を手にしたが、真筆であることがわかった。
手記を一読したところ、幹部しか知りえない生々しい行動録が一字一句刻み込むように綴られていた。まさに世紀の発見だった。

この手記を著者は『新選組戦場日記』（ＰＨＰ研究所）として刊行、版を重ねたが、その後絶版となっていた。この書籍は維新史研究者の間でも高い評価を受け、新選組史のみならず、稀少な幕府側史料として一石を投ずる内容だけに文献史料として各方面で引用された。

永倉は手記の中で「此この一いつ戦せん記き大だい苦く戦せん中ちゆう日につ記き致いたしタル事ことニアラス、事件終おわりテ時とき々どき之の覚おぼえヲ繰くり出だシタレハ実じつ説せつ咄ばなシニテ有㆑之。故ゆえに作さく本ほんトハ事ことナリ戦せん場じよう日につ記きト知ルへシ也」と記し、散さん華げした隊士への追悼の意味も込めて戦場日記を綴った。表紙には「徳とく川がわ家け御おん撰せん之の兵へい」と大書、幕臣のプライドをあらわした。

この手記と同じく新選組の日記を綴った隊士がいた。永倉と寝食を共にした島田魁さきがけである。二番組組長を務めた永倉のもとで伍長を務めているが、二人は江戸飯田町の坪内主馬道場で心形刀流剣術を学んだ仲で隊内でも行動を共にしてきた。

日記は一般に『島田魁さきがけ日記』（霊山歴史館蔵）と呼ばれ二冊の冊子から成り、いわば新選組通史で、事件の経過を名文で理路整然と綴っている。

一冊目は近藤を中心に、入洛から新選組の結成、池田屋事件などを綴り、二冊目は土方を中心に鳥羽伏見の戦い敗走後の戊辰戦争を描き、土方の戦死で筆を措おいている。一冊目には近藤の戒名、二冊目には土方の戒名をしるし、両雄に対するレクイエムとした。とくに島田は土方を敬慕し、「歳進院誠山義豊大居士」の戒名の書付けを終生、肌身離さず持っていたという。

永倉と島田は幾度となく死線を越え生き残った数少ない隊士であった。戦い終わり目にしたのは、幕府崩壊後に新しい政権に取り残された幕臣らが、誇りを失い旧幕政への非難を口走る姿であり、これに失望し嘆いた。永倉にしろ、島田にしろ、それを許すことができなかった。

この手記、日記にはその想いが込められている。京都での五年間の新選組の活躍は華々しいものであった。新選組隊士は幕臣に取り立てられたものの、四カ月後には将軍慶喜が大政奉還、つづく鳥羽伏見の戦いで敗走した。

新選組は江戸へ戻り再起を誓い甲陽鎮撫隊を結成、甲州勝沼へ進軍したが士気を欠き「誠」の精神もうすれ、永倉の手記では「瓦解」としるし甲州城の攻取はならなかった。

永倉は近藤、土方らと袂を分かち、旧友の芳は賀が宜ぎ道どうらと靖せい共きょう隊たいを創設し、奥羽各地を転戦し会津で援軍を求めたが成功せず、隊を離脱して失意のうちに江戸に戻った。
沖田は病死、近藤は刑場の露と消えたが、土方はなおも鬼神となって「誠」の大旗をひるがえし北辺の地で勇猛果敢に戦い散った。
これらの戦歴を綴った手記、日記はまさに新選組の栄光の紙碑であった。今、新選組を見直す気運がある。敗者の歴史でなく、隊士ひとりひとりの徳川に忠義を尽した生きざまに共感を覚えるのではないだろうか。
刊行にご尽力を賜った多田敏捷氏、ＰＨＰ研究所新書出版部の佐々木賢治氏、霊山歴史館の館員に深甚なる謝意を表したい。

平成十五年六月

木村幸比古

新選組戦場日記　目次

凡例

一、翻刻にあたっては、史料原本の記載体裁を可能な限り再現し、誤字、脱字、当て字などもそのままとしたが、次の諸点については表記を改めた。

一、漢字は原則として常用字体を用いた（人名は除く）。変体仮名は、原則として改めた。

一、破損虫損などによって判読困難な箇所は、□、□□で示し、できるだけ前後の文章から推測し、文字を入れた。

写真提供　霊山歴史館

第一章　浪士文久報国記事 一

将軍家茂二条城出門之図

浪士文久報国記事

〔表紙〕
「松村蔵書」印
浪士文久報国記事
弐
長倉所有

〔表紙見返し〕
鵜殿鳩翁松平上総介并ならびに新徴組創立ノ事ハ史籍協会出版ノ東西紀聞参照ノ事
巌

時ニ文久三亥年五月事発

大原左衛門督殿為御勅使御下向被為在叡慮之趣ハ、攘夷御決談被為遊候ニ付徳川家茂公速ニ御上落可致トノ御沙汰、依テ文久三亥年三月中旬御上落被為在候ニ付於幕府尽忠報国ノ有志御募リニ相成此時御掛リ御役人左之通リ記ス
浪士頭　板倉伊賀守殿
取扱　　松平上総之介殿
御目附　中条金之助殿　杉浦正一郎殿
池田修理殿
取締リ　山岡鉄五郎殿　松岡萬殿
取調役　佐々木只三郎殿
高久範之助殿
速見又三郎殿
廣瀬六兵衛殿
此時市ケ谷加賀屋敷柳町ニ罷在ル近藤勇、剣術導場ヲ開キ日々稽古盛リ、稽古終テ稽古人集リ各々議論国事ヲ愁ル、其連中左ニ記ス
近藤勇始メ　山南敬助　土方歳三
沖田総司　永倉新八　佐藤彦五郎

大月銀蔵　斎藤一　藤堂平助

井上源三郎　佐藤房二郎　中邨太吉

沖田林太郎

右之連中申スニハ、今般幕府ニオイテ小石川傳通院大真寮ニテ大集会ト承リ、一同大慶直ニ近藤勇　沖田総司　永倉新八　松平上総之助殿江罷出テ、同志申込ミ上総之助殿承知ニ依テ、二月五日姓名書認メ伝通院大真寮江一同罷出、此時松平上総介殿退役ニ付鵜殿旭翁殿取扱被仰付、左之姓名取扱江差出ス

近藤勇始メ　山南敬助

土方歳三　沖田林太郎

沖田総司　永倉新八　藤堂平助

佐藤彦五郎　斎藤一　井上源三郎

大月銀蔵　佐藤房二郎　中邨多吉

右同志加入ニ相成ル、鵜殿旭翁殿道中法令一統江申渡ス、組々相立ルニ依テ各方組頭ヲ人撰可致様御達シ有之、近藤勇相募ル仁丈ハ、水戸芹澤村浪人芹沢鴨実者天狗隊ノ隊長、木村継次申ニハ、此仁ヲ組頭ニ人選イタス、依テ芹沢鴨召連レル人ハ、矢張水府浪人新見錦野口健次、平間重助、平山五郎右合塀　近藤勇、池田徳太郎道中宿割浪士出頭出羽国清川村出生清川八郎舎弟斎藤熊三郎清川ト同論之者村上俊五郎石坂宗順

＊松村巌（一八六二〜一九四一）は高知の郷土史家
＊長倉は永倉の本姓
〔表紙〕
「松村蔵書」印
浪士文久報国記事
弐（一）
長倉所有

〔表紙見返し〕
鵜う殿どの鳩きゆう翁おう、松まつ平だいら上総かずさの介すけならびに新徴組の創設については史籍協会の東西紀聞を参照の事。

松村巌

時に文久三亥年五月に事を発す

大原左衛門督（重しげ徳とみ）殿が勅使として江戸に下ったが、叡慮の趣旨は、天皇が攘夷の決断をされたので、徳川家いえ茂もち公はすみやかに上落（洛）せよとのことだった。そのため、文久三亥年三月中旬に上落（洛）されることになり、幕府は尽忠報国の有志を募集することとなって、その係の役人は左のとおりで、それを記す。
浪士頭　板倉伊賀守（勝かつ静きょ）殿
取扱　　松平上総介殿
御目附　中条金之助殿　杉浦正一郎殿
池いけ田だ修しゅ理り殿
取締役　山岡鉄五（太）郎殿　松岡万よろず殿
取調役　佐々木只ただ三さぶ郎ろう殿　高久範之助殿
速見又三郎殿　広瀬六兵衛殿
このとき市ケ谷加賀屋敷柳町に住む近藤勇は、剣術導（道）場を開いて毎日、盛んに稽古をしていたが、稽古が終わると門弟たちは国事を議論して国を憂いていた。その者たちを左に記す。

近藤勇はじめ山南敬助、土方歳三、沖田総司、永倉新八、佐藤彦五郎、大月（槻）銀蔵、斎藤一、藤堂平助、井上源三郎、佐藤房二（次）郎、中なか邨むら（村）太吉、沖田林太郎。
右の者たちがいうには、このたび幕府が小石川の伝通院大真（信）寮で有志募集のための大集会を開くそうで、一同は大いに喜んで、ただちに近藤勇、沖田総司、永倉新八が松平上総助（上総介）殿のもとへ行き、同志となることを申し込んだ。上総之助（上総介）殿がこれを承知してくれたので、姓名簿を用意して、一同は二月五日に伝でん通つう院いんの大真（信）寮へ行った。このときには松平上総介殿は辞任しており、代わりに鵜殿旭（鳩）翁殿が取締の後任となっていたので、左の姓名簿を差し出した。
近藤勇はじめ山南敬助、土方歳三、沖田林太郎、沖田総司、永倉新八、藤堂平助、佐藤彦五郎、斎藤一、井上源三郎、大月（槻）銀蔵、佐藤房二（次）郎、中邨（村）多（太）吉。
この者たちが同志として加入することとなり、鵜殿旭（鳩）翁殿より集まった一同へ道中の規則が申し渡された。また組を編成するため、各自に組頭を選ぶようにとの達しがあり、近藤勇の同志たちだけが、水戸芹沢村の浪人である芹せり沢ざわ鴨かもを選んだ。この芹沢は、実は天狗隊の隊長であった木き村むら継つぐ次じのことである。芹沢鴨が引き連れていたのは、やはり水府浪人の新にい見み錦にしき、野の口ぐち健けん次じ（司）、平ひら間ま重じゅう助すけ、平ひら山やま五ご郎ろうで、彼らと合塀（併）することとなった。
近藤勇と池田徳太郎は道中宿割となり、浪士出頭は出羽国清川村生まれの清川（河）八郎と、弟の斎藤熊三（太）郎、清川（河）と論を同じくする村上俊五郎、石坂宗順（周造）である。

永倉新八手記『浪士文久報国記事』

近藤勇

解　　説

　表紙には松村巌の蔵書印があり、松村の旧蔵本であったことがうかがえる。松村は高知出身の郷土史家で梅ばい梁りょうと号した。
　また、同じく表紙に永倉の本姓の長倉所有とある。
　文久三年（一八六三）五月のこと。孝こう明めい天皇は公家の大原重しげ徳とみを左衛門督に任じ、勅使を命じ東下、六月十日江戸城に臨んで勅諭を伝達した。孝明天皇の叡慮（考え）の趣おもむきは、攘夷の決断につき、十四代将軍徳川家茂に速やかに上洛いたすようにとの御沙汰であった。
　しかし、『島田魁さきがけ日記』の冒頭には「文久三亥年二月上旬、将軍公御上洛ノ御沙汰有之」とみえる。
　この御沙汰によって将軍が三月中旬上洛するにあたり、幕府は尽忠報国の者を募った。
　ちょうどこの頃、近藤勇は江戸市ヶ谷柳町で天てん然ねん理り心しん流りゅうの剣術道場試し衛えい館かんを構え、日々門人らと稽古に励み盛況であった。稽古の後、門人らと国事について議論をしては憂いていた。
　その門人には近藤はじめ山南敬助、土方歳三、沖田総司、永倉新八、佐藤彦五郎、大槻銀蔵、斎藤一、藤堂平助、井上源三郎、佐藤房次郎、中村太吉、沖田林太郎らの面々がいた。
　門人たちは、このたび幕府において小石川伝通院大信寮で大集会が開かれると聞き、一同大喜びですぐに近藤、沖田、永倉の三人が松平上総介のところへ行き、同志の参加を申し込んだところ承諾され、二月五日、参加者の名簿を伝通院大信寮へ一同で持参、鵜殿鳩翁に山南、土方、沖田林太郎、沖田総司、永倉、藤堂、佐藤彦五郎、斎藤一、井上、大槻、佐藤房次郎、中村らの名簿を提出し応募した。これが浪士組のはじまりであり、のち新選組となる若者たちの出たび発だちであった。
　鵜殿から隊士に道中での規則を申し渡された。隊士の中には水戸の浪人芹沢鴨がいた。本名を木村継次といい、天狗隊（党）の隊長という。実際はそうではなく水戸では尊攘派の浪人を天狗と称していたという。芹沢の一党には新見錦、野口健司、平間重助、平山五郎らがいた。

近藤はこの時、六番隊に入り浪士組取締付の池田徳太郎の下役で道中の宿割を務めていたが、浪士組を統括していたのは出羽出身の清河八郎と山岡鉄舟（鉄太郎）であった。

清河は本名斎藤元司といい出羽国清川村（山形県東田川郡清川）の出身、生家は造酒屋を営んでいた。江戸に遊学し昌平黌に入り、剣は北辰一刀流の千葉周作の門人だった。神田お玉ヶ池に私塾を開く一方、尊王攘夷を論じあう虎こ尾びの会を主宰し、山岡鉄舟、石坂宗順（周造）、村上俊五郎ら十五名の同志が集まった。

文中の「同論之者」は虎尾の会のことである。

文久三亥年二月十二日

文久三亥年二月十二日浪士一統関東発足中仙道ヲ登ル、組頭左ニ記ス

壱番　徳永大和　弐番　石坂宗順

三番　芹沢鴨　四番　新見錦

五番　斎藤源十郎　六番　村上俊五郎

七番　青木慎吉　八番　中澤宇之助

九番　松澤良作　拾番　宇都宮左門

拾壱番　山本仙之助

拾二番　森出鉞五郎

拾三番　村上常右衛門

拾四番　大門志津馬

拾五番　大館鎌三郎　拾六番　岡田盟

拾七番　黒田桂民　拾八番　常見一郎

拾九番　根岸友山　廿番　山田官治

芹沢鴨組下左ニ記ス

山南敬助　土方歳三　沖田林太郎

沖田総司　永倉新八　藤堂平助

斎藤一　原田左之助　井上源三郎

平山五郎　野口健次　平間重助

佐藤房二郎　中村太吉

文久三亥年二月十二日

文久三亥年二月十二日、浪士一統は関東を発足して中仙道を登った。各組頭を左に記す
。

一　番　　徳とく永なが大和やまと
二　番　　石いし坂ざか宗そう順じゅん
三　番　　芹せり沢ざわ鴨かも
四　番　　新にい見み錦にしき
五　番　　斎さい藤とう源げん十じゅう郎ろう
六　番　　村むら上かみ俊しゅん五ご郎ろう
七　番　　青あお木き慎しん吉きち
八　番　　中なか沢ざわ宇（良りょう）之の助すけ
九　番　　松まつ沢ざわ良りょう作さく
十　番　　宇う都つの宮みや左門（左さ衛え門もん）
十一番　　山やま本もと仙せん之の助すけ
十二番　　森もり出（土ど）鉞てつ五ご郎ろう
十三番　　村むら上かみ常つね右衛え門もん
十四番　　大門（内）志し津づ馬ま
十五番　　大館鎌（謙）三郎
十六番　　岡おか田だ盟ちかい
十七番　　黒田桂民（桃とう珉）
十八番　　常つね見み一いち郎ろう
十九番　　根ね岸ぎし友ゆう山ざん
二十番　　山やま田だ官かん治（司じ）
芹沢鴨の組下を左に記す。
山南敬助　土方歳三　沖田林太郎　沖田総司
永倉新八　藤堂平助　斎藤一　原田左之助
井上源三郎　平山五郎　野口健次（司）　平間重助
佐藤房二（次）郎　中村太吉

文久三亥年二月二十二日

文久三亥年二月廿二日道中無滞京入
旅宿ハ壬生村前川庄司宅、鵜殿旭翁殿南部亀二郎宅、御目附御取締調役右三役新徳寺本堂、清川八郎、八木源之丞隠宅芹沢鴨組下近藤勇同宿都テ悉ク謹慎
清川八郎御所江浪士一同ノ連名ニテ建白イタス其旨趣左ニ記ス
今般幕府御世話ニテ上京仕候得共、禄位等ハ更ニ受不申只々尊攘之大議ヲ奉期候、万一皇命ヲ妨ケ私意ヲ企テ候輩於有之ハ、譬タトエ有司ノ人タリトモ聊無用捨建責此度一統之決心
文久三亥年二月浪士三百三拾余有人連名ニテ学修院江差出ス、夫ヨリ関東表ヨリ申来ル、此度嶋津三郎生麦村ニテ夷人殺害イタシ、依テ外国ヨリ幕府江応接償ハイ金差出スカ、嶋津三郎相渡、但シ者軍鑑差向ケ様カ、右三ケ條之内返答ニ可及トノ次第、清川八郎是ヲ聞クト自分カ謀叛是アル故、大キニ笑ミヲ含浪士一統ヨリ関東下ノ願速ニ差出ス願之通リ被仰付
御老中板倉伊賀守殿、清川八郎暗殺イタセトノ内意、取調役并ニ芹沢鴨組一統エ御達シ有之程ニ手ヲ廻しヲリ清川八郎土州邸内エ参リ其跡ヲツケ、四条辺ニテ殺害イタサント存スル処山岡鉄五郎御朱印ヲ持チ持居リ清川ノ側ニ始終付キヲリ、夫故ニ殺害スルコト難相成残念局エ戻リ最早東下ニ相成ル、取調役江諾ス
此時芹沢鴨組一統残ル処ノ旨趣ヲ申上ル、若シ鵜殿旭翁殿不取扱ナラハ決心イタス、芹沢鴨、近藤勇惣名代トシテ御取扱江罷出テ此度東下ニ相成ル、御旨趣ハ更ニ不相訳私共拾四人ハ是非トモ京師ニ止ル存意
其旨趣ハ大樹公暫ク御滞留被為在、就テハ未タ攘夷ノ皇命相下テス、夫ニ清川八郎東下イタシ寮ル処横浜鎖港イタスノ所存ト私共愚案ニハ皇命下リシヨリ、欠付ケ参リシトモ攘夷ノ魁ニ可相成、依テ私共身体如何様ニ相成トモ京師ニ止リ度趣申上ルト、鵜殿旭翁殿感心有之速ニ松平肥後守殿ニ進達ス、肥後守大慶思召是迄通リ御賄被下、拾四人ノ者京師ニ止リ可申御沙汰依テ拾四人ノ姓名
芹沢鴨　近藤勇　新見錦
山南敬助　土方歳三　沖田総司
永倉新八　藤堂平助　原田左之助
平山五郎　野口健次　井上源三郎

斎藤一　平間重助

三月廿六日御役人始メ清川八郎其外浪士一統東下、清川八郎謀叛横浜鎖港イタシ夫ヨリ相州小田原城ヲ抜キ東海道ノ諸侯随ハセ日月ノ御幕ヲ飜シ、京師へ登リ三藩ト同意徳川ヲ威スノ所存、清川八郎過宿ニ相成ル了簡夫故ニ関東ニテ清川八郎、村上俊五郎、石坂宗順悉ク令サクイタス

清川八郎麻布古川町ニ儒者有之、右之者ノ処江参ル其帰リヲ待チ居リ赤羽橋ニテ佐々木只三郎ノ手ニテ暗殺イタス、夜ニ入リ斎藤与三郎、岡田助松、木村粂丞、右三人ニテ清川の首持参ル、村上俊五郎、石坂宗順其外四五人召捕ル、大名江御預ケニ相成ル、山岡鉄五郎、松岡萬、厳重御咎ヲ蒙ル、跡浪士ハ酒井左衛門尉殿江御預ケ

壬生村郷士前川庄司宅、八木源之丞隠宅、南部亀次郎宅旅宿イタス、壬生浪士ト号エ松平肥後守殿江願出シ、尽忠報国之有志隣国江募リ出ル、大坂江下リ八軒家京屋忠兵衛方ヲ旅宿文武師範之宅江参リ同志相募ル、其外諸方ヨリ寄集ル、大凡百人程ニ相成ル、壬生連文武修行イタサセル、此時役人ヲ定ム

隊長芹沢鴨、近藤勇、副長ハ新見錦、山南敬助、土方歳三、組頭沖田総司、永倉新八、藤堂平助、原田左之助、斎藤一、平山五郎、野口健次、井上源三郎、勘定方　平間重助

文久三亥年二月二十二（三）日

文久三亥年二月二十二（三）日、道中何事もなく京都に入る。
旅宿は壬生村前川庄（荘）司宅となる。鵜殿旭（鳩）翁殿は南部亀二郎宅、御目付、御取締、取調役の三役と清川（河）八郎は新徳寺本堂、八木源之丞宅の離れ座敷に芹沢鴨の組下が入り、近藤勇たちも同じ宿で、全員が謹んで宿泊した。
清河八郎は御所へ浪士一同の連名で建白したが、その趣旨を左に記す。
このたび幕府の世話によって上京したものの、禄位などは受けておらず、ただただ尊攘の大議（義）を願うものである。万一、朝廷の命令を妨げ、私意を企てる者があるときには、たとえ有司の人であろうとも、まったく用捨（容赦）なく建（譴）責することを、このたび一同は決心した。
文久三亥年二月、浪士三百三十人あまりの連名で、これを学修（習）院へ差し出した。
その後、関東表から、このたび嶋（島）津三郎（久光）が生麦村で夷人を殺害し、そのため外国より幕府に申し入れがあり、賠償金を差し出すか、嶋（島）津三郎の身柄を渡すか、あるいは軍鑑（艦）を差し向けるか、右の三ヶ条のうちから返答せよと追及された次第との連絡があった。清川（河）八郎はこれを聞くと、自分が謀るところがあるため、大いに笑って喜び、浪士一統の関東へ戻りたいとの願いを素早く差し出すと、願いのとおりにせよと仰せ付けられた。
これによって御老中の板倉伊賀守殿より、清川（河）八郎を暗殺せよとの命令が、取調役と芹沢鴨の組の者たちに達せられた。その手配をしたところ、清川（河）八郎が土州（土佐藩）邸に行く後をつけ、四条あたりで殺害しようとしたものの、山岡鉄五（太）郎が幕府の御朱印を携帯して清川（河）に同行していたため、殺害することができず、残念ながら宿に戻ったが、すでに取調役へ浪士一同の東下が許可されていた。
このとき芹沢鴨組の一統は京都に残留したい旨を申し上げた。もし鵜殿旭（鳩）翁殿が承知してくれなくとも決心し、芹沢鴨と近藤勇が代表として御取扱のもとへ参って、このたび東下となった御趣旨は、まったく名分の立たないものであり、私共十四人はぜひとも京師に止まりたいとの存念を伝えた。
その趣旨は、大樹公（家茂）がしばらく御滞留される訳は、いまだ朝廷の攘夷の命令を実行していないことにある。また、清川（河）八郎が東下したのは横浜を鎖港するためであるが、それは朝廷よりの命令が下されてから欠（駆）け付けても攘夷の魁となるこ

とができる、と私共は考える。そのため、私共の体がどのようになっても京師に止まりたいと申し上げると、鵜殿旭（鳩）翁は関心を寄せ、すみやかに松平肥後守殿（容かた保もり）にその旨を達した。肥後守は大いに喜ばれ、これまでどおりに経費を下され、十四人の者は京師に止まるように御沙汰された。

この十四人の姓名は、芹沢鴨、近藤勇、新見錦、山南敬助、土方歳三、沖田総司、永倉新八、藤堂平助、原田左之助、平山五郎、野口健次（司）、井上源三郎、斎藤一、平間重助である。

三月二十六（二十八）日、御役人はじめ清川（河）八郎そのほか浪士一統は東下した。

清川（河）八郎の謀は、まず横浜を鎖港し、それから相州小田原城を攻略して東海道の諸侯を従わせ、日月の御幕をひるがえして京師に登り、三藩と同意して徳川を威おどすというものである。清川（河）八郎は過宿（宿を去る、つまり江戸を去るの意味と思われる）するつもりだったので、そのため清川（河）八郎は村上俊五郎、石坂宗順にすべてのことを命じていた。

しかし、清川（河）八郎は麻布古川町の儒者の家に行った帰り、赤羽橋で待ち伏せしていた佐々木只三郎の手によって暗殺された。夜になって斎藤与三郎、岡田助松、木村条（久）丞の三人が清川（河）の首を持って帰り、村上俊五郎、石坂宗順そのほか四、五人を召し捕り、大名預けとなった。山岡鉄五（太）郎、松岡万は厳重御咎めとなり、あとの浪士は酒井左衛門尉殿へ御預けとなる。

（京に残った者は）壬生村郷士の前川庄（荘）司宅、八木源之丞の離れ座敷、南部亀次（二）郎宅を宿として、壬生浪士と名乗って松平肥後守殿へ願い出て、尽忠報国の有志を隣国で募集することとした。大坂へ下り、八軒家の京屋忠兵衛方を宿とし、文武師範の道場を訪れて同志を募り、そのほかにも諸方から寄り集まったため、おおよそ百人ほどになったので壬生へ連れていき、文武の修行をさせた。このときに役職を定めた。

局長は芹沢鴨、近藤勇。副長は新見錦、山南敬助、土方歳三。組頭は沖田総司、永倉新八、藤堂平助、原田左之助、斎藤一、平山五郎、野口健次（司）、井上源三郎。勘定方は平間重助。

八木邸

清河八郎

解　説

　浪士組は文久三年（一八六三）二月二十二日に入洛したのではなく二十三日だった。『島田魁日記』には「御先供トメ三百五十人程同月二十五日京都壬み生ぶ村江着ス」とある。
　本文に「道中無滞とどこおりなく」とあり、また近藤の二十六日付の小島鹿之助宛の書状にも「京地へ二十三日滞り無く着仕り候、道中筋も差し支つかえ之これ無く、乍はばかり憚ながら御ご懸け念ねん被くだ下され間敷候」とあるが、近藤が本庄宿で芹沢らの旅宿をとり忘れ、野宿を余儀なくされた芹沢が火事を思わせる大おお篝かがり火びを焚き、うっぷんを晴らしたという事件があった。浪士組は入洛して旅宿を壬生寺周辺の壬生村の前川荘司宅にとる。前川家は代々八木姓を名乗っていたが幕末期に前川姓にかえている。浪士組が壬生村を選んだのは、前川家の本家が所司代に務めたことがあり、その関わりからとの説がある。
　鵜殿鳩翁は南部亀二郎宅、御目附、取締役、取調役の三役は新徳寺本堂、清河八郎も同寺に入り、八木源之丞の隠宅には芹沢鴨らの一派がいた。このとき近藤勇は大篝火事件の一件で八木邸で謹慎させられている。
　清河はさっそく自ら建白書を起草し、浪士組一同の血判連名を添え、入洛の翌日二十四日に御所の学習院へ提出した（次項の解説参照）。
　建白書には浪士組一統の入洛は、天皇の御心をもって全国から集まった尽忠報国の有志でありますから尊王攘夷の御政道を邁進して頂きたいとした。
　建白書の後ろの一文をあげて、「浪士組は幕府の世話で入洛をしたので禄位はいりません。我々は尊攘の大義を貫く覚悟で参りました。皇みかどの御心を妨げる者は容赦なくきびしくとがめる決心です」と述べていた。
　だが清河の本心は討幕の挙兵であった。
　老中板倉勝かつ静きよは清河八郎の攘夷運動を苦々しく思い、暗殺することを取調役と芹沢鴨らに伝え、手を廻した。芹沢らは日々、清河をつけ京都土佐藩邸からの帰路、四条あたりで殺害しようとしたが、そばに山岡鉄太郎が御朱印を持って付き添っており決行できず残念であったという。本部（局）へ戻り浪士組は幕府より江戸へ呼び戻されることになった。

だが、芹沢鴨、近藤勇らは鵜殿鳩翁に申し出、京都守護職松平容かた保もりに進達され、めでたく十四人が残留することに決定した。
　残留した隊士は、壬生村郷士の前川邸、八木邸、南部邸にそれぞれ分かれて投宿し、壬生浪士と名乗り、京都守護職に願い出て、尽忠報国に志ある隊士を募り、組織作りのため隊内の役職を決めた。
　本文では隊長に芹沢、近藤、副長に新見、山南、土方、組頭に沖田、永倉、藤堂、原田、斎藤、平山、野口、井上、勘定方に平間となっている。
　この役職は文久三年五月二十五日のもので、翌六月頃の編成での主な役職は次のとおり。

局長　芹沢、近藤、新見
副長　山南、土方
助勤　沖田、永倉、原田、藤堂、井上、平山、
　　　野口、平間、斎藤、尾形俊太郎、山崎丞、谷三十郎、
　　　松原忠司、安藤早太郎
諸士調役兼監察　島田、川島勝司、林信太郎
勘定役　岸島芳太郎、尾関弥四郎、河合耆三郎、酒井兵庫

文久三癸亥年
二月　浪士二百三十有余人
二月廿六日　　　　　連名
建白　学修院江差上ル
学修院国事参政
御用掛
橋本宰相中将　　　　三条西中納言
豊岡大蔵卿　　　　　鹿内中納言
東久世少将　　　　　徳大寺中納言
姉小路少将　　　　　六条宰相中将
柳原右衛門督
川鰭少将　　　　　同寄人
橋本侍従　　　　　　正親町大納言
萬里小路辨　　　　　脇野井中将
当番　　　　　　　　　東園中将
勘由小路中務少輔　当番
非蔵人　　　　　　　　正親町少将
鴨脚和泉　　　　　壬生修理権太夫
松尾伯耆　　　　　　中山侍従
三宅式部　　　　　　四条侍従
石川要人　　　　　　錦小路右馬頭
右四人殿応接御事　　澤主水正
謹而奉言上候今般私共上京仕候義者於大樹公御上洛之上皇命ヲ尊戴確断被遊候御事ニ付草莽中是迄国事ニ周旋ノ様ハ不及申尽君報国之有志之者既往の忌諱ニ拘ラス廣ク天下ニ御募其才力ヲ御任用尊攘之道御主法被遊候御趣意ニ付私共始メ御召ニ相成ト其周旋可有之候義ニ候間夷蛮已来（異 変 以 来 カ）累年国事ニ身命ヲ誓候者共之旨意モ全ク征夷大将軍御職掌御主張相成尊攘之道可相達トノ赤心ニ御座候得者右之如く言警洞開人才御任撰被遊候は赤心報国ノ志従是可相徹底ト存シ則其御召ヘ応シ罷出候然ル上ハ於大将軍家も断然攘夷之大命御尊戴シ奉補佐朝廷者勿論之事万一因循姑息皇武離隔姿ニモ相成候事私共義幾重ニモ挽回之周旋可仕（候）尚其上とモ御取用ニモ無之者不及是非銘々靖献ノ

心得ニ御座候其節者寒微之私共誠以奉恐入(存)候得共固ヨリ尽忠報国抛身命勤王仕候志意ニ付何卒於朝廷御憐密被成下何方ナリトモ尊攘之赤心相遂候様御差向被成下候はゝ難有仕合奉存候右ニ付幕府御世話ニテ上京仕候得トモ禄位等ハ実ニ承不申只々尊攘之大義奉相期候間万一皇命ヲ妨ケ私意ヲ企候輩於テハ譬たとえ有司(志)之人タリトモ聊無用捨建責仕度一統決心ニ候此度不顧威厳言上仕候内御聞置被成下候は微心徹底仕候ヨウ誓天地奉懇願候誠惶頓首再拝謹白

御勅定

近年醜夷逞猖獗覬覦皇国実不容易形勢ニ付万一於有汚国体欽(欠)神器之事ハ被為対列祖之神霊是全当今之故ト被補(為痛)宸衰(襟)候ニ付蛮夷絶(拒)之叡旨ヲ奉シ固有志(之)忠勇奮起シ速ニ建掃除之切上安宸襟下ハ救万民全黙(黠)虜永絶之念不汚神妙不授(汚)国体様トノ叡慮ニモ為在候事

文久三癸亥年
二月　浪士二百三十有余人
二月二十六日　　　　　連名
建白　学修（習）院へ差し上げる
学修（習）院国事参政
御用掛
橋本宰相中将（実麗）　　三条西中納言（季知）
豊岡大蔵卿（随資）　　　鹿内中納言
東久世少将（通禧）　　　徳大寺中納言（実則）
姉小路少将（公知）　　　六条宰相中将（有容）　　　　　　　　　　　　　　柳原右
衛門督（隆光）
川かわ（河）鰭ばた少将（公述）　　　同寄人
橋本侍従（実梁）　　　　正親町大納言（実徳）
万里小路弁（博房）　　　脇（滋）野井中将（実在）
当番　　　　　　　　　　東園中将（基敬）
勘（解）由小路中務少輔（資生）　当番
非蔵人　　　　　　　　正親町少将（公董）
鴨脚和泉　　　　　壬生修理権太夫（基修）
松尾伯耆　　　　　中山侍従（忠光）
三宅式部　　　　　四条侍従（隆謌）
石川要人　　　　　錦小路右馬頭（頼徳）
右四人殿応接御事　沢主水正（宣嘉）
謹んで言上奉り候。今般、私共上京仕り候義、大樹公において御上洛の上、皇命を尊戴、確（雄）断遊ばされ候御事に付き、草そう莽もう中これまで国事に周旋の様は申し及ばず、尽君（忠）報国の志これある者、既往の忌諱に拘らず広く天下に御募り、その才力を御任用、尊攘の道御主法（張）遊ばされ候御趣に付き、私共始め御召しにあいなると、その周旋これあるべき候義に候間、夷蛮已来、累年国事に身命を誓（抛）ち候者共の旨意も、全く征夷大将軍御職掌御主張あいなる尊攘の道あい達（違）いべくとの赤心に御座候得者、右の如く言警（論）洞開、人才御任選遊ばされ候は赤心報国の志、これよりあい徹底と存じ、すなわちその御召しへ応じ罷り出で候。しかる上は大将軍家にお

いても断然攘夷の大命御尊戴し、朝廷補佐奉るはもちろんの事、万一因循姑息、皇（公）武離隔の姿にもあいなり候事、私共幾重にも挽回の周旋仕るべく（候）。なお、その上とも御取（採）用にもこれなきは、及ばずながら、ぜひ銘々靖献の心得に御座候。その節は寒微の私共、誠にもって恐れ入り奉り候得共、固より尽忠報国、身命を抛ち、勤王仕り候志意に付き、なにとぞ朝廷においては御憐密（垂）下しなされ、何方なりとも尊攘の赤心あい遂げ候様、御差し向け下しなされ候わば、ありがたき仕合せと存じ奉り候。右に付き、幕府御世話にて上京仕り候得ども禄位等は実に承り申さず、ただただ尊攘の大儀（義）あい期し奉り候間、万一皇命を妨げ、私意を企て候輩においてはたとえ有志の人たりとも、いささかの用捨（容赦）なく建（譴）責仕りたき一統決心に候。このたび威厳を顧みず言上仕り候内（間）、御聞き置き下しなされ候は微心徹底仕り候よう、天地に誓い懇願奉り候。誠惶頓首再拝謹白。

御勅定（諚）
近年醜夷猖しょう獗けつし皇国を覬覦、実に容易ならざる形勢に付き、万一国体を汚し、神器を欽（欠）くの事においては、列祖の神霊に対せられ、これ全く当今のゆえと宸衷（襟）を補（痛）められ候に付き、蛮夷（拒）絶の叡旨を奉じ、固有の忠勇を奮起し、速やかに掃除の切（効）を建て、上は宸襟を安んじ、下は万民を救い、全く黠虜、覬覦の念を永絶し、国体汚さぬようとの叡慮にもあらせられ候事。

解　　説

文久三年二月。

江戸から入洛した浪士組二百三十余名は二月二十六日（二十四日）、連名をもって御所学習院へ建白書を提出した。左記の内容は勤王倒幕論で、清河八郎が策謀したものだった。

大意は「上（天皇）に謹つつしみて申し上げます。今こん般ぱん私ども浪士組が上京いたしましたのは、大樹公（将軍家茂）において御上洛の上、（将軍が上洛したのは、家光以来実に二百三十年ぶり）皇みかどの命めいを頂き、勇気をもって英断されましたことにつき、無名の志士、国を憂うる者、尽忠報国の志ある者を広く応募しました。その才力をもって、皇が尊攘の道を主張されました趣意に基づき、私らはその考えに東奔西走いたしたく存じます。ペリー来航以来、国家に身命を抛なげうつ者の考えも、また将軍の主張と相成り尊攘の心を抱いて上京して参りました。この上は将軍家としましても攘夷の命を拝し、朝廷をたすけることは勿論のこと、万一その場しのぎにならぬよう、かりに攘夷を決せられずにいましたら公武のあるべき姿はなくなるでしょう。私共浪士組は身をもって、このことに奔走しますゆえ、何卒、攘夷を一刻も早くご英断されますよう。私共は幕府のお世話にて上京しましたが、禄位（給金）を求めている訳ではございません。ただただ尊攘の大義を願うばかりでございます。万一皇の命を妨げるような者がおりましたならば、厳しくとがめますゆえご英断をお願いいたします。私共は天地に誓って申し上げます」との内容の建白書であった。

孝明天皇

文久三亥年五月頃ノ事

攘夷皇命相下リ　徳川家茂公ノ御請ニハ関東江着十日相立サル中ニ攘夷可致ト申上、速ニ徳川家茂公東下ケ此時惣裁職一ツ橋中納言殿御同行、然ル処徳川ニテ十日タテトモ攘夷ノ応接無之其御申訳トシテ御老中小笠原図書頭為御名代大坂江軍鑑ニテ着、夫ヨリ淀江参ル当所江御所ヨリ差留メニ相成ル
薩長土大キニ立服左様ナ穢シキ士ハ、京師江足踏ミイタサセ申間敷ト申シ夫故ニ小笠原図書頭殿直ニ東下イタス

文久三亥年五月頃の事

攘夷決行の勅命が天皇より下り、将軍徳川家茂は、江戸に到着して十日以内に攘夷を決行すると約束した。速やかに家茂は、政治惣（総）裁職と一橋慶喜を同行して江戸に帰った。しかし、江戸に着いて十日過ぎても一向に攘夷を行なわなかった。朝廷に弁解のため、老中小笠原長行は将軍名代として軍鑑（艦）で大坂に到着した。そこから淀へ行くと、御所から入京を止められた。
薩・長・土の三藩が、幕府の攘夷不履行に立服（腹）し、弁解に来た小笠原の入京に反対したので、小笠原長行は直ちに江戸に帰った。

解　　説

文久三年（一八六三）三月四日、十四代将軍徳川家茂は、三代将軍徳川家いえ光みつ以来、実に二百三十年ぶりに上洛した。参内した際の席順は、家光の時は家光→関白→左大臣・右大臣→内大臣だったのが、家茂の時には、関白→左大臣・右大臣→内大臣→家茂となっていた。このこと一つとっても、将軍の権威が衰えていることが窺える。

将軍上洛によって、攘夷決行の機運を高める試みが尊王攘夷派の画策によって行なわれた。

それが三月十一日の下・上加茂神社行幸、四月十一日の石清水八幡宮行幸として実現した。

なかでも、下・上加茂神社行幸は、将軍家茂も在京諸侯を率いて参加した。その行列はさながら天皇が将軍と諸大名を率いているようであり、行列を見た民衆の眼にも、幕府権威の衰えと朝廷権威の高揚としてうつったであろう。

尊王攘夷派のねらいはまさにここにあったといえる。

孝明天皇は攘夷を熱望し、それを利用して幕府を追い込もうとしていた尊王攘夷派の圧力に押された幕府は、四月二十日、五月十日を期日に攘夷を実行することを朝廷に約束したが、それは実行されなかった。

文久三年の前半の政治状況は、「攘夷」をスローガンに、朝廷と幕府との間で熾し烈れつな政治的駆け引きが展開され、攘夷を熱望する天皇の意志を利用した尊王攘夷派の公卿や浪士らの画策によって、中央政府としての幕府の威信が圧迫されていったのである。

なお本文では、先述した政治状況が文久三年五月頃の事として記されているが、「攘夷皇命相下り　徳川家茂公ノ御請」すなわち五月十日を攘夷決行の期日とする件は四月二十日のことであり、「惣裁職一ツ橋中納言殿御同行」と政事総裁職の松平慶よし永ながと将軍後見職の一橋慶喜が将軍家茂と一緒に江戸へ帰ったと記されている箇所も、史実では、慶永は、尊王攘夷派の公卿と浪士の跳梁に対する方策を見出せない幕府首脳の力不足を嘆いて、文久三年四月に辞表を提出して国許に帰っている上に、慶喜は将軍より先に江戸へ帰っているというように、異なっている点が多いため、扱いは一考を要する。しかし、わずか十二行にまとめられた本文の記述は、内容を吟味して読むと、当時の切迫した政治状況がまざまざと浮かび上がってくる非常に興味深いものである。

文久三亥年六月頃ノ事

既ニ大原左衛門督殿、御勅使トシテ相州小田原迄御下向コレアリ、当所江徳川家茂公呼出シ、皇命ヲ相背依テ将軍職召上ケ、此時大原公之御警衛新選組江被仰付、新選組ノ存意ハ小田原迄御警衛イタシ夫ヨリ欠抜ケ横浜鎖湊イタス、夫ヨリ攘夷ノ魁トモ相成、就テハ徳川公ニヲイテモ朝敵ノ罪ミ逃れヘクト存此事件ヲ聞キ、一ツ橋中納言殿驚キ速ニ上京御所表ヲ取繕対ニ御勅使御差止メニ相成ル

文久三亥年六月頃の事

すでに大原左衛門督殿（重徳）は御勅使として相州小田原まで下っており、そこに徳川家茂を呼び出して、朝廷の命に背いたことにより将軍職を召し上げようとした。このとき大原公の御警衛が新選組に命じられたので、新選組としては小田原まで御警衛したのち、それから横浜へ欠（駆）け抜けて鎖湊（港）して攘夷の魁となれば、徳川公は朝敵の罪を免れると考えていた。これを知った一橋中納言（慶喜）は驚いて上京し、朝廷と話し合って、ついに御勅使を差し止めた。

解　　説

　文久三年六月頃になると、公卿の大原重徳が勅使として東下（江戸行）するにあたって、隊内で議義があった。
「文久二年島津久光が上京して公武合体の立場から朝廷に建策し、幕府に五大老の設置等三事の幕政改革を迫ることに決すると、五月その勅使を命ぜられ、家格前例を破って左衛門督に任じて東下、六月十日江戸城に臨んで勅諭を伝達し、これの奉承を諭告すること数次、ついに革政遵行を奉答させた」（『明治維新人名辞典』）という。
　大原が東下する際、将軍家茂を小田原まで呼び寄せて、天皇の命に背いたことを厳責し将軍職を取りあげるという。隊内ではこの大原の警衛を新選組が担当することになると思われるので、新選組としては途中から横浜に走り、湊みなと（港）を封鎖してしまう、そうすれば攘夷の魁さきがけと評価されて徳川公の朝敵も免罪になるだろうという話になった。この一件を聞いて一橋慶喜は驚き御所に赴き、取繕い勅使を差し止めることになった。
　大原は二月（文久三年）、東下に際して薩摩と長州の不和を避けるために策をめぐらし、勅書を改かい竄ざんした。このことにより辞官、落飾を命ぜられた。この大原の東下の際の新選組警衛のことは実現しなかったが、隊内では攘夷について真剣に論じられたのだろう。

新選組袖章

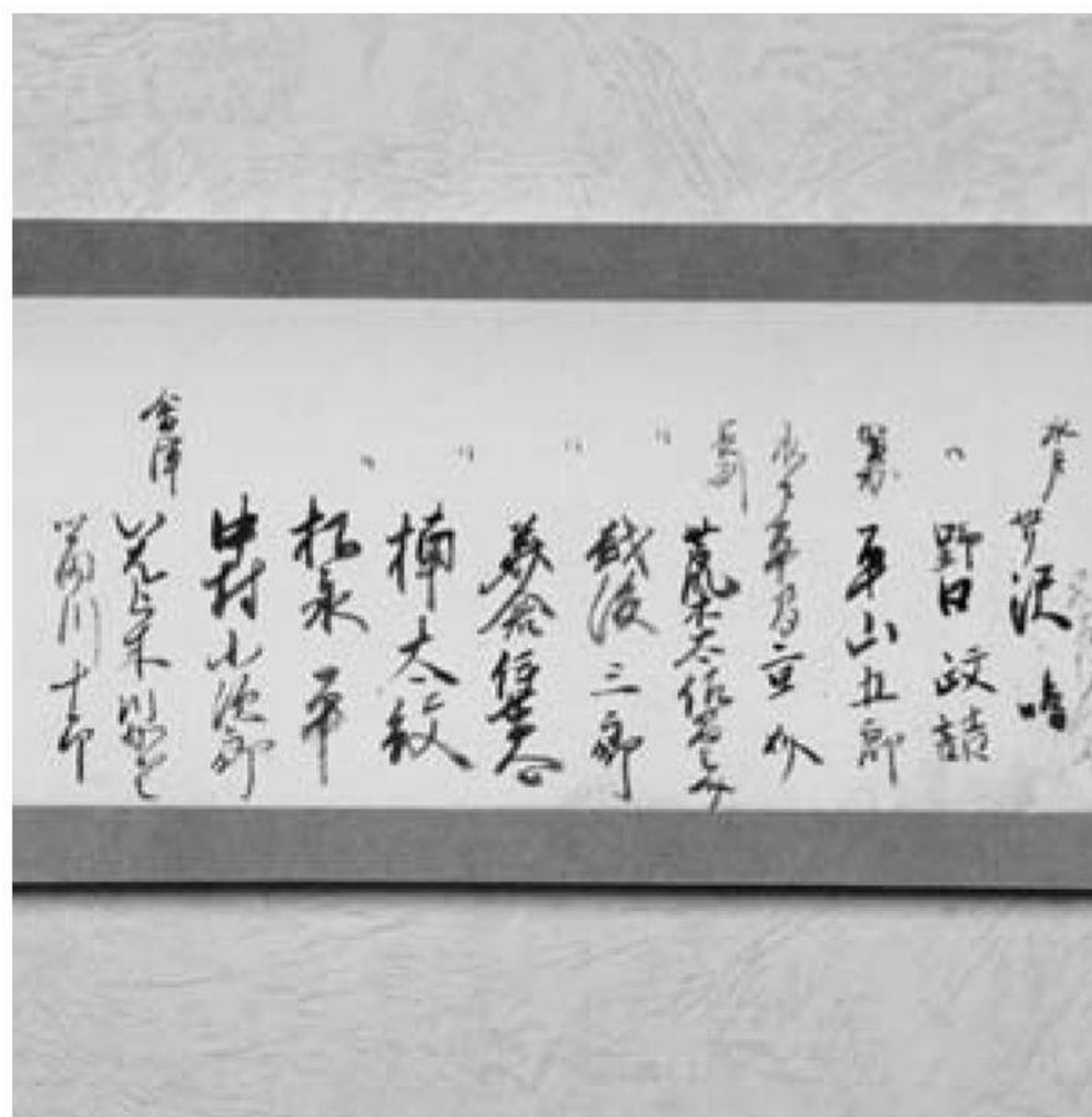
文久三亥年七月中旬頃之事

大坂御用ニ付、芹沢鴨、近藤勇、山南敬助、沖田総司、永倉新八、斎藤一、平山五郎、野口健次、井上源三郎、嶌田魁、右人下ル、旅宿京屋忠平衛夕景ニ及ヒ内ニモ居ヲリ兼ルホトノ暑サ、依テ京屋ニ有之小舟ニ乗テ淀川江涼ミ出ル、終ニ川瀬早ク次第ニ鍋嶌ノ岸江参ル、其中ニ斎藤一馬ハ腹痛無拠鍋島岸江上陸、北ノ新地住吉楼江参ル心得併シカ各シテ脇差ハ帯シヲレトモ袴計リ着シ居ル者モ有之、稽古着壱枚着テ居ル者モ有之皆々違行姿ニテ涼ニ出タル人名芹沢鴨、山南敬助、沖田総司、永倉新八、平山五郎、野口健次、斎藤一、嶌田魁
道不案内ニテ岸通リヲ参ル橋ニテ相撲ニ出会イ御不礼有之、切捨ヘキノ処駁ウチ髞ハタキ其儘ニ評(許)シス(ヌ)、夫ヨリ蜆橋江懸ル亦壱人相撲参ル橋ノ間中ヲ渡リ参リ、此方も間中ヲ渡リ参ル終ニ行違イ相撲ヨリ直言ヲ申シ捨置キ難切捨テヘキナレトモ其場江打タヲシ北ノ新地江出ル
不取敢茶屋江参リ斎藤介抱イタシ居ルト多勢ノ人声此大坂相撲は攘夷ノ魁致さムト与力ヨリ樫ノ八角棒ヲ渡シ置キ有之、右之棒ヲ持茶屋の前へト押シ寄セルナリ
此時芹沢鴨表江出テ見ルト爰ニ居ルト申シ不禮(礼)ヲイタスニヲイテハ、用捨無切捨ルト申シ相撲兼テ預リ居ル樫ノ棒ヲ持チ無方ニ打懸ル、夫ヨリ一同抜刀此戦イハ夜分ノコト故シカトハ不相訳併月夜故殊ニ茶屋ノ角口ニ灯籠ツキヲリ夫ニテ余ホド助ニ相成ル、大戦イ併シ怪我人は無之慥ニ切捨タルハ三人手討ヲイハ何ニホトヤラ不相訳其儘ニイタシヲキ京屋江引揚ル
近藤勇ニ逐一語ル同人申ニハ屹度今宵押而シ懸ル参ヘキ直様町奉行江御届ケ可申上、京屋忠兵衛ヲ呼ヒ右之次第申聞ケ同人申ニハ京大坂ノ相撲集会明日興行ニ可相成筈ツ夫ナレハ相撲トハ書出シ申間敷、町奉行所江届書
今宵余リ暑サ厳敷候故、淀川江小舟ニテ涼ミ出テ終ニ水瀬早ク鍋島岸江流ル、壱人腹痛致ス者有之、鍋島岸江上陸之処道不案内故、北ノ新地江出ル御茶屋ヲ相頼ミ斎藤一ト申者腹痛ニ付介抱イタシ候、尤途中ニヲイテ相撲三四人不礼ヲ働キ、切捨テ可申ノ処其儘差許シ腹痛人介抱致居ルト、何者成や五六拾人ホト徒党ヲムスヒ打懸ル、依テ無拠切捨ル今晩ニも旅宿江押シ寄参候得者、壱人モ不残切捨有之段御届ケ申上ル、町奉行ニテハ驚速ニ旅宿廻リ江警衛差出ス

翌日相撲方ヨリ届ケ有之全五拾人ホト徒党ヲムスヒ何ノ武家トモ不相知候得共、若者無方ニ打懸ル先方ニ壱人打殺シ候者有之、夫カ手前ニテハ故障私ノ方ニヲイテハ即死、三人手負十四人コレアル趣キ町奉行所江届ケ出ス、後ニ至リ壬生浪士ト申コト相訳リ、京大坂ノ相撲恐腑イタス、夫ヨリ大坂ヲ往来ヲスルトイエトモ相撲ハ道端ニヨリ挨拶イタス、是ヨリ小野川熊川年寄ハ懇意ニイタス

文久三亥年七月中旬頃の事

大坂に御用のため芹沢鴨、近藤勇、山南敬助、沖田総司、永倉新八、斎藤一、平山五郎、野口健次（司）、井上源三郎、嶌（島）田魁が下った。宿を京屋忠平（兵）衛方とし、夕方になっても屋内にいられないほどの暑さのため、京屋にある小舟に乗って淀川に涼みに出た。川の流れが速く、次第に鍋嶌（島）河岸に近づいたが、そのうちに斎藤一が腹痛を起こし、しかたなく鍋島河岸で上陸した。北の新地にある住吉楼へ行くつもりで、それぞれ脇差は差していたが、袴だけを着た者もあり、また稽古着一枚の者もあり、まちまちの姿で、涼に出た人名は、芹沢鴨、山南敬助、沖田総司、永倉新八、平山五郎、野口健次（司）、斎藤一、嶌（島）田魁である。
道が不案内だったため岸辺の道を歩いていた。ある橋で相撲取に出会ったが、無礼があったので切り捨てるべきところを殴りつけただけで許した。それから蜆しじみ橋へ差しかかると、また一人の相撲取が橋の中央を歩いてきて、こちらも中央を渡っていたため、行き違った。そのとき相撲取が無礼を申したため、捨て置くことができず、これも切り捨てるべきところだったが、その場に打ち倒して北の新地へ出た。
とりあえず茶屋に入って斎藤の介抱をしていると、大勢の人の声がした。これは大坂の相撲取で、彼らは攘夷の魁をするために与力より樫の木の八角棒を渡されており、この棒を持って茶屋の前に押し寄せたのである。
このとき芹沢鴨が表に出て、「ここにいる。不（無）礼をすれば用捨（容赦）なく切り捨てる」と申すと、相撲取は手にした樫の棒で無方（法）に打ちかかってきたため、それから一同は抜刀した。この戦いは夜のことだったため、しっかりと見極めることはできなかったが、月あかりと茶屋の角口に灯籠が灯されており、ずいぶん助かった。大いに戦ったが怪我人はなく、三人を切り捨て、手傷を負わせたのはどれほどかわからず、そのままにして京屋に引き揚げた。
近藤勇にすべてを話すと、「きっと今宵また押しかけてくるので、すぐに町奉行所へ届けるべきだ」というので京屋忠兵衛を呼んで事の次第を申し聞かせた。忠兵衛は、明日、京と大坂の相撲取が集まって興行があるはずだというので、相手が相撲取とは書かずに町奉行所へ届けた。
今宵あまりの暑さのため、淀川へ小舟で涼みに出たところ、川の流れが速く鍋島河岸に流れ着いてしまった。一人が腹痛を起こしたので、鍋島河岸に上陸したところ、道が不

案内のため北の新地へ出、茶屋に頼んで腹痛の斎藤一という者を介抱していた。その途中で相撲取三、四人が無礼を働いたので、切り捨てるべきところをそのまま許し、腹痛の者を介抱していると、何者なのか五、六十人ほどが集団で打ちかかってきたので、仕方なく切り捨てた。今晩にも宿へ押し寄せてきたら、一人残らず切り捨てるつもりである。このように届け出ると、町奉行は驚いてすぐに宿の周りへ警備の者を差し出した。翌日、相撲取の方からも届けがあり、どこの武家ともわからないが、五十人ほどの集団が、無方（法）にも打ちかかり、先方（壬生浪士側）に一人の死者があった。それは我々のせいだが、私の方には即死三人、負傷者十四人もあったというもので、これを町奉行所へ届け出た。あとになって相手が壬生浪士だったということがわかり、京大坂の相撲取は恐腑（怖）した。その後、大坂を往来するときには相撲取は道端に寄って挨拶するようになり、それからは小野川、熊川の両年寄と懇意になったのである。

英名録　芹沢一派

文久三亥年八月十四五日

新選組旅宿ノ手セ間ニ付、嶋原廓ニテ角屋徳右衛門宅ヲ借リ新選組一統大集会ヲ催シ議論終テ酒宴娼妓藝妓舞子嶋原廓不残揚ル、大愉快
芹沢鴨兼而角屋徳右衛門取扱イタシ悪ミヲリ一同ヘハ芹沢鴨断置ク、今日ハ娼妓圍かこミテ差上ル各々御違論無之様イタシ度ト申置キ、芹沢鴨坐中見渡ストコロ角屋仲居壱人モ居ラス背諸方ノ仲居斗イ角屋にくき取扱ヲイタスト存シヲル
一同追々酔イ廻ル、床ニナル者ヨリ酒ヲ呑テ居ル者アリ、中々娼妓ノ事ニ付彼是申夫ヲ芹沢鴨聞キ入ルト立腹イタシ、夫々角屋の不取扱イキナリ太鼓ヲ表江投ケ、夫より芹沢鴨所持ノ三百目の鉄扇ニテアタリノ器ヲ剛ス、其外三味線床之間ノ掛物破リ置物剛ス、婦人不残逃去ル夫ヨリ二階ヲ下リ委(悉ク)打剛ス、夫ヨリ表江出テ土方歳三向イ是ニテ気カサツハリ致シ直ニ会所江参リ角屋徳右衛門七日の戸〆申付ル
新選組新見錦ト申者是アリ、此仁法令ヲ犯シ殊ニ乱暴甚敷芹沢、近藤説得イタスト雖トモ更ニ不聞入対ニ切腹イタサセル一同ノ論爰ニ四条木屋町ニ旅宿イタシ居ル、水府浪人吉成常郎方江新見錦参ル矢張暴ヲイタシ対ニ無余儀水府浪人梅津某介錯ニテ新見錦切腹イタス
夫より芹沢鴨追々ト心が変シ対ニ法令破リ殊ニ暴甚敷、近藤勇悉ク説得イタセト無聞入一同困入ル処江会津公用方より近藤勇呼ニ参ル早速罷出ル芹沢鴨余リ市中乱暴イタシ依テ御所表より召捕可申様御沙汰コレ有近藤勇戻リ役人一統江相談ス、実ニ一同驚キ心配致ス何ニモセヨ芹沢鴨ハ新選組ノ開発ノ本人夫故ニ召捕差出スト申訳ニモ致シ難少シノ間一間住居謹慎イタサセルヨリ外ハ有間敷ト相談致シ居ル

文久三亥年八月十四、五日

（九月十四、十五日の誤り）

新選組の宿が手狭なので、嶋（島）原遊廓（郭）の角屋徳右衛門宅を借り、新選組一統の大集会を催し、議論が終わって宴会となり、島原遊郭の娼妓、芸妓、舞子を総揚げにし、大いに愉快であった。
しかし芹沢鴨は、かねてより角屋徳右衛門の取り扱い方に不満を抱いており、一同にむかってこう断り置いた。今日は娼妓囲みて差し上げる、各々の者には御違（異）論のないようにしたい、と申し置いて、芹沢鴨が座中を見渡すところ、角屋の仲居が一人もおらず、あちこちの店の仲居ばかりで、角屋の憎き取り扱いに怒った。
一同は酔いが回り、横になる者やら酒を呑む者ばかりで、娼妓のことをかれこれ話している。これを聞いた芹沢鴨は立腹し、角屋の取り扱いの悪さに、いきなり太鼓を表へ投げ、それから芹沢鴨が所持する三百目（匁もんめ）の鉄扇をふるってあたりの器を剛（壊）し、そのほかにも三味線や床の間の掛け軸を破り、置物を剛（壊）し、女たちは残らず逃げ去った。二階から下りてもことごとく打ち剛（壊）し、それから表へ出て土方歳三に向かい、「これで気分がさっぱりしたので、ただちに会所に行って角屋徳右衛門に七日間の閉店を申し付ける」と語った。
新選組に新見錦というものがあり、この者は法令を犯し、ことに乱暴がひどく、芹沢や近藤が説得してもいっこうに聞き入れず、ついに一同の結論として切腹させることになった。ところが、四条木屋町に旅宿する水府（水戸）浪人の吉成常郎方へ行き、やはり乱暴を働いたので、仕方なく水府浪人の梅津某の介錯によって新見錦は切腹した。
それから芹沢鴨が徐々に変わり、ついに法令を破って、乱暴がことにはなはだしくなった。近藤勇が説得してもことごとく聞き入れず、一同が困り果てているところへ、会津藩公用方より近藤勇が呼び出され、さっそく出掛けると、芹沢鴨があまり市中で乱暴を働くため、朝廷筋より召し捕るようにとの御沙汰があったことを聞かされた。近藤勇が戻って役付き者たちに相談したところ、一同は驚いて心配した。芹沢鴨は新選組を創立した本人であり、まさか召し捕って差し出すわけにもいかず、しばらくの間は一部屋に謹慎させておく以外にないだろうと相談したのである。

解　　説

　永倉が七月中旬としている大坂の相撲取とのいざこざは十八日のことである。新選組史において、よく知られた事件だ。その一カ月後の文久三年八月。
　新選組の屯所では手狭とあって島原の揚屋・角すみ屋やで集会を開き、その後、大宴会となり娼妓、芸妓、舞子の総揚げとなった。ところがふだんより主人徳右衛門と犬猿の仲の芹沢が店の仲居がひとりもいないことに立腹して、いきなり太鼓を表へほうり投げ、愛用の三百匁もんめ（約一キロ）もある鉄扇で、手あたりしだいに器をこわし、三味線をもって床の間の掛軸を破り、置物まで破壊した。見ていた女どもは恐れのあまり逃げてしまった。
　芹沢は土方に向かい「これで気分がサッパリした」といい、直に会所に行き角屋の七日間の営業停止を申しつけた。
　この日の集会は、水みな口くち藩の公用方が会津藩の公用方へ近頃の新選組の隊士の行状がよくないと申し込んだことにはじまり、芹沢が水口藩の者を呼び出し詫状を書かせた。ところが水口藩の仲裁人という京都二条通りで直心影流を開く戸田栄之助がやってきて、あの詫状を返納してほしい、このことが藩にばれれば詰腹を切らされると頼みこんだ。芹沢もいさぎよく受け入れ、この日の大宴会は水口藩侯の招待となったが、酒乱ぐせのある芹沢がいつものごとくあばれたという。
　一方、芹沢の側近といわれていた新見錦が、隊則を破り乱暴の限りをつくし、意見しても聞かないので粛清することになった。四条木屋町に旅宿していた水戸浪人・吉成常郎を新見がたずね、例の悪いクセがでて暴れ、ついに水戸浪人・梅津の介錯にて切腹させられてしまった。
　子し母も澤ざわ寛かんの『新選組始末記』には、
「第一、遊蕩にのみ耽って隊務を怠ること多く、且つ、度々民家を襲うて強談し、隊費と称して多額の金子を奪っている。この種を、みんな握られて終った。腹を切らぬというなら、隊の法度書の個条に照らして、断首にも仕兼ねまじいので、流石国士を以て自任した新見も、遊女屋（祇園の山やまの緒お）に血を流すような結果になって終った」
　と、目にあまる行状だと伝えている。この子母澤の一文が新見切腹の通例であったので、今回のものは新発見といえよう。なお、新見錦の死亡した日は、今まで確定してい

なかった。九月上旬という説が有力であるが、永倉は八月十四、五日としている。他の史料などから、これは九月十四、五日の誤りではないかと思われる。

文久三亥年八月十八日事

新選組役人左に記ス

隊長　芹沢鴨　　　副(隊)長　近藤勇（芹沢同勤副長誤リ）

副長　山南敬助　土方歳三　　組頭　沖田総司　永倉新八　斎藤一馬　平山五郎　野口健次　井上源三郎　　諸士調役　川島勝次　嶌田魁　　勘定方取締リ　平間重助　　同手附　尾関弥四郎

毛利大膳大夫殿叛逆終ニ松平肥後守殿ニ被為顕依テ毛利大膳大夫即刻京師引キ払イ被申付、其旨趣者天朝ニ大和御幸ト被仰出実ハ天朝ヲ周防ノ山口城江落シ、徳川家茂公逆賊ニ落シ入ル謀叛対ニ露硯ケンニおよふ

此時中山侍従公七卿京師ヲ脱ス、大和十津川江落ヲル、脱スル時ノ出テ立ハ七卿不残馬乗朱絨ノ鎧長刀ヲ持、警衛ハ四条木屋町ニ居ル、天忠組桂幸五郎、草加玄水、藤本鐵石、其外諸藩脱走人何レモ甲冑得物ヲ携江、此時松平肥後守殿、参代昼夜詰メ協議論不施、新選組御所江欠付ケ南門角ヲ固メル、何レモ甲冑ニテ野陣ヲ張リ九門ハ諸侯固タル

八月廿一日

従天朝新選組ニ市中取締被仰付若シ手余リ候節ハ切捨御免依テ壬生旅宿江呼出シ右之段申渡ス

八月下旬頃日不詳

四条堀川西江入ル所米屋渡世有之、夜八時頃備前藩固メ場所ヨリ鉄炮ヲ携ヘ三人ニテ右之押込ミ閙ル、直ニ新選組江注進有之依テ速ニ永倉新八、斎藤一、平山五郎、中郇金語、山野八十八欠付ケ参ル、門口ニ向イ門ハ昼夜門ヲ見ルト、ホタルノヨウナ火ガ見江ル夫ハ全火縄ノ火ガ見エルノナリシカシ鉄炮所持トハ内江(不知ラ)五人閙ル、壱発打チ大イニ驚キ併怪我モナク抜刀致少々戦ニ相成ル対ニ不残討捕ル、此時手負中郇金吾、平山五郎、刃切し出ス従天朝御褒美賜ル

文久三亥年八月十八日の事

新選組の役人を左に記す。
隊長　　芹沢鴨　　隊長　　近藤勇
副長　　山南敬助　土方歳三
組頭　　沖田総司　永倉新八　斎藤一　平山五郎　　　　　野口健次（司）　井上源三郎
諸士調役　　川島勝次　嶌（島）田魁
勘定方取締り　　平間重助
同手附　　尾関弥四郎
毛利大だい膳ぜん大夫（敬たか親ちか）の叛逆がついに松平肥後守殿によって顕らかにされ、そのため毛利大膳大夫は即刻、京師よりの引き払いを申し付けられた。その趣旨は、天皇に大和御（行）幸と申し上げながら、実は天皇を周防の山口城へ送り、徳川家茂公を逆賊に陥れるというもので、その謀反が露見したのだった。
このとき中山（忠光）侍従公ら七卿が京を脱し、大和十津川へ落ち延びた。脱出したときの装束は、七卿全員が乗馬、朱絨の鎧、長刀を持ち、警衛は四条木屋町にいた天忠（誅）組、桂幸（小）五郎、草加玄水（久く坂さか玄げん瑞ずい）、藤本鉄石、そのほか諸藩の脱藩者で、全員が甲冑に武器を携えていた。松平肥後守殿はこのとき、昼夜を問わず御所に詰めて協議したが結論がまとまらなかった。新選組は御所に欠（駆）け付け、南門角（堺町御門）を守衛した。全員が甲冑を着込んで野陣を張り、九門は諸侯の兵が固めた。
八月二十一日
朝廷より新選組に市中取締が命じられ、もし手に余った場合には切り捨て御免を許された。それによって壬生の旅宿へ呼び出しがあり、その旨を申し渡された。
八月下旬頃日不詳
四条堀川西へ入る所で米屋を営む者があり、夜八時ごろに備前藩警備の場所より、鉄砲を持った者三人が押し込み強盗に入った。ただちに新選組に連絡があり、すみやかに永倉新八、斎藤一、平山五郎、中邨（村）金語（吾）、山野八十八が欠（駆）け付けた。門口に向かい、門となっている昼夜門からうかがい見ると、蛍のような火が見える。これは火縄銃の火だったのだが、鉄砲を所持しているとは知らず、五人は中に入った。一

発打たれ、大いに驚いたが怪我はなく、抜刀して少し戦って、ついに賊を討ち取った。このときに中郁（村）金吾と平山五郎が負傷し、刀が刃切れしたので研ぎに出した。朝廷より御褒美を賜る。

解　　説

文久三年八月十八日。

八月十八日は世にいう〝八・一八の政変〟で、公武合体派によって尊攘派勢力が京から一掃された一大クーデターであった。尊攘派の中心・長州藩は朝廷から追放され、三条実さね美とみら急進派公家七人も長州勢と共に長州に落ちのびた、いわゆる〝七卿の都落ち〟となった。これに先立つ八月十三日、孝明天皇の大和・伊勢行幸が発表されたが、実は天皇の攘夷祈願、攘夷親征がその名目だった。尊攘派が密かに計画していたのは、行幸中に御所など京の町に放火、還幸を不能にして討幕親征の兵を挙げるというもので、中山忠光を擁する天誅組の大和挙兵はその先鋒であった。

だが天皇は討幕をこころよしとせず、その密旨をうけた会津藩主松平容保（京都守護職）は、長州と反目する薩摩藩と結び、八月十八日、会津、薩摩両藩兵で禁門を固めた。この時、壬生浪士組（新選組）は御所へ駆けつけ南門角（堺町御門）を固めて、長州勢を禁裏から締め出した。

一触即発の危機もはらんだが、長州勢は「退去せよ」との勅命には抗せず、京をあとにした。

八月二十一日、朝廷は新選組に対し、市中取締りを命じ、もし手にあまる者がいたならば切捨てご免でよいとした。

七卿都落ちの図

京都御所

文久三亥年九月中旬ノ頃之事

芹沢鴨大坂之節ハ新町吉田屋江度々遊興致ス、其砌藝妓小寅ヲ呼ヒ寵愛スルトイエトモ小寅ハ不承知、永倉新八、吉田屋抱仲居お鹿ト申者寵愛致ヲル
然ル処酒井雅楽頭殿御東下ニ付、警衛トシテ大坂へ下ル、八軒家京屋旅宿此夜近藤、土方始メ外一同吉田屋江遊しニ参リ跡ニ残リ居ルハ、芹沢永倉余リサヒシク酒ヲ呑ミ芹沢申ニハ、永倉君お鹿ヲ呼ヘト申席ニ小寅モ呼ニ遣スヘシ、早速京屋若者相頼吉田屋江申遣ス、早速小寅お鹿参リ大御宴ト相成ル、最早夜更ニ相成ル間寝ル事宜敷ト芹沢申酒ノ座も引ケ直ニ其間江伏ル
芹沢小寅ニ向イ帯ヲトケト申ス、小寅ハ芹沢ヲ件ヨリ嫌イ、お鹿サン帯ヲトケハ私モトクト云、お鹿藝妓ノ取締リニ参リ夫故ニ帯ヲトカス、色々申セトモ承知イタサス、終ニ芹沢立腹致今宵ノ内ニ戻レト申付ケ無余儀、永倉駕籠ニテ送リ返ス
翌朝ニ及ヒ芹沢、永倉ニ向イ昨夜両人ノ始末甚不届キ依テ今日両人ノ首ヲ斬リ可申、永倉驚キ早速ニ京屋亭主ヲ頼ミ吉田屋江参リ藝妓五拾人斗リ呼ヒ酒肴ノ支度イタシヲキ芹沢吉田屋ノ玄関江参ルト仲居始其外藝妓出迎イ京屋相頼ム、夫より土方歳三、斎藤一、平山五郎相頼ム、芹沢永倉跡より参ル
芹沢鴨、永倉私ハ吉田屋ノ玄関江向イ兼而申付ヲク通リ仲居始藝妓五拾人程並ラ芹沢三百目ノ鉄扇ニテ仲居ノ肩ヲクラシ目ヲ廻ス夫より雷天ノ間江通ル、芹沢吉田屋喜左衛門ヲ呼ヒ、京屋忠兵衛名代トシテ罷出ル、喜左衛門今朝無余処用向有之他行イタスト申御用向之儀ハ私江被仰聞度ト申ス、今日ノ用向外儀ニ不有、其方抱お鹿并ニ藝妓小寅昨夜不礼ヲ働キ依テ申渡ス義有之差出可申ス若おるハ不承知ナラハ此家ヲ粉名微塵ニ剛ス篤ト両人ニ申聞ヘク依テ京（屋）両人ノ処江参リ悉ク説得イタス、若シお前方出ナイトキニハ此家ヲコハサン、主人ヲ思ハ出ルガヨイト存シルトアルニ付、両人儀利ニ迫リ出ルト申左様ナレハ、私ノ右左リニ居ルヘシ若首ヲ斬ル時ニ至ラハ私ノ膝ニ江伏スヘシ、左様イタスト私両人ノ首ヲ抱イ両人ノ替リニ私ヲ斬リ被下度ト申述ル、芹沢罪ナク人ヲ斬ルトハ申間敷併髪ノ毛切ルト申ナラハ決テ手ヲ揚ル事不相成膝ノ上ニ手ヲツキ居ルヘシ、夫より京屋仲ニ立左右ニお鹿小寅ヲ召連レ出ル
此時婦人ハ畳ノ目ワカラサルホト眼ガ眊ム、髪ヲ斬リタル事トハスコシモ知レス、芹沢鴨両人ニ向イ申渡ス時昨夜不礼之振舞依テ男子ナレハ首打ヘキノ処婦人故断髪申付ル、

芹沢脇差ヲ抜キ立上ル、永倉モ同様土方平山君ニ手ヲカケサセント申両人立上リ土方歳三小寅ヲ断髪ス、平山五郎お鹿ヲ断髪ス、両人は引込ム
夫より酒肴藝妓五拾人斗リ三味線ヲ持出ル、芹沢申ニハ此毛ヲ肴ニ一盃呑ヘシト申ス、京屋ヲ呼今日ハ酒ヲ呑ミ余分人此家ノ亭主ニ宜敷速ニ芹沢四人ノ者立帰ル
小寅コレホドマテニイタサレテモ芹沢ニ肌ヲユルサス、夫故ニ大町人ニ身受イタサレ、お鹿毛を切ラレ吉田屋ニ奉公六ケ敷、依テ吉田屋喜左衛門ヨリ永倉新八お鹿ヲ貰請直ニ外方江縁組イタス併両人ハ吉田屋ノ為ニハ忠儀ナヘシ

文久三亥年九月中旬の頃の事

芹沢鴨は大坂へ下ったときには、よく吉田屋で遊んだ。そのさい、芸妓の小寅を呼んで寵愛したものだが、小寅は芹沢を嫌っていた。永倉新八は吉田屋の抱え仲居のお鹿しかという者を寵愛していた。
あるとき、酒井雅う楽たの頭かみ殿が御東下するため、その警衛として大坂に下り、八軒家の京屋を宿とした。その夜、近藤、土方はじめほか一同が吉田屋へ遊びに行き、芹沢と永倉があとに残った。ふたりが酒を呑んでいると、芹沢が「永倉君、お鹿を呼べ」と申し、席に小寅も呼ぼうとして、さっそく京屋の若者に頼んで吉田屋に向かわせた。すぐに小寅とお鹿がやってきて大宴会となったが、すでに夜も更け、寝ることにしようと芹沢がいい、酒を引き下げてその部屋で横になった。
芹沢は小寅に帯を解くように命じたが、小寅は以前より芹沢を嫌っており、「お鹿さんが帯を解けば私も解く」といったが、お鹿は芸妓に付き添ってきているだけで、帯は解かない。芹沢はいろいろと説得したが小寅は承知せず、ついに芹沢は立腹して、今宵のうちに帰ってしまえと命じたので、仕方なく永倉は二人を駕籠で送り返した。
翌朝になって芹沢は永倉に向かい、昨夜の二人のふるまいははなはだ不届きだったので、今日は二人の首を斬るといいだした。永倉は驚いてすぐさま京屋の主人に頼んで、吉田屋に芸妓五十人ばかりを呼んで、酒肴の用意をさせ、芹沢が吉田屋へ行ったときには、玄関で仲居や芸妓が出迎えるようにさせた。さらに土方歳三、斎藤一、平山五郎に吉田屋へくるように頼み、そのあとから芹沢と永倉は吉田屋へ行った。
芹沢鴨と永倉が吉田屋の玄関に着くと、申し付けてあったように、仲居をはじめ芸妓五十人ほどが並んでいた。芹沢は手にした三百匁もんめの鉄扇で仲居の肩をたたき、仲居は目を回した。それから雷天の間へ上がり、芹沢は吉田屋喜左衛門を呼んだが、京屋忠兵衛が名代としてやってきて、「喜左衛門は今朝よりやむをえない用事があって外出中なので、御用向きは私に申し付けて下さい」という。芹沢は「今日の用向きはほかでもない、吉田屋お抱えのお鹿と芸妓の小寅が昨夜、不（無）礼を働いたことによって、申し渡すことがあるのでここへ差し出せ。もし不承知であるならば、この家を粉々に剛（壊）すつもりであるので、よく二人に申し伝えよ」と命じた。そこで京屋は二人のところへ行き、「もしお前たちが出て行かないときには、この家は壊される。主人のことを思うならば、出向いた方がよいと思う」と説得し、二人は主人への儀利（義理）もある

ことから承知した。京屋は「それならば、私の両隣にいて、もし首を斬ることになったら、私の膝に伏せろ。そうすれば、私が二人の首を抱え、二人の替わりに私を斬ってくださいと願い出る。芹沢にしても、罪もない者を斬るとはいわないだろう。ただし、髪を切るといわれたならば、決して手を上げることなく、膝の上に手をついているように」と説き、それから二人を連れて戻ってきた。
このとき、女たちは畳の目もわからないほどに目がくらみ、髪を切られることは少しも知らなかった。芹沢は二人に向かって、「昨夜の不（無）礼のふるまいによって男子ならば首を刎ねるべきところだが、女なので断髪を申し付ける」と、脇差を抜いて立ち上がった。永倉も同様にして、「土方、平山君の手でやってもらおう」というと、二人は立ち上がって、土方歳三は小寅の髪を切り、平山五郎はお鹿を断髪し、女二人は部屋を去った。
それから酒肴が運ばれ、芸妓五十人ばかりは三味線を弾いた。芹沢は「この髪の毛を肴に一盃呑もう」といって、京屋を呼び、「今日は酒を呑んで帰るが、手のすいている者に、亭主によろしく伝えるように」と言い置いて、ほどなく芹沢は四人とともに帰っていった。
小寅はこれほどまでにされても、芹沢に肌を許すことを嫌い、そのため町人に身受けされることになる。お鹿は髪の毛を切られて、吉田屋で働くこともできず、永倉新八は吉田屋喜左衛門よりお鹿を貰い受け、ただちにほかの所へ縁組させた。この二人は、吉田屋のためには忠儀（義）を働いたものである。

文久三亥年九月六日

「十八日の誤ナルベシ」

島原廓角屋徳右衛門座敷ヲ借リ新選組再会イタシ、国事議論終テ大愉快藝妓舞子島原惣仕舞午後六字頃ニ芹沢鴨、平山五郎、平間重助角屋ヲ戻ル、土方歳三、沖田総司、御倉伊勢武ハ戻ル、芹沢、平山、平間、土方四人ニテ壬生ニテ八木源之丞本宅ヲ借リ酒宴ヲ相催ス
此時芹沢鴨四条堀川西エ入処菱屋ト申内ノ妾於梅是ヲ愛シ居ル右お梅ヲ呼、平山五郎島原桔梗屋抱お栄、平山重助ハ島原輪違屋抱糸里何レモ呼一坐ニテ大愉快
土方ハ芹沢ヲ酔セ早ク寝カスカ専一ト心得最早夜更ニモ相成ルニ付、坐ヲ開ヘシト土方歳三ニ申し酒宴モ引テ下間エ芹沢ト平山伏セル別間エ平間重助伏ル、各々婦人ヲ抱キ不残寝入ヲ見テ八木宅ヲ戻ル、其節玄関ノ障子明ケタナリ門ノ扉ヲ明ケタナリ
先エ抜身(刃)ニテ御倉伊勢武閊ル、直ニ土方歳三、沖田総司、藤堂平助何レモ抜刃ニテ閊ル、イキナリ平山五郎寝首ヲ斬リ、夫ヨリ芹沢鴨寝所ニ屛風ヲ建テ是アリ、其儘屛風トモニ刀ヲ通ス、両人エモ大音ヲ発シ芹沢鴨枕元ニ是アル刀ヲ取リ抜カケル処ヲ腕ヲ切ル其儘死ス、お梅ハ床之上ニ苦ミ死ス、平間重助屛風ゴト刀ヲ通ス、五六本通ス、其中ニ八木家内目ヲ覚シ四人ノ者局江戻リ、平山ノ婦人間亦ニ便所エ行終ニ難ヲ遁レル、平間重助婦人両人トモ疵ナク驚キ平間重助局ヲ脱ス、芹沢鴨暗殺イタシタルハ何レノ人カ新選組ニテ知ヌタイ死骸ハ神葬祭立派ニシテ壬生寺江埋ル也

文久三亥年九月六日

（「十八日の誤ナルベシ」と松村の注がある）

島原遊廓（郭）の角すみ屋や徳右衛門の座敷を借り、新選組は再び会合を開いた。国事の議論が終わって、芸妓や舞子をあげて愉快にやっていたが、島原が惣（総）仕舞いとなる午後六字（時）ごろになって、芹沢鴨、平山五郎、平間重助は角屋から帰った。土方歳三、沖田総司、御み倉くら伊い勢せ武たけも帰って、芹沢、平山、平間、土方の四人は壬生の八木源之丞の本宅を借り、酒宴を開いた。
このとき芹沢鴨は、四条堀川西へ入るところの菱屋という家の妾お梅を愛しており、彼女を呼んでいた。平山五郎は島原の桔梗屋お抱えのお栄、平山（間）重助は島原の輪違屋お抱えの糸里を呼んで、一座は盛り上がっていた。
土方は芹沢を酔わせて早く寝かせなければならないと、もはや夜更けになったのでお開きにしよう、といって酒を引き下げ、下間で芹沢と平山が横になり、平間は別間に寝た。各人が女を抱いて寝入るのを見届け、土方は八木家を去った。そのさいに玄関の障子を開け、門の扉を開けておいた。
まず御倉伊勢武が真っ先に刀を抜いて入り、直後に土方歳三、沖田総司、藤堂平助も抜き身を持って入ると、いきなり平山五郎の寝首を斬り、ついで屛風を隔てて眠る芹沢鴨に、その屛風ごと刀を突き立てた。二人とも大声を発し、芹沢鴨は枕元にある刀を手にして、抜きかけたところで腕を切られ、そのまま死んだ。お梅は床のなかで苦しみながら死ぬ。平間重助（平山五郎の誤り）には屛風ごと五、六回、刀を突き立てた。そのうちに八木の家内が目を覚ましたので、四人は八木家を去っていった。平山の女は、襲撃のときに便所に行っていたため難を逃れ、平間重助と女は疵もなく、驚いた平間重助はその夜のうちに局を脱走した。芹沢鴨が誰に暗殺されたのか、新選組では知らぬふうを装い、死骸は立派に神葬で弔い、壬生寺へ埋めた。

隊士の墓碑

文久三亥年十一月頃之事

越後三郎、御倉伊勢武、荒木田左馬之輔、松井龍三郎、新選組江同志申込ミ全ク長州奸者ト知リナカラ、近藤勇芹沢鴨同志エ加入イタセヲク、局ノ周旋方申付ヲク、永倉新八ヲ奸者ニ入置ク、毎日諸方江周旋ト唱エ出ル
御倉伊勢武、近藤勇ニ向イ段々探索イタス所、局ヲ長州ニテ焼討ニイタスノ論専ラ盛ナリ、依テ近藤先生ニハ爰ニ居ラハ御身危御立退是ルヘシト申、夫より局中ニテ同志ヲ相募リ増々局ヲ散乱イタサセルノ謀計依テ四人之者殺害イタス手訳候
十二月中旬頃御倉伊勢武、荒木田左馬之助、永倉新八、中邨金吾四人連ニテ大原公江参ル帰リニ祇園一力ト申揚屋江登ル、大壱坐大愉快夜ノ十二時頃ニ及ト、御倉、荒木田脇ノ坐敷江参リ、永倉新八不思義ニ存シ、脇ノ坐敷ヲ覗キ見レハ長州人拾人斗リ、御倉伊勢武、荒木田左馬之助ト蜜談度々紙一重ノ内ニテ聞キ取ル処永倉新八ヲ殺サント、終ニ露硯ケンニ及ふ
右相談永倉新八自分ノ坐敷江参リ酒ヲ呑ミ居ル、御倉伊勢武、荒木田坐敷江参ル、永倉ニ向イ最早夜フケニモ相成ル故、寝ルコト宜敷ト坐敷モ引ケ夫より永倉新八脇差さしヲ持寝間へ参リカケルト、御倉伊勢武、永倉ニ向イ脇差ハ仲居ニ預ケヘシト申シ、速ニ仲居江預ケル、二階坐敷江案内イタス永倉新八酩酊イタシタル体ニテ伏シ居ル、中村金吾脇差ヲ持テ来リ今宵ハ御油断有間敷申床ノ下へ脇差ヲ入レ置ク
御倉伊勢武、荒木田左馬之助、夜ノ二時ニ相成時、永倉新八寝テ居ル所へ参リ、永倉ヲ起シ永倉目ヲ覚シ何ニ時ト聞ケハ、最早三時未タ夜ノ明ケニ余程間モアル、夜ガ明ケテカラ帰ルヘシト申シ中居ヲ呼ヒ酒ヲ取リヨセ呑ミ居ル
此夜斎藤一、藤堂平助組ヲ召連レ一力江踏ミ込申サント見エド、永倉新八同席、殊ニ一力モ迷惑イタシ就テハ永倉ヲ呼出ス、明朝ハ無間違御倉、荒木田左馬之輔両人ヲ連レ帰リ可申、永倉委細承知イタシ斎藤、藤堂局江帰リ待構イヲル
最早夜モ明ケル、一力ヲ出テ局江戻ル途中デ永倉新八ヲ暗殺イタス心得、御倉、荒木田ノ所存、永倉ハ兼而承知致居ル、夫故左右江眼ヲ配リ対ニ殺事出来ス、局江帰リ直ニ亦タ出ル存意ニテ髪結ヲ呼両人髭ヲスル所江髪結ノ後腹カラヨリ芋差シニイタス、直ニ両人とも首ヲ討ツ
夫ヨリ同志ノ中ニ彼是ト同意ノ者是有リ、楠小十郎此両人ノ首ヲ討ツ、其外四人斗リ此事ヲ聞ト局ヲ脱ス、死骸ハ壬生寺エ埋ル、越後三郎、松井龍二郎、是ヲ聞ト前日出タギ

リ全ク長州ヨリ新撰組ヲ死目ス了簡ニテ四人ノ者奸者ニ入ル、余ホド長州藩ニハ新撰組在テハ邪摩ニ相成趣キ也

壬生手セ間ニ付西六条境内学林寺ヲ借リ本堂ヘノ境江矢来ヲコシラエ十二月引移ル

文久三亥年十一月頃の事

越後三郎、御み倉くら伊い勢せ武たけ、荒木田左馬之輔（介）、松井龍三郎が新選組に入隊を申し込んだが、彼らを長州の奸（間）者と知りながら、近藤勇と芹沢鴨は加入させた。そして局の周旋方を申し付け、永倉新八を奸（間）者として彼らのもとへ入れ、毎日、諸方へ周旋と称して出掛けていた。
御倉伊勢武は近藤勇に向かい、「いろいろと探索したところ、長州が新選組を焼き討ちにするとの論が盛んで、近藤先生はここにいては御身が危険なので、御立ち退きになるべき」と進言し、実現すれば、それから局中に同志を募って、ますます新選組を混乱させようとの謀略だった。これによって四人を殺害しようということになったのである。
十二月中旬ごろ、御倉伊勢武、荒木田左馬之助（介）、永倉新八、中邨（村）金吾の四人連れで大原公のもとを訪れた帰りに、祇園の一力という揚屋に登楼した。愉快に一同は過ごしていたが、夜の十二時ごろになったとき、御倉と荒木田が脇の座敷に移った。永倉新八が不思義（議）に思ってその座敷をのぞいてみると、そこには十人ほどの長州人がおり、御倉伊勢武、荒木田左馬之介と蜜（密）談していた。襖一枚を隔てて聞いていると、永倉新八を殺そうとしていたことが判明した。
その後、永倉新八が自分の座敷で呑んでいるところへ、御倉伊勢武と荒木田左馬之介がやってきて、永倉にもう夜も更けたことであり、寝ることにしようと引き揚げる。永倉新八が脇差を持って寝室に向かうところ、御倉伊勢武が永倉に脇差は仲居に預けようといって、すぐさま仲居に渡してしまう。そして二階の座敷に案内させ、永倉新八は酔って横になる。そこへ中村金吾が脇差を持ってきて、今宵は御油断なさらぬようにといい、そこで布団の下に脇差を隠し置いた。
夜の二時になったころ、御倉伊勢武と荒木田左馬之助（介）が永倉新八の寝室にやってきて、永倉を起こした。永倉が目を覚まして時刻を問うと、もう三時になっていたが、夜明けにはまだ間もあることから、夜が明けてから帰ることにしようといい、中（仲）居を呼んで酒を呑んでいた。
この夜、斎藤一と藤堂平助が隊士を引き連れて一力に踏み込む手筈だったが永倉新八が同席していたこともあり、ことに一力に迷惑をかけるので、斎藤と藤堂は永倉を呼び出した。明朝には間違いなく御倉伊勢武と荒木田左馬之輔（介）を屯所に連れ帰るように

とのことで、永倉も委細を承知したので、斎藤と藤堂は屯所に戻って待ち構えることとなった。
夜が明け、一力から屯所に戻る途中で暗殺しようというのが御倉と荒木田の計画だったが、すでにそれを承知していた永倉は左右に眼を配っていたので、ついに殺すことはできなかった。屯所に帰って、二人はまたすぐに出掛けるつもりで髪を結い、髭を剃らせているところへ、髪結の後腹からより芋差しにし、ただちに首を討った。
同志のなかに彼らと同意の者（長州の間者）があり、そのうちの楠小十郎ともう一人の首も討った。そのほか、四人ばかりがこの事件を聞くと局を脱した。彼らの死骸は壬生寺に葬った。越後三郎と松井龍二（三）郎は事件を知り、前日より屯所を出たきりになった。長州が新選組を探らせるつもりで、四人を奸（間）者として入れたもので、よほど長州藩にとって新選組は邪摩（魔）になっていた様子である。
壬生が手狭になったので、西六条境内学林寺を借り、本堂との間に矢来を設けて、十二月に引き移った。

壬生寺

第二章 浪士文久報国記事 二

朝廷を守護するの図／禁門の変

〔表紙〕

浪士文久報国記事

三

長倉性

元治元子年六月六日之事

近江国出生近江屋俊五郎ト号エ四条小橋ニ馬具渡世致ヲル、右人召捕新選組江召連レ段々吟味イタス処、自分ノ本性ヲ語ル古高俊五郎ト申、追々間答ニ及候処中々白状イタサス、夫故ニ拷問ニカケ対ニ不残白状ニ及フ

全ク私宅ニ居ル拾人是ハ不残長州人也、土蔵ニ入置品ハ御所焼キ打道具六月廿二日風並能ケれハ焼打致スノ了簡、天朝ヲ奪ウハイ山口城江落スノ謀叛夫々数多長州人姿ヲ替江四条辺ノ町家江入リ込ミ隠レ居ル其外三条通リ旅宿屋ニ水口藩、大淵藩ト表札ヲカケ居ル大凡三百人ホド京師ニ潜伏致居ル、逐一白状ニ及フ夫より速ニ会津公江注進イタス、会津公驚キ夫々警衛ノ諸侯江口々ヲ相固ルヨウ相達ス、会津公ニヲイテハ人数択リ出ス支度、土方歳三申ニハ古高俊五郎召捕レタ故是ヲ聞テ追々散乱致スモ難計、依テ新選組祇園ノ会所に出張致ス

最早午後七時頃当所茶屋中ヲ調ルイエトモ壱人モヲラス皆逃去リ夫より川端タ三条小橋北側ニテ池田屋ト申旅籠屋アリ、右ノ内ニ長州人居ル趣表廻リハ厳重ニ固メ夫より閖まかりいル人ハ近藤勇、沖田総司、永倉新八、藤堂平助、表口より閖ル、鉄炮鑓沢山是有縄ニテ搦カラム、玄関ラシキ所へ参リ亭主ヲ呼出シ、今宵旅宿御改メト申ト、亭主驚キ奥之二階江去り跡ヲ直ニツケ参ル、長州人弐拾人ホド不残抜刀、近藤勇御用御改手向イイタスニヲイテハ用捨無切捨ルト申シ其大音ニ恐腑イタシ跡へサカル

壱人切テカケル者是アリ、沖田総司是ヲ切ル、夫より下へト逃ル者有之、近藤勇下エト差揮スル、下ニハ八軒ノ灯リ有之、夫故ニ大キニ助リ、沖田総司病気ニテ会所江引取

是より三人奥奥ノ間ハ近藤勇防キ居ル、台所より表口ハ永倉新八防キ居ル、庭先ハ藤堂平助表口へ壱人逃ケ出ス者有之

夫ト見ルより跡ヲ追かケ表口より谷万太郎鑓ニテ突トタンニ永倉新八肩ヲ切ル、本ノ所へ永倉新八参ル、又壱人表口へ逃ル者永倉追カケ、是ハ袈裟ガケニ一刀デヲサマル、夫より庭先江参ル、雪隠エ逃込人ヲリ、夫ト見ルより串指ニ致呉刀ヲ抜カケントスレト刀

ニツカレヲルユエタヲレル、直ニ胴ヲ切ル、藤堂平助垣根際より長州人ニ切レ夫より戦イ目ニ血ガハイリ難渋之ヨシ、夫々刀切レ出ス、永倉新八夫ト見ルより介太刀イキナリ腰ノ所へ切込ムトツクユカント受止メ夫より永倉新八ニ切リ懸ケル
藤堂平助深手負会所へ引取ル、永倉必死ノ戦イ近藤勇見テ居ル所、両三度モ危キ事有之、近藤勇助太刀ニ可参ト存ヲレトモ、奥ノ間敵大勢夫ヲ防キ居ル故、助太刀ニモ参ラレス永倉漸々ノコトデ肩先エ切込ミ対ニタヲレ仕止メル、長州人四人刀ヲ差出シ謝罪イタス直ニ縄ヲ懸ケル、永倉手ノ平ヲ少シ切レ刀刃切出ス、夫故ニ長州人ノ刀分捕イタス、夫より表口ノ新選組大勢押入ル家ヲ捜ル二階ノ天井カ破レ長州人壱人落ル、武田観柳斎是ヲ切ル、表へ逃タ者不残新選組ノ手ニ掛ル、嶋田魁ハ鑓長州人ハ刀鎗ノ太刀打より五寸ホト手前より切落サレ直ニ刀ニテ仕ト止メル
三条小橋ノ間ニテ勝負イタス池田屋亭主小手ヲユルシ置キ、対ニ長州人ノ縄ヲ解キ長州人逃去ル、原田左之助跡ヲ追カケ対ニ鑓ニテ仕トメル、此時松平越中守家来両人長州ニ切レ即死致ス、松平肥後守家来壱人長州人ヲ水口藩ト心得縄ニカケス連レ参ル途中ニテ長州人カ袈裟カケニ会津藩ヲ切リ其儘逃去ル跡ヲ追カケ長州門前ニテ仕ト止メル、長州人四五人召捕リ夫より池田屋亭主モ召捕ル、不残町奉行所へ差出ス、夫より早速松平肥後守天朝エ奏問ニ及フ、御満悦被思御賞賜コレアリ、新選組一統江金三百両賜ル、於幕府刀料并ニ金五百両一統江頂戴ス、松平肥後守様より一統江弐拾五円宛被下ル也

〔表紙〕
浪士文久報国記事
三（二）
長（永）倉性（姓）

元治元子年六月六日之事

近江の国出身の近江屋俊五（太）郎（桝ます屋や喜右衛門）という者が、四条小橋で馬具商を営んでいた。右の人物を新選組が召し捕り（屯所へ）連れてゆき、段々吟味してみると、自分の本性（正体）を古高俊五（太）郎と名乗った。おいおい問答をしたがなかなか白状せず、拷問にかけると、ついに残らず白状した。
古高の家に出入の十名の志士はすべて長州人で、また自白どおり土蔵には禁裏御所を焼き払う際の道具が発見された。決行日は六月二十二日頃、強風の日に火を放ち、孝明天皇を奪って山口城へ連れ去る謀反で、策をめぐらすため長州の志士たちは身を変じて四条あたりの町屋にかくれているという。また、三条通りの旅宿には、近江の水口藩、大淵（溝）藩などの表札をあげ、およそ三百人ほどが潜伏しているとのこと、すべての行状が古高の自白によりあかるみとなる。この内容を取り急ぎ京都守護職松平容保に報告した。容保は大いに驚いて警衛担当の各藩に厳重なる警戒を通達した。容保も数名の者に出動を命じた。土方歳三は古高の自白によって一隊を率いて市中を探索しながら八坂神社石段下の祇園会所へ走った。
午後七時頃に到着。祇園の茶屋をくまなくさがしたが一人もおらず、どうも逃げ去ったようである。そこで鴨東を探しながら、三条方面へ走る。三条小橋北（西北）側に池田屋という旅籠があり、どうも長州の志士らが密会しているという情報をえる。厳重に固めおいて近藤勇、沖田総司、永倉新八、藤堂平助は表口より入る。そこにあった鉄砲、鑓などの武器を縄でしばって押収した。玄関らしき所へ参って池田屋の主人をよび、「今宵旅宿お改めであるぞ」と告げると、主人大いに驚いて、奥の二階へ走り、跡をすぐにつづくと、長州の志士二十名ほどがみな抜刀、そこで近藤が「御用お改め手向いいたすにおいてはようしゃなく切りすてるぞ」と大声で一喝、一同の者は恐れおののき後へさがった。

その時、勇猛な志士一人がやにわに切りかかる。すかさず沖田の剣がこの者を捕え一刀のもとに切り倒した。それより階下に逃げさる志士がおり、これを見た近藤はすかさず下へと指図する。階下には八軒の灯があってそれゆえ大いにたすかる。このとき沖田は持病のため屯所（会所）へ戻った。
これより三人で奥へぬけ、奥の間は近藤が固め、台所から表口は永倉が見張る。庭先は藤堂、そこへ一人の志士が表口へ逃げだした。
（永倉は）これをみるなりあとを追い、表口より鑓の名手谷万太郎が突くやいなや、永倉が肩を切る。永倉は、もとの場所を固める。そこへまた一人表口へ逃げる者を永倉は追いかけこれは袈け裟さがけに切りすてた。それより庭先の方へまわると、便所へ逃げ込む者がいた。これを串指（刺）しにし、（その敵は）抜刀しようとしたが疲れていて倒れ、すぐさま胴に一刀をおくった。藤堂は垣根ぎわより長州の志士に切られ、目に血が入って戦いが思うようにならず、また刀が刃こぼれし、永倉はこれをみて介（助）太刀、（相手は）いきなり腰あたりに切り込むのを受けとめて永倉へ切りかかってきた。藤堂は重傷のため屯所にもどった。永倉は必死に闘いつづけ近藤を見ていると、三度ばかり切られそうになり、助太刀しようとすれど、奥の間に志士が大勢いてそれもままならず、永倉はやっとのことでこの者の肩先に切り込んで倒した。長州の志士四人が刀を差し出して謝罪したところを、すぐさま縄をうつ。永倉は手の平を少し切られたが刀が刃こぼれしたので、それゆえ長州の志士の刀を分捕った。それより表口の新選組の隊士が大勢でドッと押入って家を探索する。二階の天井が破れ、長州の志士一人が落ちてきた。これをみてとった武田観柳斎がすかさず切り伏せた。また表の方へ逃げた志士はのこらず隊士によって手にかけた。嶋（島）田魁の鑓（槍）が長州の志士に刀鑓の太刀打より五寸ほど手前より切り落とされ、すぐさま刀にて切った。
池田屋の前の三条小橋にて勝負する。池田屋の主人は手をしばられていなかったので、そのうちに長州の志士の縄を解き放し逃してやった。このことに気づいた原田左之助はあとを追いかけ、鑓で仕とめた。このとき京都所司代松平定さだ敬あきの家臣二人が長州の志士に切られ即死した。また京都守護職松平容保の家臣が長州人を水口藩士と思い縄をうたずに連行しようとし、途中において長州の志士が袈裟がけに会津藩士を切り、そのまま逃走する後を追いかけ長州藩邸門前で討ちとった。このとき長州の志士四、五名と池田屋主人も召捕る。のこらず京都奉行所に引き渡した。それよりさっそく松平容保より朝廷に池田屋事件の一件を申し上げたところ大変ご満悦で、このたびの働きにつ

き褒賞金の下賜があり、新選組へ金三百両、また幕府より刀料と金五百両、松平容保より二十五円（両）をそれぞれ新選組一統に賜った。

解　　説

　新選組の武名を轟かせた事件が世にいう〝池田屋騒動〟である。元治元年（一八六四）六月五日の出来事だった。

　この事件の発端となったのは古高俊太郎という人物が、新選組の不逞浪士取締りの網にかかったことである。古高は近江（滋賀）出身であることから、近江屋俊五郎と名のっていたのだろう。古高は桝屋こと湯浅喜右衛門と変名を使い、表向きは商人を装い、裏では勤王志士たちの武器調達を行なっていた。古高は馬具商を営んでいたと本文にはあるが、どうやら薪炭屋であった可能性が高い。桝屋のあった四条小橋は高瀬川に面し木屋町とよばれ、町名のとおり材木商が多く、これに従事する商人が軒をならべ、筑前藩御用達商人の古高もその中の一軒だった。

　この界隈、夜ともなると夜鷹が出没、志士らのかっこうのアジトとなっていたのである。

　新選組は捕えた古高を壬生の屯所に連行し拷問、これによって志士たちの陰謀を知った。内容は驚くべき過激なものであった。

「烈風の日に乗じて火を御所の風上に放ち、斯かくする時は必ず中川宮及会津肥後守（松平容保）には、倉そう皇こうとして参内する。吾われ々われは、その途中を要撃して中川宮を幽閉し肥後守を討ち取らば朝廷は再び吾々の掌中に帰する、今日の策たるこれに優るは皆無である。と衆議これに一決して長州藩士および諸国浪士らは、直に武器を集め手て筈はずを定め、毎日烈風の吹き来るを待ったが、図はからずも新選組のために怪あやしまれ、古高俊太郎の捕縛ありて破は綻たんを生じ陰謀ことごとく露見に及んだ」（『池田屋事変始末記』寺井維史郎）

　新選組の正史である『島田魁さきがけ日記』では事件の模様を次のように伝えている。「五月下旬四条小橋辺リニ桝屋喜左（右）衛門ト申人、元江刕（州）大津代官手代古高俊太郎ト申人ニテ、長州人ト同意シ三百余人姿ヲヤツシ三条大橋辺ノ宿屋ニ泊リ居ル。当組島田、浅野、山崎、川島是ヲ探索シ、会津侯へ達ス。六月五日夜、会（会津）桑（桑名）両藩当組ト合シテ七ツ時（午後四時）頃切込。人数二百人余下坂シ残リ八九十人居。接戦シ十一人擒リ速（即）死二十人程、其他皆遁にげ去ル。翌六日、近隣悉ク探索ス。昼頃壬生村ニ帰ル。七日御褒美ヲ下サル。八日、市中ノ風説、長（長州）浪人当

局（屯所江切込候ノ由、故ニ厳ニ固メ表門へ木炮（砲）二門ヲ備江裏門江一門備江侵スヲ待。九日、会津ヨリ加勢トシテ廿一人来リ合ス」
　この正史と永倉の実歴談を読みあわせると、池田屋事件の全貌が鮮明によみがえる。
　島田と永倉は江戸の心しん形ぎょう刀とう流りゅう坪内主しゅ馬めの同門で、隊内でも互いに親交を結んでいた。
　日記で特筆すべきことは、古高を五月頃からすでにマークしており、探索方は山崎丞のみならず、島田、浅野藤太郎、川島勝司の四名の隊士が任務にあたっていたことだろう。情報が錯誤したのだろうか、闘死者（負傷後死亡を含め）十四名であるのにかかわらず二十一名としている。同事件後の八日に長州浪人の報復情報を得て壬生屯所前に木砲二門を備え警備、翌九日には会津藩から二十一名の援軍の派遣を受けていることから、事件後もかなりの緊迫した状況にあったことを伝えている。
　永倉の『浪士文久報国記事』の池田屋の一文は、闘いに加わった者でしか書きえない描写で綴られている。
『浪士文久報国記事』では、池田屋の密議に参集した志士をすべて長州人とみている。だが実際にはこの事件の前から数回にわたり、肥後の宮部鼎蔵、松田重助のリーダー格をはじめ、土佐の野老ところ山やま吾ご吉きち郎ろう、藤崎八郎、北きた副ぞえ佶きつ摩ま、因州（鳥取）の河かわ田た佐さ久く馬ま、京都の西にし川かわ耕こう蔵ぞう、佐さ伯えき稜い威つ雄お、播州の大おお高たか又また次じ郎ろう、長州の吉田稔とし磨まろ、福ふく原はら乙おと之の進しん、杉山松介、広岡浪なみ秀ひで、有吉熊次郎、山田虎之助、大和の大沢逸いつ平ぺい、作州の安藤精之助ら、二十数名の一級の志士の面々が密会に加わっていた。
　池田屋は長州藩の常宿として知られ、店の看板にも長州の藩紋をかかげる長州藩御用達商人だったので、永倉は密会者のすべてを長州の志士と思ったのだろう。
　最初に駈けつけたのは近藤、沖田、永倉、藤堂の四名。最初に志士を切りすてたのは沖田総司であった。のち沖田は闘いの途中で持病労ろう咳がいのため吐血し屯所に戻る。
　よく池田屋の内部はうす暗かったと伝えられていたが、階下には八つも灯があって大だすかりだった、と永倉は記している。近藤が奥の間、永倉は台所から表口、藤堂平助は庭先を各々固め、逃走して来た志士に鑓の名手谷万太郎が必殺の突きをおくると、すかさず永倉が切り伏せた。

指揮をとっていた近藤が数名の志士に取り囲まれたのだろう、三度ばかり危うくなった。大勢の志士をけちらして、やっとの思いで永倉は助太刀した。これを見た志士四名が刀を差し出して降伏したので、すぐさま縄をうって捕えた。そこへ土方らの一隊が加勢し、一斉に家の中を探索したところ、天井裏から志士一人がころげ落ち、武田が切り仕留める。巨漢の島田魁が鎗を切り落とされたので、すばやく刀で討ち果たす。

池田屋主人惣兵衛は捕えられていなかったので、捕えられていた志士たちの縄を解き放し、逃がしていることに気づいた。原田が後をおいかけて鑓で仕留めた。

闘いで京都所司代松平定さだ敬あきの家臣二人が長州人に斬られた。京都守護職松平容保の家臣が、水口藩の者を縄をかけず連行しようとしたところへ、志士が袈裟斬りに飛びかかってきたのを、会津藩士が反対に追いかけて京都長州藩邸前で討ちとった。この闘いで新選組は志士四、五名と池田屋の主人を捕縛し町奉行所に引き渡したと、永倉は実歴談として伝えている。

京の三大祭・祇園祭の宵々山に新選組が疾風迅雷のごとく池田屋を急襲したこの事件は、その後の政局に波紋を残した。殉難した者の中には一級の志士らがいて維新が数年おくれたともいう。

池田屋事件は、大捕物であったにもかかわらず、この時期、新選組内は病人が多く、出動可能な隊士が限られており、まさに決死の討ち入りであったのだ。

また、最初に池田屋へ踏み込んだ人数を永倉は四人、近藤は江戸の近藤周斎あて書簡に倅せがれ周平を加え五人と伝えている。さらに、近藤は所司代の者が一人即死としているが、実際は永倉の記した通り、本間久太夫と藤崎猪之右衛門（共に桑名藩士）の両名が討死している。

戦闘の様子も微妙なちがいが永倉と近藤ではあり、屯所へ戻った隊士らが、各々語る武勇伝に加え、自らの体験を綴ったのであろう。したがって、どちらが真実かと問うことはできず、永倉の実歴であり、近藤の実歴ととらえるべきであろう。

余談だが、この事件の褒賞金の分配は、

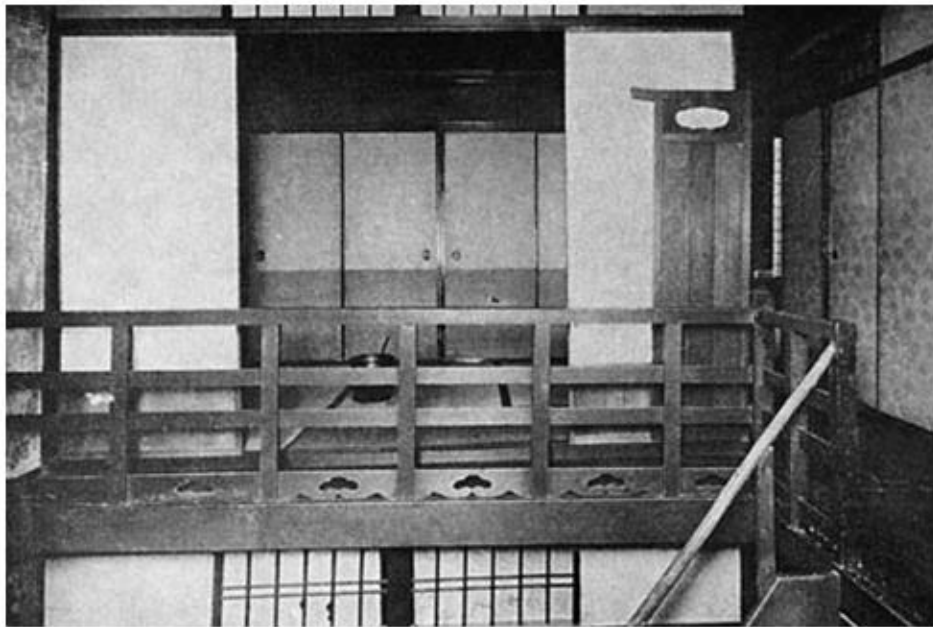
金三十両

近藤勇（三善長道の刀と酒一樽）

金二十三両

土方歳三

金二十両

沖田総司、永倉新八、藤堂平助、谷万太郎、浅野藤太郎、武田観柳斎
金十七両
井上源三郎、原田左之助、斎藤一、篠塚峰三、林信太郎、島田魁、川島勝司、葛山武八郎、谷三十郎、三品仲治、蟻通勘吾
金十五両
松原忠司、伊木八郎、中村金吾、尾関弥四郎、宿院良蔵、佐々木蔵之助、河合耆三郎、酒井兵庫、木内峰太、松本喜次郎、竹内元太郎、近藤周平
別途金二十両宛三人へ（死亡した奥沢栄助、安藤早太郎、新田草左衛門）
総計六百両で現在額でざっと千八百万円。池田屋に出動しなかった隊士たちには何も下されなかった。

池田屋内部

元治元子年六月十日頃之事

新選組人員不足ニ相成、依テ会津公より加勢ヲ願イ弐拾人御遣シニ被成ル、此時祇園ニテ明保ノト申茶屋ニ長州人潜伏イタシ居ル趣、町奉行より新選組江注進是有、依テ速ニ新選組副長助勤原田左之輔組夫々会津加勢人拾人召連レ、明保野江踏込長州人壱人召捕土州人四五人居ヲ不残召捕リヘクノ処、逃去ラレ是ヲ長州人ト心得会津ノ柴司ト申者跡ヲ追カケ鎗ニテ腰ノアタリヲ突クト土州藩ト名乗ル、決テ私ヲ鎗ニテ突ハ被成間敷私モ突レハ不致ト申シ其儘大仏ノ旅宿江帰ル
柴司モ局江戻リ悉ク心配ノ様子永倉新八ニ向イ如何致タ事デアロト申ス、決テ御心配無国家為ニ人ヲ殺ス事ニハ聊不都合之事ナク、夫ニ土州人ナラハ逃ル事ナクテ宜敷ニ彼ノ者逃るハ誤リ、依テ決テ御心配無キ様ト永倉申ス
夫ニテモ矢張心配ノ体ヘ見エル付、依テ永倉近藤勇ニ向イ柴司悉ク心配致シ私ヲモ一応申聞ケルトイエトモ中々聞入ナクト申居ル処エ、柴司ノ兄秀治ト申者ヨリ柴司ニ早々帰ル可様申越シ早速ニ柴司コト柴秀治ノ宅エ参ル
直ニ近藤勇、土方歳三、永倉新八心配致シ跡ヲ追カケ公用方江参ル、会津家老公用方集会致早速土州家江医師ヲ壱人召連公用方参ルト、土州藩ニヲイテハ士道ヲ背タル者ハ療治致サス、折角ノ思召難有存ルトイエトモ療治之儀者御断申スト有、右会津公用方モ無余儀戻ル
公用方右之次第委細ニ語ル、家老申ニハ、是迄肥後守ト土州公ト別段御懇意ヲ結ヒガ対ニ離隔ノ姿ト相成ルモ不知、家老公用方心配イタシ柴司ニ切腹イタサセルト申次第モ是無如何致タモノト一同心配イタシヲル処ヲ、柴秀治聞入レ直ニ宅江戻リ司ニ向イ家老公用方心配ノ趣申聞ケ、司ニ切腹致呉ト申ス、司ノ申様私壱人ノ事ニテ土州公ト離隔ノ姿ニ相成誠ニ恐縮ノ次第、依テ切腹イタス、入湯イタサセ兄ガ髪ヲ結イ衣服ヲ改メ、兄秀治介錯ニテ速ニ司事切腹致シ、依テ為念之御見届ケ願ト土州藩江申入即土州藩ニヲイテモ切腹為致御見届ケ願ト申ス、土州公用方召連戻ル、柴司ノ切腹ヲ見届ケサセ是ニテ土州公ノ御意ガ解ケ、是迄之通リ会津公ト御懇意ニイタス、柴司ハ主人ノ情ヲイミ切腹致ス、京都黒谷ト申寺エ葬リ有之
此時柴司用ヒタル鎖帷子ニ鎗是ハ永倉新八所持ノ品之、柴秀治事右ノ品貰度趣ニ付同人江差贈ル、柴秀治天下ノ御為ニハ是ヲ着シ討死イタスト申シ居ル也

元治元子年六月十日頃の事

新選組の人員が不足したので、会津公に加勢を願ったところ二十人をお遣わしになられた。このとき、祇園の明保野という茶屋に長州人が潜伏しているとのことを町奉行より新選組に注進があったので、速やかに新選組副長助勤の原田左之輔（助）組が会津からの加勢人十人を連れ明保野に踏み込み、長州人一人を召し捕り、土州人四、五人がいたので残らず召し捕ろうとしたところ、逃げたのでこれを長州人と思って会津の柴しば司つかさという者が後を追いかけ、鎗で腰のあたりを突くと、土州人だと名乗った。（男はこれ以上）決して鎗で突かないでくれ、自分も突きはしないと言って、そのまま大仏の旅宿へ帰った。
柴司も新選組の屯所へ帰ったがどうにも心配な様子で、永倉新八に向かって「どうしたものであろう」と言う。「決して御心配なく。国家のために人を殺すことには少しも不都合なことはなく、それに土州人なら逃げなくてもよいのに、あの者が逃げたのが誤りであったのだから、決して御心配ないように」と永倉は言った。
それでもやはり心配しているように見えたので、永倉は近藤勇に「柴司がどうも心配していて、私も一応、申し聞かせたのだが、なかなか聞き入れることがない」と言っているところに、柴司の兄秀治という者より、柴司に早々に帰るようにと申し伝えられ、早速に柴司は柴秀治の家に向かった。
ただちに近藤勇、士方歳三、永倉新八は心配して後を追いかけ、（会津藩の）公用方に行くと、会津（藩）家老、公用方が集会して、（その結果）早速、土州家に医師一人を召し連れて（土佐藩）公用方に行くと、「土州藩では士道に背いた者は治療はしない。せっかくのお心遣いはありがたく思うものの、治療についてはお断り申す」とあって、会津の公用方も仕方なく戻った。
公用方が右の次第を詳しく報告すると、家老が言うには「これまで肥後守（松平容保）と土州公とは非常に懇意であったが、ついに断交するようになるかもしれない」ということで、家老や公用方は心配して、柴司に切腹を申し付けるわけにもいかず、どうしたものかと一同が心配していることを柴秀治が耳に入れ、ただちに家に戻って、司に向かって家老や公用方が心配していることを申し聞かせ、司に切腹してくれと言った。司が言うには、「私一人のことで、土州公と断交となってしまっては誠に恐縮の次第であり、（自分は）切腹する」とのことで、風呂に入り、兄が髪を結って衣服を改めてやり、

兄秀治の介錯で速やかに切腹したので、念のため見届けていただきたい、と土州藩に申し入れた。そこで土州藩も切腹したのを見届けたいと願い出て、土州公用方を連れて戻った。そして柴司の切腹を見届けさせ、これによって土州公の（断交しようとの）思いが解け、これまでどおりに会津公と御懇意にすることとなった。柴司は主人の情を汲んで切腹し、京都黒谷という寺に葬られた。

このとき（明保野亭事件）に柴司が用いた鎖帷子と鎗は永倉新八が所持していたもので、柴秀治がその品を貰いたいとの意向だったので、同人へ贈った。柴秀治は天下のために、これを身に着けて討ち死にすると申したものである。

元治元子年六月廿六日之事

長州藩福原越後、大膳父子御詫トシテ関東江罷下ルト淀城主稲葉伊予守殿ニ申出ル、此時御老中御役ヲ相勤居リ願之儀者、関東江申達ルトノ御答有之ハ宜敷処権コクニ恐腑致、対ニ福原淀ヲ通ル、尤モ武器類ハ淀川船ニテ廻ス、稲葉公ヨリ会津公江御注進イタス、会津公驚キ速ニ会津兵蒔田相模守組下新選組不取敢九条邸江出張致ス、口々ノ固メ諸侯江相達ス、福原越後伏見ノ長州邸内ニ居ル、夫より釈迦天龍寺、山崎天王山江福原越後兵ヲ廻シ
此時事木船ニ出兵ノ人員左之通リ
会津藩士大将神保蔵内之助、軍事方林権助惣勢五百人、見廻リ頭取蒔田相模守惣勢三百人新撰組局長近藤勇、副長土方歳三病気ニテ引込居リ代山南敬助副長助勤病気ニ付引込居リ代沖田総司、永倉新八、藤堂平助、斎藤一馬、井上源三郎、軍事掛リ武田観柳斎、諸士調役山崎丞、嶋田魁、林信太郎、小荷駄方尾関弥四郎、川嶋勝司、惣勢弐百人
七月十四日ノ応接ヲ△永井玄蕃頭殿福原越後ヲ伏見奉行所屋敷江上江呼ヒ是迄度々引取様申聞候処、今日ニ至リ引取不申此上者十八日ヲ限に引取可申、若シ引取イタサンニ於ハ速々兵ヲ差向ケ可申、福原越後眼ノ色ヲ換エ何卒廿四日近日延願上候ト申ス、永井公不聞入其儘相別レ新選組ニテハ、十八日ノ明方伏見長州屋敷江焼キ打カケル支度致居ル処江、夜五時頃伏見ノ方ニテ大炮ノ音ト其内ニ九条村ニテ具太鼓ヲナラシ、夫より固場所エ出張ス
伏見固場ニハ大垣藩ヨリ会津軍事方ヲ頼ミニ相成ル、伏見手薄ニ付心許無シト申来ル、速ニ会津兵弐百人夫々新選組不残伏見エ向イ、此時彦根公伏見関門御固メ福原越後右関門江参リ、永井玄蕃頭仰ニ随ひ釈迦天龍寺ノ兵引取せ可申ス依テ関門罷通リ、若シ関門ニテ返答ニヨツテハ討ツ心得其権威ニ彦根藩恐腑イタシ、速ニ返ス福原越後ノ謀計ハ関門ヨリ偽リ、実ハ叡山エ登リ江州米ヲタテ切、兵粮攻メニイタスノ了簡
大垣藩固メ居ル関門ニ福原越後向ウト見ルト、大炮ニテ挨拶イタサレ夫ヨリ大戦イト相成ル、幸ニ福原越後大炮ニ当リ落馬イタシ、夫ヨリ福原ノ陣大イニ崩レ散乱ス
此時新選組大垣藩ニ追討如何ト問エハ、大垣藩追討欠ルコト六ケ敷夫ニ未タ夜明ス、間道ハコレアリ先弊藩ニテハ見合セ可申、夫より新選組ニテ追討チ伏見稲荷ノ処より墨染迄追討ス、残念ナガラ福原越後手負イタシ大坂へ船ニテ下ル、福原ヲ手ニ入レ不申許ノ場所へ戻ル

最早夜ガ明る、御所ノ方ニ向イ大炮ノ音烈敷家根上リ見るト、御所ニ当リ黒煙リ上リ夫御所へト近藤勇差揮イタスト新選組バカリ七条通リ押登る、堺御門弐丁ホトノ手前へ陣取ル、此時堺町御門御固メ松平越前守長州勢追払ハレ会津兵右御門内ニ固メ居候堺町御門西側ハ應司殿邸内ニ長州人五十人斗潜伏イタシ居ル、依テ鷹司殿邸内へ火ヲ上ル、堺町御門ノ所ハ長州兵間タニ挟ミ、会津ト新選組ニテ打止メル
寺町御門固メヲハ細川越中守鷹司殿邸内より逃出ス兵不残寺町御門ノ方江逃ケ出ス、会津兵追討チ熊本藩ト会津兵トノ中江挟ミ長州人不残討死、長州方ニテハ縄梯子まて持土塀ヲ乗リ越シ九門内へ入ル、藤堂和泉守固メ場所ヲ追イ払イ蛤御門ノ方江出ル、蛤御門ハ会津公御固メ大苦戦シ、対ニ長州兵九門外江追散ス、此場ニテハ惣方ニ討死多シ
中立売御門黒田美濃守御固メ長州兵ニ追イ払ハレ、長州不残中立売御門ノ内へ陣取リ居ル、戌亥御門ハ薩州御固メ薩州兵中立売御門内外より攻メル、此時此時会津ハ薩州ト合併イタシ大攻メ長州大敗軍背ノ死コロシ薩州会津ノ討死モ多シ
夫より亦長州人兵ヲ集メ今宵夜討ヲカケル心得ニテ市中へ潜伏イタス、右注進立有之依テ中売御門外ニ紅屋ト申大家有之、右ノ内へ会津焼玉ヲカケル、夫より市中大方焼払ウ公家町向角日野殿屋敷へツキ会津ノ見張所有之、然ル処日野殿邸内ニ五拾人ホド長州人潜伏致居リ不意ニ見張所江切込レ、漸々ノ事ニテ長州人討取ル、会津討死多シ
新選組公家御門前ニ固メル、松平肥後守此大変ヲ聞永々御病気実ニ寝返リも六ケ敷位イ、今日ノ大変ハ職掌ニ拘ル、参代イタスト被申近習ノ者ニ剃刀ヲトリヨセ自分ニテ髪ヲスリ官服ヲ召シ、参代イタサントト馬ニ乗テ花畑ヲ出テ南門前より公家門ノ方江曲ル、角ニテ馬ガ止リ無余儀南門ヨリ参代
御玄関ニ一ツ橋中納言殿、松平越中守出迎イ両君ノ手ニ縋リ漸々天子ノ御側へ近クヨリ、此時天子御立退キノ御支度被為有肥後守驚御膝許ニ寄リ御袖ニ縋リ、暫時シ御止リ有之度ト申上ル、肥後其方ニ任セルトノ御上意、会津公ニヲイテハ職掌不相立、依テ君臣トモ討死之覚悟家来一統江申渡ス
会津公公家門より参代イタスト鷹司殿日野殿邸内より長州討テ出デ既ニ肥後守危キトコロ南門より参代イタサレ、実ニ高運
御所より釈加天龍寺討手、松平修理大夫被仰付山崎天王山討手、松平肥後守ニ新選組被仰付、元治元子年八月廿一日夫々出兵ニ相成ル、釈加天龍寺ニ廿二日朝取掛ル長州大敗軍山崎天王山江落る跡ヲ薩州追イ討ス、此時長州人討死多シ

矢張廿二日朝会津新選組山崎天王山江取掛ル、淀城江参ルまて夜も明ケス、夫故ニ籏ハ巻キ各々絨之ハカラケ淀城迄押寄ル、此時天王山ニヲイテ長州人議論牧和泉申ニハ、最早志ハ是迄、我爰ニヲイテ討死之覚語落ル者早ク落ヲルヘシト申ス、其中ニ廿人計リ牧和泉同論、跡ハ丹波丹後江不残落ル

夫より会津新選組山崎ノ渡場ヲ先陣後陣ト率イ渡ル、室寺天王山ヘハ会津士大将神保内蔵之助其組下百人程新選組ニヲイテハ局長近藤勇、副長助勤永倉新八、斎藤一組下四十人ホド、天王山下ハ副長土方歳三、副長助勤原田左之助、藤堂平助、井上源三郎、軍事方浅野薫、武田観柳斎、諸士調役山崎丞、嶋田魁、林信太郎、小荷駄方尾関弥四郎、川嶋勝司惣勢百五拾人会津兵四百人、此兵ニテ下タ通リヲ固メル

追々室寺より攻メ始メ、天王山ニ向イ天王山より六丁ホトハナレ水天宮ノ神主ニテ牧和泉ト申ス者、金ノ烏帽子ヲ頂キ錦ノ下垂タレヲ着シ組下廿人計各々鉄炮ヲ持チ壱丁ホトマデ押寄セ、敵より声ヲカケ、我ハ長門宰相ノ臣牧和泉互ニ名乗ラレテ戦イイタサン、我モ徳川ノ旗下ノ者ニテ近藤勇ト申、夫より敵キハ詩ヲ吟ジ勝時ヲ揚炮発イタシ陣小屋江引退タ夫より追イ討スル陣小屋江火ヲカケ、火ノ中ヘ飛込ミ和泉ヲ始メ其外不残立腹ヲ切ル、実ニ敵ナカラ討死感心ナリ

天王山江登リ会津御籏ヲ持テ勝時ヲ上ケル

天王社ニ金三千両ニ米三千俵、甲冑ヘ名前ヲ印シ天王江奉納、此性名不詳夫より山中ヘ参ル、山崎村ヘ火ヲカケ八幡社焼失イタシヲル

此時会津ニテ長州江兵粮ヲ大集シ殊ニ極暑ニテ咽ノト乾キ対ニ水切無拠ナクドブノ水ヲ一統呑ム、兵粮ハ切レ黒米ニテ廻ル、長州より分捕ノ金三千両米三千俵コレハ八幡ノ神主ト山崎村百姓ニ遣ス、廿三日新選組計リ大坂江下ル、廿四日長州屋敷ヲ攻メル、廿人ホト召捕リ町奉行江相渡ス、此節旅館東御堂ナリ、廿五日京都壬生旅宿江帰陣ス

長州ノ暴落不成容易次第　大樹公御聞入レ有テ未御所落ノ御模様無之、依テ諸侯ハ将軍ノ命ヲ背ク様ニ相成リ、就テハ将軍御上落御進メニ関東江罷下ル

元治元子年九月一日京師ヲ発ス、近藤勇、永倉新八、竹田観柳斎、尾形俊太郎、外ニ藤堂平助下ル、六日ニ関東ヘ出ル、市ケ谷加賀屋敷柳町ニテ近藤勇宅江着、翌日和田倉御門内会津公留守居ノ宅江参ル、此時薩藩西郷吉之助ニ面会、西郷モ矢張御上落御進メニ京師より三日ニ而当所江罷出候趣キ

夫より柳原健吉、中条令之助方江出テ議論伺ウ、両人ノ議論ハ長州ハ其儘ナシヲキ攘夷ヲイタスカ先ト心得、近藤勇ノ申様内々事カ出来ヲルノニ攘夷ヲ致スノハ思召違イト存

スル、私ニヲイテハ長州方カ先ト心得ルト申ス、柳原中条両人ハ近藤ノ論ニ副守フクストモニ御上落御進御義ハ尽力イタスヘシ、夫より御小性御小納戸大御番組江罷出テ、当今ノ議論伺ウ処、言語道断ノ嘶シ、籏下ノ処申ニハ上落被仰出ルヲイテハ支度金沢山頂戴致サンケレハ御供六ケ敷ナト申、将軍権威日々衰ル事ヲ不知、誠ニナゲカワシキ人論ニ施タリ

籏下一統ノ処ハ未タ泰平ト心得居ル様子、此時キ御老中松平伊豆守殿江建言致ス、其旨趣京師ノ御模様殊ニ関東へ参リ籏下ノ処心得違イイタシヲル次第逐クー チ申上ル、依テ将軍御壱人ニテ御上落被為遊若有志ノ者有之候ハ、倍可致様御達シテ相成ルニヲイテハ籏下ノ者一統目ガ覚ル、左様ニ相成ルニヲイテハ籏下ノ者支度料ナトニ彼是申間敷、就テハ速ニ御上落被遊候様御取計奉願上、右松前侯江言上ス

松前侯建言委細承知イタス、速ニ御上落被遊早速帰京可致様御達シ同志五拾人ホト相募ツノル、其中ニ伊東甲子太郎舎弟三木三郎、十月朔日関東ヲ発足、十月十五日ニ道中無滞京都江安着、夫より直ニ役ヲ命スル、参謀ニ伊東甲子太郎、副長助勤三木三郎、諸士調役服部武雄、篠原寿造右申付とナリ藤堂平助跡より外ニ帰ル

元治元子年六月二十六日の事

長州藩の福原越後は大膳父子（毛利慶よし親ちか・定さだ広ひろ）の御詫びと称して関東へ下ると、淀城主の稲葉伊予守（稲葉正まさ邦くに）殿に申し出た。このとき（稲葉は）御老中御役を勤めており、願いについては関東へ申し送ると御答えになればよいのに、「権コク」（剣幕）に恐腑（怖）して、ついに福原は淀を通った。ただし、武器類は淀川船で回送した。稲葉公より会津公へ報告があり、会津公は驚いて、速やかに会津兵・蒔田相模守組下（見廻組）・新選組はとりあえず九条邸（河原）へ出張し、口々の警備を諸侯へ達した。（このとき）福原越後は伏見の長州（藩）邸内におり、それから釈迦（嵯峨）の天龍寺、山崎の天王山へ兵を廻した。
このときの事だが、「木船」（九条河原のことか？）に出兵した人員は左のとおりである。
会津藩士・大将神保蔵内（内蔵）之助、軍事方・林権助、惣（総）勢五百人。見廻（組）頭取・蒔田相模守、惣（総）勢三百人、新選組局長近藤勇、病気のため引き込んでいた山南敬助に代わり副長土方歳三、副長助勤では病気のため引き込んでいた沖田総司に代わり副長助勤永倉新八・藤堂平助・斎藤一馬（一）・井上源三郎、軍事掛り武田観柳斎、諸士調役山崎丞・嶋（島）田魁・林信太郎、小荷駄方尾関弥四郎・川嶋（島）勝司、惣（総）勢二百人。
七月十四日の応接は、永井玄蕃頭殿が福原越後を伏見奉行屋敷へ呼び、「これまで何度も引き取るように申し聞かせてきたが、今日になっても引き取らないでいる以上は、十八日を期限に引き取ること、もし引き取らない場合は、速々（早々）に兵を差し向ける」と告げると、福原越後は目の色を変えて、「なにとぞ二十四日近くまで日延べをお願いする」と言う。永井公は聞き入れず、そのまま別れた。新選組は十八日の明け方に、伏見の長州屋敷へ焼き打ちをかける準備をしていたところ、夜の五時ごろに伏見の方で大砲の音がして、そのうちに九条村では具太鼓が鳴ったので、それから警備の持ち場へ出張した。
伏見の警備地区では大垣藩が会津軍事方を頼って、伏見が手薄で心もとないと申し出たので、速やかに会津兵二百人それぞれと新選組全員が伏見に向かった。このとき彦根公（井伊直なお憲のり）が伏見関門を御固めになっており、福原越後はこの関門にやってきて、「永井玄蕃頭の仰せに従って釈迦（嵯峨）天龍寺の兵を引き取らせるので関門を

通る。もし関門での返答によっては討つつもりである」と言い、その権威に彦根藩（兵）は恐腑（怖）して、速やかに（承諾して）返した。福原越後の計略では、実は関門をとおってから（比）叡山に登り、江州米（の搬入路）を断ち切って、兵粮攻めにするつもりだった。

大垣藩の警備する関門に福原越後が向かったと思うと、（大垣藩は）大砲を見舞い、それから大戦争となった。幸いなことに、福原越後は大砲に当たって落馬し、そのため福原の陣は大混乱となって散乱した。

このとき新選組が大垣藩に追討をどうするかと問うと、大垣藩が討ちかけることは難しく、それに夜が明けておらず、間道もあることなので、自藩（大垣藩）は（追討を）見合わせるとのことだった。そこで新選組が追い討ちをかけることになり、伏見稲荷から墨染まで追討した。福原越後は負傷したものの大坂へ船で下ったため、残念ながら福原を捕えられずに、元の場所へ戻った。

夜が明けると、御所の方で大砲の音が烈しく、家（屋）根に上って見ると、御所付近に黒煙が上がっていた。「それ、御所へ」と近藤勇が差（指）揮すると、新選組だけが七条通を押し登り、堺（町）御門の二丁ほど手前に陣取った。このとき堺町御門の警備は松平越前守（松平茂もち昭あき）で、長州勢（兵）は追い払われ、会津兵もこの門内を守っていた。堺町御門の西側の應（鷹）司殿邸内に長州人が五十人ほど潜伏していたので、鷹司殿邸内に火をかけ、堺町御門の所で会津と新選組が長州兵を挟み撃ちにして打ち取った。

寺町御門の警備は細川越中守（細川韶よし邦くに）だったが、鷹司殿邸内から逃げ出した（長州）兵は、残らず寺町御門の方へ走った。会津兵が追いかけ、熊本藩と会津兵とで挟み撃ちにして、長州人は全員が討ち死にした。長州方は縄梯子まで持っていて、土塀を乗り越えて九門内に入り、藤堂和泉守（藤堂高たか猷ゆき）の警備を追い払って蛤御門の方へ出た。蛤御門は会津公の警備で大苦戦となったが、ついに長州兵を九門外に追い散らした。この場所では惣（双）方に討ち死にしたものが多かった。

中立売御門は黒田美濃守（黒田長なが溥ひろ）の警備だったが、長州兵に追い払われ、長州（兵）は残らず中立売御門のなかに陣取った。戌亥（乾）御門は薩州の警備で、薩州兵は中立売御門の内外より攻め立て、このときに会津は薩州と合同で大攻勢をかけたので長州は大敗北を喫した。薩州・会津の討死も多かった。

それからまた、長州人は兵を集めて、その晩に夜討ちをかけるつもりで市中に潜伏した。そして中（立）売御門外に紅屋という大店があり、そこに潜伏しているとの通報があったので、会津（兵）が焼き玉を撃ち掛け、それより市中の大方が焼き払われることとなった。
公家町の向かい角にある日野殿の屋敷に会津の見張所があった。日野殿邸内に潜伏していた五十人ほどの長州人が見張所に切り込み、ようようのことで長州人を討ち取ったが、会津側の討死した者も多かった。
新選組は公家御門前を警備していた。松平肥後守は長く御病気で、実に寝返りをうつのも難しいほどであったが、この大事件（禁門の変）を聞き、「今日の大事変は職掌にかかわることなので参代（内）する」と申され、近習の者に剃刀を取り寄せさせ、自ら髪（月代さかやき）を剃り、官服を着し、参代（内）のため馬に乗って花畑を出て、南門前から公家門の方へ曲がったが、角で馬が止まってしまったので、仕方なく南門から参代（内）した。
御玄関に一ツ橋中納言（慶喜）殿と松平越中守が出迎え、両人の手にすがり、ようよう天子の御側へ近付くと、このとき天子は御立ち退きの御支度をされていて、肥後守は驚いて御膝許へ寄って御袖にすがり、「しばらく御止まりくだされたい」と申し上げたところ、「肥後、その方に任せる」とのことだった。会津公においては（このままでは）職務の遂行に関わるので、君臣ともに討死の覚悟を家来一統に申し渡した。
このとき、会津公が公家門から参代（内）していたとすると、鷹司殿・日野殿邸内から長州（兵）が討って出て、肥後守は危うところであったが、南門より参内したのは実に高（幸）運なことであった。
御所から釈迦（嵯峨）天龍寺への討っ手が松平修理大夫（島津茂久）に命じられ、山崎天王山への討っ手が松平肥後守と新選組に命じられ、元治元子年八月二十一日、それぞれ出兵した。釈迦（嵯峨）天龍寺（の長州兵）には二十二日の朝から攻撃を開始し、長州軍は大敗を喫して山崎天王山へ落ちようとしたが、薩州が追討して討死した長州人が多かった。
やはり二十二日朝、会津と新選組は山崎天王山に攻撃を開始したが、淀城へ着くまでに夜が明けなかったので、簱は巻き取り、「絨之」（「絨」は地の厚い毛織物）はからげて淀城まで押し寄せた。このとき、天王山では長州人が議論しており、牧（真木）和泉がいうには「もはや志はこれまでであり、我はここにおいて討死する覚語（悟）である

。落ちる者ははやく落ちろ」ということで、二十人ほどは和泉に同調し、あとの者は丹波や丹後へ落ちていった。
それより会津と新選組は先陣と後陣に別れて山崎の渡し場を渡り、天王山の室（宝）寺へは会津の士大将神保内蔵之助とその組下百人ほど、新選組からは局長近藤勇、副長助勤永倉新八・斎藤一と組下の四十人ほどが向かった。天王山の下には副長土方歳三、副長助勤原田左之助・藤堂平助・井上源三郎、軍事方浅野薫・武田観柳斎、諸士調役山崎丞・嶋（島）田魁・林信太郎、小荷駄方尾関弥四郎・川嶋（島）勝司、惣（総）勢百五十人と会津兵四百人が、下の通りを固めた。
やがて天王山より六丁ほど離れた室（宝）寺より攻め始めたが、水天宮の神主で牧（真木）和泉という者は、金の烏帽子をかぶり錦の下垂を着し、組下の二十人ばかりと鉄砲を持って一丁ほどの近くまで押し寄せた。そして「我は長門宰相の家臣牧（真木）和泉である。互いに名乗りあって戦おう」と発し、近藤勇も「我も徳川の旗下（本）の者で近藤勇である」と名乗った。敵は詩を吟じて、勝時（鬨）をあげて発砲すると陣小屋へ退いたので、追い討ちをかけた。すると敵は陣小屋に火をかけ、火中へ飛び込んで和泉をはじめ、その他の者も残らず立腹を切った。これは敵ながら感心すべきことであった。
その後、天王山へ登って会津の旗を掲げて、勝時（鬨）をあげた。
敵は天王社に金三千両、米三千俵、それに甲冑に名前を書いて奉納していたが、この性（姓）名は不詳である。それから彼らは山中に入ったのだが、山崎村に火を放ったので八幡社は焼失していた。
このとき、「会津にて長州へ兵粮を大集し」（意味不明）、暑さが極まって咽（喉）が乾いたが水がなく、仕方なくドブの水を飲み、兵粮も切れて黒米が出されたのみだった。長州より分捕った金三千両と米三千俵は八幡の神主と山崎村の農民に下げ渡し、二十三日に新選組は大坂へ下った。二十四日には長州屋敷を攻め、二十人ほどを捕縛して町奉行へ引き渡して東御堂に宿陣し、二十五日に京都の壬生屯所へ帰った。
長州の暴落（挙）は見捨てておけないことながら、大樹公（将軍）はこれを聞いても、いまだに所（上）落（洛）しなかった。そのため諸侯は将軍の命令に背くようになり、ついては将軍の上洛を求めるため関東へ下ることになった。
元治元子年九月一日に近藤勇・永倉新八・竹（武）田観柳斎・尾形俊太郎、ほかに藤堂平助は京都を発し、六日に関東（江戸）へ到着すると、市ケ谷加賀屋敷柳町の近藤勇宅

に入った。翌日、和田倉御門内の会津公留守居宅へ行くと、薩摩藩の西郷吉之助と出会った。西郷もやはり将軍の上落（洛）を実現させるため、京都から三日で江戸へやってきたということだった。
それから柳（榊）原健吉・中条令之助方へ出向いて議論したが、両人は長州（の処分）はそのままとして、攘夷を行なうことが先決と考えていた。近藤勇は内々（国内）のことができないのに攘夷を実行するのは考え違いであり、自分は長州の処分が先決である旨を申し述べた。柳（榊）原・中条の両人は近藤の論に賛成するとともに、御上落（洛）の推進に尽力することとなり、それより御小性（姓）・御小納戸・大御番組へ出頭して、現在の情勢について話を聞いたが、これは言語道断のことであった。旗本などの言い分では、上落（洛）するとなると支度金を十分にもらわなければ御供は難しいというもので、そのようなことでは将軍の権威が日々に衰えることを知らず、誠に嘆かわしいことであった。
旗本たちは、いまだ（天下が）泰平と考えているようなので、松平（前）伊豆守殿に建言した。その内容は、京都の現実についてだったが、とくに江戸での旗本たちの認識の甘さを指摘し、将軍が御一人で上落（洛）されることとし、有志の者は供するようにとの御達しを出せば、旗本たちの目が覚め、そうなれば支度料のことなど口にしなくなるので、速やかに上落（洛）されるよう取り計らうよう、松前侯に申し上げた。
松前侯が委細を承知し、上落（洛）を推進するので早速にも帰京するようにとの御達しがあり、同志五十人ほどを募った。そのなかに伊東甲子太郎と弟の三木三郎がおり、十月一日に江戸を発足し、十月十五日に無事に京都へ到着した。すぐに彼らに役を命じ、参謀に伊東甲子太郎、副長助勤に三木三郎、諸士調役に服部武雄・篠原寿造（泰之進）を任じた。藤堂平助はこれとは別に、あとから帰った。

解　　説

　本文では山南敬助と副長助勤の沖田総司が病気で引き込んでいて出陣していないとあるが、『顚末記』では、土方と山南の名がない。また、沖田が、九条河原に出陣していたことは『顚末記』その他の史料に記されていることから間違いないであろう。
　禁門の変の激戦地は蛤はまぐり御門であることは周知の通りである。蛤御門は会津藩の守備であったことから、八・一八の政変の報復とばかりに長州藩は激しく攻めた。大苦戦のすえ、薩摩兵の応援によって長州兵を敗退させた。この時、長州兵掃討のため、会津兵が中立売御門外の紅屋に放った火は市中に広がり、三日間燃え続けたという。その焼失被害は町数八百十一町、世帯数二万七千五百十三軒、公家屋敷十八、武家屋敷五十一、社寺二百五十三と市中の三分の二を焼失したのである。
　禁門の変は、長州藩が武力を行使して、八・一八の政変以前の政治情況に戻すことを意図していたことから、会津・一橋をはじめとする公武合体派諸侯にとって由々しき事態であり、決死の覚悟で当たったのである。そのことは本文の記述に沿って見ると、当時寝返りをうつことができないほど、重い病気にかかっていた松平容保が、病を押して参内し、一橋慶喜と容保の弟松平定さだ敬あき（京都所司代）に支えられながら孝明天皇に拝謁し、天皇の膝許に寄り袖に縋すがって、天皇の下鴨社への避難を止めたとある。いくら容保が孝明天皇の信頼が篤いとはいえ、天皇の膝許に寄って袖に縋って諌言するとは考えられないが、天皇が避難するための準備の話が参内した公卿たちの中から出ていたのを容保が止めたのは事実である。それゆえ、容保はそれだけ必死の覚悟で事に当たったという彼の心が、先の誇張された表現で記されたのであろう。付言であるが、長州兵は公家門から参内する容保を襲撃しようと日野邸と鷹司邸で待ち伏せするが、容保が南門から参内したために失敗に終わり、容保は危うく難を逃れたことが本文に記されている。
　七月二十四日、禁門の変での残党追討を名目とした下坂を機に一時的な措置と思われるが、大坂町奉行支配下で市中見廻の任務につく。これによって大坂にも新選組の勢力は拡大していくのである。
　禁門の変によって「朝敵」となった長州藩を追討すべく、七月二十三日に長州藩追討の勅令が下り、翌日、幕府は西国二十一藩に出兵を命じた。こうして第一次長州征伐が進行していく。だが諸侯の足並みはそろわず、将軍が上洛しなければ、諸侯は将軍の命

に背くようになり、ひいては公武隔絶するのではという状況にあった。この状況を憂いて、近藤勇、永倉新八、尾形俊太郎、武田観柳斎の四人が東下することに決定し、六日に江戸市ケ谷加賀屋敷柳町の近藤勇宅に着く。

　近藤らは帰京の前に、もう一つの目的である新選組隊士募集にかかった。その目的は、池田屋事件などで減った隊士の増員と、変転めまぐるしい時勢対処のための人材確保であった。この時に藤堂平助の紹介で新たに入隊したのが、
伊東甲子太郎・三木三郎（明治元年に鈴木三樹三郎と改名）らである。彼らの入隊の詳細は後述するのでここでは省略する。

京都周辺略図

比叡山
上賀茂
下鴨
近
江
二条城
蛤御門
御所
嵯峨
天竜寺
京　都
東寺
上鳥羽
大仏
赤池
山
城
下鳥羽
伏見
桂川
石清水八幡
京橋
天王山
巨椋池
宇治川
淀
山崎
摂
津
淀川
橋本
八幡
宇治
木津川

慶応元午年九月十三日事件

三条高札ニ毛利大膳父子　禁闕相迫リ暴発致依テ御所置之次第認メ有之、高札江何士カ度々イタヅラ致町奉行より数度召捕ニカヽルトイエトモ、召捕事出来ス、依テ新選組ニ御頼ニ相成リ、速ニ新選組副長助勤原田左之助、諸士調役荒井只雄其外組弐番組六番組七番組午後七時頃より三条出張
三条橋向東江五人、三条小橋江五人、木屋町入口江五人、ホント町江五人不残伏セ置キ、高札向イ町家ヲ借リ此所ニ原田左之助、荒井只雄、隊長附拾人ホト此家ニ隠レ居ル、鉄炮ニテ相図
夜午後十時頃ニ小橋ノ方カラ士各々長刀ニテ詩ヲ吟シ高札前江参ル、八九人不残抜刀、高札江手ヲ掛ケ脱コワサントスルトコロヲ兼而相図ノ鉄炮ヲ打ツ、夫より隊長附切リ込ム、敵キ散乱小橋ノ方ニテモ打取ル、木屋町ノ方ニテモ打捕ル、ホント町ニテモ打捕ル、終ニ加茂川ヲ敵キ越ス也、ホント町ノ人跡ヲ追イカケル、三条橋東ニ居ル人ガ川向ニテ戦イ終ニ壱人生捕致ス、速ニ駕籠ニ乗セ局エ引揚ル、性名ヲ聞所宮川助五郎、直ニ医師ヲ呼ヒ疵所療治致ス、夫より翌日町奉行江差出ス、新選組手負原田左之助、橋本皆助、伊東浪之助敵ヲハ大方切タヲス、夜分ニテシカト不相分、此時幕府より御褒美賜ル

慶応元午（丑）年九月十三日事件

三条高札に、毛利大膳父子が御所に迫って暴発したので、それに対する処置の次第が記されていた。高札は何者かによって何度もいたずらされ、町奉行は数度にわたって召し捕ろうとしたができず、そのため新選組に依頼があった。ただちに新選組副長助勤の原田左之助、諸士調役の荒（新）井只（忠）雄そのほか二番組・六番組・七番組が午後七時ごろより三条に出動した。
三条橋の東へ五人、三条小橋へ五人、木屋町入り口へ五人、先ぽん斗と町へ五人と配置すると、高札の向かい側の町家を借りて、ここに原田左之助と荒（新）井只（忠）雄のほか、隊長附の十人ほどが潜んで、鉄砲で相（合）図することとなった。
夜十時ごろに、小橋のほうから長刀を差した武士たちが詩を吟じながら現れ、高札の前に立った。八、九人が残らず抜刀して、高札に手をかけて抜こうとしたので、相（合）図の鉄砲が放たれ、まず隊長附が切り込んだ。敵は散乱して、小橋のほうでも打ち取り、木屋町のほうでも打ち取り、先斗町でも打ち取ったところ、ついに加茂川を渡って逃げようとした。先斗町の者があとを追いかけ、三条橋東の者が川向こうで戦い、とうとう一人を生け捕りにしたので、速やかに駕籠に乗せて屯所へ引き揚げた。性（姓）名を聞いたところ宮川助五郎といい、ただちに医師を呼んで傷の治療をさせ、翌日になって町奉行へ引き渡した。新選組の手負いは原田左之助・橋本皆助・伊東浪之助で、敵はほとんど切り倒したが、夜分のためはっきりとはわからない。これによって幕府から御褒美が下された。

解　　説

慶応元午年九月十三日事件（慶応二年九月十二日の誤り）。

この事件は世に言う〝三条制札事件〟である。禁門の変の直後の元治元年七月二十三日に町衆に対して長州兵の行状を次のように高札に認したためた。

「一、此度長州人恐多くも自ら兵端を開き、犯㆓禁きん闕けつ㆒、不㆑容易㆒騒動相成候間、立去候者共安堵帰住可致候。将まさに又また妄みだりに焼払候様、浮説を唱候者も有之哉に候得共、右様之儀には決して無㆑之候間、銘めい々めい職業を励み、立騒ぎ申間敷事。

一、元来長州人名を勤王に托し、種々手段を設け人心を迷し候故、信用致候者も有㆑之候得共、禁闕に発砲し逆罪明にて追討被仰付候。若もし信用致候者も前非を悔くい改かい心しん候者は御免可㆑被㆑成候間、可㆓申出㆒候。且潜伏落人など見当り候者、早速に申出候はば御褒美可㆑被㆑下候。若隠他より顕はれ候はば、朝敵同罪たるべき事」

この高札が同八月二十九日夜、何者かによって墨汁で落書きされた。犯人は十津川郷士の中井庄五郎、深瀬繁磨ら過激派の志士の仕業だった。その後も再三にわたりいたずらが絶えず、困り果てた京都町奉行所は、これは単に悪いいたずらではすまされない、幕府への挑戦であると思い、次第にテロへと発展する前に捕えようと新選組にその任務を命じた。

この事件に関して松平容保は、新選組に褒美として「壱人前金三枚」を与えた。容保は重大事件の解決とみていたのである。

鴨川の三条付近

慶応元午年十月上旬頃之事件

徳川家茂公大坂御城ニ御滞留中、此時諸侯ハ一統攘夷ノ論悉ク相号居ルニ、然ル処江英国より度々兵庫開港申来ルトイエトモ、諸侯一統ノ論ニハ、京都隣国ニ依テ決而開港不相成趣キ、猶又英国ヨリ数度催促及ヒ兵庫江参リ応接ニ及所英人ヨリ十二日ノ中ニ御返答有之趣、阿部豊後守大坂江戻リ、右之段松前伊豆守ト相談致ス所、松前公ノ申ニハ天朝江湊問ニ及ト御許宥ニ不相成御沙汰有之ル、依テ此場限ヲ取計十二時トスレハ天朝江窺間モナク、天朝エハ御届ケキリニテ直ニ開港ノ応接可致ト阿部豊後守ニ申、豊後守同論徳川家茂公ニ御聞ニ相達ストコロ、御政事役人ニ万事御任セニ相成ル、依テ兵庫開港ノ義も御承知被為在、御所江御届キリニテ阿部豊後守兵庫ニヲイテ開港ノ応接ニ及フ

此事京都ニ居ル諸侯聞付ケ、徳川家茂公朝敵之謀叛顕シ国々江早ヲ立テ其動乱揺ヒトカタナラス、松平肥後守此大変ン聞キ驚キ速ニ大坂御城江使者ヲ立テ申上ケル、松前伊豆守、阿部豊後守早々退役申付東下イタサセ可申、委細ハ御目通リ之上可申上、速ニ松前伊豆守、阿部豊後守退役可申付早々東下イタシ江戸屋鋪ニテ謹慎可致、兵庫開港ハ阿部豊後守聞取違イニテ近日応接ニ可及ト、平山図書頭ニ申遣ス

松平肥後守ニ公用方ハ馬八騎ニテ大坂江下ル、会津藩ト新選組ニハ早船ニテ下ル者之有リ、陸ヲ走ル者モアリ、阿部公ト松前公ノ首ヲ斬リ、是ヲ以テ天朝へ御申訳致スルノ了簡、夫ニ将軍御所江御届ケ切リニテ御東下ケニ相成趣キ、是モ御諫言申上ケ差止メル心得ニテ大坂江下ル処、途中平方宿ニテ会津公ニ御家来新選組、大樹公ニ御出合申ス

不取敢阿部豊後守、松前伊豆守ノ事ヲ聞ク所、午後四時ニ東下致之趣、依テ平方宿より会津藩新選組御警衛致、家茂公ニ肥後守御目通リイタス、家茂公御意ニハ何共無申訳従是東下致ス外無之ト心得ル、肥後守申上ルニハ、御所御届キリニテ御東下被遊候儀ハ不相成、一先天朝ノ御機嫌ヲ御窺ナケレハ不相成、御承知被為在、依テ会津公御同道ニテ伏見江御立寄リ肥後守申上ル、二条御城江御入城遊ハセト申スト、我ニハ城江閊テモヨイカト御意、肥後守御答ニハ御自分ノ御城江御入リアルニ聊御差構無之ト申上ル、肥後御前ト同道致ス可トノ御意、私ハ一先御先江参リ御所ノ取繕イ致サンケレハ不相成、夫より肥後守直ニ御所江参代イタス

家茂公伏見御発足二条江御入城、此時会津藩新選組ノ御警衛、此時将軍公ハ誠ニヒソカニテ御入城

松前伊豆守、阿部豊後守ノ所置ハ京師呼上松平肥後守ノ前ニおゐて切腹カ家カイエキ、然ルトコロ一ツ橋中納言公ノ論ニハ松前阿部在所表ニテ謹慎半高召上ケ右御所置ニ決スル

慶応元午（丑）年十月上旬頃の事件

徳川家茂公が大坂城に滞在中、諸侯はそろって攘夷論を唱えていた。そのころ英国よりたびたび兵庫の開港が申し入れられていたが、諸侯の論では（兵庫は）京都の隣国であって、決して開港はしないというものだった。そこへ英国よりさらに数度の催促があり、兵庫で話し合いを行なったところ、英国人から十二日までに返答が求められたので、阿部豊後守（阿部正外）は大坂へ戻り、それについて松前伊豆守（松前崇弘）と相談した。松前公は、天朝へ湊（奏）問しても御許しにならない沙汰が下されるので、この場かぎりを取り計らって期限を十二時とすれば、天朝にうかがう間もなく、天朝へは届けきりにして、ただちに開港に向けての応接を致そう、と阿部豊後守に告げると豊後守も賛成し、これを家茂公に申し上げたところ、御政事は役人にすべてを任せるとのこととなった。そのため兵庫開港のことも御承知となり、御所へは届けきりにして、阿部豊後守は兵庫で開港の応接を行なった。
このことを京都にいる諸侯が聞くと、徳川家茂公は朝敵となるような謀叛を起こした、と国々へ早（馬）を立て、その騒ぎはひとかたならないものであった。松平肥後守（一橋慶喜の誤り）はこの一大事を聞くと、驚いて大坂城へ使者を派遣し、松前伊豆守・阿部豊後守を早々に退役させて東下させるように申し入れ、詳しくは御目通りのうえで申し上げるので、速やかに松前伊豆守・阿部豊後守に退役を申し付け、早々に東下させて江戸屋敷に謹慎させ、兵庫開港は阿部豊後守の聞き取り違いだったとして（英国に再び）応接するよう、平山図書頭に申し遣わした。
松平肥後守と公用方は馬八騎で大坂に下った。会津藩と新選組のなかには早船で下る者、陸路を走る者もあり、阿部公と松前公の首を斬り、それを天朝へのお詫びとするつもりだった。それに将軍が御所へ届けきりにして御東下になるとのことで、これについても諫言して差し止めるつもりで大坂へ下っていたところ、途中の平（枚）方宿で会津公ならびに御家来と新選組が大樹公と出会った。
とりあえず阿部豊後守・松前伊豆守のことを聞いたところ、午後四時に東下したとのことだったので、平（枚）方宿より会津藩・新選組が御警衛して、家茂公に肥後守が御目通りした。家茂公の考えでは、なんとも（天朝に）申し訳がなく、東下する以外にないとのことで、肥後守は「御所に御届けきりで御東下されることは許されず、ひとまず天朝にご機嫌うかがいをしなければならない」と申し上げ、御承知されたので、会津公が

御同道して伏見に立ち寄り、ここで肥後守が二条城へお入りになられるように申し上げると、城に入ってよいのかと問われ、肥後守は御自分の御城へお入りになるのであって、少しもご遠慮する必要はないとお答えしたところ、肥後も御前（家茂）に同行しろとのことだったが、私はひとまず御所へ参って事後処理をしなければならないと、肥後守はただちに御所へ参代（内）した。

家茂公は伏見を発して二条城へ入城したが、このとき会津藩と新選組が御警衛し、実に密やかに御入城したものである。

松前伊豆守・阿部豊後守の処分は、京都へ呼び上げ、松平肥後守の前で切腹するか、家を改易するかだったが、しかしながら一ツ橋中納言公の意見によって、松前・阿部は国許で謹慎のうえ、石高の半分を召し上げるということに決した。

二条城

解　　説

慶応元午（丑）年十月上旬頃の事件。

第二次長州征伐の準備を進める中、英・米・仏・蘭の四カ国の公使が大坂湾に集結して、条約勅許と兵庫開港を要求した。この時、英国公使パークスは応接に来た老中阿部正まさ外とうに十二日の内に返答するよう求めた。阿部は老中松前崇たか広ひろと相談し、朝廷へは報告だけにして、四カ国公使の要求を認めることに決し、将軍家茂の承諾を得る。

これを聞いて驚いた松平肥後守（一橋慶喜の誤り）は使者を発して、阿部・松前の二老中は罷免、江戸屋敷で謹慎とし、兵庫開港は改めて応接することを平山図書頭に申し渡した。これを知った朝廷は阿部と松前の老中罷免と官位剥奪を幕府に命令した。大坂城でこの命令を受けた将軍幕閣は動揺する。また、下坂した一橋慶喜は、勅許による兵庫開港を主張して譲らず、幕閣はあくまで幕命によって実行することを主張する大激論となった。この光景を眼前に将軍家茂は、将軍職辞表を朝廷に提出し、陸路江戸へ帰る。この報告を受けた慶喜・容保・松平定敬の三人は伏見で将軍の一行を引き止め、二条城へ連れ帰った。将軍を引き止めた慶喜は十月四日、参内して兵庫開港・条約勅許を奏上し、小御所で夜を徹して会議が開かれた。この時の慶喜は「剛情公」のあだ名のごとく勅許を得ることを主張して一歩も譲らなかった。そして翌日、条約勅許、兵庫開港は不可という勅命を受ける。これをもって幕閣は、大坂湾に滞泊している四カ国公使に通告し、兵庫開港は先送りという形で妥協がなされた。

なお阿部と松前の二人は、本文では慶喜の意見で、国許での謹慎、石高半分召し上げになったとあるが、実際は、朝廷からの通達で官位剥奪・老中罷免・国許での謹慎となったのである。

老中とは、幕府の役職であり、本来は徳川家の執政機関である。その人事を朝廷が幕府に命じるのだから将軍や幕閣にとっては自己の権威に関わる事柄である。

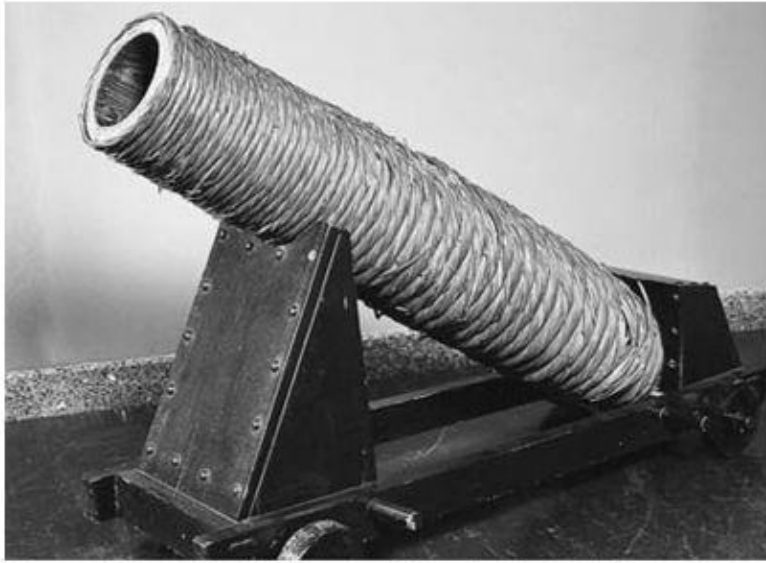
朝廷による幕閣の人事介入は、文久二年（一八六二）五月、島津久光による裏工作で、一橋慶喜を将軍後見職に、松平慶永を政事総裁職に任命というかたちですでに行なわれている。だが、老中罷免事件は、人事介入よりも兵庫開港をめぐる幕議の紛糾が、一橋慶喜と幕閣との間が分裂していて、幕府の組織としての一体性が保ちえなくなったこ

とを明らかにしたと言える。それゆえ将軍家茂は責任を感じて辞表を提出したのであろう。

慶応二寅年三月中旬頃之事

伊東甲子太郎、舎弟三木三郎、右両人ノ者局中ニテ同意ノ者相募リ、近藤勇ニ向イ、今度薩長エ奸者ニ入込ニ付局ニ居テハ不都合、夫故ニ別局ト相成度趣近藤ニ相談イタス、近藤勇承知イタス、実ハ伊東甲子太郎、近藤勇ヲ殺シ自分ガ新選組ノ隊長ニナラントノ謀計、近藤勇ハ伊東甲子太郎ノ心中ヲ悟サトり、依テ別局許ス
伊東甲子太郎、三木三郎、斎藤一、藤堂平助、服部武雄、篠原泰之進、阿部十郎、富嶌張兵衛、毛内有之進、篠嶋慎八郎、木内峰太、江畑小二郎、右之人々高台寺エ別局陵ミサヽキ御衛士号イ居ル、斎藤一ハ奸者ニ入込ムニツキ、局ニ居ランデハ不都合故ニ別局イタサセル、途中ニテ出合ンテモ決テ口ヲ聞クコト不相成一統江達シ置ク
伊東甲子太郎同意ノ者ノ茨城司、佐野七五三之進、冨川十郎、中邨五郎、新選組ヲ八月相脱シ会津公用方参リ議論申立テ、其旨趣ハ新選組ニ居ランテハ勤王不相立、依テ新選組ヲ是非退キ度趣公用方江申述ル、公用方挨拶ニ当惑致シ、何れ肥後守ニ申聞ケ其上ニテ御挨拶申スト答置キ肥後守ニ窺ウ所、近藤勇ヲ呼ヒ同人ニ任セ可申トノ御沙汰、依テ公用方より近藤勇ヲ呼ヒ遣ス、早速罷出ル召連ル人名副長助勤井上源三郎、諸士調役大石鍬二郎、其外拾五人ホト近藤勇当人ニ申渡スニハ、一先ツ局江引取可申、四人ノ者承知致シ会津公用方ヲ引取ラントスルト使者閊入込ミ四人トモ早ク脇差ヲ抜キ切腹イタス、大石鍬二郎見届ケニ参ルト佐野七五三之進ト申者大石ニ一刀アヒセル、大石膝ヲ切レ其死骸局江引取ル、翌日壬生寺埋メル
新選組ニテハ日々ノ練兵アル日門主ガ御髪剃ニ出タ時大炮強薬ニテ打ト門主驚キ後ロエヒツクリ返ル、夫より方角ヲ以新選組江調練アル時ハ前日御答被下度ト申入ル、イジワルク門主ガ本堂江参ルトキヲ聞キ調練致イタス、門主タマリ兼調練アルトキハ奥ノ座敷江引込蒲団ヲ冠リ上カラ乗ラセ居ル、対ニ新選組屋敷ヲ七条堀川下ル所江求メ呉レ七日引移ル、是ハ土方歳三ノ取計

慶応二寅年三月中旬頃の事

伊東甲子太郎と弟の三木三郎は局中で同志を募り、近藤勇に向かって、「このたび薩長へ奸（間）者として入り込むにあたって、局にいては不都合なので別局したい」と相談し、近藤勇は承知した。実は伊東甲子太郎は、近藤勇を殺して自分が新選組の隊長になろうと計画していたが、近藤勇はその心中を知っていたので別局を許したのである。
伊東甲子太郎・三木三郎・斎藤一・藤堂平助、服部武雄、篠原泰之進、阿部十郎・富嶌（山）張（弥）兵衛・毛内有之進・篠嶋（崎）慎八郎・木内峰太・江畑小二郎、右の人々が高台寺へ別局し、御陵衛士と名乗った。斎藤一は間者として入り込ませたもので、局にいることはできずに別局させたものであり、途中で出会っても決して口をきいてはならない、ということを全員に達していた。
伊東甲子太郎と意見を同じくする茨城（木）司・佐野七五三之進（助）・冨川十郎・中邨（村）五郎は八月に新選組を脱し、会津公用方へ出向いて議論を申し立てた。その趣旨は、新選組にあっては勤王の志が立たないので、ぜひ新選組を辞めたい、というもので、これを公用方に申し述べた。公用方は申し出に当惑し、いずれ肥後守に相談し、そのうえで返答するということにして肥後守にうかがったところ、近藤勇を呼んで同人に任せるようにとの沙汰だった。そこで公用方が近藤勇を呼び出すと、隊士を連れて早々にやってきた。その人名は、副長助勤の井上源三郎、諸士調役の大石鍬二郎、そのほか十五名ほどで、近藤勇はひとまず帰局することを申し渡すと、四人も承知した。会津公用方から戻ろうとしたとき、使者が（四人のいた別室に）入ると、四人は脇差を抜いて切腹した。大石鍬二（次）郎が見届けに行くと、佐野七五三之進（助）が大石に一刀を浴びせ、大石は膝を切られた。四人の死骸は局へ引き取り、翌日、壬生寺に埋めた。
新選組では日々、練兵していたが、ある日、門主が剃髪しようとしたところ、大砲を強薬で打つと、門主は驚いて後ろにひっくりかえった。それからは新選組が調練を行なうときは前日に教えてくださいと申し入れたが、意地悪く門主が本堂へ参ることを聞き付けては調練を行なったので、門主は堪り兼ねて、調練のあるときは奥の座敷に引きこもり、頭から蒲団を被っていた。そのため、ついに新選組の屋敷を七条堀川下ルの場所に購入し、七日に引き移った。これは土方歳三の計らいである。

木砲　池田屋事件後にも同型木砲が壬生屯所前に置かれた

新選組屯所ともなった西本願寺

解　説

慶応二寅年三月中旬頃之事（慶応三年の誤り）。

元治元年（一八六四）秋、伊東甲子太郎のもとを親交のあった副長助勤の藤堂平助が訪れ、勤王運動のため一肌脱いでほしいと懇願した。当時、伊東は深川佐賀町で北辰一刀流の道場を構え、学問も多少あったので門人には勤王派が多く身を寄せていた。

近藤は隊士募集で東帰した際に、伊東一派を入隊させた。当初、伊東は二番組長を務めたが慶応元年には参謀という幹部に抜擢している。

政局を読む手腕は近藤より一枚上で、次第に伊東一派は何かにつけて近藤、土方らの主流派と反目するようになった。藤堂は近い将来、近藤一派を粛清し、局長に伊東を据すえる謀略を企てていた。近藤もこの一件は薄々感じていたという。

慶応二年一月、伊東は近藤とともに長州へ下り、その際、持論の勤王論を唱え、九月には尾張へ出張後に近藤、土方らと意見の対立を激化させたという。翌三年一月、西国遊説に出かけた時、伊東は宇田兵衛と名乗り新井忠雄らと九州へ赴いた。この時点で新選組からの離脱が鮮明になった。近藤との対談で離脱の理由に「薩長に間者（スパイ）に入るため新選組に居っては迷惑もかかるゆえ」と近藤の承諾を求めた。

この時、近藤は快諾したような態度をみせ、実は斎藤一を間者に送り込み、伊東らの行動を一部始終探らせたのである。

伊東は三月二十日、御ご陵りょう衛え士じの高台寺党を結成し、新選組から離脱した。隊士は伊東の実弟三木三郎（鈴木三み樹き三さぶ郎ろう）、藤堂平助、服部武雄、篠原泰之進、阿部十郎、富山弥兵衛、内海二郎、新井忠雄、加か納のう鷲わし雄お、橋本皆助、毛内監物、清原清、佐原太郎、中西昇、斎藤一の十六名だった。

屯所を三条城安寺に、つぎに五条善立寺そして高台寺月真院に移した。

だが新選組の隊内には伊東派が残留していた。その中で茨木司、佐野七五三しめ之の助すけ、冨川十郎、中村五郎の四名を首謀格とする十名が行動を共にしたいと、六月に離脱を決心したが、近藤から約定によって高台寺党への離脱はできない旨を告げられるや、六月十四日、自刃した。本文には「四人トモ早ク脇差ヲ抜キ切腹イタス、大石鍬二郎見届ケニ参ルト佐野七五三之進（助）ト申者大石ニ一刀アヒセル、大石膝ヲ切レ其死骸局（屯所）江引取ル、翌日壬生寺埋メル」とあるが、『新撰組史録』では「主謀者とみられていた茨木司、佐野七五三助、富山十郎、中村五郎の四人は他の六人とは別間に

待たされていた。そして待ちくたびれているところへ、いきなり背後の障子ごしに数名が槍を突きだし、四人を刺した。思いがけぬ襲撃で四人は深手をうけながら刀を手に応戦したが、力およばず斬殺された。この四人のうち佐野七五三助は、大石鍬次郎の槍で腹を刺しぬかれながらも抜き打ちに切りかけ、大石に手傷を負わせた」と粛清したことを伝えている。

近藤と伊東との対立からみれば、粛清した公算が強い。永倉の手記は一貫して新選組隊士たちのレクイエム（鎮魂歌）を綴っている手前、「自刃」という表現を使った。が、しかし佐野が切腹しているところへ見届けに入ってきた大石の膝を斬りつける不自然な描写になってしまう。やはり『新撰組史録』の伝える、大石が佐野を槍で突いたが刺されながらも反撃したと考えるべきであろう。

文末に慶応三年（一八六七）六月、新選組の不動堂村への屯所移転を伝えている。

旧屯所であった西本願寺は長州藩との浅からぬ関係もあったので、同寺の監視を兼ねつつ多数の隊士の収容も可能な、最適な場所であった。当初、寺側は桂宮淑子内親王の非常御立退所であると拒否したが、幕府の強行さには勝てず北集会所を提供した。

この時の門主は本願寺第二十世広こう如によで、彼は勤王僧として知られ、文久三年、朝廷に一万両を献じ、その後もたびたび献金した。また慶応三年には朝廷のために荒こう神じん口ぐち橋を架け、通称勤王橋と呼ばれた。大坂商人の石田敬起の援助を受け、寺の財政逼迫を立て直し、北海道開教に尽力して箱館に本山掛所を設けるなどの政治家でもあった。

伊東離脱の以前に、西本願寺への移転問題で隊内批判を行なっていた江戸以来の同志であり副長の山南敬助は脱走、隊に連れ戻されて切腹させられている。慶応元年二月二十三日の出来事だった。

しかし、永倉の手記にはどこにも山南脱走の一件が記されていない。

高台寺月真院　御陵衛士屯所

慶応三卯年十一月廿日頃之事

伊東甲子太郎対ニ逆意顕ス、近藤勇始メ其ノ外役人不残殺害イタシ、自分カ新選組大隊長ト成ル事ヲ一同エ咄シ、就テハ新選組風並宜敷節ニ焼打ニイタサン、逃出ス所ヲ討ツ心得、此条斎藤一聞クヨリ高台寺ヲ脱シ近藤土方ノ妾宅江参リ注進ニ及フ、夫より伊東甲子太郎ヲ殺スノ工夫近藤勇ヨリ伊東甲子太郎ヲ呼ニ遣ス、兼テ伊東より近藤ニ金ヲ借リ度申込ミ居リシ故、其用向ニテ呼ニ遣ス、早速右伊東甲子太郎夕方ニ近藤勇妾宅江参リ、尤警衛四人ホド居ル
夜八時迄留置夫ヨリ伊東甲子太郎暇乞シテ近藤勇ノ妾宅ヲ出ル、近藤ノ手ニテハ宮川信吉、大石鍬二郎、岸嶋芳太郎四人之内、横倉甚五郎等途中ニ待伏セイタサセ伊東甲子太郎虚ウカ々ゝと其場へ通リ懸ル、対ニ伊東甲子太郎暗殺イタサレ、夫より死骸ハ七条通リ油小路角江引出シ通ニ馬屋ノ弁当ヲ町役人ニ仕立高台寺江知セル、高台寺ニ居ル寧ハ実ニ驚直ニ支度スル体ヲ見ルト使ニ参リノ者ノ戻リ参ル
夫ヨリ永倉新八、原田左之助、隊長隊長召来付召連レ出ル、隊長附ヲ出ル隊長附ヲ七条七条通ト油ノ小路ト四方江伏セ置、死骸ハ取片付ニ来ルヲ待所待チ居ルヲ、近藤勇申ニ藤堂平助参ルモシレス、若シ見エタラハ介ケヘシト申ス、永倉新八、原田モ其心得
夜二時頃ニ相成ルト高台寺ヨリ拾人計不残鎖帷子鉢巻カネニテ駕籠ヲ為持死骸ノ側江寄死骸ヲ駕籠ノ内ヘ入ントスルト、四方より切出ス大戦ト相成ル、服部武雄、藤堂平助、毛内有之助討死、新選組ニテハ原田左之助、大石鍬二郎、岸嶋芳太郎、芝岡万助、三浦常三郎右之人々深手負夫々刀刃切レ不残出ス、三浦常三郎、藤堂平助ヲ打止メル、其時三浦膝ヲ切レ対ニ死ス
四人ノ死骸翌日廿一日壬生寺へ埋メル、新選組ニヲイテハ同局ノ者故決テ知ラヌテイ、伊東甲子太郎残徒ヲ新選組ニテイタシタト寮シ、新選組ノ人ト見ルト覘ネロウコト夥シク

慶応三卯年十一月二十日頃の事

伊東甲子太郎はついに逆意を顕わした。近藤勇はじめそのほかの役人を残らず殺害し、自分が新選組大隊長となることを一同に話し、ついては新選組（屯所）を風向きのいいときに焼き打ちして、逃げ出すところを討つつもりだった。斎藤一はこの件を聞くと高台寺を脱し、近藤・土方の妾宅に出向いて報告した。そのため伊東甲子太郎を殺すことにし、近藤勇は使いをやって伊東甲子太郎を呼び出した。以前より伊東が近藤に借金を申し込んでいたので、それを用件として呼んだのである。早速、夕方には伊東甲子太郎が近藤勇の妾宅を訪れたが、護衛を四人ほど連れていた。
夜の八時ごろになって伊東甲子太郎は席を立ち、近藤勇の妾宅を出た。近藤は配下の宮川信吉・大石鍬二郎・岸嶋（島）芳太郎・横倉甚五郎の四人に途中で待ち伏せさせ、伊東甲子太郎がうかうかとその場をとおりかかり、ついに伊東甲子太郎は暗殺された。それから死骸を七条通り油小路角へ引き出し、通りに馬屋の弁（別）当を町役人に仕立てて高台寺に知らせた。伊東殺害を使いの者からきくと、高台寺にいた寧（某）は驚いて、遺体を取りにいく支度をした。
それから永倉新八、原田左之助の各隊長は、部下をひきつれ、隊長附（局長附のことか？）を七条通りと油小路に潜伏させ、死骸を取り片付けにやってくるのを待った。近藤勇は「藤堂平助がくるかもしれないが、もし見えたら（命を）介（助）けるように」と言ったが、永倉新八、原田もそれは心得ていた。
夜二時ごろになって、高台寺から十人ばかりが鎖帷子に鉢巻を着けて駕籠を用意し、死骸の側に駕籠を降ろし、死骸を駕籠のなかへ入れようとしたとき四方から切り出し、大戦となった。服部武雄・藤堂平助・毛内有之助は討死し、新選組では原田左之助・大石鍬二郎・岸嶋（島）芳太郎・芝岡万助・三浦常三郎という人々が深手を負い、それぞれ刀の刃こぼれで研とぎに残らず出した。三浦常三（次）郎は藤堂平助を打ち取ったが、そのときに三浦は膝を切られて、ついに死亡した。
四人の死骸は翌日、二十一日に壬生寺に埋めた。新選組では同局の者のことであり、この事件については知らないふりをした。伊東甲子太郎の残党は新選組の仕業と寮（察）し、新選組の人を見ると狙うことが夥しかった。

解　　説

　慶応三卯年十一月廿日頃之事（十八日の誤り）。

　近藤らはついに伊東一派暗殺を計画する。かねてより伊東が長州の間者になるための軍資金三百両の調達を申し入れていた。この話をエサに醒ケ井通りの近藤の妾宅に呼び寄せ、近藤は伊東と時勢を談じ伊東は上機嫌で大盃を傾けた。酩酊した伊東は帰路、暗殺されたのである。

　本文に「近藤勇申ニ藤堂平助参ルモシレス、若シ見エタラハ介（助）ケヘシト申ス」とある。近藤が藤堂だけは斬るなと、永倉、原田に指示をしたのだ。よほど藤堂に目をかけていたのだろう。だが三浦常次郎が藤堂を討ってしまった。

　高台寺党の生き残り篠原泰之進の手記には「同年十一月十八日夜九時頃、衛士隊長伊東甲子太郎遊歩帰洛中、七条油小路に於て新撰組の賊徒等計策を以て暗殺す。依て油小路町役人我輩の営中へ馳来て曰く、御衛士隊長菊桐の提灯を持ちながら当町内に殺されたり。只今巡邏の人之を番す。速に死体を引退く可と其一声にて隊中或は驚き、或は怒り、騒擾甚し。則、三樹三郎、服部武雄、加納道之助（鷲雄）、毛内有之助、藤堂平助、富山弥兵衛、余が輩、死体を引取らんことを集議す。服部曰く、敵は新撰組に極たり、各々甲冑の用意然るべしと。余曰く、斯の如き隊にて斯の如き人を殺す、万一其備なきにしもあらず、若もし賊と戦はば敵は多勢、我は小勢なり。然りと雖も甲冑を著て路頭に打死せば後世其怯を笑ふべし。各々常服にて然るべしと。同志爰ここに一決し、只七名垂駕籠を持し、人足二人小者武兵衛を引卒し、油小路に馳付たり。四方を顧るに凄然として人なきが如し。依て直に伊東の死所に至り、其横死を見て一同歎息を発し、速に死体を駕籠に入れんとするに、賊兵三方より躍り出で、皆鎖を着し、散々に切懸けたり。其数凡およそ四十余人也、我同志は素肌にて備なし、只傍若無人に戦へども、衆寡敵せざるを以て勝利を得ず、終ついに敗走す。此時打死せしもの服部武雄、毛内有之助、藤堂平助也。今出川薩邸に引揚げしもの三樹三郎、加納鷲雄、富山弥兵衛、余が輩（篠原）なり」とある。

伊東甲子太郎　暗殺の地

慶応三卯年十二月七日頃之事

紀州和歌山藩三浦久太郎、周旋方相勤居リ六条油小路天満屋ト申方江旅宿致居ル、紀州家ニヲイテハ国事尽力イタシヲリ、紀州家ニヲイテモ壱人ノ人物、就テハ悉ク用ユル薩土ニテハ、三浦久太郎ハ悉ク邪摩ニ相成ルト見エテ、久太郎ヲ暗殺イタサント付廻ス
就テハ紀州家ヨリ新選組江御頼ミニ相成ル、何分三浦久太郎手薄ニテ心細ク、何卒新選組ヨリ御加勢相頼ムト、会津公用方より申居リ三浦久太郎人物ト心得、新選組三浦久太郎旅宿江参リ副長助勤斎藤一、調役大石鍬二郎、其外組ノ者宮川信吉、中邨小二郎、中条常八郎、梅戸勝之進、船津釜太郎右七人、夜八時頃ニ相成リ天満屋方江参ル
中二階ガ三浦久太郎居間此所ニテ酒ヲ呑居所江表より頼ムト申ス、家来取次ニ出テ三浦君御在宿テ有カト問エハ家来何ノ気もツカス、主人在宿テ有ト申シ家来ハ主人江告ント心得三浦ノ前ニ向テ手ヲ突ト、跡より三浦エ切ツケル廿人ホト跡ヲツケ参ル
三浦ハ新選組ヲ頼ミシ故ニ漸々ノ事ニテ手負致シナガラ逃去ル跡七人ハ敵キヲ引請ル、此時梅戸勝之進後より敵ヲ抱キ止メ対二深手負致ス、斎藤梅戸ノ為ニ切抜ル、中邨小二郎敵ト組打ヲシテ中二階ヨリ庭ノ池ノ中エ落ル、此時池廻リハ敵多勢夫ト見ルより池ノ内より表テヲカケル、今陸江上リジンジヤウニ勝負イタスト申、陸江上リ一生ケン命ニ働ク、対ニ敵皆散乱イタス
土州藩ニテモ討死手負多ク有ル趣キ新選組ニテハ宮川信吉、船津釜太郎討死、斎藤一、中邨小二郎、梅戸勝之進、中条常八郎肚ヲ少シ切レ土州ヨリ押寄たル人員大凡七拾人ホド、実ニ三浦久太郎ノタメニハ新選組討死手負致ス
「此一戦記大苦戦中日記致タル事ニアラス、事件終テ時々之覚ヲ繰出シタレハ実説咄シニテ有之故作本トハ事換リ戦場日記ト知ルヘシ也」

慶応三卯年十二月七日頃の事

紀州和歌山藩の三浦久（休）太郎は周旋方を勤め、六条油小路の天満屋方を旅宿としていた。紀州家では国事に尽力し、紀州家でもひとかどの人物であり、万事に用いられていた。薩・土では三浦久（休）太郎がことごとく邪摩（魔）になったとみえ、久（休）太郎を暗殺しようと付け回していた。
そのため紀州家より新選組に依頼があった。三浦久（休）太郎の警護が手薄であるため、どうか新選組に加勢を願いたいということであると、会津公用方より申し付けられた。三浦久（休）太郎が人物であることから、新選組は三浦久（休）太郎の旅宿へ出向いた。副長助勤の斎藤一、調役の大石鍬二郎、そのほか組の者である宮川信吉・中邨（村）小二郎・中条常八郎・梅戸勝之進・船津釜太郎の七人は、夜八時ごろになって天満屋に出向いたのである。
中二階が三浦久（休）太郎の居間で、ここで酒を呑んでいると表から「頼む」という声がした。家来が取り次ぎに出て、「三浦君は宿におりますか」と問われたが、家来は何も気づかずに「主人は宿におります」と答え、家来は（来客を）主人に告げようと三浦の前に手をつくと、背後から三浦へ切り付けた。二十人ほどが後をつけてきたのだった。
三浦は新選組を頼んでいたため、ようようのことで負傷しながらも逃げ去ることができた。あとの七人は敵を引き受けたが、このときに梅戸勝之進は背後より敵を抱きとめたため、深手を負った。斎藤は梅戸のために危地を切り抜けたのである。中邨（村）小二郎は敵と組み討ちして中二階から庭の池の中に落ちた。このとき池の周りには敵が多く、それを見てとると池から上がり、「今、陸へ上がるので尋常に勝負いたす」と言って、陸に上がって一生懸命に働いた。そのため、ついに敵は散り散りとなった。
土州藩でも討死し負傷した者が多くあったとのことで、新選組では宮川信吉・船津釜太郎が討死し、斎藤一・中邨（村）小二郎・梅戸勝之進が負傷、中条常八郎は肚を少し切られた。土州から押し寄せた人員はおよそ七十人ほどで、実に三浦久（休）太郎のために新選組は討死し、負傷したのだった。
「この一戦記は大苦戦中に日記として記したものではなく、事件が終わって、その時々にこの覚えを繰り出したものであって、実際の話である。そのため、作られた話の書かれた本とは異なり、戦場日記と心得ていただきたい」

解　説

慶応三卯年十二月七日之事。

本記事は天満屋事件のことである。この事件は、紀州藩士三浦休太郎が、六条油小路花屋町にある天満屋で陸奥陽之助（宗光）、中井庄五郎、松島和助、関雄之助ら二十人に襲われた事件である。

この背景には、慶応三年四月のいろは丸事件での紀州藩と海援隊の対立がある。いろは丸事件は、紀州藩が賠償金を支払うことで決着がつく。しかし三浦はこれに不満を持ち、龍馬を斬ったという風説が流れる。これに怒った陸奥ら海援隊士は、三浦暗殺を計画する。身の危険を感じた三浦は紀州藩を通じて新選組に護衛を依頼した。三浦を護衛した隊士は副長助勤斎藤一、調役大石鍬二郎、宮川信吉、中村小二郎、中条常八郎、梅戸勝之進、船津釜太郎の七人である。

この切り合いで、宮川信吉・船津釜太郎が討死し、斎藤一、中村小二郎、梅戸勝之進、中条常八郎は負傷したことが本文に記録されている。

その中でも梅戸は、斎藤を助けたために深手を負っている。この記述は『顛末記』にはない。

また、本文の末尾五行は、永倉がこの手記の性質を記したものである。内容から想像するとおそらく『新選組戦場日記』として第三者に読ませるためのことわり書きであろう。とすると、明治九年の「近藤、土方両雄の碑」建立に際し、記念出版を試みたことが窺い知れる。

新選組大幟　輪王寺宮筆

第章

浪士文久報国記事 三

毛利鶴山官軍大勝利之図／鳥羽伏見の戦い

〔表紙〕
徳川家御撰之兵
浪士文久報国記事
壱
長倉所有

慶応三卯年十一月頃之事

徳川慶喜公御旅館江上京致居諸侯一統御呼寄ニ相成兵庫開港ハ時勢ニ相叶さる、開港いたさされハ致し方なく一統存意如何哉と問へハ諸侯一統御答ニ者時勢ニ不叶開港無拠次第長州所置之義者寛大之沙汰ニ可及与問ひ是も寛大之御所置可然存し依而者明日速ニ参内いたし奏聞ニ可及一同参内可致様御達ニ相成、翌日直ニ徳川慶喜公始諸侯参内いたす、薩州土州公越前公宇和島公参内不致、依之再度御使者を以催促ニ及はれ候得共参内不致、依而慶喜公奏聞ニ及　天朝江被召聞時勢不叶開港無余義次第御差免し長州所置之義者寛大之沙汰取計可申与慶喜公ニ被仰聞
翌日四藩之者天朝江建白其旨議ハ兵庫開港之議は先天子之御遺言も有之先帝之御事候開港不相成長州御所置之議ハ寛大之御沙汰是ハ徳川慶喜公万じ同論
依而慶喜公悉く御心配ニ而長州所置ハ如何致す哉と新選組江御尋ニ相成候、新選組一統之論者長州御追討中々叡慮を背ク事度々有之、依而所置致し方ニ困候、寛大之御所置なれハ矢張尾張大納言殿御所置より外ニ有之間敷ト申上ル、尾張殿之御所置に決而改而毛利大膳父子江申渡し夫を四藩之者聞く、慶喜公江言上長州大膳父子御所置之趣私意不相叶大膳父子官位相復し拾万石被召上候義不相成速ニ上京可致様不相成候而者不承知之趣申之
慶喜公如申苦御取計方無之依而将軍御権威不相立就而者将軍辞職之御頼ひ御差出ニ相成叡慮之趣将軍辞職之義は十万石以上之諸侯上京之上衆議決談可申付代官是迄之通支配可致事慶喜公大坂城江御出張兵庫開港応接被遊
慶応三年十二月四日徳川御親藩其外遊撃隊見廻組新選組一同大集会軍議相決スけル場所ハ相国寺ハ薩州旅館遊撃隊大仏者土州旅館新撰組御所御固ハ松平肥後守松平越中守其外親藩相固り十二月十一日ニ兵端を開く心得依而新撰組ニ而東寺江探索を入十一日待構ゐ居り十二月十日二条御城より新選組速ニ出兵可致旨御達し何事哉と驚き一同ニ支度致し

出張致ス二条御城之外南側江陣取板倉伊賀守殿より申渡シには今晩十二時頃勅使被参其
警衛者松平修理太夫殊ニ寄りと薩州より炮発可致も難計決而此方より炮発不相成然る所
勅使御延引ニ相成候翌朝八時頃ニ堀川屋敷江帰陣致ス

〔表紙〕
徳川家御撰之兵
浪士文久報国記事
壱（三）
長倉所有

慶応三卯年十一月頃の事

徳川慶喜公の御旅宿へ、上京中の諸侯が呼び出され、兵庫開港は時勢にかなわず、開港しなければならないが皆の意見はどうか、と問われ、諸侯は時勢にかなわないのであれば開港は仕方ない、と答え、長州の処分は寛大なものにすることについても、これも寛大な処置が妥当であるとのことで、速やかに明日、参内して奏聞するので、一同も参内するようにとの御達しがあった。翌日、ただちに徳川慶喜公はじめ諸侯が参内したが、薩州・土州公・越前公・宇和島公は参内せず、そのため再度の使者を送って催促したものの参内しなかった。そこで徳川慶喜公は奏聞におよび、天朝に召されて時勢にかなわず、やむなく開港する次第を許し、また長州の処分については寛大な沙汰を取り計らうよう、慶喜公におっしゃられた。
翌日、四藩の者は天朝に建言したが、その内容は、兵庫開港の件は先の天子（孝明天皇）の御遺言もあり、先帝が開港の不可を定めた事である。また長州処分については寛大の沙汰であって、これは徳川慶喜も同じ意見である、というものだった。
そこで慶喜公はいろいろとご心配になり、長州処分はどうするか、と新選組にお尋ねになられた。新選組一統の論は、長州追討については（戦に敗れ）叡慮に背いてしまったことがたびたびあり、処置については困惑している。寛大の処分とするならば、やはり（責任者として）尾張大納言殿を処分する以外にない、ということを申し上げた。尾張殿を処分することを決してから、改めて毛利大だい膳ぜん父子へ申し渡すということを四藩の者が聞き、慶喜公に言上し、長州大膳父子の処分について私意を用いることはかなわず、大膳父子の官位を復し、十万石を召し上げたことも妥当ではないので、速やかに上京させなければ不承知である旨を申し上げた。
慶喜公は苦しまれ、取り計らいようがなく、ついては将軍の権威が立たないため、将軍辞職の御願いを御差し出しになられた。（これに対する）叡慮は、将軍辞職については

十万石以上の諸侯が上京のうえで議論し、それで決談（断）せよと申し付けられ、代官はこれまでどおりに支配することとし、慶喜公は大坂城へ出張して兵庫開港の応接をされた。
慶応三年十二月四日、徳川の御親藩とそのほか遊撃隊・見廻組・新選組一同は大集会を開き、軍議を決した。見張る場所は、薩州旅館の相国寺は遊撃隊、土州旅館の大仏は新選組、御所の警備は松平肥後守・松平越中守そのほか親藩があたることになり、十二月十一日に兵端を開く手筈となったので、新選組は東寺へ探索を潜入させ十一日を待ち構えた。十二月十日、二条城から新選組に急ぎ出兵するよう達しがあり、何事かと驚き、一同は支度して出動した。二条城外の南側に陣取り、板倉伊賀守より申し渡しがあって、今晩十二時ごろに勅使が参られ、その護衛に松平修理大夫が付き、ことによっては薩州より発砲するかもしれないが、決してこちらより発砲はするな、というものだった。そうしたところ、勅使がくるのは延期となり、翌朝八時ごろに堀川屋敷に帰陣した。

解　　説

「徳川家御撰之兵浪士文久報国記事壱（三）長倉所有」と表題がある。「徳川家御お撰せん之の兵へい」とは幕臣に取り立てられたことも含め徳川家に特別に選ばれた兵士であるという誇りが、戦いで散華した近藤、土方へのレクイエム（鎮魂歌）としてこういうタイトルになったのであろうか。

本文は慶応三卯年十一月頃、兵庫開港と長州藩処分問題（実際は慶応三年五月二十三日）から明治二年五月十一日、土方歳三戦死までの約二年間の新選組の活動が記されている。「徳川家御撰之兵浪士文久報国記事壱（三）長倉所有」の表紙から「漸の事ニて不残内へ入候永倉△」までの記述とその次の行「△新八原田左之助井上源三郎斎藤一山崎丞」以降とでは筆跡が異なっている。本史料全体の筆跡に鑑かんがみて後者が永倉の筆跡によるものである。前者の筆者は不詳であるが、鳥羽伏見の戦いでの御香宮での戦闘や伏見方面の旧幕軍・会津藩兵などの兵員数の記述が一致することから、おそらく永倉と参戦した新選組の者が参考に記したものが挿し込まれたものと考えられる。

内容は慶応三年五月二十三日の兵庫開港・長州藩処分問題、近藤勇狙撃、伏見での戦闘、甲州勝沼の戦い、近藤・永倉の訣別までの期間は細かな記述がなされているのに対し、訣別以降の宇都宮城攻防戦から箱館戦争での土方戦死までは全部で二十二行とごく簡潔な記述で終わっている。

慶応二年（一八六六）八月一日の小倉城落城・九州諸藩の無断帰国による解兵によって第二次征長は失敗に終わり、その処理問題が起こる。周知の通り、第二次征長の失敗は、幕府支配の正当性の一つである諸侯統制が破綻したことを白日の下にさらした。つまり中央政府としての幕府の威権が完全に失墜したことが衆しゅう庶しょに明らかとなったのである。

また、慶応二年の中央政局は、十二月五日の徳川慶喜の将軍職就任までの約五カ月間の将軍空位期、七月二十日、十四代将軍徳川家茂の死去、十二月二十五日の孝明天皇の崩御と、政治の代表者の死去と相まって混迷の度合いはますます深まっていったのである。このことから慶応三年（一八六七）の政治動向は、次の政治的主導権を誰がどのように担うのかが争われたものであると言えよう。その第一段階が兵庫開港・長州藩処分問題である。

この問題は、島津久ひさ光みつ（薩摩藩）・松平慶よし永なが（越前藩）・伊達宗むね城なり（宇和島藩）・山内容堂（土佐藩）の四侯の長州藩処分先決・兵庫開港先送りの建白にも拘らず、「時勢不叶開港無余義」という慶喜の強い要求によって、慶応三年五月二十四日（本文では十一月頃とあるが誤り）に、兵庫開港・長州藩の処分寛大という形で二件同時に勅許が下りたのである。こうして長州藩処分の実行の仕方が問題となった。

本文では徳川慶喜が長州藩処分について新選組に意見を求めたとあるが、慶喜側の文献にはそのような事実はまったくない。しかし、興味深い記述ゆえ、後考を待つ。だが「越前藩幕末維新公用日記」慶応三年六月十七日条で、長州藩処分を討議する在京幹部による親藩会議に近藤勇が出席して、長州藩父子の官位復旧は「幕府之妄挙一条ヲ申立、再騒動ヲ引出」すことになるという発言をしていることが記されている。おそらくこちらの方が史実であろう。諮問した相手が異なっていたとはいえ、新選組は幕臣に取り立てられることが決定（六月二十三日、通達）していたこともあり、近藤が幕府の重要事項に発言権を得たことに変わりはない。

松平春嶽

徳川慶喜

十二月十一日二条御城より新選組ニ兵出可致との御達速ニ出兵致ス、二条御城内ハ大騒動慶喜公大坂表江御立退諸役人立退候跡を一見候処余程周章之体ニ見受、二条御城者新選組ニ御悉任ニ相成候厳重ニ相固メ若薩土より押懸来候時者何れ薩土焚玉なり不残土屏ニ付御殿ハ果して焼れ可申一同決心籠城致スの心得
十二月十二日大坂表より至急用向有之下坂可致様御達有之、依而二条御城ハ水戸殿江譲り速ニ大坂江下ル、十二月十四日大坂天満江旅宿此夜直ニ慶喜公江近藤勇罷出候慶喜公其方ニ伏見表委任申付候、早々伏見表江相登候旨之御意、十二月十八日早朝大坂を発し伏見奉行邸江着、此時薩土大ニ動揺新選組大和郡山の城を抜き伏見江押寄候との風聞薩土京師場所固候
十二月十六日伏見市中町役人を呼此度当所御委任ニ相成趣申渡薩土長よりも其市中江申渡勅命を以京都伏見と其政事御任に相成り依而新選組之政事相受申間敷新選組に於而者厳重相固候、新選組加勢として伝習兵一大隊五百会津公より三百人隊長林権助伝集隊頭取小笠原大隅守、薩長土於ハ新選組ニ手出シ致さんと心得毎夜屋敷之廻りへ参り砲発候上小鑓にて屏を突候事と少しも騒かす、新選組之人を見と切付候而十二月廿一日永井玄蕃頭ニ軍事の義ニ付相談可致事有之二条御城江近藤勇乗馬ニテ罷出候
此時警衛ハ嶌田魁、横倉甚五郎、石井清之進、草履取文吉、伊東甲子太郎之残徒江局より注進致ス者有之近藤勇帰来候を途中待ち伏セいたし居鉄砲ニ而打者有之も恙なく勇馬を走しせて警衛人者石井清之進鉄砲ニ被打其上切込れ終ニて討死ニ草履文吉も右同断所者伏見墨染と申所なり、廿三日大坂御城内江手負養生ニ参候
十二月廿七日夜新選組之者門外江出候と手討いたし参候依而土方歳三と永倉新八相談いたし今宵ハ市中巡羅ニ罷出士体と見れ者無用捨切捨可申合印ハ晒鉢巻を用合言葉ハ月星ト永倉新八組江相達ス、夫より名々ニ鉄鉋を為持市中巡羅致し候処士体之者ニ少しも不出合実に引揚んと町奉行屋敷表門江掛候と同し合印ニて十人斗り潜伏致し居候
永倉新八側江寄り何者成そと声を掛候哉否哉逃ケ去ル、夫追討ト申けれハ組ノ者追欠候余り長追致すも不宜と存引揚けと念を掛候、夫より南門より入ル、直ニ合印を取替綿襷たすきニいたし亦々市中見廻候、此十人之者敵を見而逃去しニ付薩州ニて翌日不残切腹被致ス、手討の者無之局江戻ル
翌朝ニ至リ土方歳三ニ向ひ副長助勤諸士調役一同会議局中ニ奸者是有、昨夜之事実も不残敵方江内通の様子就而者局中之障ニ付内密探索方諸士より調役ト申達シ夫々探索之所右者永倉組より小林桂之助敵方江相過し不容易所行依而断首申付候

薩長土毎夜屋敷廻り江参り新選組ニ手出シ致させんと喧嘩ニ付へク当局ニ而者不取構差置

十二月十一日、二条城から新選組に出兵命令が出され、速やかに出兵した。二条城内は大騒動で、慶喜公は大坂へ立ち退き、諸役人も立ち退いたあとを一見したところ、よほど慌てていたものと見受けられた。二条城は新選組に悉（委）任され、厳重に警備し、もし薩・土より押しかけてきても、いずれ（彼らが使うのは）焼玉であり、（二条城は）残らず土塀であるので、御殿が焼かれても一同は籠城するつもりの決心をした。

十二月十二日、大坂より至急の用向きで下坂せよとの達しがあり、そのため二条城は水戸殿へ譲って、速やかに大坂へ下った。十二月十四日に大坂天満へ宿陣すると、その夜ただちに慶喜公より近藤勇が召し出され、慶喜公より近藤に伏見方面（警備）が委任された。早々に伏見へ向かうようにとのことだったので、十二月十八日早朝、大坂を発して伏見奉行邸に着いた。このとき薩・土は大いに動揺し、新選組が大和群山の城を攻略して伏見へ押し寄せるとの風聞が立ち、薩・土は京都の警備を固めた。

十二月十六日、伏見市中の町役人を呼び、このたび当地を委任されたことを申し渡したが、薩・土・長からの市中に申し渡した勅命によって、京都と伏見の政事が任されており、新選組の政事を受けることはできないというので、新選組は厳重に警備した。新選組の加勢として伝習隊頭取小笠原大隈守の伝習兵一大隊五百、会津公より林権助を隊長とする三百人が守った。薩・長・土は新選組に手出しをしようと、毎夜、屋敷の付近にやってきて発砲するうえ、小鎗で塀を突くなどしたが、少しも騒ぐことはなかった。また新選組の人を見ると切り付けて、十二月二十一日には永井玄蕃頭より軍事についての相談があるというので、二条城へ近藤勇は馬に乗って出掛けた。

このときの警衛は嶌（島）田魁・横倉甚五郎・石井清之進・草履取りの文（久）吉で、伊東甲子太郎の残党に局から密告があり、近藤勇がやってくるのを待ち伏せし、鉄砲で撃った者があったが、無事に勇は馬を走らせて帰陣した。これによって警護の石井清之進は鉄砲に撃たれ、そのうえ切られてついに討死し、草履取りの文（久）吉も同じだった。場所は伏見の墨染という所だった。（近藤は）二十三日に大坂城内で傷を養生するために下った。

十二月二十七日夜、新選組の者が門外へ出て（犯人を）手打にしようとしたが、土方歳三と永倉新八が相談し、今夜は市中巡羅（邏）に出て、武士風の者と見れば用捨（容赦）なく切り捨てようと言い、合印に晒鉢巻を用い、合い言葉は月と星として、永倉新八が組に伝えた。それから銘々に鉄砲を持たせ、市中巡羅（邏）をしたところ、武士風の

者に少しも出会わず、まさに引き揚げようと町奉行屋敷の表門に差しかかったとき、同じ合印をした十人ばかりが潜伏していた。
永倉新八が側に寄って、何者かと声をかけるやいなや逃げ去った。それ、追い討ちだ、と言うと、組の者が追いかけたが、あまり長追いするのもよくないので、「引き揚げるぞ」と声をかけて、奉行所の南門から入り合印を綿の襷にかえて再び市中を見廻った。
この十人の者は、敵を見て逃げ出したため、薩州では翌日、残らず切腹とした。新選組には手負いの者はなく、局へ戻った。
翌朝になって、土方歳三に向かって副長助勤・諸士調役の一同が会議し、局中に奸（間）者があり、昨夜のことも残らず敵に内通されていた様子で、ついては局中に差し障りがあるので、内密に探索することを諸子より調役に伝えた。おいおい探索したところ、内通者は永倉組の小林桂之助が敵方へ過（通）じ、容易ならざることだと断首を申し付けた。
薩・長・土は毎夜、屋敷付近へやってきて、新選組に手出しさせて喧嘩させようとしていたが、当局では相手にせずにいた。

近藤勇鎖帷子

解　　説

慶応三年十月十四日の大政奉還、同年十二月九日の王政復古クーデターにより、二百六十四年間続いた徳川幕府の支配は幕を下ろした。朝廷は、総裁・議定・参与の三職による政治体制をとり、小御所会議で慶喜の辞官・納地が決定する。これに反発した旧幕臣、会津・桑名両藩は十二月十一日、武装して二条城に集結、薩摩藩兵が二条城に攻めるとの風説があり、今にも討って出る勢いであった。この状況を危き惧ぐした慶喜は、彼らを引き連れて大坂城に入城することにし、翌日、新選組が二条城警備にあたることになった。だが、十三日、慶喜から警備を任された水戸藩との間で警備をめぐる対立が起こり、新選組は永井尚志と共に下坂し、十四日、大坂天満に宿陣する。

十六日、新選組は幕命により伏見奉行所に布陣し、伏見の警備を任されたことを伏見市中町役人を呼んで通知している。これを知った薩土両藩は、京都の警備を固め、伏見の市中に「勅命を以もつて京都伏見と其政事御任ニ相成依而新選組之政事相受申間敷」と申し渡すというように両者の間で鍔つばぜり合いが行なわれている。同時に新選組加勢として伝習兵五百人、林権助を隊長とする会津藩兵三百人が伏見に集結した。

このように新政府と旧幕府との不穏な状況が展開される背景には、先述した辞官・納地をめぐる新政府側と旧幕府側の交渉が進まず、奏請文に「領地返上」の文字を入れるか入れないかで、激しい対立があったのである。

このさなかの十二月二十一日（十二月十八日の誤り）、二条城で永井尚志と会談した近藤は、伏見墨染（一説には丹波橋筋）で高台寺党の残党によって狙撃され、馬を飛ばして辛うじて逃げるが、警備についていた石井清之進と草履取り久吉の二名が闘死している。なお、永倉の記憶では草履取り文吉であったが、他の文献では「馬うま奴やつこ文吉」「勇の僕久吉」と一致しない。彼らと警備にあたった島田魁の記憶では、井上新左衛門と奴芳介となっている。永倉・島田ともに記憶をたどって記した性格の記述ゆえ、信憑性に疑いを抱くが、現場にいた島田の記憶が正しいように思われる。また、狙撃現場も、従来は本文のように伏見墨染と言われていたが、墨染説は全て隊士の回顧談に依拠するのに対して、丹波橋筋説は、薩州私領一番隊書記だった財部雄右衛門の書いた『戊辰役実録』という隊の公式陣中日記の記述に依拠する。

明治壱辰年一月三日陸軍総督松平豊前守大久保主膳正、竹中主水正、会津兵三百人隊長林権介、伝習隊兵五百人頭取小笠原大隅守、新撰組副長土方歳三、同助勤永倉迄原田左之助、井上源三郎、斎藤一、山崎丞、諸士調役吉村無一郎、大石鍬二郎、小荷駄方岸辺島辺芳太郎、巨冨才輔、中竹玄道、青柳牧太郎、隊長付組頭石井清之進、相馬肇、歩兵頭兼岸嶋芳太郎一小隊五十人、新選組総督同志百人、隊長附五十人、歩兵附五拾人都合弐百人之兵伝習隊五百人会津兵三百人都合千人ニ而籠城致ス了簡当より薩州江奸者入レ置小幡三郎、荒木新三郎両人

三日朝ニ及ト三藩諸方江兵を配候、御香宮大砲四門伏セ候、御香宮より奉行屋敷ハ一ト目ニ見おろス所総督始組之隊長御殿江集会弥今晩兵端を開模様相見江依而各々固場所をハ表御門ハ会津兵、南北之御門ハ伝習兵、裏手之方ハ新選組

夕景ニ相成候而御香宮より砲大打掛暫し炮戦、三藩より打ノハ不残焼玉ハ破烈多く新選組より裏之庭より大炮一発打、是より御香宮より（江）とゝき終ニ三藩討死多く有之趣

其場より小幡三郎、荒木田信三郎戻来物語あり、新選組之手ニ而薩土屋敷江火を掛候、土方申ニ者炮戦ニ而者勝負不決依而永倉右土屏を乗越し切込呉候と申ニ附速ニ組共ニ屏を越夫迄ハ向長屋かり一発も不打処乗越スト障子を破り其内より小隊打出サレ夫にて太方打タレ乗越したる最早討死之覚悟ニて夫レ切り込ハ会ヲ掛候切込ント致ス処ニ長屋へ火を掛ケ逃候依而切り込事出来す、手討負カ之者ハ永倉サン首を打テト声を懸候無余義手討負カイタシタ者の首を打追て残候組者漸の事ニて不残内へ入候＊１永倉△△新八、原田左之助、井上源三郎、斎藤一、山崎丞、諸士調役吉村如二郎、大石鍬二郎、小荷駄方岸嶋芳太郎安藤冨才輔、中郙玄道、青柳牧太夫、隊長附組頭石井清之進、相馬肇、歩兵頭兼岸嶋芳太郎、壱小隊五十人、新選組惣勢同志百人、隊長附五拾人、歩兵五拾人都合弐百人之兵勢伝習隊五百人会津兵三百人都合千人ニテ籠城致スノ了簡遠ヨリ薩州江奸者ヲ入置ク小幡三郎、荒木信三郎両人三日之朝ニ及ブト薩（三藩）諸方江兵ヲ配ル、御香宮江大炮四門伏セル、御香宮ヨリ奉行屋敷ハ一ト目ニ見ヲロス処ロ惣督始メ組々隊長御殿江集会弥今晩兵端ヲ開ク相様ニ相見江依テ各々固場所ヲハ表御門ハ会津兵南北門ハ伝習兵、裏門ハ手ノ方新選組夕景ニ相成ト御香宮ヨリ大炮打カケ暫シハラク炮戦、三藩ヨリ打ノハ不残焼玉トハレツ多シ＊２

君鉄炮ヲ持土塀ノ上カラ是縋スガリ可申ト永倉江申聞ルコエ永倉是幸ト足ヲカケ鉄炮ニツカマリ嶋田コレヲ引揚ル、永倉鬼瓦江軒ニ手ノトゝキシコエ夫ヨリ邸内江入ル、永倉

嶋田ニ申附外ニ居ルアリ手討ノ人階子ヲカケ内江入養生致サセ呉レト申、嶋田魁ノ力ハ五斗俵三俵持ツホドノ力アリ永倉新八ハ嶋田魁ニ介ケラレル

御殿江焼玉カヽル一旦タンハ燃ル所モ消ス諸所ヨリ燃揚ル迚モ裏手ニハ居コト不叶、夫ヨリ会津兵ト合塀イタス惣督之令ニテ表門ヲ開キ三方江切出ス、敵ニヲイテハ鉄炮ハケシク打ツ敵御香宮迄追退ケ終ニ桃山江敵退ク桃山モ追退ケ直ニ京師江押入ランノ勢イ

敵ハ不残丹波丹後江落チル身方大凡鉄炮ニ打ン纔ワスカノ人数ニ相成リ残念ナカラ許ノ表門江退ク、会津兵組頭林権助玉ヲ八発受討死敵ニテ町家江火ヲカケ漸ノ事ニテ川向イエ退タ、長州ノ論ニテ今一度引返シ夫テ迚モ叶ハン時ニハ国江退クヨリ外ハナクト申ス夫マテ薩土伏見江引返ス

伏見ハ地理宜ナク依テ淀城下江不残引揚ル、惣督松平豊前守淀城内江懸合ニ及トコロ淀留守居ノ申様勅命ニテ無之ハ入事御無用ト申

一月四日朝八時頃薩州鳥羽街道ヨリ押寄ル、コチラハ会津兵応接新選組薩州大敗軍対ニ鳥羽街道宿々江火ヲカケ退ク、薩兵討死多シ、一月五日朝七時頃淀川堤ハ薩兵鳥羽街道長土兵ハ押寄ル、コチラハ淀川ノ堤ハ先陣会津兵新選組後陣遊撃隊頭取千代田豊太郎組弐百人、千代田此所ニヲイテ手負イタス、遊撃隊ト歩兵一小隊鳥羽街道先陣大垣兵後陣見廻組歩兵一小隊両方トモ大苦戦暫ク炮戦、故ニ勝負ツカス、依テ会津新選組不残鉄炮ヲ捨テ切込ム

ナヲ薩兵ヨリハ炮発致ス此処ハ右側ニ川有左側ハ沼ナリドチラエモ差引キ出来ス薩兵ニテハ荒手ト引替、許ト込メノ筒ニテ小隊打イタサレ会津新選組討死多シ然レトモ薩兵ニ追イツキ切込ム、何分薩兵ニヲイテハ荒手ヲ入替エ一先ツ弐丁ホド退キ堤脇江落ス

夫ヨリ土方歳三応接ト申シ荒木信三郎応接ノ迎ニ参ル、不残逃去ル趣キ土方歳三江註進ニ及フ、依テ速スミヤカニ一同淀城外江引揚ケル、此時会津藩ニテ金田百助ト長倉新八淀小橋ヨリ三町ホド手前江参ルト大炮一ト門コレアリ、右之大炮見ルト玉楽コレアリ不取敢金田永倉両人ヲ見テ大炮ヲ打夫ニテ敵キ追ヲ打チ暫時留ル直ニ大炮淀川江埋メル

淀城下江引揚ケル川向ハ敵地ト相成小橋ニテ炮戦ハケシク既ニ薩兵船ヲ仕立淀城内江入ル、此時土方歳三惣督松平豊前守向イ淀城内江敵キ船ニテ入込ム趣キ依テ城内江御懸合可相成城内江閊ラン事ニハ致方ナクト申セハ松平豊前守城内ノ留守居江掛合ニ及ケル処勅命デコレナクハ入事不相成ト挨拶余儀無淀城下江火ヲカケ橋残本宿引揚ル、此時新選組副長助勤山崎丞其外討死多シ

一ヶ月六日朝七時頃山崎天王山下タ関門藤堂和泉守固メ八幡山江ハ松平越中守兵戸釆女正其外歩兵相固メル橋本宿ハ会津兵新選組遊撃隊見廻リ組固メル八幡堤ハ薩兵寄ル新選組ト大戦イ対ニ薩兵ニ計ラハレ薩兵八幡堤ノ鳥居前江参リ薩兵ト大垣兵ハ戎服ト笠ハハ少モタガワズ只合印カ二本戦力腕ニアルト壱本手クビニアルトノ違ヒ
薩兵シキリニ自分ノ身方江大炮ヲ打ヲル五丁ホド手前江ハナレ見ル処大垣兵ニ違ヒなく迚モ大垣兵ニハ防コト六ケ敷、夫故ニ土方歳三、原田左之助兵ヲ率キ三丁ホド参ルト薩兵コチラヲ向イ炮発イタス、漸くノ事ニテ胸壁ノ内エ引揚ケコレヨリ大戦イ永倉新八、斎藤一馬兵ヲ率テ八幡山中副ニテ戦ヲル
山崎関門藤堂和泉守長州兵ニ欺レ裏ヲ切出ス会津兵隊長林文三郎兵ヲ率キ藤堂兵ニ向イ対ニ藤堂追払イ此時大苦ク戦シ林又三郎討死其外討死手負多クコレアリ
八幡堤ノ戦イ藤堂裏切致シ夫故ニ兵散乱イタサムト心得夫ト見ルヨリ土方歳三、原田佐之介猶ヲ進メト令ヲカケ其内ニ藤堂兵会津兵ニ追払ハレタト注進コレアリ兵コレヲ聞ト一同大慶ニ存ナヲ働タ、見廻リ組頭佐々木只三郎土方ニ向イ我カ隊ハ堤川向イ越シ笹藪ノ処江兵ヲ配るト申夫ヨリ船手配リイタシヲル処エ薩兵堤下ヲ廻リ鼻ノ先押出ル大苦戦此処ニ壱軒家コレアリ火ヲカケ長倉新八、斎藤方ヘ注進ナリ橋本陣家江引揚る長倉新八斎藤一少モ不知八幡中副ニ戦居ル処八幡堤ヲ見る処堤ニ身方壱人モ不居ヲ夫々壱軒家ヘ火掛ル不思議ト存シ田村一郎土方歳三方エ遣ストコロ壱人モ不居ラ不残橋本陣家江引揚ル趣田村一郎戻り申ス、夫より長倉新八斎藤一速ニ兵ヲ引橋本陣家江参ル途中ヲ敵ニ前後ヲ取マカレ必死ノ戦対ニ一方ヲ破リ漸々ノ事ニテ橋本陣屋ヘ参ル
総督松平豊前守、大久保主膳正、竹中主水正寄合一先大阪城江引揚ヘク夫ヨリ不残大阪江引揚ル大御番長家江新選組屯イタス、其外不残御城内江屯イタス
一月七日徳川慶喜公始メ松平肥後守諸役人集会軍儀イタス、会藩家老神保内蔵之助此時言上イタス迚モ山崎天王山八幡山ヲ落トサレテハ此御城ニテハ危ク存シ一先御東下アツテ兵ヲウス井峠小仏峠箱根山ヘト兵ヲ差シ向ケニ相成方宜シクト申上ル近藤勇言上イタス私ニ三百人ノ兵御預ニ相成ルトキニハ兵庫堺ト兵ヲ配リ私御城内ニ居テ令ヲ下ス当月一倍ハ相保ツノ心得其中ニ関東ヨリ兵御指シ向コレアリ度若シ負軍ニ及フトキニハ御城内ニテ討死ノ覚悟左モナクテハ東照宮ヘ相対シ壱人モ討死コレナクテハ御申訳ケナクト申上ル

慶喜公一先ツ御東下被為在肥後守モ御供其外役人不残御供軍鑑ニテ御東下、慶喜公より御沙汰会津兵新選組速ニ大坂引揚ケ冨士サン丸順動丸ニテ東下イタスヘク御沙汰、依テ右船ニ乗込ミ一月十日ニ大坂表ヲ出発シ徳川籏本ノ兵不残紀州公江御預ケ

一月十二日品川宿釜屋方へ旅宿此時新選組役人局長近藤勇、副長土方歳三、副長助勤永倉新八、原田左之助、斎藤一、病気ニ而引込居ル沖田総司、尾形俊太郎、諸士調役大石鍬二郎、小荷駄方安冨才助、中村玄道、歩兵頭岸嶋芳太郎、隊長附相馬肇、惣人員相調候処九拾人ニ相成ル

江戸表江着早々近藤勇慶喜公へ建白甲州御城内御委任ニ相成ル様奉願上二月一日釜屋ヲ引キ取リ鍛冶橋御門内大名小路若手前御後屋敷拝領イタシ新選組ノ屋敷ト相成ル

明治一辰年一月三日、陸軍総督松平豊前守・大久保主膳正・竹中主水正、林権介を隊長とした会津兵三百人、小笠原大隅守を頭取とした伝習隊兵五百人、新撰（選）組副長土方歳三、同助勤永倉・原田左之助・井上源三郎・斎藤一・山崎丞、諸士調役吉村無（貫）一郎・大石鍬二郎、小荷駄方岸辺（島）芳太郎・巨（安）富才輔・中竹（村）玄道・青柳牧太郎、隊長付組頭石井清之進・相馬肇、歩兵頭兼岸嶋（島）芳太郎一小隊五十人、新選組総督（勢）、同志百人、隊長附五十人、歩兵附五十人。都合二百人（計算間違いか。実際は二百五十人になる）の兵が、伝習隊と会津兵の都合千人（計算間違い。実際は千五十人になる）で籠城するつもりだったので、薩州に小幡三郎と荒木新三郎の両人を奸（間）者として入れて置いた。

三日の朝になると三藩は諸方へ兵を配置し、御香宮に大砲四門を設置した。御香宮は奉行屋敷が一目で見下ろせる所で、総督はじめ組の隊長は御殿に集会し、いよいよ今晩には兵端が開かれる模様に見られると、それぞれに警備場所を表御門は会津兵、南北の御門は伝習兵、裏手の方は新選組と決めた。

夕方になって、御香宮より大砲が打ち掛けられ、しばらくは砲撃戦となった。三藩より打つのは残らず焼玉で、破裂するものが多く、新選組は裏の庭から大砲を一発打ったが、これが御香宮に届き、三藩には討死が多く出たようである。

その場から小幡三郎と荒木信三郎が戻り報告があった。新選組の手で薩・土屋敷へ火をかけた。土方が言うには、砲戦では勝負がつかないので、永倉に土塀を乗り越えて切り込んでくれ、ということなので、速やかに永倉隊が者に塀を越え、それまでは長屋から一発も打たれないところに乗り越すと（指示し）、障子を破って小隊が打ち出し、それから太刀での戦いをしようと乗り越したが、もはや討死の覚悟で切り込みは命をかけた。切り込もうとしたところへ、長屋へ火をかけて逃げたので、切り込むことはできなかった。手負の者は、「永倉さん、首を打て」と声をかけられたので、仕方なく負傷した者の首を打っておいて、残った組の者はようようのことで残らず内に入ることができた。

（以下、＊１～＊２まで原文重複のため、訳省略）

土塀の上から鉄砲を持って、君、これにすがれと永倉に言うのが聞こえ、永倉はこれ幸いと足をかけ鉄砲につかまると、嶋（島）田がこれを引き上げた。永倉は軒の鬼瓦に手が届き、それより邸内に入った。永倉は嶋（島）田に、ほかにまだ外にいるので、手討

（負）いの人にはハシゴをかけて内に入れ、治療をしてくれと頼んだ。嶋（島）田魁の力は五斗俵を三俵も持つほどの力で、永倉は嶋（島）田に介（助）けられたのだった。御殿は焼玉を打たれ、いったんは燃えているのを消火したが、諸所から燃え上がるようになって、とても裏手にはいることができなくなった。そこで会津兵に合流して、惣（総）督の命によって表門を開き、三方へ切り込んだ。敵が激しく鉄砲を撃つなか、敵を追って御香宮まで追い退け、ついに桃山へ敵を退けると、ただちに京都へ押し入ろうという勢いだった。

敵は残らず丹波・丹後へ落ち、身（味）方はおおよそ鉄砲に打たれわずかの人数となり、残念ながら元の表門へ退いた。会津兵組頭の林権助は玉を八発受けて討死し、敵は町家に火をかけて、ようやくのことで川向こうに退いた。長州の意見によって、もう一度、引き返して（戦い）、それでもとてもかなわないときには国へ退くよりないということで、薩・土は伏見に引き返した。

伏見は地理がよくないので、淀城下へ残らず引き揚げた。惣（総）督の松平豊前守（大おお河内こうち正まさ質ただ）が淀城内に掛け合ったところ、淀留守居のいうには、勅命でなければ入れることはできないということだった。

一月四日朝八時ごろ、薩州が鳥羽街道より押し寄せた。こちらは会津兵と新選組が応戦し、薩州は大敗し、ついに鳥羽街道の宿々に火を放って退いた。薩兵に討死が多かった。一月五日朝七時ごろ、淀川堤に薩兵、鳥羽街道に長・土兵が押し寄せた。こちらは、淀川の堤は先陣として会津兵と新選組、後陣は千代田豊太郎が頭取の遊撃隊二百人だった。千代田はここで負傷した。遊撃隊と歩兵一小隊が戦った。鳥羽街道は先陣が大垣兵、後陣が見廻組と歩兵一小隊で、両方とも大いに苦戦したが、しばらく砲撃戦となった。勝負がつかず、会津と新選組は残らず鉄砲を捨てて切り込んだ。

薩兵よりはなお発砲があって、この場所は右側に川があり、左側は沼なので、どちらへも逃れることができず、薩兵は荒（新）手と引き替わる。元込め銃で小隊に射撃され、会津と新選組に討死が多かったが、薩兵に迫って切り込んだ。とはいえ、薩兵は荒（新）手を入れ替え、ひとまず二丁ほど退いて堤の脇に避難させていた。

それから土方歳三は軍議があって、荒木信三郎が迎えにやってきた。（味方は）残らず逃げ去ったとのことで、土方歳三は報告を受けて速やかに一同は淀城外へ引き揚げた。このとき会津藩の金田百助と長（永）倉新八が淀小橋から三町ほど手前の所へ行くと、大砲一門があった。この大砲を見ると玉楽（薬）があったので、とりあえず金田と永倉

が大砲を撃ったところ敵が退いたので、しばらくそこにとどまったが、大砲はただちに淀川へ捨ててしまった。

淀城下へ引き揚げると、川向こうは敵地となっており、小橋では砲撃戦が激しかった。すでに薩兵は船を仕立てて淀城内に入っている。そこで土方歳三が惣（総）督の松平豊前守に向かって、淀城内に敵が船で入っているようなので、城内に掛け合って（こちらも）城内に入らなければどうにもならないと言うと、松平豊前守は、城内の留守居に掛け合ったところ、勅命がなければ入れることはできないと返答があった（旨を告げ）、仕方なく淀城下に火をかけて、残らず橋本宿へ引き揚げた。このときの戦いで新選組副長助勤の山崎丞そのほか、討死する者が多かった。

一月六日朝七時ごろのことである。山崎の天王山下の関門を藤堂和泉守（藤堂高たか猷ゆき）が守備し、八幡山は松平越中守の兵と戸田采女正そのほか歩兵が守備し、橋本宿は会津兵・新選組・遊撃隊・見廻り組が守備していたところ、八幡堤に薩兵が攻め寄せ、新選組と大いに戦った。これは薩兵の計略によるもので、薩兵は八幡堤の鳥居の前に進攻したが、薩兵と大垣兵の軍服と笠は少しも違うところがなく、ただ合印の二本線が腕にあるのと手首に一本あるとの違いだった。

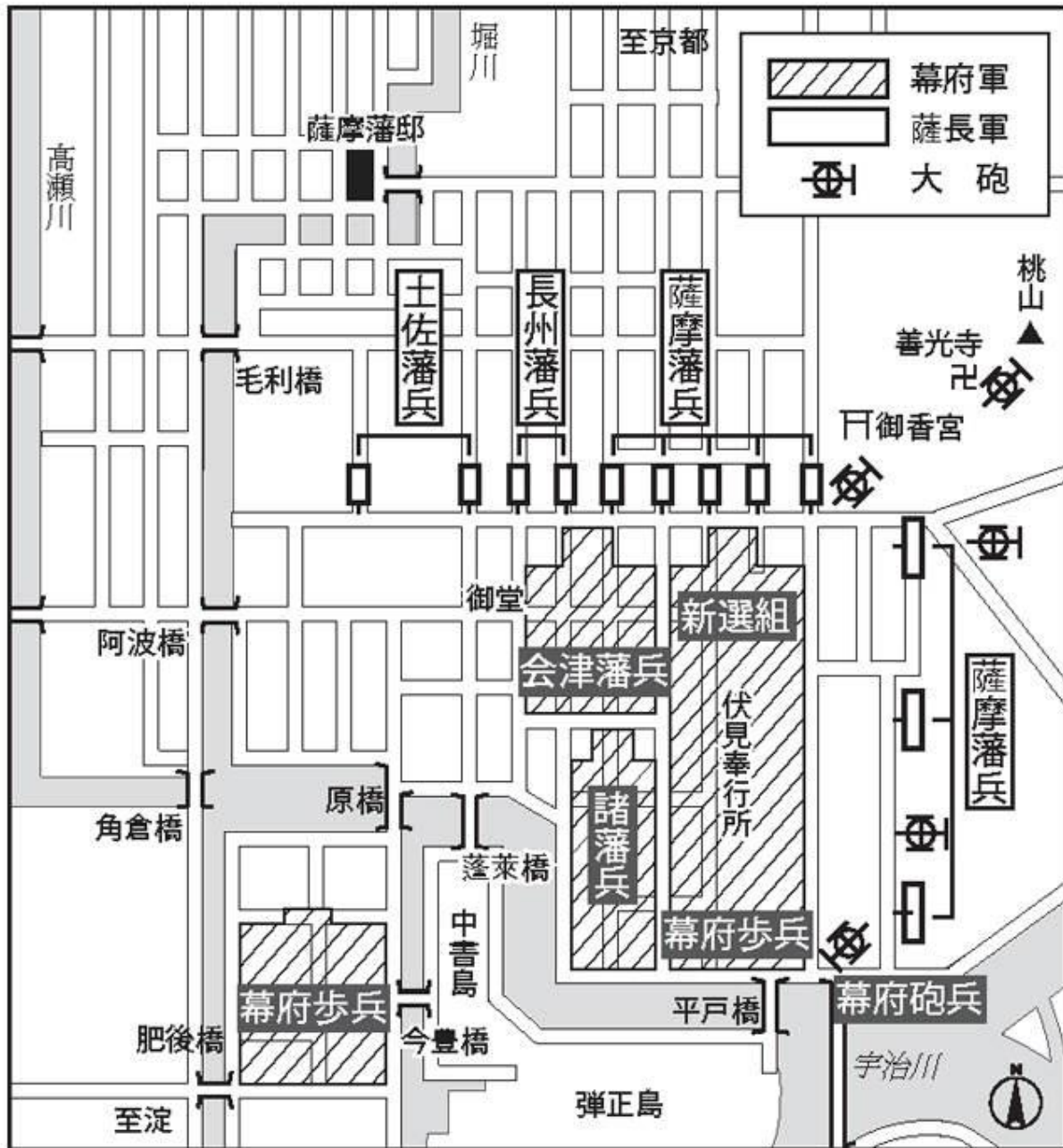
薩兵はしきりに自分の身（味）方へ向けて大砲を打ち掛け、五丁ほど離れて見たところは大垣兵に違いないようで、敵と気づいたときにはとても大垣兵に防ぐことは難しかった。そこで土方歳三と原田左之助は兵を引き連れ、三丁ほど行くと、薩兵が発砲してきた。ようやくのことで胸壁内に引きこもり、それから大戦となった。永倉新八と斎藤一馬（一）が兵を率いて八幡山中副（腹）で戦った。

山崎関門の藤堂和泉守は長州兵に欺かれて裏切り、そこで会津兵隊長の林文（又）三郎は兵を率いて藤堂兵に向かい、ついに藤堂を追い払った。このとき大いに苦戦し、林又三郎が討死し、そのほかに討死、手負いが多くあった。

八幡堤の戦いは、藤堂が裏切ったため兵が散乱してしまう恐れがあり、土方歳三と原田佐之助はなおも進めと号令し、そのうちに藤堂兵は会津兵に追い払われたとの報告があり、兵たちはこれを聞いて喜び、なお働いた。見廻り組頭の佐々木只三郎は土方に向かって、我が隊は堤の川向こうに移って笹藪に伏兵すると言い、船を手配していたところ、薩兵が堤の下へ回り込んで、目前に押し出し大苦戦となった。

ここに一軒家があり、これに火をかけると長（永）倉新八と斎藤に報告があった。橋本の陣屋に引き揚げようとしていた長（永）倉新八と斎藤一はそれを少しも知らず、八幡

中副（腹）で戦っていたところ、八幡堤を見ると堤には身（味）方が一人もなく、一軒家に火をかけているので不思議に思い、田村一郎を土方歳三のもとに遣わしたが一人もおらず、残らず橋本の陣屋に引き揚げたということを、田村一郎が戻ってきて語った。そこで永倉新八と斎藤一は急いで兵を引いて橋本の陣屋に向かうと、途中で敵に前後を囲まれ、必死の戦いのすえに一方を破り、ようようのことで橋本の陣屋へ戻った。
総督松平豊前守・大久保主膳正・竹中主水正が集まり、ひとまず大阪（坂）城へ引き揚げることとなり、それから全員が大阪（坂）へ引き揚げ、新選組は大御番長家（屋）に屯集した。そのほかの者も残らず城内へ屯集した。
一月七日、徳川慶喜公はじめ松平肥後守、諸役人が集まって軍議を行なった。会津家老の神保内蔵之助はこのとき、「山崎天王山と八幡山を落とされては、この御城では危ういので、ひとまず御東下され、碓氷峠・小仏峠・箱根山へと兵を配備されたほうがよろしい」と申し上げ、近藤勇は「私に三百人の兵をお預けになられれば、兵庫と堺に兵を置き、私が御城内で命令を下す。今月一倍（杯）は防衛できると思うので、その間に関東の兵を派遣してくだされたい。もし負け戦となったときは、御城内で討死する覚悟である。一人も（城で）討死するものがなければ、東照宮に対して申し訳が立たない」と申し上げた。
慶喜公はひとまず御東下になられ、肥後守もその御供をし、そのほかの役人も残らず御供として軍鑑（艦）で東下した。慶喜公より御沙汰があり、会津兵と新選組も速やかに大坂を引き揚げ、富士山丸と順動丸で東下するようにとのことだった。そのため右の船に乗り込み、一月十日に大坂を出発した。徳川の旗本の兵は全員が紀州公に御預けとなった。
一月十二日に品川宿の釜屋を宿とした。このときの新選組の役人は、局長近藤勇、副長土方歳三、副長助勤永倉新八・原田左之助・斎藤一、それに病気で一線を離れていた沖田総司、尾形俊太郎、諸士調役大石鍬二郎、小荷駄方安富才助・中村玄道、歩兵頭岸嶋（島）芳太郎、隊長附相馬肇で、惣（総）人員を調べたところ九十人だった。
江戸到着早々、近藤勇は慶喜公へ建白し、（新選組に）甲府城支配を一任してもらうよう願い出て、二月一日に釜屋を引き払った。鍛冶橋御門内大名小路若手前（年寄）御後屋敷を拝領し、これが新選組の屋敷となった。

伏見市街における幕府軍と薩長軍の配置

『史伝 土方歳三』(学習研究社)の図をもとに作成

解　　説

慶応四年正月三日夕七ツ時頃、上鳥羽村小枝橋の薩摩軍の砲声で、世にいう鳥羽伏見の戦いの戦端は開かれた。伏見方面は、伏見奉行所を見下ろす御ご香こう宮ぐうに布陣する薩摩兵が桃山善光寺に大砲四門をすえ奉行所に向けて砲撃を開始した。一方、新選組は奉行所にあった大砲一門を御香宮に向けて応戦する。永倉が塀を乗り越えようとした際に島田魁に引き上げられた逸話はこの時のことである。本文にもその記述があり、彼の力を「五ご斗と俵だわら三さん俵びょう持ツホドノ力アリ」と記している。島田は隊中一の巨漢であった。なお、他にこの逸話を記したものは『顚末記』だけである。つまり永倉の回顧録しか手懸りがないことから、あながちうそとは言い難いように思われる。

のち、旧幕府軍の敗色が濃くなる中、薩摩兵の陣に錦旗がひるがえり、旧幕府軍は一気に戦意を失う。それに呼応するかのように七日、慶喜は松平容かた保もり・松平定さだ敬あきらを伴って大坂城を脱出し、開陽丸で江戸に帰る。これを知った旧幕府軍は大坂に引き揚げ、軍艦で江戸に帰った。こうして鳥羽伏見の戦いは新政府側の圧勝に終わり、日和ひより見みの西南諸藩は次々と新政府側につくのである。

二月廿八日慶喜公上野へ御謹慎依テ新選組御警衛被仰付、二月廿九日兼テ近藤勇願立置キ甲州御城内御委任ニ相成ル就テハ御朱印拝領イタス一日モ早ク甲州へ発ルル支度御警衛遊撃隊頭取ハ榊原健吉障義隊中条金之助右ノ人ニ相渡シ鍛冶橋旅館江戻ル、徳川公ヨリ金三千両大炮八門ハタノモト込メ筒三百挺夫々弾タン薬ヤクマテ相添へ拝領ス、三月一日江戸表発足シ此時新選組改メ慎撫隊長近藤勇改大久保剛、副長土方歳三改内藤隼人、副長助勤永倉新八、原田左之助、斎藤一、諸士調役大石鍬二郎、隊長附組頭相馬肇、歩兵頭岸嶋安太郎〇小荷駄〇安冨才助、歩兵頭岸嶋（）芳太郎、小荷駄団真樹改メ矢嶋直樹ト申シ道中払方、殊ニ直樹甲州出生右ニ付探索周旋方ニ相用イ召連ル
猿橋宿へ参ルト甲州表テヨリ注進コレアリ敵ハ下諏訪ニ参ル趣キ近藤勇申ニハ爰ヨリモ甲州へハ十五里ノ処早クニ甲州御城江乗込ム方カ肝要ト存シ速ニ猿橋宿役人ニ申付ケ馬ヲ仕立テサセ残ラス馬ニテ走ラセ鶴瀬宿へ参ルト最早甲州城へ岩倉従侍殿入城相成リ、新選組改メ慎撫隊ト号イヲリ無拠鶴瀬宿ニ止ル、夜分ニ成ルト山々へカヽリヲ焚キ夫々矢嶋直樹ニ周旋イタサセ隣国近在ノ猟人ヲ集メ兵ニ仕立テ明五日勝沼宿へ出張ノ用意可致様同志一統へ相達候処同志一統ヨリ申立ニハ明日戦軍応接コレナクテハ戦イヽタシ不申趣キ永倉新八、原田左之助、斎藤一ニ申立ル、直ニ近藤勇土方歳三右之趣キ三人ヨリ申述ル近藤土方当惑イタス依テ同志欺クヨリ外ハコレナシ会津兵六百人猿橋宿マデ参リヲリヲツクモ明朝応接ノ間ニ合可申ト存シ依テ戦イ可申ト同志江相達ス漸々承知イタス、三月十四日夕方鶴瀬宿ヲ出護勝沼宿江越ス宿ノ両方ヨエリ関門ヲ建テ詰所江篝リヲ焚ク鶴瀬宿ニテ篝ヲ焚ヲ甲州ノ城ニテ見テ関東ヨリ大軍ニテ押寄セ来ル迚モ少シノ兵ニテハ防キ兼依テ兵ヲ増シ夫故ニ弐千人ホドニモ官軍相成ル、明五日午前八時頃ニ相成リ兵ヲ徐ワコ々配ル鶴瀬ト勝沼ノ間ニ観音坂ト申所ヨリ此観音坂江大炮弐門伏セル原田左之助此所江固メル永倉新八夫ヨリ間道沢山有之右之口々江ハ○〇五人宛兵ヲ配ル此処斎藤一組相固メル永倉新八ハ組一同夫々猟人三拾人ホド率シテ川ヲ越シ山江上ル、問道多ク有之諸所江五人宛相配ル永倉新八ハ固メ場所ヲ見廻リヲル勝沼関門ニハ近藤勇改メ大久保剛土方歳三改メ内藤隼人右両人ニ其外大石鍬二郎隊長附組頭相馬肇組不残大久保剛ニ附居ル、岩倉公ヨリ壱人余リ大久保剛応接イタス、イツレ隊長ニ申聞ケ挨拶可致ト申戻ル返答有之ベクト差控居ル処エイキナリニ炮発イタサレ大久保剛始メ其外一同勝沼宿ヲ引揚ケ鶴瀬宿江本陣ヲ構イ敵キ勝沼ノ関門破リ観音坂江押参ル、大炮伏セコレアリ一発打ツ敵散々ニ崩レル、逃ル処江亦一発敵大敗軍、夫ヨリ敵川ヲ越ルト永倉方江寄セ来ル、此時甲州ノ者昔シ軍ヲ見ル気ニ成テ山々江見物沢山出ル此時人物之方江向ケ一同ニ天発イタサ

セ驚ヲドロキ速ニ逃去ル、夫ヨリ大戦イ此節猟人ニ申附ケ下ノ家江火ヲカケ参ルヘシト申セハ猟人答コタヘニハ決テ火ヲカケルコト出来ス殊ニ人気ニサハルト申ス戦イ治マリ時ハ許ノ様ニ普請イタシテ遣シ其上ニ御褒美トシテ金子沢山下サルト申聞ルト速ニ火ヲカケニ参ル、火ヲカケタ所ヨリ追々兵繰リ出シ山江押シ寄セ来ル大苦戦ニ敵ハ大勢コチラハ少勢討死手負デキル依テ追々繰引イタスヲ見テ猟人ハ不残山江欠ケ上リ身方ヲ討ツヨウニ相成就テハ無余儀鶴瀬宿エ引揚ケル、敵ハ慎撫隊人人数少勢ト知テ押寄カケセ来ル、鶴瀬江一同引揚ケ鶴瀬宿ヨリ五丁ホド手前ニ甲州ヨリ出ル間道コレアリ、右所江隊長附出兵イタシヲルトイエドモ最早防キカネ引揚ケ可参左様イタスト右場所江敵キ出ルト鶴瀬宿ニ居リテハ前後ニ挟レ一同討死ノ場合ト相成ル一先甲フ吉野宿マテ引揚ル、当所ノ地程ヲ見テ爰ガ究竟ノ場所ト見定メ爰ニテ最一度近藤勇、土方歳三防グ心得右ノヨシヲ同志一統エ申スト同志一統不承知隊長タルヘキ者ガ身方ヲ偽ル様成レ隊長ノ差揮ハ不請今日至テモ応接ニ参ラス委ク立服ノ体イ永倉新八原田左之助斎藤一申置キ八王寺宿江不残参ル、不取敢近藤勇ト土方歳三ニ此事ヲ申処大キニ当惑ノ様子永倉新八、原田左之介馬乗ニテ同志ヲ追イカケ小仏宿ニテ止メル心得ニテ小仏宿江参ルトコロ壱人モ居ラス、近藤勇ヨリ大炮弾薬差送ラレ間道江敵キ廻ラレ防キクレト近藤勇申参リ永倉新八原田左之助ヨリ近藤方ヘ書翰差送ル当所江参ル処壱人モ不居不残八王寺宿江罷越シ夫々弾薬大炮贈ラレ候得共爰ニヲイテハ敵ニ奪ハレルモ難斗至急八王寺宿江送ル右認メ近藤勇方江贈ル、直ニ永倉、原田馬ニ乗リ八王寺宿江参ル同志ノ者大集会右ノ処江永倉原田参リ申ニハ隊長ノ令ヲ背キ此後チ如何ノ御存意ニテ有之カ一応御尋申最早応接ハコレナリ一先ツ江戸表江早々引揚ケ兵ヲ募リ夫より外江出兵ニ相成ル趣キナラ近藤勇ノ指揮受ケ申ベクカト同志一統申述長倉新八原田左之助近藤勇ニ申述フヘクト心得ヲル処エ近藤勇、土方歳三吉野宿江出張イタシ居ル処江田安中納言殿ヲ早々引揚ケ可申様御使者有之依テ八王子宿迄引揚ル早速近藤勇ト土方歳三永倉新八原田左之介同志一統ノ存意申処ロ近藤勇土方歳三申スニハ同志ノ論ニ随イ速ニ江戸表江引揚可申ト申就テハ近藤勇土方歳三直ニ馬乗ニテ江戸表江出ル跡ト同志ノギハ永倉新八原田左之助両人ニ任ル右之段同志一統江申ト申聞ケ承知イタス江戸旅宿ハ本所二ツ目大久保主膳正屋敷江召連レ参ルヘクト申ヲク

二月二十八日、慶喜公は上野へ謹慎され、新選組に警衛が命じられた。二月二十九日、かねて近藤勇が願い出ていた甲州御城内御委任が認められ、御朱印を拝領し、一日も早く甲州へ出発する支度をせよとのことで、（慶喜の警衛を）遊撃隊頭取の榊原健吉・障（彰）義隊の中条金之助に託し、鍛冶橋の屯所へ戻った。徳川公より金三千両、大砲八門、元込め銃三百挺に弾薬を添えて拝領した。三月一日に江戸を出発し、このときは新選組を慎（鎮）撫隊と改め、隊長は近藤勇改め大久保剛、副長土方歳三改め内藤隼人、副長助勤永倉新八・原田左之助・斎藤一、諸士調役大石鍬二郎、隊長附組頭相馬肇、歩兵頭岸嶋（島）安（芳）太郎、小荷駄安富才助、（歩兵頭岸嶋芳太郎、小荷駄）、団真樹（弾内記）は名を改めて矢嶋（島）直樹といい、道中払方となった。ことに直樹は甲州の出生により、探索周旋方に用いて召し連れた。
猿橋宿へ着くと甲州表より報告があり、敵は下諏訪に到達しているとのことで、近藤勇はここから甲州までは十五里であり、早く甲州城に乗り込むことが肝心であると言って、速やかに猿橋宿の役人に命じて馬を用意させ、残らず馬で鶴瀬宿に到着すると、すでに甲州城に岩倉従侍殿（具定）が入城していた。そこで新選組改め慎（鎮）撫隊と唱え、仕方なく鶴瀬宿に止まった。夜になると山々へ篝火を焚き、矢嶋直樹に命じて隣国近住の猟人を集めて兵に仕立て、翌五日に勝沼宿へ出動の用意をするよう同志一統へ伝えた。ところが、同志たちが言うには、明日の戦いは援軍がなければ戦いたくないとのことで、それを永倉新八・原田左之助・斎藤一に申し立てた。そこで三人が近藤勇・土方歳三にこれを伝えると、近藤・土方は当惑して、同志を欺くよりほかはないと、会津兵六百人が猿橋宿までやってきており、遅くとも明朝には援軍が間に合うはずであり、ともに戦うと同志に伝え、ようよう承知させたのである。三月十四（四）日夕方、鶴瀬宿を出発し勝沼宿に着いた。鶴瀬・勝沼両宿に関門を建（立）て、詰め所に篝火を焚いた。鶴瀬宿で篝火を焚いたのを、甲州城から見て、関東より大軍が押し寄せてきて、とても少しの兵では防げないと、兵を増やしたので官軍は二千人ほどにもなった。明くる五日、午前八時ごろになって兵を配置し、鶴瀬と勝沼の間の観音坂という所があり、この観音坂に大砲二門を備え、原田左之助がここを守った。それから間道がいくつもあるので、それぞれに五人ずつを配置して斎藤一の組が守備し、永倉新八の組の一同は猟人三十人ほどを率いて川を越えて山に上った。間道がいくつもあるので詰め所に五人ずつを配備して、永倉新八はそれぞれの陣を見回った。勝沼の関門には近藤勇改め大久保剛、土方歳三改め内藤隼人の二人と、そのほか大石鍬二郎、隊長附相馬肇組の全員が大久保

剛に従っていた。岩倉公より（使者が）一人来り、大久保剛が応接した。（使者は）隊長に伝えてあとで挨拶すると言って戻ったので、そのまま待っていると、いきなり発砲され、大久保剛はじめそのほか一同は勝沼宿を引き揚げて鶴瀬宿に本陣を構えた。敵は勝沼の関門を破り、観音坂へ押し寄せてきた。ここには大砲が備えてあったので、一発発射すると敵は散り散りになった。逃げるところへ、また一発発射すると敵は敗れた。敵は川を越えて永倉の方へ攻め寄せた。このとき、甲州の者は昔の戦いくさを見るつもりになって山々に見物人がたくさん出ていたので、その人々の方へ向けて当たらないように空へ撃つと、驚き急いで逃げ去った。それから戦いとなって、そのときに猟人に下の家に火をかけるようにと命じると、火をかけることはどうしてもできない、そのようなことをしては人気に障る、と言うので、戦が終わったら元のように新築し、そのうえ褒美として多くの金子を与える、と言うと、速やかに火をかけてきた。火をかけた所から敵兵が繰り出して山へ押し寄せてきたので大苦戦となった。敵は大勢で、こちらは小勢なので、討死、負傷する者が出た。その戦いを見た猟人たちは残らず山へ欠（駆）け上り、身（味）方を打つようになったので、仕方なく鶴瀬宿へ引き揚げた。敵は慎（鎮）憮隊の人数が少ないことを知って、押し寄せてきたのである。鶴瀬宿に一同が引き揚げると、鶴瀬宿の五丁ばかり先に甲州へ出る間道があった。ここに隊長附が出兵したが、すでに防ぐことはできずに引き揚げてきた。そうすると、そこから敵が出現し、鶴瀬宿にいては前後を挟まれて全滅する可能性があり、いったん吉野宿まで引き揚げた。ここの地形を見て、ここが最適の場所と考え、ここでもう一度、近藤勇・土方歳三は防戦しようと思い、その旨を同志一統に達した。しかし同志たちは不承知で、今日になっても援軍がこないことから、隊長たる者が身（味）方を偽るようになっては差（指）揮は受けない、と立腹して永倉新八・原田左之助・斎藤一に言うと、残らず八王寺（子）へ向かった。とりあえず、このことを近藤勇と土方歳三に告げると大いに当惑した様子で、永倉新八と原田左之介（助）は馬で同志を追い、小仏宿に集結させるつもりだったが、小仏宿に着いたところ一人もいなかった。近藤勇から、大砲弾薬を送るので、間道に敵が回ったので防戦してくれとの申し入れがあったが、永倉新八と原田左之助は、当所へきたところ一人もおらず、全員が八王寺（子）宿へ行き、弾薬大砲を送られても、こうなっては敵に奪われる恐れがあるので、至急、八王寺（子）へ送るようにとの手紙を記し、近藤勇へ送った。ただちに永倉と原田は馬で八王寺（子）宿へ向かうと、同志が集会していたのでそこへ行き、隊長の命令に背いて、今後はどのようにするつもりであ

るのか、と尋ねたところ、もはや援軍はなく、ひとまず早々に江戸へ引き揚げて兵を募り、それから出兵するというのならば近藤勇の指揮を受けると一同は言った。永倉新八と原田左之助が、その旨を近藤勇と土方歳三に伝えようとしたところへ、近藤勇と土方歳三が吉野宿へやってきた。そこへ田安中納言殿より、早々に引き揚げるようにとの使者があったので、八王子宿まで引き揚げた。早速、近藤勇と土方歳三に、永倉新八と原田左之介（助）が同志の考えを伝えたところ、近藤勇と土方歳三も同志の考えに従って、速やかに江戸へ引き揚げると言った。そして近藤勇と土方歳三はただちに馬に乗って江戸へ向かった。同志については永倉新八と原田左之助両人に任せるとのことで、その旨を同志一統に告げることを承知し、江戸での宿は本所二ツ目の大久保主膳正屋敷とし、そこに同志を引き連れると言った。

解　　説

　隊組織再編の準備をすすめる中、二月二十九日（二月二十八日の誤り）、甲府鎮撫を命じられ、「金三千両大炮八門ハタノモト込メ筒三百挺夫々弾薬マテ相添」えられて、三月一日に江戸を出立する。この時に隊長近藤は大久保剛つよし（のち大和やまと）、副長土方は内藤隼はや人とと名を改めている。
　甲こう陽よう鎮ちん撫ぶ隊たいは、近藤・土方の他に永倉・原田左之助ら新選組と矢嶋直樹（浅草の弾左衛門）が主な隊員で総勢二百人からなっていた。
　彼らは猿橋宿で、新政府軍は下しも諏す訪わに布陣との一報を受ける。近藤は速やかに甲府城に入城すべく猿橋宿役人に馬の用意をさせて、鶴瀬宿へ向かう。だがその頃には、岩倉具定を東山道鎮撫総督とする新政府軍はすでに甲府城を占領していたのである。そこで近藤はやむなく鶴瀬宿に布陣し、焚火を燃やして敵を威嚇する一方、矢嶋に命じて隣国近在の猟師を集め、急ごしらえの兵とした。そして明後日の五日に勝沼宿へ出張する用意を隊士一統に命ずる。しかしこの状況では、明日戦闘しなくては意味がないという隊士の不満が、永倉・原田・斎藤一を通じて近藤に伝わる。これに窮した近藤は、会津兵六百人が援軍として猿橋に来るといううそをついてその場をしのいだ。近藤は援軍を要請するため土方に命じて神奈川宿まで走らせたが失敗、甲陽鎮撫隊を見殺すことになった。
　そして三月十四日勝沼宿へ進軍し、勝沼と鶴瀬の両宿に焚火を盛んに燃やして威嚇し、その中間地点の観音坂に大砲二門をすえて原田に守備を任せ、近藤らは勝沼を永倉は猟師三十人で間道を守備した。その頃、岩倉総督が近藤に使者を送り挨拶する旨を伝え、その返答を待っている間に砲撃を受けたとの記述が本文に見られるが、実際は逆で、「挨拶は鉄砲で行なう」と岩倉にはねつけられている。
　勝沼での戦いは、猟師を金品で釣って放火させて敵の進攻を阻止しようとするも、次々と新手の兵を繰り出す新政府軍の攻撃に抗し難く鶴瀬宿へ引き返し、そこも敵に挟み打ちに遭う危険性から吉野宿へと後退する。
　近藤は吉野宿で再起を図るものの、隊士たちは、会津藩援軍がうそであったこと、これまでの近藤の指揮の鈍さなどに不満を高め、近藤の命令を無視して八王子へ引き返した。これに驚いた永倉・原田は馬で彼らを小仏宿まで追いかけ、「大集会」でひとまず

江戸へ引き返すことに決した。これを永倉・原田から聞いた近藤は、江戸引き揚げを認め、八王子にいる隊士たちの統率を永倉・原田に任せたのである。

三月九日朝七時頃ニ八王子宿発シ江戸表大久保主膳正屋敷江参ル処大久保屋敷ニヲイテハ立退ク騒ニテ迚茂もヲル事出来ス夫々近藤勇居ラス、近藤勇参リタ先ヲ聞浅草今戸銭座ニ近藤勇参リ居ル趣キ右ノ処江尋参ル処爰ニモヲラス夫ヨリ和泉橋通リ医学所江尋ル処爰ニモ居ス右ニ付同志一統立服銘々旨趣ヲ述べ就而ハ新選組瓦解
医学所江矢田健之助松本喜二郎残シヲキ永倉新八原田左之助松本良順方江参リ右之噺ヲイタシ松本公ヨリ金三百円拝借致シ医学所江帰リ矢田松本両人ヲ連レ吉原金瓶ト申ス貸座敷ニ参ル、瓦解ノ同志大愉快相催シヲル処江永倉新八原田左之助参リ脇ノ座敷ヲ借リ同志一統ヲ招キ一統議論ヲ承知イタシタク論ニ依而ハ御同意申ス一同ノ論ニハ速ニ近藤勇会津表江下ルト申サバ同志イタスサモナクテハ同志致サス左様ナレハ一応近藤勇ニ面会致シ速ニ会津表江下ルノ論ヲ述ヘ近藤勇不承知ナレハ是迄世話ニ相成タ一礼ヲ申シ述ヘ直ニ会津江下ルノ支度イタシ右永倉新八原田左之助申スト一同承知致シ明朝近藤勇ニ面会イタシ申ベク夫ヨリ大愉快相催シ翌日不残勘定イタシ今戸大七江参リ是ヨリ船ヲ仕立テ和泉橋江ツケ医学所へ参リ近藤勇土方歳三同志一統ニ面会イタス、此時近藤勇嗔イカリヲ含マス和ニ挨拶スルト宜キ処近藤勇怒リヲ含ミ我カ家来ニ相成ルナラ同志イタスヘク左様ナケレハゼヒナク断リ申ト一同江申聞ケル一同立服左様ナレハ是迄永々御世話ニ預リ難有存スルト申シ一同此場バヲ引取リ亦新選組瓦解ト相成ル
永倉新八原田左之助、近藤勇土方歳三ニ相別レル夫ヨリ瓦解ノ兵ヲ引連レ深川冬木町芳賀宜動方江尋ル、同人同志イタシ直ニ歩兵頭取米田桂治郎ノ組下ニ相成和田倉御門内会津屋敷江屯所ニイタシ斎藤一ハ手負病人之世話イタシ会津表江参ル
四月九日勝安房守官軍ト同意ト相成ル依テ四月十日御退城ニ相成ル、夫ヨリ右三人ハ局中取締リ伍長前野五郎林信太郎歩兵取締林庄吉中山重蔵士官六拾人歩兵四十人惣勢百人障儀隊ト号ヲル江戸表相脱シ行徳宿ヨリ水戸海道山崎宿ニテ原田左之助無余儀用事コレアリ行徳宿マテ戻ル、直ニ跡ト追イカケ参ル筈之処官軍立テ切リ参ル事不叶対ニ上野戦争サウ之節原田左之助討死

三月九日朝七時ごろ八王子宿を出発し、江戸の大久保主膳正屋敷に行ったところ、大久保屋敷では立ち退きのため混乱しており、とても宿とすることはできず、また近藤勇もいなかった。近藤勇の行き先を聞くと、浅草今戸の銭座に近藤勇がいるということなので、そこに行ったところが不在で、和泉橋通りの医学所へ行ったがここにもおらず、同志一統はそれぞれ立服（腹）の旨を口にして、ついに新選組は瓦解した。
矢田健之助と松本喜二郎を医学所に残し、永倉新八と原田左之助は松本良順のもとへ行き、右の次第を話して松本より金三百円（両）を拝借して医学所へ戻り、矢田と松本の両人を連れて吉原の金瓶という貸座敷へ行った。瓦解した同志たちが宴会を催しているところへ永倉新八と原田左之助が行き、脇の座敷を借りて一統を招き、一統の意見を聞かせてもらい、論によっては同意することができると、一同の意見を聞くと、彼らは近藤勇が速やかに会津に下ると言えば同志となるが、さもなければ同志とはならない、ということだ。それならば一応、近藤勇に面会して速やかに会津へ下るとの論を伝え、近藤勇が不承知ならば、これまで世話になったことの礼を述べ、ただちに会津へ下る支度をしよう、と永倉新八と原田左之助が言うと、一同は承知した。明朝、近藤勇に面会してそのことを告げることとし、それから宴会を催した。翌日、残らず勘定を済ませると、今戸の大七へ行って船を仕立て、和泉橋へ着けて医学所で近藤勇と土方歳三に、同志一統が面会した。このとき近藤勇は怒らずに、穏やかに挨拶すればよかったのに、近藤勇は怒って「自分の家来になるのならば同志とするが、そうでなければお断りする」と一同に言い、一同は立服（腹）し「そうであれば、これまで永々と御世話に預かり、ありがたく存じる」と告げて、一同はその場を引き取り、また新選組は瓦解した。
永倉新八と原田左之助は、近藤勇と土方歳三と別れると、瓦解した兵を引き連れて深川冬木町の芳賀宜動（道）のもとを訪ねた。同人を同志とした。ただちに歩兵頭米田桂治郎の組下となって、和田倉御門内の会津屋敷を屯所として、斎藤一は負傷者と病人の世話をして会津へ向かった。
四月九日、勝安房守（海舟）が官軍と同意したので、四月十日、御退城になった。それより右の三人が局中取締、伍長には前野五郎・林信太郎、歩兵取締には林庄吉・中山重蔵が就任し、士官六十人、歩兵四十人の惣（総）勢百人が障儀隊（靖共隊のこと）と唱えて江戸を脱した。行徳宿から水戸海（街）道に出て、山崎宿で原田左之助は仕方のない用事があって行徳宿に戻った。ただちに追いかけてくるはずだったが、官軍が「立テ

切リ」（「立ち仕切って」の意か）戻ってくることができず、ついに上野戦争で原田左之助は討死した。

上野戦争の図

解　　説

江戸引き揚げを永倉・原田から聞いた隊士等は三月九日朝七時、八王子から江戸へ戻り、近藤の宿所である本所二ツ目大久保主膳正屋敷に向かうが、立ち退き騒ぎで不在、浅草今戸銭座にいると聞き、そこへ向かうも不在、また和泉橋通りの医学所にも不在だったため、隊士等は立腹する。これを指して永倉は「新選組瓦解」と記している。永倉と原田は松本良順を訪れ「金三百円（両）」を借用し、矢田健之助・松本喜二郎を連れて吉原の金瓶で隊士等と大宴会を催し、隊士等と議論して、永倉・原田の提案で、近藤と共に会津へ行くこと、もし近藤が拒否すれば、長年世話になった礼を述べて会津へ行くことに決定した。

医学所で、永倉・原田から会津行きを聞いた近藤は怒って、自分の家来になるのなら同志として認めるが、そうでなければ断ると言い放ったのである。これを聞いた隊士等は立腹し、「此場ヲ引取」った。こうして「新選組」瓦解は決定的なものになったのである。

永倉・原田は「瓦解ノ兵」を引き連れて芳は賀が宜ぎ道どうと共に歩兵頭取米田桂治郎の組下となり、和田倉門内の会津藩邸を屯所とした。

その後四月九日、勝・西郷会談が成立し、江戸無血開城となる。が、上野戦争が起こる。このとき靖共隊に入隊していた原田は、山崎宿から引き返し、彰義隊に参加、戦死をとげる。

関東周辺略図

白河
栃木県
日光
宇都宮
群馬県
水戸
鹿島灘
長野県
茨城県
埼玉県
奥多摩
板橋
流山
甲府
勝沼
東京都
今戸
山梨県
横浜
千葉県
神奈川県

近藤勇土方歳三武州荒山宿ニ歩兵三百人持チ夫々隊長附十人ホドニテ潜伏イタシ居ル、近藤勇之謀計ハ甲州御城一旦御委任ニアイナリ殊ニ御朱印迄拝領致ヲリ実ニ残念夫故ニ甲州御城ヲ最一度ト攻メ取ル了簡是アリ、荒山ニテ兵ヲ集ル処江官軍荒山江押寄セ速ニ近藤勇ノ組下裏ノ山江兵ヲ配ル、夫ヲ敵カ配ルト近藤勇見テ最早不叶切腹イタサント存シ然ル処土方歳三差留メル未切腹ニハ早シ偽名ヲ語リ歩兵頭取ト偽リ歩兵諸方ニ散乱イタシヲル当今ノ御場合実ニ恐入ル右ニ付歩兵呼ヒ戻ス心得ニテ当所江出張イタスト申ケレハ吃度申訳相立ツ依テ切腹見合セル

官軍表ヨリ[illegible]ハイル近藤勇馬口ヲ取テ玄関前ニ引寄セ官軍馬ヨリヲリ座敷江通ル、近藤勇ニ向イ委細尋ル近藤勇逐一御答申ス、官軍申ニハ越ケ谷宿ニ惣督府御出張ニ相成居ルニ依テ是迄参ルヘク近藤勇馬乗ニテ附添イ相馬肇野村利三郎越ケ谷宿江参ル、土方歳三直ニ兵ヲ引連レ会津表江脱ス、近藤勇申訳相立許サレル処伊東甲子太郎残徒ニ見アカサレ近藤勇偽名ノ次第モ路頭イタシ亦々引留メニ相成ル夫ヨリ板橋宿江引カレ降服謝罪致スヘクヨウ天朝ヨリ三度迄御説得有之手前勤王ノ兵ニアラスニテ謝罪致ス事無クト申募リ依テ無余儀明治辰年四月廿五日誅チウ戮リクイタサレ夫ヨリアルコウルニテ首ヲ結メ西京三条河原曝ス

近藤勇と土方歳三は武州荒山（下総流山）宿に、隊長附十人ほどと歩兵三百人を集めて潜伏していた。近藤勇の計画では、甲州城がいったんは御委任となり、御朱印まで拝領しているのに、実に残念なことだと、もう一度、甲州城を攻め取るつもりだった。荒（流）山に兵が屯集しているところに官軍が押し寄せたので、急いで近藤勇の組下の者が裏の山へ兵を配備した。これを敵が包囲したものと近藤勇は勘違いして、もはや勝ち目はない、と切腹しようとしたところ、土方歳三が差し止めて「いまだ切腹するには早い。偽名を用いて歩兵頭取と偽り、現在のように歩兵が諸方に散乱しているのは恐れ多いことで、その歩兵たちを呼び戻すつもりで当所に出張したものであると言えば、きっと申し開きが立つ」と言い、そこで切腹は見合わせたのである。
官軍が表から入り、近藤勇は馬の口（轡）をとって玄関前に引き寄せ、官軍は「馬エリ」より座敷に通った。近藤勇に向かい委細を尋ねると、近藤勇は「すべてお答えする」と言った。官軍が言うには、越谷宿に惣（総）督府が出張しているのでそこへ参るようにとのことで、近藤勇は馬に乗り、相馬肇・野村利三郎を付き添いとして越谷宿へ出頭した。土方歳三はただちに兵を引き連れて会津へと脱した。近藤勇は申し立てが通って許されるところだったが、伊東甲子太郎の残徒に正体を見破られ、近藤勇の偽名も露見して釈放はされず、それから板橋へ連行され、降伏謝罪するように天朝より三度までも説得がありながら、自分は勤王の兵ではないので謝罪する必要はないと申し立て、ついに明治辰年四月二十五日に殺害された。それから首はアルコール漬けにされ、西京の三条河原に晒された。

解　　説

　永倉・原田らと訣別した近藤・土方らは歩兵三百人で下総流山宿に潜伏し、甲府城奪回を図り、兵を集めていた。この時に新政府軍は流山に出兵して近藤らを包囲した。これを見た近藤は万策尽きたと切腹を図ろうとする。土方はこれを止め、偽名と歩兵頭取という偽の職名を用いて、兵を集める理由は、散乱した歩兵呼び出しのためであるとして自首することを提案する。

　これを受けて近藤は提案通り実行し、越谷の本営での新政府軍の尋問に答え、主張が認められて釈放される寸前で、本営にいた高台寺党残党によって素性がばれて板橋宿へ護送され、慶応四年四月二十五日、処刑された。この日の近藤勇は、黒綾の袷あわせを着用し、山駕籠にのせられて、板橋宿はずれの平尾一里塚の刑場へはこばれた。彼の首を斬ったのは旧幕臣岡田盞之助の家臣横倉喜き三そう次じである。近藤の首級は板橋宿外の一里塚に数日晒さらされ、そばには次のような罪状を記した立札があった。

「近藤勇

　右者元来浮浪之者にて、初め在京新選組之頭を勤め、後に江戸に住居致し、大久保大和と変名し、甲州並ならびに下総流山において官軍に手向ひ致し、或は徳川の内命を承り候抔などと偽り唱へ、不容易企に及候段、上は朝廷下は徳川の名を偽り候次第、其罪数ふるに暇いとまあらず、仍よつて死刑に行ひ梟きよう首しゆせしむる者也」

　彼の首はアルコール漬けにされて京都三条河原に晒されたのである。だが、板橋宿と異なり、この時の罪文の立札は、

「近藤勇事　大和

　此者儀凶悪之罪有之処、甲州勝沼、武州流山において官軍へ敵対候条、大逆に付可令梟首者也」と近藤を凶悪な極悪人のようにしたてあげている。

　幕末という激動の時代のなかで、多摩の百姓から幕臣へと出世した近藤も、討幕派にとっては、多くの同志を殺した新選組という殺人者集団の親玉としか映らなかったのであろう。香川敬三は、自分自身も新選組からつけねらわれ、同郷の仲間の坂本龍馬と中岡慎太郎暗殺の犯人が新選組であるといわれていたことから、近藤に対する復讐心が強く、近藤の斬首を主張した。

　新選組が一時ヤクザ集団のように忌み嫌われ不当な扱いを受けたのは、明治政府の高官の人々が等しく香川敬三のような思いを抱いていたこと、明治政府の正当性を立証す

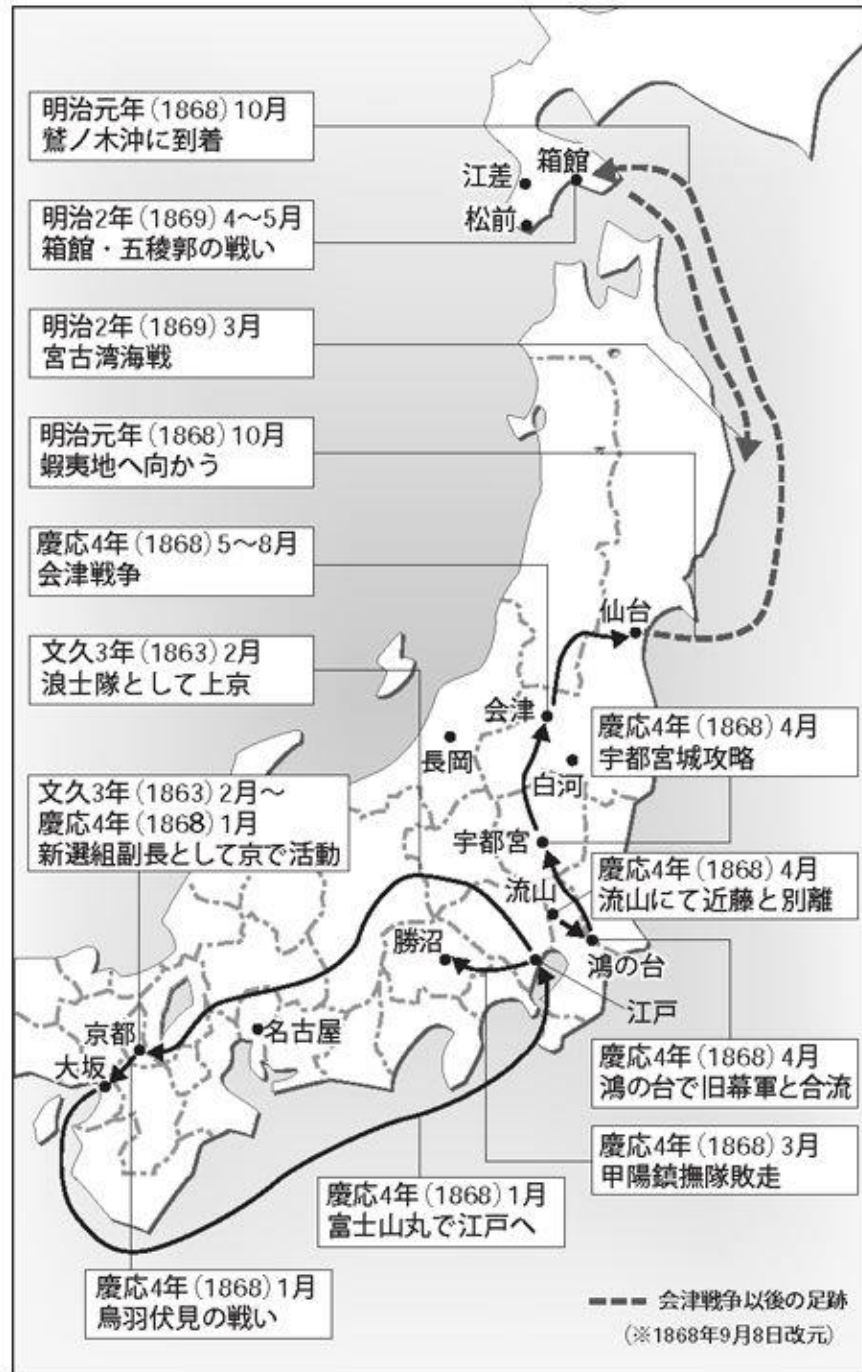
るため必要以上に幕府側を賊軍扱いした歴史観をつくりあげてきたことによる。まさに
近藤の処刑にまつわる話はその一コマを示しているといえよう。

四月十七日小山宿ニテ永倉新八芳賀宜動戦争ニ及ヲ此処敵大敗軍夫ヨリ鳥井丹波守御城下ヲ通リ合戦場宿ト鹿沼宿江官宿軍陣、夫より宇都宮城ヲ攻メ落ス、夫より壬生城ヲ攻メル対ニ宇都宮落城直ニ日光江引揚ル、日光ヨリ会津田嶋宿江引揚ケ当所ニテ休兵夫ヨリ会津藩山川蔵人改メ結城左馬之助惣督ニ任スル大鳥敬助ト同役惣勢千八百人ホド率ス戸田因幡守領分高原宿江出兵、此時遊軍隊頭芳賀宜動△副長永倉新八△伍長前野五郎林信太郎、歩兵取締リ中山重蔵林庄吉、小荷駄渡瀬善太郎、惣勢八拾人、終ニ芳賀宜動同志ノ人ボウヲツムキ遊軍隊頭退役跡永倉新八ニ被仰付今市ノ官軍ト数度大苦戦、永倉新八若松城下江手負全快ノ者迎ニ参ル、惣督願済之上芳賀宜動モ同道イタス跡ハ林信太郎、前野五郎江任スル八月十八日高原宿発シ同廿二日若松城下江恙(着)

翌廿一日会津大節迫リ我カ遊軍隊ヲ引テ来テ会津ノ応接イタサムト存シ直ニ田嶋宿江戻ル諸方相破レ我カ隊ヘ散乱致ス芳賀宜動ト相談致シ居ル処江幸ニ米沢藩小嶋竜三郎ト申仁ニ面会同人申ニハ我カ藩ノ兵ヲ率キ会津ノ応接イタスヘク尤モ御同意夫ヨリ米沢江越ス米沢官軍ト和会ヲムスビ依テ兵差出ス無余儀米沢江永倉新八芳賀宜動潜伏イタス、会津降伏後斎藤一会津城下江潜伏イタス

土方歳三箱館江脱ス松前江差大戦イ終ニ於函館ニ明治二年五月十一日土方歳三討死ス

四月十七日、小山宿で永倉新八と芳賀宜動（道）は戦争に参加し、敵が大敗北したので鳥井丹波守の御城下を通って合戦場宿と鹿沼宿に宿陣した。それから宇都宮城を攻め落とす。壬生城を攻め、ついに宇都宮は落城し、ただちに日光へ引き揚げた。日光から会津田嶋（島）宿へ引き揚げ、そこで休兵した。それから会津藩山川蔵人改め結城左馬之助を、大鳥敬助（圭介）と同役の惣（総）督に任じ、惣（総）勢千八百人ほどを率い、戸田因幡守領分の高原宿に出兵した。このとき遊軍隊は、頭芳賀宜動（道）、副長永倉新八、伍長前野五郎・林信太郎、歩兵取締中山重蔵・林庄吉、小荷駄渡瀬善太郎、惣（総）勢八十人だった。ところが芳賀宜動（道）が同志の人望を失ったため遊軍隊頭を退役し、後任は永倉新八に仰せ付けられ、今市の官軍と数度の大苦戦をした。永倉新八は芳賀宜動（道）を同道して、若松城下へ負傷が全快した者を迎えに行った。その後、総督を辞退したうえで、林信太郎と前野五郎を後任とし、八月十八日に高原宿を出発し、同二十二日に若松城下へ着いた。
翌二十一（二十三日）日、会津に大節（「軍」か）迫り、遊軍隊を率いて会津を応援しようと、ただちに田嶋（島）宿へ戻った。諸方で破れて我が隊は散乱し、芳賀宜動（道）と相談しているところに、幸いにして米沢藩の小嶋（島）竜（龍）三郎という人に面会し、その人が言うには、我が藩の兵を率いて会津の応援をすることに同意するということで、それより米沢へ向かった。しかし、米沢は官軍と和会（解）を結んだため、兵を出すことはできず、そのまま米沢に永倉新八と芳賀宜動（道）は潜伏した。会津降伏後、斎藤一は会津城下に潜伏した。
土方歳三は箱館に脱し、松前・江差で奮戦し、ついに箱館において明治二年五月十一日、討死した。

土方歳三の足跡

『史伝 土方歳三』（学習研究社）の図をもとに作成

第四章 島田魁日記 一

会津落城之図

解　　説

　永倉の手記『浪士文久報国記事』が実歴ならば、『島田魁さきがけ日記』は通史である。

　日記を綴った島田魁は文政十一年（一八二八）美濃大垣の元徳川家青木孫太郎知行所、濃州厚見郡綱村の近藤伊右衛門の次男に生まれた。二十九歳で江戸の坪内主馬道場に入門して心形刀流剣術を修め、ここで永倉新八と出会ったという。

　のち名古屋城内で催された御前試合に優秀な成績をおさめ、剣の実力をかわれ大垣藩士島田歳の養子となった。文久三年（一八六三）に脱藩、三十六歳で新選組第一期募集に応じ入隊した。隊内一の巨漢、身長六尺（百八十二センチ）、体重四十貫（百五十キロ）もあり、よく相撲取と間違えられた。酒は一滴も飲めず、大福餅が大好物で二十〜三十個は食べたという甘党だった。

　隊内の役職は調役並監察、二番組伍長、組長の永倉のもとで行動を共にした。池田屋事件では山崎丞らと探索方をつとめ、また討ち込みで活躍し報奨金十七両を受ける。その後、三条制札事件、大坂相撲取りとの乱闘、伊東を惨殺した油小路事件に加わった。鳥羽伏見の戦いで敗走後、江戸に戻り輪王寺宮が大書した「東照大権現」の新選組大幟を押し立てて甲州勝沼、流山、宇都宮、会津、箱館を転戦し、激戦になると大幟を腹に巻きつけ戦い抜いた。大幟は、小銃で撃たれた際、島田の腹部を貫通した血痕で染められた生々しいものである。

　五稜郭降伏時には、たった一人で帯刀したまま恭順に臨み、新政府軍兵士を驚嘆させた。新政府軍に対する反乱軍として捕虜となり、箱館の浄土宗称名寺に収容された。この寺はかつて新選組屯所となったところで、境内に、鴻池の手代大和屋友次良が建立した土方歳三の供養碑があったが、その後、幾度かの大火や台風により失われ、現在は昭和四十七年に建てられた土方はじめ野村利三郎、栗原仙之助、糟屋十郎、小林幸次郎ら新選組隊士の供養碑が立っている。

　称名寺から名古屋城預けとなるが、『島田魁日記』はこの三年間の謹慎中にまとめられたと思われる。

　日記は二冊から成り、一冊目は入洛した幕府浪士組からはじまり、新選組の隊名を武家伝奏から下されたことや隊で起こった事件に関し近藤勇を主人公に綴り、二冊目は「明治二己巳歳日記」と表題にあり、鳥羽伏見の戦い敗走後の再起をかけた甲州勝沼の戦

い、東北各地を転戦して、戊辰戦争を土方歳三を主人公に綴った。まさに新選組通史である。

明治六年、新選組で活躍した思い出の地、京都に舞い戻り、隊士時代に知り合った西村サトを娶めとり五男一女をもうけた。旧幕臣の榎本武揚から新政府への出仕を誘われたものの、二君にまみえずの一徹を貫き、応じなかった。

島田自らの信念をもって生き、土方の戒名「歳進院誠山義豊大居士」を書きつけ肌身離さず持ち、雑貨屋、仏具屋の店番、西本願寺の警備員をつとめ、夜は剣術道場を開き門弟数百人におよんだ。

明治三十三年三月二十日、勤務先の西本願寺で病死、行年七十三歳だった。葬儀には北海道から永倉も駈つけ参列した。

島田魁日記

文久三亥二月上旬、将軍公御上落ノ御沙汰有之、御先供トシテ三百五十人程同正月廿五日京都壬生村江着ス、翌廿六日足利三公ノ木僧并御位牌三条河原ニ曝シ有之

同三月四日将軍公御上京二条御城ニ被為入、同廿五日朝廷石清水八幡宮江御幸、将軍公始メ国主大小名御供当組御道筋警固ス、同六月中旬将軍公御下坂浪花城ニ被為入、当組御供八軒屋ニ旅陣ス、将軍公所々江御見分有之、廿日天保山ヨリ蒸気船ニテ江戸表江御開帆、当組天保山迄道筋警固ス、亦八軒屋ニ帰陣ス

此頃大坂与力ノ風聞甚不宜、故ニ当組ニテ是ヲ探索ス、当組ノ数人探索旁堂島辺ヲ歩行シ蜆橋ノ側ニテ相撲両三人来リ、道ヲ塞キ悪口ヲ申シ、遂ニ投倒シ三人ノ相撲遁去リ、直ニ四五十人六角ノ棒ヲ以テ四方ニ向ヒ不得止切殺ス、三四人死ス、深手八九人其他皆遁去、我数人八軒屋ニ帰リ直ニ町奉行江届出ス、日有テ上京ス

同八月十八日長州人引揚ノ節、当組南門前ヲ守ル、其節転奏ヨリ新選組ノ隊名ヲ下サル、同廿一日桂小五郎其外徒党ノ人数祭木町ニ屯シ追払ハントシテ、会桑両藩当組ト合シテ追払フ、擒二人速死四五人、同十二月中旬将軍公江戸ヨリ天保山江着ニ相成、当組下坂シ天保山迄御迎ヒ舟ニテ天満橋迄警固ス、将軍公上陸入城被為遊当組八軒家ニ旅陣ス、直ニ亦上京ス

子ノ正月二日将軍公御上京ノ御沙汰有之、当組下坂ス、十四日御先供ニテ伏見江着ス、将軍公伏見城江被為入、当組城裏ヲ守ル、十五日御入京二条城被為入、当組御供壬生村ニ屯陣ス

四月上旬将軍公御下坂当組御供、翌日安治川提警固、天保山ヨリ御乗舟ニ相成、江戸表江開帆、当組上京ス、三月上旬会津侯守護職ヲ御免越前春嶽侯守護職ヲ任ラル、四月上旬守護職春嶽侯御免会津侯再勤ス

文久三年亥年二月上旬、将軍（家いえ茂もち公）が上落（洛）されるという御沙汰があり、その先乗りとして三百五十人ほどが同月二十五日（二月二十三日）、京都の壬生村に到着した。翌二十六日（二十三日）、足利三代の木僧（像）と位牌が三条河原にさらされるという事件があった。
同年三月四日将軍が上洛し、二条城に入った。同月二十五日（四月十一日）、朝廷（孝こう明めい天皇）が石清水八幡宮へ行幸するため、将軍はじめ大小の国持ち大名がお供し、当組（新選組）もその道筋の警護にあたった。同年六月中旬、将軍が大坂城に入るため、新選組がお供となり八軒屋（家）という旅籠（京屋忠兵衛方）に陣をかまえた。将軍はいろいろと大坂を視察され、二十日に天保山沖から蒸気船で江戸へ戻られた。新選組も天保山までの道筋の警護にあたり、その後また八軒屋（家）に戻った。
この頃、大坂の与力の風聞が悪く、新選組においてこれを探索していた。新選組の数人が堂島あたりを歩いていると、蜆しじみ橋のそばで相撲取り二、三人にあい、道を塞いで悪口をいうのでこれを投げ倒すと、三人は逃げ去ったがすぐに四、五十人の相撲取りが六角棒をもって四方からむかってきたのでやむを得ずこれを斬り殺した。三、四人が死亡し、八、九人が深手を負ったがそのほかは皆逃げ去った。我々は八軒屋（家）に戻るとすぐにこれを町奉行所（大坂東町奉行有馬出雲守）に届け出た。日数がたって上京した。
同年八月十八日、長州が京都を引き上げる際、新選組は御所の南門（堺町御門）を守っていた。この節に転奏（武家伝奏）より新選組の隊名を下された。同月二十一日、桂小五郎そのほかの徒党が祭木町（梨木町か）に集まっていたのを会津・桑名両藩と新選組で追撃した。このとき二人を捕え、四、五人が速（即）死した。同年十二月中旬、将軍が江戸から天てん保ぽう山ざんに着いた。新選組は大坂にむかい、天保山までお迎えに出、船で天満橋まで警護した。将軍は上陸後、大坂城に入られたので、新選組は八軒家に戻り、またすぐに京都に戻った。
この正月二日、将軍が京都に入るというご沙汰があり、新選組が大坂にむかった。十四日先乗りとして伏見に到着する。将軍も伏見城に入ったため、新選組が城の裏を守った。十五日、将軍は京都二条城に入ったため、新選組も壬生村に帰った。
四月上旬、将軍が大坂に下るとき、新選組はお供となり、翌日には淀の安治川提（堤）の警護にあたった。将軍は天保山より御乗船され、江戸表へ出帆、新選組は京都へ戻った。三月上旬（二月二十五日）、会津侯（松平容かた保もり）が守護職を退き、越前の

（松平）春しゅん嶽がく公が守護職に任ぜられた。四月上旬（七日）、春嶽公が守護職を免ぜられ会津侯が再び守護職となった。

加茂行幸図

解　　説

『島田魁日記』の特筆すべきところは、入洛した時期から書きはじめている点である。隊士の中島登のぼり、立川主税の綴った日記もあるが、ここまで克明に新選組史を伝えたものではない。ただ、島田は激務の日々を日記に綴ったのではなく、戦い終わって人生を振り返った時、何が残ったかと考えるとそれは新選組の華々しい奔走のことしか脳裡に浮かばなかったのだろう。したがって日付などや勘違いの誤記が散見するが、かえってそれがこの日記の信憑性を高めているといえる。

　入洛の目的は「文久三年亥年二月上旬、将軍が上洛されるという御沙汰があり、その先乗りとして三百五十人ほどが同月二、十、五、日、京都の壬生村に到着した」とある。

　十四代将軍家茂は公武合体の攘夷祈願のため、三代将軍家光以来二百三十年ぶりに上洛することが決まり、幕府は京都の治安維持ならびに不逞浪士の取締り強化、将軍警護のため会津藩主松平容保を京都守護職に就任させた。一方、江戸で浪士組を募集、近藤ら試し衛えい館かん門人は参加を申し込み入洛した。日記では入洛を二十五日とするが二十三日の誤りである。浪士組の創立者のひとりである清河八郎が尊王宣言、幕府から江戸へ呼び戻される事態が起こったが、近藤一派は京都に残留を決意した。

「翌二、十、六、日、足利三代の木像と位牌が三条河原にさらされるという事件があった」

　世に言う足利三代木像梟きょう首しゅ事件といい、二十二日夜、浪士数名が、等持院に安置されている木像に天誅を加え、翌二十三日、三条河原に晒された珍事であった。三体の木像は幕府によって回収されたが、晒された尊たか氏うじ、義よし詮あきら、義よし満みつ像をよく調べると義満の首は義よし持もちだった。

　三月四日、将軍家茂は上洛、二条城に入ったが、このとき京都守護職、所司代が総出迎えで一列に並んで丁重に扱うものの、将軍が誰やら家臣がどれやらさっぱりわからなかった。それというのも服装が皆同じで、そこへ将軍みずから輿こしからおりて家臣と共に歩いたというから信じられないような話である。

　三月七日、将軍家茂は御所へ参内し義兄である孝明天皇に拝謁することになった。

「同月二、十、五、日、朝廷が石清水八幡宮へ行幸のため、将軍はじめ大小の国持ち大名や当組もその道筋の警護にあたった」

孝明天皇が石いわ清し水みず八はち幡まん宮ぐうへ行幸して攘夷祈願されたのは四月十一日、この時、将軍家茂は体調をくずし供奉しなかった。近藤らの初任務は道筋の警備であった。次に将軍家茂が大坂城に入るため警護を務め、八軒家の京屋忠兵衛方に陣を置いた。将軍は大坂を視察後、天保山沖から蒸気船で江戸へ戻り無事警護の任務を終えた。

七月十五日、大坂相撲取りとのケンカである。ケンカの原因について「大坂の与力の風聞が悪いので探索に出かけていたところ、相撲取り二、三人が道を塞いで悪口をいうのでこれを投げ倒す」

永倉の『新撰組顚末記』では、与力の探索ではなく夕涼みとなっていて、大坂へ下った理由に与力の探索一件も含まれていたのだろう。

ケンカの後、近藤、芹沢鴨の両名をもって、大坂相撲の熊川次郎を斬り殺したことを大坂東町奉行有馬出雲守則篤に届け出ている。

八・一八の政変で長州勢と三条実さね美とみら七人の公卿が京都の町から一掃された。このとき近藤らに会津藩公用方から出動命令があった。

「この節に転奏より新選組の隊名を下された」

近藤らは御所の堺町御門の警備を一任されたが、この働きが孝明天皇の耳に入り、武家伝奏より新選組の隊名を賜ったというのである。武家伝奏は天皇や上じょう皇こうへの取次ぎ役をする公卿たちで、野のの宮みや俊とし克かつと飛鳥あすか井い雅まさ典のりが任にあり、この者から賜ったとなれば幕府で唯一の由緒正しい隊ということになる。この『島田魁日記』によって隊名の決まった時期が確定できた。

「同月二十一日、桂小五郎そのほかの徒党が祭木町に集まっていたのを会津、桑名両藩と新選組で追撃した」

桂小五郎は後の木戸孝允で長州藩のいわば代表的な人物、文久二年（一八六二）七月二十九日、御所内の学習院用掛を命ぜられていた。学習院は三条ら急進派公卿と長州志士らが出入りし、尊攘派のアジトのように幕府から見られていた。

祭木町は三条邸の梨木町の間違いで三条らが長州へ西下した後に探索が会津、桑名、新選組で行われた。この記述は日記にしかなく、もしかして翌二十二日、平野国臣を捕縛するため山中成太郎方を急襲したことや、二十四日に古東領左衛門を捕縛したことを混同して綴った可能性もある。

「このとき二人を捕え、四、五人が即死した」とあり、こういう史実は今までになく再考すべき点である。桂は元治元年（一八六四）四月十八日、長州藩京都留守居を命ぜられている。

文久三年（一八六三）九月十八日、土方らが芹沢一派を粛清の名のもと血祭にあげたが、日記には見られず、隊内の恥は綴りたくなかったのだろうか。

新選組は将軍が大坂の天保山へ船で江戸から入るというのでその警護にあたり、大坂から元治元年正月十五日、二条城に入る際もその任にあたった。

「三月上旬、会津侯が守護職を退き、越前の春嶽公が守護職に任ぜられた」

幕府は遅々として進展しない公武合体の実をあげることができず、元治元年正月十三日、有力大名が入洛して政事に発言権を与、えられる「参予」制度を設けた。薩摩の島津久光、宇和島の伊達宗城、土佐の山内容堂、越前の松平春嶽に一橋慶喜も加わった。まさに幕末サミットだった。議題は孝明天皇の主張される横浜鎖港が論争となった。それまで幕府は開国策を打ちだしてきたが、慶喜は天皇を幕府の味方につけたい一心から鎖港案にまわった。他の者たちは幕府に貿易を独占されることに危惧し逆に開国策を主張した。慶喜は通商による物価高騰が庶民の生活を困窮させかねないと一歩も譲らなかった。ついに物別れとなり久光、春嶽、宗城が相ついで参予を辞任してしまった。

そこへ二月上旬に長州征伐の議案がもちあがり、一時松平容保は京都守護職を解任され、肩書きが陸軍総裁職となり征長軍主将に任ぜられた。後任に春嶽が任ぜられたが、やる気がまったくなく三月十五日に辞表を提出した。

こうなれば慶喜の意のまま四月七日、容保を京都守護職に復職させ、容保の意見も聞き入れ、十一日所司代稲葉正邦を老中に昇格、その後任に容保の実弟桑名藩主松平定さだ敬あきを着任させた。

五月下旬四条小橋辺リニ舛屋喜左衛門ト申人元江刕大津代官手代古高俊太郎ト申人ニテ、長州人ト同意シ三百余人姿ヲヤツシ三条大橋辺ノ宿屋ニ泊リ居ル、当組島田、浅野、山崎、川島是ヲ探索シ、会津侯へ達ス、六月五日夜、会桑両藩当組ト合シテ七ツ時頃切込、人数二百人余下坂シ残リ八九十人居、接戦シ十一人擒リ速死二十人程、其他皆遁去ル、翌六日、近隣悉ク探索ス、昼頃壬生村ニ帰ル、七日御褒美ヲ下サル、八日、市中ノ風説、長浪人当局江切込候ノ由、故ニ厳ニ固メ表門ヘ木炮二門ヲ備江裏門江一門備江侵スヲ待、九日、会津ヨリ加勢トシテ廿一人来リ合ス

五月下旬、四条小橋のあたりにいる桝屋喜左（右）衛門という人物が、じつは元江州（近江）大津代官手代古ふる高たか俊しゅん太た郎ろうという人で、長州人と同意しており、（長州人）三百余人が正体を隠して三条大橋あたりの宿屋に泊まっていた。新選組の島田、浅野（薫）、山崎（丞）、川島（勝司）がこれを探索し、会津侯に知らせた。六月五日夜、会津桑名の両藩と新選組が集まり七つ時（四時）頃斬りこんだ。（長州人は）二百人が大坂に行っており、八、九十人がいた。接近戦となり十一人を捕縛、二十人ほどが速（即）死、残りはみな逃げ去った。翌六日近隣をくまなく探索した。昼頃壬生村に帰った。七日ご褒美を下された。八日、市中の風聞では長州浪人が新選組屯所へ切り込みにくるといい、そのため表門へ木砲二門、裏門に一門備えて警備を固め、待ち伏せをした。九日会津藩より加勢として二十一人がきた。

解　　説

「五月下旬、四条小橋のあたりにいる桝屋喜左、衛門という人物が、じつは元江州大津代官手代古高俊太郎という人で、長州人と同意しており、三百余人が正体を隠して三条大橋あたりの宿屋に泊まっていた」

　古高は筑前藩御用達商人で桝屋喜右衛門と名乗って商いをしながら志士活動をつづけ、本名を古高俊太郎正まさ順よりといった。出身は江州守山古高だった。故あって桝屋に養子に入った。桝屋は本姓湯浅といい、京都船井郡世木村木住（日吉町）の郷士湯浅五郎兵衛の分家であった。本家は肥後藩主細川家と遠縁にあたり、家紋は肥後九曜紋だった。五郎兵衛は細川家旧領の下桂西ノ岡で肥後藩の浪士らと親交をもち援助をおしまなかった。

　古高ははじめ堺町丸太町下ルに住居を構えていたが当主喜右衛門が病死したため五郎兵衛のすすめもあって商いを継ぎ、文久元年三月に木屋町に移り住んだ。古高の妹千恵は皇女和宮の女中を務めていた。

　古高の家はしだいに浪士らのアジトとなり、肥後の宮みや部べ鼎てい蔵ぞう、松まつ田だ重じゆう助すけはじめ長州の浪士らも出入りして討幕の策を練っていた。古高の裏の長屋には京都では名の知れた侠客で会津藩中間の小鉄が住んでいたというからこのあたりから志士らの情報がもたらされたのだろう。

「新選組の島田、浅野、山崎、川島がこれを探索し、会津侯に知らせた」

　日記には今まで不明だった探索隊士四名が綴られている。島田と備前出身の医師で副長助勤浅野藤太郎、阿波出身で諸士取調役並監察の山崎丞、山城川島村出身で伍長川島勝司ら四名で探索してついに古高の正体を見破った。

　一説に六月一日夜、宮部鼎蔵の従僕忠蔵が古高の家から出てくるのを新選組探索方が見つけ尾行した。忠蔵は宮部の言いつけを受け南禅寺塔たつ頭ちゆうにある肥後藩宿陣に走った。用を済ませて戻ってきたところを新選組探索方に捕えられ、用件の密事を問いただすが一向に口を割らない。そこで南禅寺山門楼上にしばりつけた。

　忠蔵が捕えられたと聞きつけて縄手三条下ル、小川亭の女将テイは見張り役の者に金包を渡し解き放してもらった。テイは浪士から勤王ばあさんと呼ばれ、肥後藩出入りの料亭とあって宮部とは顔なじみであった。

新選組がその数日後の六月五日早朝、古高の家を急襲し古高を捕えた。壬生屯所へ連行し、取調べたところ、土方の拷問に耐えかねて、古高の口から陰謀の一部がもれた。実は古高も浪士らのすべての企みを知っていた訳でなく、毎日のように場所を変え時間を変え密会を繰り返していたこともあって古高にも正確な情報は入っていなかったのだろう。ただ六月中旬に強風の夜を選んで市中に火を放ち、京都守護職、所司代と親幕派の中川宮を斬殺し、孝明天皇を奪い長州へお連れし、これを機に討幕ののろしをあげ、各地の志士に蜂起をうながすという内容であった。

近藤は京都守護職松平容保にこの一件を報告すると大いにおどろき、市中の警備を強化した。

「六月五日夜、会津桑名の両藩と新選組が集まり七つ時頃斬りこんだ。（長州人）二百人が大坂に行っており、八、九十人がいた。接近戦となり十一人を捕縛、二十人ほどが即死、残りはみな逃げ去った。翌六日近隣をくまなく探索した。昼頃壬生村に帰った」

池田屋の乱闘場面が永倉の手記に比べ日記にはほとんど綴られていない。この日は近藤隊と土方隊の二つのグループに分かれて探索し、いち早く情報を得た近藤隊が永倉四名で池田屋に駈けつけて乱入し、遅れて土方隊が祇園方面からやってきて加勢した。島田は土方隊と行動を共にして突入。いきさつがまったく伝わらなかったのだろう。島田の耳に入った情報はあいまいで長州人二百人の大坂行きのこと、池田屋は当時、浪士三十名たらずが密会中であったにもかかわらず八、九十人となっていることや、即死、捕縛の人数など誇大な表現になっている。隊内でも流言飛語で武勇伝となりつつあったのだろう。近藤が書き送った国元への書状にも「兼ねて徒党の多勢を相手に火花を散らして、一時（二時間）余の間、戦闘に及び候処、永倉新八の刀は折れ、沖田総司の帽子（切っ先）折れ、藤堂平助刀は刃切り出しささらの如く、倅周平は槍を切り折られ、下拙刀は虎徹にや無事に御座候」。池田屋の一件はかなり誇大な内容だった。

「八日、市中の風聞では長州浪人が新選組へ切り込みにくるといい、そのため表門へ木砲二門、裏門に一門備えて警備を固め、待ち伏せをした。九日会津藩より加勢として二十一人がきた」

日記のこの下りは、他の文献にも散見せず池田屋事件後、長州の報復に備え、屯所の表と裏門に木砲三門をすえ、会津藩に援軍二十一人を要請するなど緊迫した状態で屯所周辺は特別警戒をめぐらせた。

隊士の宿舎だった前川邸は襲撃に備え、敷内の板塀を土塀に替え屋敷全体を要塞化した。

池田屋での闘死は奥沢栄助、負傷後死亡は新につ田た革かく左ざ衛え門もん、安藤早太郎の三名。藤堂平助と永倉は負傷、沖田総司は戦闘中に肺結核のため血を吐いて祇園会所に引き揚げた。

翌十日　明ホノト申茶屋ニテ人違ヒニテ土藩ヲ一人切害ス、然ルニ土藩ヨリ会藩へ掛合ニ相成リ、事睦ツケ敷相成、会藩芝司ト申人申開キトシテ黒谷ニ慎シテ自カラ切腹ス、比由土藩江以使者ヲ申シ達ス、然ルニ土藩自殺ス、其趣キ申来リ両藩ノ士死テ相済候、其後チ所々ニテ潜伏人多ク当隊ニテ召捕、廿一日夕会藩ヨリ早馬ニテ来リ聞テ東六条辺ニ潜伏人多ク是有ルノ由申来リ、直ニ六条太鼓ヤクラノ下ニテ其夜泊シ、翌廿二日探索シ何事モ無之九ツ時頃帰ル、廿四日会藩ヨリ急使来リ、大坂兵庫辺江長〆浪人来ル由申来リ、故ニ当組竹田街道ヲ固ム
七月十九日暁天ニ乗シテ御所ヲ襲ヒ炮発ス、亦伏見ニテ長藩福原越後ヲ始トシテ三百人余稲荷山且本道ニテ大垣藩ト戦フ、敵藤ノ森ニテ本陣ヲ備、然ルニ井伊ノ人数藤ノ森ノ山ノ手ヨリ繰出シ、暁七ツ半時ヨリ朝五ツ半時頃迄テ戦、敵敗シテ伏見へ走ル、九条河原ノ人数本道江繰出ス、当組蛤御門会藩へ合ス、門外ニテ薩〆ト戦フ、我軍昼八ツ時頃天龍寺江打込悉ク焼払フ、廿日天王山ニ敵屯集ス、会藩見廻り組当組ト合シテ繰出ス、其夜伏見ニテ泊シ、廿一日暁天乗シテ伏見ヲ発シ橋本ヨリ小舟ニ乗シテ川向江渉リ、敵四五百人居、追々引去リ百人斗リニテ討合、我軍神主町放火ス、遂ニ山崎天王山追払イ敵討死廿四五人、我軍直ニ橋本江引揚暫時休兵ス、亦直ニ発シ初更ニシテ牧方江着ス、此所ヨリ小舟ニ乗シテ夜八ツ時頃大坂西横堀所ノ御堂江着、翌廿二日朝長〆蔵家鋪放火ス、当隊市中ノ潜伏人ヲ探索ス、翌廿三日御堂江引揚、直ニ八軒家至リ三十石舟ニ乗シテ上京ス、壬生村ニ屯陣ス、三四日隔朝廷ヨリ当組御褒美ヲ賜ル、同十月頃長州追討トシテ尾〆玄道侯初メ其他諸侯下坂ス、十一月上旬尾州侯総督トシテ其他人数芸州迄出陣、此頃長芸ノ国境ニテ数日戦争有之候事、十一月三日大樹君御上京ニ相成リ、十二月上旬下坂ニ相成、此頃朝廷ヨリ兵庫開交被仰出、大樹君ニハ御所ニ相成候事、此頃尾田兵庫介其他十一人五条坂ノ法華寺ニ屯シテ居、当組ニテ召取リ入牢ス、後ニ免セラレル

（会津のものが）翌十日、東山の明保野という茶屋で人違いから一人の土佐藩士（麻田時太郎）を長州の者と間違い殺害した。　このことで土佐藩から会津藩へ掛け合いとなり、事が難しくなり、会津藩の芝（柴）司という人が申し開きとして黒谷で自ら切腹した。このことを土佐藩へ使者をやって伝えた。すると土佐藩のもの（麻田）も自殺した。そのことを会津藩に伝え、両藩の士の死をもって事がすんだ。その後、所々で潜伏している者が多く、新選組で召し捕った。二十一日夕、会津藩より早馬がきて、東六条あたりに潜伏している者が多くあるという。直ちに六条太鼓やぐら（西本願寺太鼓楼）にその夜は泊まり、翌二十二日探索したが何事もなかったので九つ頃（十二時）帰った。二十四日、会津藩より急使がきた。大坂兵庫のあたりに長州浪人がくるということなので、新選組は竹田街道を固めた。
七月十九日、（長州人が）暁天に乗じて御所を襲って発砲した。また長州藩の家老・福原越後をはじめとした三百人余りが稲荷山や本道（伏見街道）で大垣藩と戦った。敵は藤の森に本陣を備えていた。そこで井伊家の者（彦根藩）が藤の森の山の手から繰り出し、明け方の七つ半時（五時）から朝の五つ半時（九時）頃まで戦い、敵は伏見へ敗走した。九条河原の銭取橋（に待機していた）の者も本道へ繰り出した。新選組は蛤御門の会津藩と合流した。門の外で薩摩藩の者と戦う。我々の軍は昼八つ時（二時）頃、天龍寺へ打ち込み、ことごとく焼き払った。二十日、天王山に敵が屯集した。会津藩の見廻組と新選組が合流して繰り出した。その夜は伏見に泊り、二十一日明け方に乗じて伏見を出発、橋本より小舟に乗って川向こうへ渡り、敵四、五百人がいたが、追々逃げ去っており、残っていた百人ばかりと戦った。我が軍は神主町に放火した。ついに山崎天王山まで追い払い、敵二十四、五人が討死した。我が軍はすぐに橋本へ引き揚げ暫時休憩した。そしてすぐに出立し初更（午後七時～九時）に牧（枚）方に着いた。ここから小舟に乗り、夜八つ時頃大坂西横堀の御堂に到着した。翌二十二日朝、長州が蔵屋敷を放火した。新選組は市中に潜伏している浪士の探索をした。翌二十三日御堂へ引き揚げ、すぐに八軒家にいき三十石舟（船）に乗り、上京した。壬生屯所に戻った。三日、四日、朝廷より新選組は褒美を賜った。同年十月頃長州追討のため尾州玄道侯はじめほかの諸侯が大坂にきた。十一月上旬、尾州侯を総督としてそのほかの人数が芸州まで出陣した。このころ長州と芸州の国境で数日戦争があった。十一月三日、将軍が上京され、十二月上旬大坂に下った。この頃朝廷から兵庫開交（港）についておおせがあり、将軍

がそのことで御所にいかれた。この頃、尾田兵庫介そのほか十一人が五条坂の法華寺に集まっていたところを、新選組が召し捕って牢に入れた。これは後に免ぜられた。

島田魁所用陣笠

島田魁所用肩当

解　　説

　池田屋事件いらい市中の浪士狩りを京都守護職から命ぜられた新選組は日々市中巡邏を強化した。事件から五日後の六月十日夜、清水寺参道にある明保野という料亭に浪士数人が密会をしているとの情報が入った。新選組は原田左之助ら隊士十名を出動させる一方、会津藩も池田屋事件の二の舞になるのではと藩士柴しば司つかさ、吉原四郎、石塚勇吉ら七人を料亭に向かわせた。部屋では土佐藩士麻田時太郎がたったひとりで酒を飲んでいたところへ柴らが乱入したものだから、麻田はおどろき庭へ飛び出した。すかさず柴が槍で一突きし、麻田は深手を負った。誤認とわかり会津藩は苦慮し、土佐藩へ見舞いに行ったが門前払い、激昂した土佐藩の浪士百人が新選組へ襲撃する噂もあり、柴は責任を感じ切腹、麻田も後ろから負傷したことは士道にあるまじきことと切腹した。

　その後も浪士狩りはつづけられ新選組は浪士を召し捕った。

「二十一日夕、会津藩より早馬がきて、東六条あたりに潜伏している者が多くあるという。直ちに六条太鼓やぐらにその夜は泊まり、翌二十二日探索したが何事もなかったので九つ頃（十二時）帰った」

　二十一日夕、会津藩公用方が早馬で来て西本願寺あたりに浪士が潜伏していることだった。西本願寺門主広如は勤王僧として知られ長州藩と浅からぬ関係にあり、その夜は同寺太鼓楼に泊り翌日も探索したが何事もなかった。のち慶応元年（一八六五）三月十日、壬生の屯所から西本願寺に屯所を移転するきっかけとなった。

「二十四日、会津藩より急使がきた。大坂兵庫のあたりに長州浪人がくるということなので、新選組は竹田街道を固めた」

　池田屋事件の凶報が長州にもたらされたのは四日後の六月九日だった。その六日後の十五日には来島又兵衛が遊撃隊をもって率兵上京、福原越後、国司信濃、益田右衛門介の三家老も京に向けて進軍してきた。その数千六百人だった。

　福原率いる四六〇人の兵士が続々と二十二日大坂へ上陸、武装したまま現在の京阪国道を東上し二十四日伏見に入った。真ま木き和泉守と久坂玄瑞の率いる宣徳、尚義、八幡、忠義、集義、忠勇の千人におよぶ各隊は二十四日淀川をさかのぼって天王山に布陣した。二十六日、河原町の長州藩京都屋敷にいた藩士と合流した浪士ら約五百人が、嵯峨天龍寺に移り、三方から御所をうかがった。

真木と久坂が朝廷に対し率兵上京した大義名分を訴える哀願書を提出することにした。使者の藤村幾之進と大谷撲助が淀藩主稲葉正邦に面会を求め取りつぎを願い出ると、稲葉は快諾し禁きん裏り守衛総督一橋慶喜にこれを届けた。慶喜はさっそく中川宮ならびに議奏、武家伝奏の公卿をあつめ朝議が開かれた。
　哀願書は二千八百字から成り、三条ら五卿ならびに長州の毛利父子の冤罪、攘夷の国是嘆願が主な理由だった。
　京都守護職松平容保はこの戦いの最高責任者で、新選組に九条河原の銭取橋へ出陣を命じた。ところが「肥後守容保は即刻参さん内だいせんとするも、病重くして行こう歩ほ心に任せず、侍臣らに命じ病床にありて上かみ下しもを着ちやくされけり」（七年史）、容保は病の床から出陣した。
　この戦いを一橋慶喜は「大軍を擁ようして入洛するだけでも大逆行為」と憤慨し、孝明天皇も「今さら長州の入京は不可」と仰せられて開戦となった。
　日記にも「七月十九日、（長州人が）暁天に乗じて御所を襲って発砲した」とあり、伏見で長州の福原隊を大垣藩が伏見街道で戦い、彦根藩も加わり午前五時から九時頃まで戦闘がつづき長州は敗走した。
　新選組の参戦の様子が日記には詳しい。
「九条河原（銭取橋に待機していた）の者も本道（伏見街道）へ繰り出した。新選組は蛤御門の会津藩と合流した。門の外で薩摩藩の者と戦う。我々の軍は昼八つ（二時）頃、天竜寺へ打ち込み、ことごとく焼き払った。二十日、天王山に敵が屯集した。会津藩の見廻組と新選組が合流して繰り出した」
　戦いは戦死者数からみれば一目瞭然、長州勢が二百六十五人、幕府側は会津兵六十人、薩摩八人、桑名三人、彦根九人、越前十五人、淀二人の計九十七人。ちなみに新選組や見廻組は一人の戦死者も出さなかったのは、指揮官が立派だったといえる。
　禁門の変の敗走兵を追う様子がリアルタイムで綴られている。
「我が軍は神主町に放火した。ついに山崎天王山まで追い払い、敵二十四、五人が討死した」
　敗走した久留米の神官真木和泉守ら十七人は天王山の酒解神社二の鳥居下で参集、夜になると山頂で大篝火をたいて追討軍の新選組をむかえうつことにした。十七人は思い思いを辞世、詩歌にして大和五条の人大沢逸平に託し、のち太宰府の三条実美のもとに届けられたという。

天王山攻めには、近藤、永倉、斎藤ら二十人ほどで、もう一方の離宮八幡社には、土方、原田、藤堂、井上、島田ら多勢に加え、会津兵も陣取った。

二十一日、会津大砲隊、新選組は宝ほう積しゃく寺じに入り天王山を包囲、天王山へ進軍したところへ山頂から銃声がしたので新選組は山を降り離宮八幡宮まで退却した。その時、一発の銃声がするや火柱があがった。十七烈士は自刃した。十七人の中に長州兵が一人も含まれていないのは真木が長州の再起を願い下山させたからという。

自刃した現場に新選組が登ると義軍の旗を囲み全員自決していた。山頂の酒解神社社殿には十七人連署の遺書が残され「甲子（元治元年）秋七月、師を出して会賊（会津）を討つ。利あらずして引還す。我輩、徒らに京師を去るに忍びず、営する所の天王山に屠腹して、陰に至尊を譲らんと欲する也」があり、孝明天皇への上表書ならびに幕府への上表の二冊が添えてあった。

新選組はなおも敗走兵を追い橋本から枚方、大坂西横堀の御堂へ走った。敗走する際、長州兵は鎧、刀、鉄砲を各家の井戸へ投げ込み、二十二日朝、蔵屋敷に火を放って落ちていった。

十二月下旬、「尾田兵庫介そのほか十一人が五条坂の法華寺に集まっていたところを、新選組が召し捕って牢に入れた。これは後に免ぜられた」

この記述は日記しかなく、尾田らを誤認して、捕えた可能性がある。

丑正月中旬長州追討ノ人数悉ク引上ニ相成候事、閏五月中旬御心発トシテ将軍公御上落ニ相成、当組三条ケアケ迄御出迎ヒ御道筋警固、二条御城江被為入、当組壬生村江帰陣ス、廿三日将軍公御参内ノ事、廿五日御下坂ニ相成、当組藤ノ森迄御供ス、此頃当組大坂市中取締ヲ被仰付京都ヨリ数人出張ス、七月十八日夜会津侯ヨリ急使来ル、聞ニ当局ノ脱走上田末次其外二人名古屋辺ニ而朝名ヲ語リ金策ヲス、故ニ尾州藩ニテ士三人召捕候由、当組ヨリ召捕トシテ伊藤甲子太郎其外三四人東海道ヲ探索ス、吾レ其外三四人ニテ仲仙道ヲ探索ス、美濃福島谷汲寺居リ候事相知シ、是ハ大垣領池田五左衛門ト申人カクマイ居候故五左衛門ヲ召出シ色々相尋、金兵衛ト申者取ニカシ、故ニ加納宿之金兵衛ヲ召出シ探索致シ、行方相知レス、附テハ金兵衛安藤領ノ者ニテ安藤ノ重役ニ対談致シ、遂ニアヤマリ一札ヲ取ル、然ルニ吾レ日頃金毘羅様ヲ心願致シ母ニ対面ノ儀ヲ願候処不計国元へ天朝ノ御用ニテ参リ、母ニ対面致シ是全ク金毘羅サマノ御リヤクナリ、事相済テ上京ス
此頃京都ニテ佐々木六角源氏ノ系図ヲカタリ廿人斗リ徒党致シ、当局ニテ探索シ遂ニ召捕ル、同九月頃異国舟天保山沖江来リ、七八人上陸シ、登城シ将軍公対面有之事
寅年二月四日亦長州追討、人数芸州迄繰出ス、四月中旬頃京都三条大橋ニ相掛ケ長州父子朝敵ノ精札徒ラスル者有之、当組探索ス、遂ニ廻リ先ニテ出会ヒ大橋小橋ノ間ニ接戦ス、当組僅十九人先多人数、五人切害ス、生捕宮川助右衛門、此者土藩、此父大目付役相勤其悴レニ候事
八月中旬頃将軍公大坂城内ニテ崩御ノ事、五十日停止有之、同十二月廿七日朝廷御崩御、御ミサヽキセンニウ寺一橋様、会津様、桑名様御供ノ事、九月頃ニ見廻リ組大津源二郎其他三四百人徒党シムホンヲクハタチ故ニ当局ニテ召捕リ兵庫ニ送ル

丑（慶応元年）正月中旬長州追討の者たちが引き揚げることになった。閏五月中旬（二十二日）、御出陣のため将軍家茂が上落（洛）することになり、新選組は三条蹴上までお出迎えし道筋の警護にあたった。二条のお城に入られたので、新選組は壬生に帰陣した。二十三日、将軍が御参内になった。二十五日、大坂へ下られることになり、新選組は藤の森までお供をした。この頃新選組は大坂市中の取り締まりを仰せつかっており、京都から数人が出張していた。七月十八日夜、会津侯より急使がきた。新選組脱走の上（植）田末次そのほか二人が名古屋あたりで朝廷の名を語（騙）り金策しているという。それで尾張藩が三人を召し捕ってほしいという。新選組からは伊藤（東）甲子太郎そのほか三、四人が東海道を探索した。私はほかの三、四人と仲仙（中山）道を探索した。美濃福島谷汲寺にいることがわかり、ここに大垣領の池田五左衛門という者がかくまっているというので、五左衛門を召し出していろいろと尋ねた。金兵衛という者が逃がしたので、加納宿の金兵衛を召し出し探索したが、行方がしれなかった。ついては金兵衛が安藤領の者なので、安藤領の重役に話をしたところ、ついにあやまり一札を入れさせた。私は日頃から金比羅さまを信心し、母にあいたいと願っていたが、はからずも公務で国元へ参り、母に対面できたのは全く金比羅さまの御利益であろう。事が済んで上京した。
この頃京都で佐々木六角源氏の血筋を騙り二十人ばかりが徒党を組んでいたのを、新選組にて探索し、ついに召し捕った。同年九月頃、異国舟（船）が天保山沖にきて、七、八人が上陸し、登城して将軍に対面することがあった。
寅年（慶応二年）二月四日、また長州の追討があり、軍勢が芸州まで繰り出した。四月中旬頃京都三条大橋にかかっていた長州朝敵という精（制）札をいたずらする者があり、新選組で探索した。ついに待ち伏せしていたところ出会い、大橋と小橋の間で戦った。新選組はわずか十九人、相手は多人数だったが、五人殺害した。宮川助右衛門（助五郎長春）を生け捕ったが、この者は土佐藩で、父は大目付役を勤めていたということだ。
八月中旬頃（慶応二年七月二十日）、将軍家茂が大坂城で崩御された。五十日喪に服した。同年十二月二十七日（二十五日）、朝廷（孝明天皇）が崩御なされ、その御陵の泉涌寺に一橋様（慶喜）、会津様（松平容保）、桑名様（松平定敬）がお供をした。九月頃（十四日）に見廻組の大津（沢）源二郎ほか三、四百人が徒党を組み謀反を企てたが、新選組にて召し捕り、兵庫に送った。

解　　説

　新選組隊士植田末次の不始末があった。
「七月十八日夜、会津侯より急使がきた。新選組脱走の上（植）田末次そのほか二人が名古屋あたりで朝廷の名を語（騙）り金策しているという」
　この一件は日記にしか記述がない内容で、朝廷の名をかたり金策したのは、植田末次で八番組に属し慶応元年（一八六五）四月、土方による江戸隊士募集で入隊したが六月に脱走した。ほかに二名の脱走隊士がいたという。該当する者は清水休左衛門、相場薫三郎、川村林次郎、田中梅太郎、伊東隼之介、沖田承之進、山寅之助の七名の中の誰かである。さっそく新選組から伊東甲子太郎が数名を連れて東海道を探索する一方で、島田も数名をもって中山道を探索した。すると美濃福島谷汲寺にいる情報を得て、大垣領の池田五左衛門という者がかくまっているというので尋問すると、金兵衛という小者がすでに逃してしまったという。結局捕えることはできなかった。
　日記には隊内の不始末に関する記述がほとんどないのに、なぜこの一件だけを綴ったのか不明である。
「私は日頃から金比羅さまを信心し、母にあいたいと願っていたが、はからずも公務で国元へ参り、母に対面できたのは全く金比羅さまの御利益であろう」
　私事にふれたのはこの下りのみ、島田は両親を失った後に母方、川島家の養子になっているのでこの時、義母に会ったことになる。公務でまさか国元に戻れるとは夢みごこちだったのか、金比羅様の神徳と感激した。
　日記には数々の浪士狩りで召し捕ったとあるが、不明な点も多い。
「この頃京都で佐々木六角源氏の血筋を騙り二十人ばかりが徒党を組んでいたのを、新選組にて探索し、ついに召し捕った」
　この下りも日記にしかない。佐々木氏は中世の守護大名で六角氏は織田信長に滅亡させられた。このことをかたり、浪士を集めていたという。
　その中でも乱闘になった三条制札事件があった。
「長州朝敵という制札にいたずらする者があり、新選組で探索した。ついに待ち伏せしていたところ出会い、大橋と小橋の間で戦った」
　八月二十八日、大和十津川郷士中井庄五郎と前岡力雄ら数名が、三条制札場にあった朝敵告示の高札を鴨川へ投げ棄てる事件がおこった。九月二日、再び高札をかかげると

いたずらされたため、幕府に対する挑戦と受けとめ新選組に慶応二年（一八六六）九月十二日、出動命令を出した。それとも知らず同夜、土佐の藤崎吉五郎、松島和助、宮川助五郎、安藤鎌次、沢田屯兵衛、岡山禎六、本川安太郎、中山謙太郎の八人が高札を取ろうとした。現場を見つけた新選組と大乱闘となった。

この日、新選組は三条大橋の東詰の荒物屋に大石鍬くわ次じ郎ろう、茨木司つかさら十人、西詰の酒屋に新あら井い忠ただ雄おら十二人、さらに橋はし本もと皆かい助すけ、浅あさ野の薫かおるが密偵役をつとめ物乞いに身を扮して橋の下にかくれていた。また先ぽん斗と町ちょうの町会所に原田左之助ら十名が援軍として待機していた。

志士らが高札を酒の酔いにまかせて引き抜くことを橋本が確認、西詰の新井に知らせに走り、浅野は東詰の大石へ、さらに会所にいる原田へ注進した。

隊士三十人と志士八人は川をはさみ斬り合った。志士側の安藤、藤崎は闘死、安藤は新井・内海次郎相手に一人で戦い、重傷後、土佐藩邸に逃げ込んだが翌日自刃した。宮川は捕えられたが、他の五人は逃走してしまった。

隊内では池田屋に次ぐ大捕物となった。新井の後日談に「新井忠雄ノ話ニ、士藩ハ何レモ例ノ長剣ヲ真向ニ振リカザシ、月光ニ輝ヤキ馳はセ来ル形勢ハ、鬼神モ避クベキ勇威ナリトイヘリ」（『新撰組始末記』西村兼文）とある。

この戦いで東詰の大石らの出動が遅れたのは、浅野が高札に群がっている浪士の横を通るのに憶し、前日の雨で増水している鴨川を流されながら無理に渡ったため、報せが一いつ時とき遅れたからである。この失敗で浅野は除隊処分となり、のち伊東が結成した高台寺党への志願も断られ、あげくのはて沖田総司に川勝寺村で斬られ桂川に捨てられてしまった。

この事件で新選組へ京都守護職松平容保から出動隊士へ感状と賞金が下された。

「九月頃に見廻組の大津（沢）源二郎ほか三、四百人が徒党を組み謀反を企てたが、新選組にて召し捕り、兵庫に送った」

土方らは幕臣渋沢栄一と共に、見廻組大沢源二郎を国事犯の嫌疑で捕えることになった。大沢は紫野大徳寺境内に住んでいたので、隊士を周りに張り込ませ、土方と渋沢とで大沢宅を訪れると、今まで寝ていた様子で眠そうな顔をして出てきた。国事犯の嫌疑がかかっていると伝えると別段手向いする様子もなく隊士らが難なく捕縛した。大沢を京都町奉行に引き渡し、江戸送りのため、十一月二十七日、新選組の手で身柄を兵庫港まで送り届けた。

慶応三年（一八六七）六月十日、新選組は幕府直参となり、近藤、土方が夢みた武士になりたいという願いが実現された。しかし、日記にはこの重要な記述はまったくない。

卯年五月頃ヨリ王政復古ノ議論有之、同七月頃将軍公政権ヲ朝廷江返上被為関白公御預リ、十月十日改メテ返上、会桑ノ両役モ返上ノ事、此月大樹君御参内、十二日市中動勃ス、会桑当組二条城江詰ル、十三日大樹君御下坂、当組二条城ニ残ル、此夜新遊撃隊ノ名ヲ当組御断申上元ノ新選組ヲ名乗ル、十四日当組下坂ス、此日大雨風、八ツ時頃橋本江着ス、此所ヨリ小舟ニ乗シテ天満天神社内ニ陣ス、十六日伏見城中ニ入ル、廿三日隊長近藤公馬上ニテ伏見墨染ノ辺ヲ通リ候処、狼藉物七八人ニテ不意ニ炮発シ胸ニ徹シ、然レドモ不撓たゆまずシテ馬ニ鞭チ打チ伏見城ニ帰ル、局長付井上新左衛門、奴芳介右両人接戦シ遂ニ死ス、右打掛ケ候者ハ局ノ脱走人ノ由シ
廿六日大樹君ヨリ御使者来リ、此ヨシ相聞ヘ候故、大坂城内ニテ養生可致ノ御沙汰ニテ下坂シ、城内二ノ丸ニテ養生ス、廿八日伏見城外江伝習第一大隊陣ス、此頭小笠原石見守ナリ、追々薩土ノ人数伏見ヘ宿陣ス、当組厳重ニ城内ヲ堅ム、会桑人数伏見ニ居ル、辰ノ年正月三日戦争相始リ敵桃山并御幸ノ宮ヨリ大小銃打掛、戦数刻ニ及ヒ我軍伏見市中ヘ放火ス、此日丑ニ退ク、肥後橋辺ニテ陣ス、四日上鳥羽街道ニテ会桑ト戦争ス、少シク敗シテ下鳥羽迄退ク、当隊淀城下ニ陣ス、五日下鳥羽ニテ戦フ、敵敗シテ一里斗リ退ク、我軍追撃ス、然ルニ右左ノ竹藪ヨリ烈布銃ヲ放ツ、遂ニ大瓦解トナリ亦退ク、然ルニ敵淀川堤ヨリ押来リ、戦遂ニ敗シテ八幡并橋本迄退ク、此夜休陣ス、傷人小舟ニテ大坂江送ル、六日暁天ニ敵亦進来ス、我軍橋本入口ニ胸壁ヲ築キ置キ互ニ炮撃ス、然ルニ山嵜ノ関門藤堂藩返シテ大小銃ヲ烈布放ツ、故ニ我軍大瓦解遂ニ大坂迄退ク、当局八軒家ニ陣ス、吾ト尾関ト今橋筋平野屋五兵衛方江隊長ノ命ニヨリテ兵粮焚出シ申付ル

卯年（慶応三年）五月頃から王政復古の議論があり、同年七月頃将軍は政権を朝廷に返上したため関白のお預かりとなり、十月十日（十四日）改めて返上した。会津、桑名も両役（守護職・所司代）を返上した。この月、将軍が御参内した。（十二月）十二日市中は動勃（揺）した。会津、桑名、新選組は二条城へ詰めた。十三日、将軍慶喜が大坂へ下ったが、新選組は二条城に残った。この夜、新遊撃隊の名を断り、元の新選組を名乗る。十四日、新選組は大坂に下った。この日は大雨と風で、八つ時頃橋本に到着した。ここから小舟に乗り天満神社内を陣とした。十六日、伏見城に入る。二十三日（十八日）、隊長の近藤が馬で伏見墨染のあたりを通りかかったところ、狼藉者七、八人が不意に発砲し、胸を撃たれたが、馬に鞭を打ち伏見城まで帰った。局長付の井上新左衛門、奴の芳介の両人が戦ったが死亡した。この撃った者は新選組を脱走した者（高台寺党）である。

二十六日、将軍より御使者がきて、このことを聞いて、大坂城内で養生するようにとのご沙汰をいただいて大坂に下り、城の二の丸で養生した。二十八日、伏見城の外に伝習第一大隊が陣を構えた。この頭は小笠原石見守である。徐々に薩摩、土佐の軍勢が伏見へ陣をとった。新選組は厳重に城を固めた。会津、桑名の軍勢が伏見にいた。辰（慶応四年）の年正月三日、戦争が始まり敵は桃山善光寺および御幸（香）宮神社から大小の銃で打ち掛け、戦いは数時間に及び、我々の軍は伏見市中に火を放った。この日丑の刻に退いた。肥後橋あたりに陣をとった。四日、上鳥羽街道で会津、桑名とともに戦争をした。形勢が悪く下鳥羽まで退いた。新選組は淀城下に陣を構えた。五日、下鳥羽で戦う。敵が一里ほど退いた。これを我が軍が追撃した。すると右左の竹藪からはげしく銃を放たれた。ついに総崩れとなりまた退いた。敵は淀川堤より押しきて、戦はついに敗れたため八幡および橋本まで退く。この夜、陣で休む。けが人は小舟で大坂に送った。

六日の明け方、また敵が進軍してきた。こちらの軍は橋本の入り口に胸壁を築き、互いに発砲しあった。山寄（崎）の関門にいた藤堂藩（津藩）が寝返って大小銃を激しく放った。そのため我が軍は瓦解し、ついに大坂まで退いた。新選組は八軒家に陣をおいた。私と尾関（雅次郎）とが今橋筋の両替商平野屋五兵衛方にいき、隊長の命により兵糧の炊き出しを申しつけた。

解　　説

「五月頃から王政復古の議論があり」

　すでに新選組の耳にも幕府崩壊の噂があったという。一介の浪士集団である新選組が五年たらずで直参になること事体、異常であった。

　将軍慶喜はついに十月十四日、政権を返上したものの朝廷はこれを保留した。朝廷は十二月九日、王政復古の大号令により将軍職、京都守護職、所司代の職制を廃止、翌日、辞官・納地を伝宣された。将軍慶喜は十二日、二条城を出て大坂へ下った。しかし、新選組は二条城に残った。

「この夜、新遊撃隊の名を断り、元の新選組を名乗る」

　十三日、新選組は新遊撃御雇を命じられたが、土方、島田らは新選組の名に誇りを感じたのかこれを拒否した。

　十四日、この日は大雨と強風で、幕臣永井尚志に従い、大坂に下り大坂天満宮に宿陣した。

「二、十、三、日、隊長の近藤が馬で伏見墨染のあたりを通りかかったところ、狼藉者七、八人が不意に発砲し、胸を撃たれた」

　この事件は二十三日ではなく十二月十、八、日だった。墨染で米屋を営んでいた老婆が店の前で侍が撃たれたと晩年語っている。近藤を治療した幕医松本良順は「右側ノ鎖骨上ヨリ、上斜脊椎ノ旁ニ貫キタル」（蘭疇）と記しているので胸ではなかった。襲撃したのは新選組を離脱した高台寺党の残党で、近藤の護衛は島田、横倉甚五郎、井上新左衛門、従僕の芳介らだったが、井上と芳介が闘死した。高台寺党の篠原泰之進が薩摩の中村半次郎に近藤の一件を話すと「なぜ先さきに馬を撃たなかったのか」と失敗をおしんだという。

　近藤は大阪城二の丸で養生することになった。慶応四年（一八六八）正月三日にはじまった鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍に土方率いる新選組は参戦するも、旧式の武装で新政府軍を迎えうつには無理があった。

　四日、上鳥羽街道で会津、桑名の兵とともに善戦したが、ついに押され、下鳥羽まで退却した。新選組は淀城下で陣取って再起をかけた。五日、再び下鳥羽で戦った。はじめは互角に戦うも、新政府軍は両側の竹藪からの奇襲作戦で応戦し、とくに千両松の戦

いで古参隊士井上源三郎を戦死させるなど、新選組は多くの犠牲を出した。土方の指揮もここまでであった。それに加え津藩と淀藩が寝返った。
「そのため我が軍は瓦解し、ついに大坂まで退いた」
　島田の認識ではこの時点で新選組は瓦解したのである。

翌七日城内二ノ丸ニ入ル、然ルニ大樹君天保山ヨリ艦ニ乗シテ江戸ニ行、此夜大手前兵士小家焼失ス、故ニ三更ニ至ツテ直ニ城ヲ出八軒家ニ陣ス、八日小舟ニ乗シテ木津川口新川ニ行、大舟ニ乗カヘ其夜舟ニテ一泊ス、九日風悪シクシテ逗留ス、十日出帆シカ子候故小舟ニ乗シテ天保山沖富士山艦乗込ム、此夜兵庫港ニテ碇泊ス、十一日朝兵庫港ヲ開帆ス、此日紀州由良港ニ碇泊ス、正角丸、三ケ保丸入港ス、十三日朝由良港開帆、十四日夕横港ニ着ス、即夜傷人直ニ上陸シ医学所ニ行ク、此時吾其他両三人介抱及世話役命セラレ病館ニ行ク、十五日隊長副長其外隊士ノ者品川ニ行暫時休ス、廿八日当組悉ク梶橋内役家鋪ニ移ル、二月朔日隊長ノ命ニヨツテ岸嶋、尾関ノ両士来ル、故ニ横浜病館ヨリ傷人悉ク引ツレ、江戸泉橋医学所ニ移ル由申来ル、故ニ翌二日横浜出立シ此夕品川着、翌三日泉橋医学所ニ入ル、七日近藤隊長養生トシテ横浜ニ行ク、然ルニ御用召シニ付十日尾関横浜江隊長迎ヒニ行ク、十二日隊長登城ス、大樹公東叡山ニテ恭順被遊候ニ付此御警固ヲ被仰付、十五日当局半隊ツヽ相勤ム、遊撃隊ト交代ニ相成、廿五日御免被仰付、廿八日甲府鎮撫ヲ被仰付、右器械御渡シニ相成、大炮六門本込小銃廿五挺二ツハントウ本込二百挺請取ル

三月朔日梶橋屋鋪ヲ発ス、近藤勇隊長、土方歳三副長同士凡百有余人ヲ以テ甲府城ニ向フ、既ニシテ勝沼駅ニ至ル同所エ宿陣ス、甲府城ノ様子ヲ聞ケレハ、甲城ニテハ敵軍入城致シ、追々江都エ押来ル由ノ注進有之候、一ハ両公評議ノ上何レ官軍陣門ニ至リ今日ノ形勢ヲ可論ストテ福田兵馬ナル者被命即刻出立、尤モ警固ノ者十人斗リ附添、敵陣間近ク成リケレハ取合ハ大炮小銃烈布打立、不得止途中ヨリ引戻シ本営ヱ右ノヨシヲ聞ヨリ直様所々ヱ手配リヲ致シ、本営ヨリ半途ニ関門ヲ設ケ両三人番兵ヲ附置キタリ、此時敵兵七百余人関門ヱ押来リ、番兵ノ者攻メケレハ、早小炮討出シ是非ナク本営迄引上ケ、前顕ノ由ヲ言上ス、敵早所々ニテ戦争ヲ始リ、当六日ノ九ツ時ヨリ八ツ時迄討合、味方勝利ナレドモ敵大軍且諸道ニ逼リ遂ニ敗走ス、七ツ時ヨリ猿橋ニ引揚ク、追々東都ニ引揚ケ今戸ニ一泊ス、是ヨリ五兵ヱ新田ニテ宿陣ス、当所ニテ兵士ヲ集メ凡弐百人余集リ、是ヨリ下総ノ流山ニ至リ宿陣ス

四月三日ノ昼敵兵不意ニ襲来ル、此時薩藩有馬東太ト申者応接トシテ本営ニ来ル、右ニ附土方公出会ス云々有之、近藤某ト附添野村利三郎村上三郎右有馬ト同道ニテ板橋駅官軍本営ニ至ル、村上三郎途中ヨリ流山ニ帰ル、某夜土方公附添両人召連江戸表ニ行キ、大久保一翁、勝安房両公エ対談シ云々有之、其ヨリ形勢ヲ寮シ暫ク江都ニ有、此時相馬某大久保、勝、土方公ノ封書ヲ持テ板橋ヱ行、近藤公エ達ス此時近藤公官人ト議論有之、無論青

天白日ノ如シ、官人尽ク服ス、然リ而テ其能ヲ忌ミ謹慎申附ラル、附添野村某相馬某途中ヨリ帰同廿五日板橋駅外ニテ被害公ノ死臨時顔色平常ニ不異従容トシテ死ニ就、見ル者流涙シテ無不惜之者、実ニ古今無双ノ人傑ナリ

翌七日、大坂城内二の丸に入る。将軍慶喜は天保山より船に乗り江戸へ行った。この夜大手前で兵士が小屋を焼失した。三更（さんこう＝子の刻）になり城を出て、八軒家に陣をとった。八日、小舟に乗り木津川口の新川に行く。そこで大船に乗り換えてその夜は船中に一泊した。九日、風が悪く、逗留した。十日、出帆しかねて、小舟に乗り、天保山沖の富士山艦に乗り込む。この夜は兵庫港に停泊した。十一日朝、兵庫港を出発した。この日は紀州の由良港に停泊した。正角丸（翔鶴丸）と三ヶ保丸（美加保丸）も入港した。十三日、由良港を出港。十四日夕方横浜港に着く。この夜けが人をすぐに上陸させ、医学所に行った。このとき私とそのほか三人が介抱と世話役を命ぜられ、病院に行った。十五日、隊長、副長、そのほかの隊士は品川に行き、暫時休憩した。二十八日、新選組はすべて梶（鍛冶）橋の役宅の（秋月右京亮種樹）に移った。二月一日、隊長の命によって岸嶋（由太郎）と尾関（雅二郎）がきた。横浜病院からけが人をすべて引き連れて、江戸泉（和泉）橋の医学所（所長松本良順）に移るようにしらせてきた。それで翌二日、横浜を出立し夕方品川に着く。翌三日、泉橋の医学所に入った。七日、近藤隊長が治療のため横浜に行く。その後召し出しがあったので、十日、尾関が横浜へ隊長を迎えに行った。十二日、隊長が登城した。将軍は東叡山で恭順あそばされるので、この警護をするようにということだった。十五日、新選組は半分ずつ勤めた。遊撃隊と交代ということになり、二十五日お役ご免となった。二十八日、（甲陽鎮撫隊をもって）甲府の鎮撫を仰せつかった。このための武器を渡され、大砲六門、本（元）込小銃二十五挺、ふたつはんとう本（元）込（二つバンドのミニエー銃）二百挺を受け取った。三月一日、梶（鍛冶）橋屋敷を出発する。近藤勇隊長、土方歳三副長、同士およそ百余人で甲府城に向かう。そして勝沼に宿陣した。甲府城の様子を聞けば、敵軍が入城し、おいおい江都へ押し来たるという報告であった。近藤土方両公は官軍の陣について評議し、形勢をさぐるため福田兵（平）馬という者に命じて出立させた。警護の者として十人ばかりが付き添ったが、敵陣の間近で大砲と小銃を激しく撃たれ、やむを得ず途中から引き返し、本営へ伝え、すぐさま手配りをして、本営の途中に関門をもうけ、三人の番兵をおいた。このとき敵兵七百人あまりが関門へ押しきた。番兵の者も応戦し、小銃を撃ったが甲斐なく本営まで引き揚げ、このことを伝えた。敵は早くも所々で戦争を始め、六日の九つ時（昼頃）から八つ時（午後二時頃）まで続いた。優勢であったが、敵は大群でかつ押し迫ってきたのでついに敗走した。七つ時（午後四時頃）に猿橋に引き揚げる。その後江戸に引き揚げ今戸の称福寺で一泊する。ここから五兵衛新田で宿陣し

た。ここで兵士を集め、およそ二百人あまりが集まり、ここから下総の流山にいき、宿陣した。
四月三日の昼、敵兵に不意に襲われた。このとき薩藩の有馬東（藤）太という者が応接として本営にきた。これに土方公が会い、話をした。近藤公と付き添いの野村利三郎、村上三郎が有馬と一緒に板橋の官軍本営へいった。村上三郎は途中で流山に帰ってきた。この夜、土方公は付き添いの両人をつれて江戸に行き、大久保一翁、勝安房の両公と対談した。これより形勢を寮（察）してしばらく江都にいた。このとき相馬（主計）が大久保、勝、土方公の封書をもって板橋へ行った。近藤公へ渡した。このとき近藤公は官軍の者と議論しており、むろん潔白であるとし、官軍もことごとく納得した。しかしその能力をおそれて謹慎を申しつけた。付き添いの野村と相馬は途中より帰ってきた。
同二十五日、板橋で斬られた。近藤公の死に臨む顔色は平生とかわりなく従容として死につき、見る者は涙をながして近藤公を惜しんだ。実に古今の無双の人傑である。

近藤勇の漢詩（個人蔵）

解　　説

　十日、新選組は旧幕軍と共に天保山沖の富士山艦で江戸に戻った。将軍慶喜はすでに東叡山で恭順し、二月十二日、新選組はその警護につとめた。

「二十八日、甲府の鎮撫を仰せつかった」

　起死回生を目論んだ近藤、土方は甲陽鎮撫隊を組織、旧幕府より大砲六門、元込小銃二十五挺と隊士に十両、局長付隊士に五両が支給され、三月一日、百二十一人で甲州勝沼へ進軍した。近藤は福田平馬に新政府軍の牽制を命じたものの、福田は小銃を浴びせられて引き返してきた。新政府軍は七百人の精兵をもって雲霞の如く押し寄せ、土方は援軍を求め江戸へ走ったがならず、ついに大敗した。

　下総の流山で宿陣した。四月三日、近藤は新政府軍に包囲され、近藤は投降し連行された。

土方は江戸に走り大久保一翁と勝海舟に近藤助命を嘆願するもかなわず、二十五日、近藤は板橋の刑場で斬首された。行年三十五歳だった。

「近藤公の死に臨む顔色は平生とかわりなく従容として死につき、見る者は涙をながして近藤公を惜しんだ。実に古今の無双の人傑である」

　島田は近藤の最期を最高の言葉をもって賛美し追悼としている。

慶喜天保山乗船の図

甲州勝沼の戦いの図

右流山ニ屯集致シ居候兵隊、近藤土方両公板橋江都被参ヲ見送リ、同四日兵器ヲ官軍ヱ差出ス、士兵尽ク会ニ落ル、我輩同夜半ニ隊ノ軍用ノ金ヲ集メ舟ニテ今戸ニ至リ、土方公ニ面シ丸ノ内ナル酒井屋敷ニ移ル、凡十日斗リ逗留ス、同十一日江戸城遂ニ官勅使ヱ引渡シニ相定ル、是ニヲイテ土方公榎本公等評議ヲ決シ、海軍ハ尽ク軍艦ニ乗込、陸軍ハ追々脱走ス、恢復之謀ヲ約シ、同十日夜半仕度ヲシ今戸ヨリ八幡宮別当寺ニ来ル、明十一日小梅ヲ直様市川駅ヲ過、鴻ノ台ニテ一泊ス、此所ニテ脱ヲ相調へ、凡三千余人同所ニ集会ス、於之土方公、大鳥公、秋月公評議ノ上大鳥某第二大隊ノ七聯隊等ヲ本道ヨリ宇都宮城ヱ向フ、土方某秋月某ト第一大隊、回天隊、新士官隊ヲ引テ水街道ヨリ走土村ニ至ル

時ニ軍監井上清之進、峯松之介、倉田巴、我輩四人於之東照神君ノ白旗ヲ翻シ勢揃ヲシ夫ヨリ常刕下妻井上辰若丸使節ヲ以テ封書ヲ送リ、直ニ辰若丸殿当陣門ニ来リ、同志ス、依之秋月某精兵四百人余ヲ以テ下妻陣屋ヲ巡リ、土方公ハ弐百五十有余人ヲ引テ同ク下館城ニ向フ、同十七日暁天同所城主石川若狭守城下ニ至リ、直ニ兵隊尽ク散兵ニ配リ付大手前エ大炮ヲ備エ、裏門エ右同様ニ備エヲ設ケ、此時土方公ハ大手通リニ本営ヲ取リ軍監井上清之進、倉田巴、我等右三人為応接入城シ、家老ニ談ス、直様家老二名用人一名同道シテ本営ニ来ル、石川若狭守家中一同徳川家江同志之旨言上ス、夫ヨリ兵粮弾薬ヲ調エ宇都宮エ向フ、尤当城下ニ於テ秋月公兵隊不残会合ス、同十八日出立途中三泊ス、軍監島田魁伝習八番小隊ヲ率テ下妻ニ行ク、然ルニ結城ノ残兵絹川ニ来リ、直ニ銃ヲ放チ暫時戦フ、遂ニ敵敗走ス、分捕リ大炮二門小銃数不分長持二サヲ馬七疋、同十九日宇都宮城下近ク迄押寄ケレハ、敵兵防禦シ烈布発炮シ敵次第ニ崩レ立追々城中ヱ引籠発炮ス、味方乗機ニ速ニ鯨声ヲ挙ケ城下ニ逼ル、放火シテ烈布大小炮打立テ於此城ノ内外尽ク火ト成リ、敵狼狽シテ城ヲ捨テ逃去、右戦争ハ朝四ツ時頃ヨリ始マリ夕七ツ時落城ス、此時城外ニテ宿陣ス、翌廿日入城ス、分捕器械弾薬兵粮不可勝数、於此当城下尽ク救米ヲ出シ、兵隊一同城中ニテ休息ス、夫ヨリ評議一決シ二十二日暁七ツ時壬生城ニ打向フ、敗走シテ四ツ時頃宇都宮城ヱ引揚ケ休ス、同廿三日早天ヨリ壬生口番兵所ヱ敵大軍ヲ以テ押来ル、右ニ付番兵所ヲ揚ケ城外ニテ互ニ発炮大戦争ト相成、九ツ時此土方秋月両公怪我ヲ受ケ、日光口今市駅ヱ宿陣ス、此是諸隊不残夕七ツ時日光口ヱ引揚、宇津宮城ハ又敵ノ有トナル、同廿四日日光口今市両所ヱ引揚ケ屯集ス、千人隊土方勇太郎来リ云々有之、既ニシ昼九ツ時秋月、土方両公警衛十余人引連会津ヱ引揚ル、廿六日会ノ領内田島陣屋ニ至ル、当所ニテ有故秋月公ト別レ我輩、漢一郎、中島登、畠山二郎、

沢忠介、松沢音造引連レ、大内通リヨリ廿九日会津城下七日町清水屋ヱ着ス、於是先流山ヨリ散乱ノ諸英士悉ク集会ス
土方公当家ニ養療ス、先ニ秋月、土方両公会ニ引揚ルヤ兵隊尽ク大鳥某江托シ置ル、然ル処兵隊大鳥某ニ服セス趣モ有之、前顕ノ訣故土方公会着、後当藩山川大内蔵ト申者ヲシテ惣督ニ命シ日光口ニ向ハシム、夫ヨリ戦争数度相始リ互ニ勝敗有リ云
新選組隊長山口二郎被命当隊百三十余人ヲ引率シ、白川ノ方向ヱ出張之被命於是ヲイテ閏四月五日当隊会公ニ謁ス、公賜ニ金簟ヲ以テ同六日出陣、赤津ヱ一泊ス、同七日三代村宿陣ス、於是旬日休ス、廿一日白川城ニ向フ、此日白川城落ル、同廿二日城下ニ宿陣ス、同廿三日白坂関門当隊持ト定ル、此時白川口総督会藩横山主税ナリ、同廿五日夜半白坂土民ヨリ官軍四百人余押来リ候旨注進有之、直ニ番兵所ヨリ当本営ヱ申来ル、右ニ付当隊不残関門ヱ出張ス、無程敵兵関門外押来ル、互ニ発炮シ大戦争ト相成ル、昼九ツ時頃敵兵尽ク敗ス、分捕小銃大小其外雑物多分有之、直ニ元ノ如当隊一同関門エ屯集ス、同晦日夕七ツ時仙藩ニ右関門渡シ当隊ハ夫ヨリ本町本陣柳屋ニテ休陣ス
此日棚倉、二本松、仙台凡二千人程白川表エ詰ル、同五月朔日暁六ツ時前黒川口百姓共ヨリ官兵二千余人押来リ候注進有之、直様黒川ニテ戦争相始、此時敵軍大勢ニテ諸道ヨリ責掛ケ大炮小銃雨ノ如ク打込ミ味方遂ニ敗走シテ仙台口、会口両道ヱ引上ケ当隊モ勢主堂ニテ一泊ス、此日惣督横山主税討死ス、同二日同所出立、三代村ニ宿陣、当中旬米藩一大隊応援トシテ長沼ニ出張ス、同廿六日白川関門迄押寄戦争相始メ互ニ発炮ニ及ヒ又々敗走シテ上古屋村迄引上ケ休陣ス、廿七日当隊並ニ会遊撃隊合兵シテ大弥地村ヨリ白川口エ向フ所早敵兵当村迄繰出シ、昼九ツ時ヨリ戦争ト相成、味方兵隊不残山之上ヱ散兵ニ配リ付、烈シク打掛ケレハ、敵追々引上ケ一旦勝利ナレドモ応援ナクシテ遂ニ敗走シテ、巻田村迄夜中引上ケ数日休陣ス、此戦ニテ我輩手負ヒ福良村病院ニ行ク
此時松平若狭守福良村ヱ御出陣被遊当所エ当隊一同御呼出シニ相成可肯会藩達野某奉命シテ来、直ニ当村ヱ罷出拝謁ス、公賜ニ黄金自カラ下ル、当村病院ニテ我輩若君ヨリ自カラ廿五両金ヲ賜ハル、隊一同当村ニテ両三日休兵ス、夫ヨリ大平口エ出兵被命、同六月六日大平口出兵ス、両三日休兵、夫ヨリ羽太村迄出張ス、同十二日諸道ヨリ白川城ニ向フ、此時羽太口ハ土屋隊、原田隊、上田隊並ニ当隊兵合シテ柏野村ニ掛リ雷神山ヨリ入道山米迄進撃ス、敵尽ク逃去ル、既ニシテ熊倉口敗走、於是雷神山ヲ引上ケ大熊川台場ニテ戦争ス、此時無程互ニ引分ル、各隊引テ元ノ如ク羽太村ニ帰ル、仙台、棚倉両道

始メ勝利ニシテ後遂ニ敗レ休陣ス、是ヨリ越後口並ニ日光口日々々戦争始マル、白川口ニテモ右同様也

流山に屯集していた兵隊は近藤土方両公を板橋江都まで見送り、同月四日、官軍へ兵器を差し出した。兵士はことごとく会津へ落ち延びた。私は同夜、隊に軍用の金を集めて今戸へ行き、土方公に会い丸の内の酒井屋敷に移った（実は酒井屋敷ではなく秋月右京亮種樹屋敷だった）。およそ十日ばかり逗留した。同十一日、江戸城がついに官軍の勅使へ引き渡された。こういうことになったので、土方公は榎本（武揚）公らと評議して、海軍はすべて軍艦に乗り込み、陸軍は江戸を脱走することになった。挽回を謀り、十日夜半支度をして今戸から八幡宮別当寺の慶養寺に行った。あくる十一日、小梅からすぐさま市川をすぎて鴻の台で一泊した。ここで脱走軍の陣容を整え、三千余人が同所に集まった。ここで土方公、大鳥（圭介）公、秋月（悌次郎）公が評議し、大鳥公の第二大隊の七連隊等が本道から宇都宮城へ向かった。土方公と秋月公は第一大隊、回天隊、新士官隊を引（率）いて水街（海）道より走土（宗道）村に至った。
軍監の井上清之進、峯松之介、倉田巴（本名は立見鑑三郎尚文）、私の四人は東照神君の白旗を翻して勢揃いをし、これより常（上）州下妻井上辰若丸の使節に封書を送ると、すぐに辰若丸殿がこちらの陣門にきて、同志となった。これにより秋月公は精兵四百人あまりをもって下妻陣屋を囲み、土方公は二百五十人あまりを引（率）いて同じく下館城に向かった。同十七日明け方、城主の石川若狭守の城下にいき、すぐに兵隊をことごとく配置し、大手門の前へ大砲を備え、裏門へも同様に備えをもうけ、このとき土方公は大手通りに本営をおき、軍監井上清之進、倉田巴、私の三人が応接のため入城し、家老と話をした。すぐさま家老二名と用人一名が同道して本営にきた。石川若狭守の家中は一同徳川家の同志であることを言上した。それから兵糧弾薬を調えて宇都宮へ向かう。この城下で秋月公の兵隊も残らず集合した。同十八日、出立し、途中三泊する。軍監島田魁は伝習八番小隊を率いて下妻に行く。すると結城の残兵が絹川にいて、すぐに銃をはなって暫時戦った。ついに敵は敗走した。大砲二門、小銃数わからず、長持二さお、馬七匹を分捕った。同十九日、宇都宮城下近くまで押し寄せると、敵兵が防御したので、激しく発砲すると、敵はおいおい城中へ引き籠もって発砲した。味方は機に乗じ、速やかに鬨の声をあげ、城下にせまる。火を放って激しく大小砲を撃ち、城の内外にことごとく火がまわった。敵は狼狽して城を捨て、逃げ去った。この戦争は朝四つ時（午前十時）頃から始まり夕方の七つ時（午後四時）に落城した。このとき城外で宿陣した。翌二十日、入城した。武器弾薬兵糧を数わからず分捕る。この城下に救米を出し、兵隊一同城中で休息した。これより評議で決まり、二十二日明け方七つ時（午前四時頃

）、壬生城に向かう。敗走して四つ時（午前十時）頃宇都宮城へ引き揚げ休む。同二十三日、早くより壬生口番兵のところへ敵大軍をもって押しくる。それで番兵所を引き揚げ、城外で互いに発砲、大戦争となる。九つ時（昼頃）土方、秋月両公がけがをして、日光口今市に宿陣する。それで諸隊残らず夕七つ時（午後四時）に日光口へ引き揚げ、宇津（都）宮城はまた敵のものとなる。同二十四日、日光口今市両方へ引き揚げ屯集する。千人隊（千人同心）の土方勇太郎がきたということだ。昼九つ時、秋月、土方両公は警護十余人を引き連れ会津へ引き揚げた。二十六日、会津領内の田島陣屋に着く。ここで故あって秋月公と別れ、我輩、漢かん一いち郎ろう、中なか島じま登のぼり、畠山二郎、土方の馬丁の沢忠介、松沢音造を引き連れ、大内通りより二十九日会津城下の七日町清水屋へ到着する。この先、流山より散乱の同志がことごとく集まった。
土方公は当家で療養した。先に秋月、土方両公は会津に引き揚げるとき、兵隊をことごとく大鳥公に託していた。しかし諸兵隊は大鳥公に服さない趣もあり、そのため土方公が会津に着くと、会津藩の山川大内蔵（大蔵）と申す者を惣（総）督に命じ、日光口に向かわせた。これより戦争が数度始まり、互いに勝敗があった。
新選組隊長に山口二郎（本名は斎藤一）が命じられ、新選組百三十余人を引率して、白川（河）の方向へ出張の命があり、そのため閏四月五日新選組は会津公に拝謁した。会津公から金を若干賜り、同六日、出陣する。赤津へ一泊した。同七日、三代村に宿陣する。十日ほど休む。二十一日、白川（河）城に向かう。同日、白川（河）城落ちる。同二十二日、城下に宿陣する。同二十三日、白坂関門が新選組の守備となる。このときの白川（河）口総督は会津藩の横山主税であった。同二十五日夜半、白坂の土地の者から、官軍四百人余りが押し来たるという情報があり、ただちに番兵所から本営へ報告された。そのため新選組は残らず関門へ出張した。ほどなく敵兵が関門の外へ押し寄せた。互いに発砲し大戦争となる。昼九つ時頃（正午）、敵兵はことごとく敗れる。小銃、大小（刀）そのほかいろいろなものを分捕り、すぐにもとのように新選組一同関門へ屯集した。同晦日、夕七つ時（午後四時）、仙台藩に関門を渡し新選組はこれより本町本陣の柳屋で休陣した。
この日、棚倉（藩）、二本松（藩）、仙台（藩）のおよそ二千人ほどが白川（河）に詰めた。同年五月一日明け方六つ時（午前六時）前、黒川口の百姓どもから官軍の兵二千人あまりが押し迫るという情報があり、すぐさま黒川で戦争がはじまった。このとき敵軍は大勢で、ほうぼうより責（攻）めかけ、大砲小銃雨のごとく撃ちこみ、味方はつい

に敗走して、仙台口、会津口の両道へ引き揚げ、新選組も勢主（至）堂で一泊した。この日、惣（総）督の横山主税が討死した。同二日、同所を出立、三代村に宿陣する。中旬、米沢藩の一大隊が応援として長沼に出張した。同二十六日、白川（河）関門まで押し迫り、戦争が始まり、互いに発砲におよび、またまた敗走して上古（小）屋（小屋）村まで引き揚げ休陣した。二十七日、新選組と会津遊撃隊と合流して大弥地村から白川（河）口へ向かうところを、早くも敵兵が村まで繰り出し、昼九つ時（正午）から戦争となり、味方の兵隊を残らず山の上へ配して、激しく撃ちかけると、敵はおいおい引き揚げ、いったんは勝利したが、応援がなく、ついに敗走し、巻田村まで夜中に引き揚げ、数日休陣した。この戦いで我輩もけがをし、福良村の病院にいった。
このとき松平若狭守（喜徳）が福良村へ御出陣あそばされ、そこへ新選組一同を呼び出すという命を、会津藩の達野某が伝えにきて、すぐに福良へまかり出て拝謁した。若狭守は黄金を自らの手で賜れた。福良の病院で我輩は若君（若狭守）から二十五両の金を賜った。新選組一同は福良村で二、三日休んだ。それから大平口へ出兵の命がくだった。同年六月六日大平口へ出兵する。二、三日休んだ。そこから羽太村まで出張する。同十二日、方々から白川（河）城に向かう。このとき羽太口から土屋隊、原田隊、上田隊ならびに新選組が合流して柏野村を通り、雷神山より入道山を経て米（村）まで進撃した。敵はことごとく逃げ去る。すでに熊倉口まで敗走した。そのため雷神山を引き揚げ大熊川台場で戦争になる。このときはほどなく引き分けた。各隊は元の羽太村に帰った。仙台、棚倉の両藩もはじめは勝利していたが、ついに敗れ休陣した。これより越後口並びに日光口で日に日に戦いが起こった。白川（河）口にても同様であった。

解　　説

　甲陽鎮撫隊での近藤の作戦指揮をめぐり永倉は失望し、新選組から袂を分かち原田とともに靖せい共きょう隊たいを組織した。隊長は芳賀宜道、副長に永倉と原田、士官取締が矢田健之助、歩兵取締に林、前野、中条、松本と新選組隊士がしめ、和わ田だ倉くら門にある会津屋敷跡に屯所を置き、米こめ田だ桂次郎の旧幕府歩兵三百人の一隊に従軍し、ほとんどの者が会津へ転戦した。
　土方は榎本武揚らと評議して海軍は軍艦に乗り込み、一方、陸軍も江戸を脱することになった。
「脱走軍の陣容を整え、三千余人が同所に集まった」
　島田はじめ軍監の井上清之進、峯松之介、倉田巴こと立見鑑三郎の四人は輪王寺宮が大書した東照大権現の大幟を押し立てて進軍した。島田は伝習八番小隊を率いて下妻に走った。
　日記には新政府軍との交戦を互角で戦ったように綴っているが、土方は負傷し、新選組隊士はバラバラに敗走し会津に向かった。旧幕府軍は大鳥圭介を隊長に任じたが対立する意見が隊士間にあって会津藩の山川大蔵が総督になり日光口に出陣した。
「新選組隊長に山口二郎が命じられ、新選組百三十余人を引率して、白河の方向へ出張の命があり、そのため閏四月五日の新選組は会津公に拝謁した」
　新選組隊長の山口二郎は斎藤一の変名で身長百八十センチの大男、新選組をたて直し、後からきた土方と合流し白河口へ出陣、松平容保より軍資金を下賜された。
　五月二十七日、新選組は会津遊撃隊と合流して大谷地村より白河口に進軍するも敗れて牧ノ内まで敗走した。前日にも白河城奪還に失敗していた。この戦いで島田は負傷し福良村の病院で治療を受けている。
「福良の病院で我輩は若君から二十五両の金を賜った」
「若君」とは松平容保の世嗣若狭守喜徳のことで島田は二十五両を下賜された。見舞金だったのだろうか。

会津方面戦線関係略図

至仙台
米沢
福島
磐梯山
土湯
熊倉
猪苗代
母成峠
二本松
十六橋
中山峠
若松
猪苗代湖
三春
郡山
守山
勢至堂
羽鳥
白河
至磐城
棚倉
至日光
至江戸

同七月朔日羽太村ヨリ繰出シ、柏野ニ大炮ヲ備エ雷神山ヨリ米村迄進撃、熊谷口ハ守山ヱ責登リ諸道ヨリ戦争ニ及候所敵敗軍ノ容ニ相見天神山迄責込、味方一旦勝利ノ所不斗モ敵兵金清寺山ニ廻リ出、腹背ヨリ烈布討掛ラレ遂ニクツレ立夕景羽村迄引揚ケ休陣ス、此時土方公医療ヲ受ケ漸全快ス、押テ福良村迄出張ニ相成当隊一同長沼駅ヨリ町守屋エ廻リ候様被命即時出立、長沼ニ両三日休陣ス、夫ヨリ町守屋ニ至リ同所休陣ス、同八月朔日同所出立、仙台口ニ向ヒケレハ既ニ三春ハ敵地ト相成、二本松モ又落城ス
依之土方秋月両公始メ伝習第一大隊、回天隊、当隊三代ニ引揚ケ中地舟津村右三ケ所ニ休陣ス、同十八日二本松口ヱ出張被命三隊共出立、猪苗代城下ニ一泊ス、同十九日諸隊評議ノ上勝軍山口ニテ戦争始ル、味方次第崩立遂ニ勝軍山迄引揚ノ注進有之ニ付、夕景ヨリ諸隊本地古屋出立、勝軍山ニ至ル、此戦ニ我輩傷スレ共土方公ノ命在リテ出張ス、然レドモ我城下ニ引揚ル、同廿一日朝六ツ時頃ヨリ敵兵二千余押来リ、既ニ中軍山八幡穴大戦争ニ相成、互ニ烈ク発炮ニ及ヒ候所、敵兵右手ノ山上より裏切致シ味方遂ニ敗走、此時敵伏兵ヲ設ケ味方又散乱ス、土方山口公猪苗代城ニテ会ノ軍事方ト評議シ上土方公ハ戸ノ口ヱ十六橋エ向フ、同廿二日敵兵猪苗代ヱ責寄ス、於此山口某ト共ニ二橋エ引揚ケ、直ニ若松城下ニ至リ、山口公直様登前顕ノ由ヲ言上、依之若松城下ニ残リ居戦士尽ク滝沢峠二橋ノ両道ニ向ハシム、当隊ハ天寧寺エ集リ一泊ス
同二十二日敵兵大軍ヲ以テ十六橋ヨリ滝沢峠江押来リ、会公土方公滝峠ニ出陣ス、既ニシテ十六橋滝沢峠ニテ戦争始リ互ニ大小炮打掛ケ、味方不利ニシテ追々繰引ニテ城下迄引揚ル、四ツ時比敵兵遂ニ城下ニ迫リ発炮ス、味方尽ク籠城ス、我此時ユモトヨリ南ホヤ沢江引揚ケ、此所ニテ関門ヲ立兵ヲ集メ籠城ス、惣兵凡九千余也、外ニ兵粮弾薬取扱フ女兵一千余、当隊モ一同城中ニ入我直ニ兵ヲ引テ北方面ニ向フ、米沢口塩川ニ陣ス、城下敵兵入込市中放火ス、此日ヨリ敵市中ニ陣ス、且当リ近所ノ山々ヱ大炮ヲ備ヱ炮声昼夜止ムコトナシ、是ヨリ白川口、日光口、越後口追々繰引ニ引上ケ、大内峠並ニ越後本道同間道陣ケ峯等ハ戦ヒ且退テ若松ニ帰ル、夫ヨリ脱兵二千余塩川小田付辺ニ宿陣ス、同九月四日高久村ニテ戦争相始リ、当隊ヨリ応援トシテ一小隊繰出ス、然ルニ無程如来堂ノ本堂エ敵兵不意ニ押寄セ、直様接戦相始リ、何分味方二十余人ノ小勢故外防禦ノ術ナク尽ク討死ス
夫ヨリ大塩村小田付辺ニ屯集ノ兵隊並ニ当隊凡二千余人、兵粮弾薬ニ差支無是非一同評決ノ上仙台并ニ福島ニ趣、是ヨリ北方不残敵ノ有ト成ル、同九日夜出立土湯村一泊ス、是ヨリ先米藩ハ敵地ト相成リ、右米藩ニテハ福島エ出兵有之、不得止脱兵尽ク仙台城ニ

趣ク、此時土方公仙府ニ在リ、公ヲ慕フ来会表ノ者凡二千人、皆ナ仙ノ城下ニ宿陣ス、当隊モ於此公ニ面会シ会表ノ瓦解之件々逐一言上ス、是ヨリ脱走銘々ノ志ヲ以テ仙府ニ恭順スル者モ有之

時ニ徳川氏ノ軍艦八艘仙ノ寒風沢ニ碇泊シ、然ルニ仙モ恭順ノ容ニ相見エ候ニ付松島ニ行ク、脱走悉ク此辺ノ島ニ来ル、当隊里浜ニ転陣ス、石ノ巻港并日和山ニテ脱兵二千人程練兵ス、当隊二十余、然ルニ桑名、唐津、板倉ノ三藩卒余人、伝習隊三十余人、当隊ニ加入ス、右ニ付島田魁隊長夫ヨリ十月中旬大江艦ニ乗込、各艦悉ク中旬開帆シ筥館ニ行ク

近藤隊長ノ墓会津侯ヨリ天寧寺山ノ上ニテ相建チ四月廿五日　法名貫天院殿純忠誠義大居士ト云　法名会君侯ヨリ付ラル

同年七月一日、羽太村から繰り出し、柏野に大砲を備えて雷神山より米村まで進撃した。熊谷口（熊倉口）から守（中）山へ責（攻）め上り、諸道で戦闘におよんだところ、敵が敗けたように見えたので、天神山まで責（攻）め込んだ。味方はいったん勝利したが、はからずも敵兵が金清（勝）寺山に廻り出て、腹背よりはげしく撃ちかけられ、ついに崩れ立ち、夕方羽村（羽鳥村）まで引き揚げ、休陣した。このとき土方公は治療を受けてようやく全快した。まもなく福良村まで出張し、新選組一同に長沼駅より町守屋へ廻るように命令を受け、即時出立、長沼で二、三日休陣した。そこから町守屋へ至り、ここで休陣する。同年八月一日、同所を出立、仙台口に向かうがすでに三春は敵地となり、二本松もまた落城した。

これより土方秋月両公はじめ伝習第一大隊、回天隊、新選組は三み代よに引き揚げ、中地、舟津村の三カ所に休陣する。同十八日二本松口へ出張の命令があり、三隊がともに出立、猪苗代城下に一泊する。同十九日、諸隊評議の上、勝軍山口にて戦闘がはじまる。味方は次第に崩れ立ち、ついに勝軍山まで引き揚げの報告があり、夕方から諸隊は本地古屋を出立、勝軍山に至る。この戦いで我輩は負傷したが、土方公の命令があって出張した。しかし、私は城下に引き揚げた。同月二十一日、朝六つ時頃（午前六時頃）より敵兵二千あまりが押しきて、すでに中軍山、八幡穴（八幡山）は大戦争となり、たがいに激しく発砲におよんだところ、敵は右手の山上より裏を通り、味方はついに敗走。このとき敵の伏兵によって味方はまた散乱した。土方公と山口公は猪苗代城で会津軍の軍事方と評議をした上、土方公は戸の口から十六橋へ向かう。同月二十二日、敵兵は猪苗代へ責（攻）め寄せた。ここにおいて山口某とともに二につ（日）橋ぱしへ引き揚げ、すぐに若松城下にいたり、山口公はすぐさま登城し、戦況を言上。これによって若松城下に残っていた隊士はことごとく滝沢峠と二（日）橋の両方に向かった。新選組は天寧寺へ集まり一泊した。

同月二十二日、敵は大軍をもって十六橋より滝沢峠へ押し迫り、会津侯、土方公は滝沢峠に出陣した。すでにして十六橋、滝沢峠にて戦争がはじまり、互いに大小砲を撃ちかけ、味方は不利になり、追々城下まで引き揚げる。四つ時（午前十時）ごろ、敵兵はついに城下に迫り発砲した。味方はことごとく籠城した。私はこのとき、湯本より南ほや沢へ引き揚げ、この場所で関門を立てて兵を集めて籠城した。惣（総）兵数九千余だった。ほかに兵糧弾薬を取り扱う女兵が一千余、新選組も一同城中に入り、私はすぐに兵を率いて北方面に向かった。米沢口塩川に陣をはった。城下には敵兵が入り込み、市中

に放火をした。この日より敵は市中に陣をかまえた。かつ、あたり近所の山々へ大砲をそなえ、砲声は昼夜止むことはなかった。これより白川（河）口、日光口、越後口へ追々引き揚げ、大内峠並びに越後本道と間道、陣ヶ峯などでは戦いつつ退いて若松に帰る。これより脱走兵二千余は、塩川小田付近に宿陣した。同年九月四日高久村で戦闘がはじまり、新選組より応援として一小隊が繰り出した。するとほどなく如来堂の本堂へ敵兵が不意に押し寄せ、すぐさま接戦となったが、なにぶんにも味方は二十余人の小勢で、防御のすべなくことごとく討ち死にした。

これより大塩村小田付近に屯集の兵隊ならびに新選組およそ二千余人は、兵糧弾薬にも差し支え、ぜひもなく一同評決の上、仙台ならびに福島に趣（赴）く。これより北方は残らず敵のものとなる。同月九日、夜出立、土湯村に一泊する。これより先、米沢藩は敵地となり、米沢藩から福島へ兵を出した。やむを得ず脱走兵はことごとく仙台城に趣（赴）く。このとき土方公は仙台にいた。土方公を慕う会津からの者、およそ二千人。皆、仙台の城下に宿陣した。新選組もここにおいて土方公に面会し、会津の瓦解のことを逐一報告した。これより脱走兵めいめいの志をもって仙台に恭順する者もあった。

このとき、徳川家の軍艦八艘が仙台の寒風沢に停泊していたが、仙台も恭順のようにみえたので、松島に行った。脱走したものはことごとくこのあたりの島にきた。新選組は里浜に転陣した。石巻港並びに日和山で脱走兵二千人ほどを訓練した。新選組二十余人、そこへ桑名、唐津、板倉の三藩の兵卒余人、伝習隊三十余人が新選組に加入した。そして島田魁隊長はこれより十月中旬に大江艦に乗り込み、各艦ことごとく中旬に出帆し、箱館に行く。

近藤隊長の墓は会津侯より天寧寺山の上に建てられ、

四月二十五日

法名「貫天院殿純忠誠義大居士」という。法名は会津侯よりつけられた。

解　　説

　旧幕府軍は奥羽越列藩同盟を結成し、新政府軍二万に対し、長岡、会津、米沢の各藩五千で戦った。河井継之助率いる長岡藩は善戦したものの敗れた。

　七月一日、新選組は再度、白河奪還を試みるが失敗した。

「このとき土方公は治療を受けてようやく全快した」

　土方は戦闘に復帰した。

「これより土方、秋月両公はじめ伝習第一大隊、回天隊、新選組は三み代よに引き揚げ、中地、舟津村の三カ所に休陣する」

　八月一日、新選組は三代に退き、十八日、猪苗代に転戦、十九日、新選組への母成峠出陣が決せられたが、日記ではこの日を開戦日と勘違い、おそらく「中島登覚え書」を一部分写した可能性もある。

　一方、新政府軍は十七日、二本松で軍議を開いた。土佐の板垣退助と薩摩の伊地知正治が会津攻めで激しく対立した。板垣の作戦は御ご霊りょう櫃びつ峠から猪苗代湖の南まわりで会津に入る。伊地知は母成峠から猪苗代湖の北まわりであった。結局二手から進軍した。大鳥は「この陣（母成峠）は曠こう漠ばくとして、山も坦たん夷いなるをもって、防ぐに甚だ難渋なり」と、陣を張るには広大すぎ、とても旧幕府軍の兵力で守れるものではないと指摘していた。

　このあたりから敗色が濃くなり、土方と山口は猪苗代へ入り会津軍事方と評議の上、戸ノ口から十六橋に向かう。新政府軍の攻勢は増すばかりで猪苗代に攻め入り、島田らは日につ橋ぱしへ引き揚げ若松城下に入り、山口はさっそく登城し松平容保に戦況を報告したと日記に綴るが「中島登覚え書」では、すでに新政府軍に占領されていて入城できず、北方へ向かったとある。定説では新選組の入城はなかったとされている。

　新政府軍は米沢藩をおとし福島へ出兵した。

「土方公を慕う会津からの者、およそ二千人。皆、仙台の城下に宿陣した。新選組もここにおいて土方公に面会し、会津の瓦解のことを逐一報告した」

　ここで敗戦を迎えた。ある者は恭順し、ある者は箱館でもう一戦を交える志で大江艦に乗り込み出帆した。

「近藤隊長の墓は会津侯より天寧寺山の上に建てられ」

近藤の墓碑は松平容保よりの志で戒名の「貫天院殿純忠誠義大居士」とつけられた。一冊目の日記はここで終わっている。

第五章 島田魁日記 二

箱館戦争之図

明治二己巳歳

日　　　記

慶応四辰八月上旬、官軍奥羽ニテ戦フ、然ルニ徳川軍艦品海ニ碇ス、開陽艦将榎本釜次郎海軍総裁ヲ任ス、回天艦将、芝誠一副総裁ヲ任ス、蟠龍艦、神速艦、千代田艦、長鯨艦運船、寒麟丸帆運軍船、三加保帆運軍船、長崎艦先ニ仙台ニ行各艦分数已ニ定ル
陸軍奉行松平太郎開陽艦ニ乗ス、且兵悉ク各艦ニ乗ス、永井玄蕃回天艦ニ乗ス、時ニ奥羽ノ戦ヒ已ニ迫ル、我艦是ノ戦ヒヲ援ハント欲シ八月十九日三更夜ノ闌ニ従ヒ品海ヲ開帆ス、廿一日黄昏ニシテ鹿島灘ヲ走ル、暴風激浪天ニ漲キリ艦ヲシテ行不能忽ニシテ艦悉ク四方ニ散ス、其勢ヒ蛟龍ノ雲ヲ凌テ昇天スルニ似リ、艦殆ト覆没セント欲ス、艦中大ニ百辛千苦ノ思ヲナス、逃テ輪声ヲ急ニシテ走ル
先後有ト雖廿七日悉ク仙台寒風沢港ニ着ス、然レドモ帆運二艘来ル不能三加保官艦ニ囲マレ不得止自焼シテ上陸四散ス、寒麟清水港ニ入、官軍艦直ニ来リ奪テ品海ニ行人員皆上陸ス
開陽、回天ノ両艦少シク損ス、直ニ是ヲ修ス、長崎艦神木隊数十人乗シテ千代田艦ト羽ノ戦ヲ援ント欲シ庄内ニ行途ニシテ暴風長崎艦飛島ニ達シ、暴風尚烈布艦破船ス、人員酒田港ニ上陸ス後ニ魯国ノ艦ヲ僦シテ筥館ヨリ之ヲ向フ千代田艦行不能途ニシテ帰ル、然ルニ奥羽ノ形勢ヲ聞ニ已ニ迫リ忽ニシテ会城中ニ籠リ奮戦スト雖遂ニ降ル、亦官軍仙府ニ迫ル由亦仙台侯降ルト云、我軍凡二千余皆各艦ニ乗ス、大江丸、鳳凰丸、元徳川ノ船仙台ニ預ケトモニ出帆スル額兵隊仙台ノ強兵五百人余脱シテ艦ニ乗ス、十月十一日悉ク開帆ス、独リ回天艦気仙地名ニ至リ千秋丸元徳川ノ舟仙台ニ預ケ官軍此舟ヲ奪テ乗ルヲ奪ヲ、直ニ開帆ス、先後有ト雖十六日南部鍬ケ崎港ニ着ス、十七日悉ク開帆ス、廿二日ニ至リ艦皆鷲ノ木ニ着ス、直ニ兵ヲ上陸サス

明治二己巳歳

日　　記

慶応四辰年八月上旬、官軍は奥羽で戦う。それで徳川の軍艦は品川沖に停泊していた。開陽艦長榎本釜次郎は海軍総裁を任ぜられた。回天艦長の芝誠一は副総裁を任命された。蟠竜艦、神速艦、千代田艦、長鯨艦・運船、寒麟（咸臨）丸・帆運軍船、三（美）加保・帆運軍船、長崎艦、さきに仙台にいき、各艦に分乗する（兵の）数がすでに定まった。

陸軍奉行松平太郎は開陽艦に乗船した。兵もことごとく各艦に乗り込んだ。永井玄蕃（尚なお志ゆき）は回天艦に乗った。すでに奥羽の戦いがせまっていた。わが艦はこの戦いを救おうとして、八月十九日三更（子の刻）の闇にまぎれて品川を出航した。二十一日、黄昏に鹿島灘を走る。暴風激しく、波は天に漲り、船を航行不能にし、そのため船は四方に散らばった。その勢いは水蛇みずちが雲をしのいで昇天するさまに似ていた。船はほとんど沈没すると思われた。船中、大いに百辛千苦の思いをした。速度を上げて逃げ走る。

前後はあるが二十七日、ことごとく仙台寒風沢港に着く。しかし帆船二艘がこられなくなり、三（美）加保は官軍の船に囲まれやむを得ず自焼したため、上陸し四散した。寒麟（咸臨）丸は清水港に入っていた。官軍の船がすぐにきて奪い、品川港に曳航した。（咸臨丸の）人員は皆（清水港に）上陸した。

開陽、回天の両艦は少し損傷していた。すぐにこれを修理した。長崎艦には神木隊数十人が乗り千代田艦と出羽の戦いを援護しようと庄内にいく途中、暴風で長崎艦は飛島に達し、暴風なおはげしく船は破壊した。人員は酒田港に上陸した。のちに露国（ロシア）の船をやとって箱館よりこれをむかえにいった。千代田艦は航行不能となり途中で帰る。奥羽の形勢を聞くと、官軍がせまり、会津城に籠もって奮戦したが、ついに落城した。かつ官軍は仙台に攻め入るとのことを聞いて、仙台侯も降伏するという。旧幕軍およそ二千余は皆各艦に乗船した。大江丸、鳳凰丸、仙台預けの元徳川の船とともに出航する。額兵隊仙台の強兵五百人余が脱して船に乗る。十月十一日、ことごとく出航する。ひとり回天艦は気仙（地名）に至り千秋丸（元徳川の船で仙台に預けていたが官軍はこの船を奪って乗っていた）を奪う。すぐに出発する。前後はあるが、十六日南部鍬ヶ

崎港に着く。十七日、すべての船が出航する。二十二日、船はみな鷲の木に到着した。すぐに兵を上陸させた。

箱館周辺略図

解　　説

　二冊目の日記は「慶応四辰年八月上旬、官軍は奥羽で戦う」からはじまる。
「わが艦はこの戦いを救おうとして、八月十九日三更（子の刻）の闇にまぎれて品川を出航した。二十一日、黄昏に鹿島灘を走る。暴風激しく、波は天に漲り、船を航行不能にし、そのため船は四方に散らばった。その勢いは水蛇みずちが雲をしのいで昇天するさまに似ていた。船はほとんど沈没すると思われた。船中、大いに百辛千苦の思いをした」
　散文調で島田の文才の一面をのぞかせている。
　八月二十七日、旧幕府海軍副総裁榎本武揚は新政府軍への軍艦引き渡しを断り、開陽、回天、蟠竜、神速、千代田、長鯨、美加保、咸臨の八艦をもって品川沖から出帆したが、島田の記述にみえるように暴風に巻き込まれ、銚子沖で美加保、咸臨の二艦を失い、バラバラで仙台湾に入った。
　母艦となった開陽は一八六五年オランダ製。バーク型三本マスト、四百馬力蒸気船、全長七十二・八メートル、大砲二十六門、乗組員最大五百人であった。
「美加保は官軍の船に囲まれやむを得ず自焼したため、上陸し四散した。咸臨丸は清水港に入っていた。官軍の船がすぐにきて奪い、品川港に曳航した」
　この時、咸臨丸の乗組員はすべて清水港に上陸した。ほかの長崎、千代田の両艦も暴風で破壊していた。
「奥羽の形勢を聞くと、官軍がせまり、会津城に籠もって奮戦したが、ついに落城した」
　会津、庄内の二藩を救うため奥羽越列藩同盟を結び新政府軍を迎えうつこととなった。もともと同盟は一枚岩でなく次々に脱落し会津は孤立、九月十五日には仙台藩主伊だ達て慶よし邦くにも降伏謝罪書を提出するに至った。同盟は事実上解体し一週間後の二十二日会津鶴ヶ城も落城した。
「二十二日、船はみな鷲の木に到着した」
　会津母成峠の戦いでは、新政府軍は勝利を確信し兵数にものいわせて怒濤の如く押し寄せた。土方は援軍を求めて庄内に走ったが利あらず、そこへ榎本が旧幕府艦隊を率いて仙台に上陸、土方らと評議がもたれ北辺の地、蝦夷地をめざすこととなった。

明治元年（一八六八）十月二十一日、蝦夷、鷲の木に上陸した。上陸日には二十二日説もあり、日記は土方の上陸が二十一日だったのだろう。

箮館ヲ襲フ、本道ヲ進ム者、伝習士官隊隊長滝川充太郎軍監牧野主計同歩兵隊隊長大川正二郎軍監同遊撃隊隊長人見勝太郎軍監岡田斧吉新選組隊長並安富才輔大鳥桂介総督トス、間道ヲ進ム者、額兵隊隊長星潤（）太郎軍監管城善左衛門衝鋒隊隊長古屋作左衛門軍監今井信郎陸軍隊隊長春日左衛門軍監和田伝兵ヱ総督土方歳三、総督守衛新選組数人隊長島田魁率ュ大雪ヲ浸シ険ヲ踰本道ノ一軍峠下地名ヲ陣ス

敵大軍ヲ以テ暗ニ乗シテ、我営ヲ侵ス、我軍銃ヲ放チ大ニ戦フ、遂ニ之ヲ敗リ忽ニシテ暁天ス、此日峠下ニ陣ス、然ルニ新選組遊撃隊黄昏ニシテ着陣ス、廿四日両軍ニ別チ一軍大鳥桂介伝習士官隊同歩兵隊ヲ率テ大野ニ進、敵直ニ銃炮ヲ放ツ、我軍銃ヲ放ツ雨ノ如ク忽ニシテ官軍敗走ス、我軍是ヲ攻ム、大野地名ヲ乗取ル後ノ一軍新選組遊撃隊七重地名数歩ニシテ官軍大兵ヲ以テ来リ侵ス

我軍数人ニシテ是ヲ防ク、殆ト敗セント欲シ我数人銃ヲ捨テ刃ヲ抜テ数人ヲ斬ル、官軍之ヲ見テ大ニ驚キ隊伍乱ル、我軍勝ニ乗シテ是ヲ攻ム、亦銃ヲ放チテ数人ヲ斃ス、大川地名近ク之ヲ追撃ス、我軍敢テ進マス、七重地名ニ陣ス、此戦ニテ備ノ福山ノ士四人長ノ士一人擒箮館病院ニテ其疵ヲ治シ、全快スルニ及ヒテ奥ノ青森ニ送ルナリ

大野ノ一軍進ム、亦七重ノ一軍大野ヲ鎮撫トシテ発ス、亦間道ノ我軍進テ河汲嶺ニ戦ヲ官軍数人シテ忽敗走、本道ノ我軍不戦シテ五稜郭ヲ乗取、直騎兵ヲ以間道ノ軍ニ報ス、是ヲ聞テ直ニ進ミ、廿六日五稜郭ニ入ル

回天艦海軍ノ先鋒トシテ鷲ノ木ヲ発シ函港ヲ襲ヲ、然ルニ官艦函港ニ在リテ出ル不能、回天是ヲ知リ然レドモ降サント欲シテ輪走、官艦夜ノ闇ニ従ヒ函港ヲ発ス、然レドモ回天浅所ニ乗リ是ヲ追フ不能、廿七日官艦函港我有ト成ヲ知スシテ入、回天艦之ヲ見ルヨリ直ニ進ミ是ヲ奪フ、艦中尽ク降ル後二人員奥ノ青森ニ送ルナリ廿八日土方歳三総督トシテ彰義隊、額兵隊、陸軍隊、炮兵大炮二門数人、守衛新選組数人合シテ五百余人ヲ率テ松前ヲ襲フ

霜月朔日尻内地名ニ宿陣ス、然レドモ敵福島峠ニ陣ス、我軍ノ先陣四百余人出張ス、敵舟ニ乗シテ、福島地名ヨリ来リ、険嶺ヲ越シテ暗ニ乗シテ我営ヲ侵ス、忽ニシテ民家ニ放火シテ銃ヲ放ツ、総督諸営戒ム、我軍皆是防ク、亦数人ヲ斃ス

炮撃スルコト数発ニシテ敵敗走シテ四散ス、日已ニ昇天、此日二日尻内ヲ発シ四日福島地名ヲ襲フ、敵直ニ銃ヲ放ツ、我軍是ヲ攻ム、然ルニ蟠龍艦福港ニ来リ巨炮ヲ放ツ、電ノ如ク敵奮戦スト雖我軍勇ニシテ且海陸ヲシテ挟攻ス、忽ニシテ敗走ス此戦ニ松前ノ士桜井源四郎擒ル然ル雖死ヲ許シ降書持シ帰ラシム敵吉岡地名ニ放火シテ松前ニ行、回天艦福港ニ来ル、

五日暁天ニ乗シテ松前ヲ襲フ、回天艦、蟠龍艦開帆ス、然ルニ暴風蟠龍艦後レ独リ回天艦而已吉岡峠ノ沖ニ来リ炮ヲ放ツ

我軍吉岡峠ヲ踰、亦回天艦是ヲ知リ遂ニ止メ、我軍荒谷ニ至リ兵ヲ両道ニ別ツ、一軍ハ海岸ヲ進ム、一軍ハ山ノ手ヲ進ム、敵直ニ銃炮ヲ放ツ、我軍亦銃炮ヲ放ツ、僅ニシテ皆大喝ス、敵忽ニシテ退ク、我軍勝ニ乗シテ是ヲ攻、敵亦城中ニ籠リ防戦ス、総督陸軍隊守衛新選組ヲ率テ城裏ニ廻リ楷子ヲ以テ石檣ヲ登リ城中ヘ潜ミ入、敵軍未タ不知、我軍大喝シテ銃ヲ放ツ、敵兵大ニ驚キ急ニシテ防禦スル不能、城ヲ走シテ市中ニ放火シ遁走ス

我軍両門ヲ開ク、忽ニシテ本道ノ兵城中ニ入ル、兵亦市中ノ火ヲ防ク、半隊ヲ城下ニ備ヱ、半隊ヲシテ荒谷地名ニ陣ス、六日進テ入城ス、日有テ衝鋒隊五稜郭ヨリ来ル、遊撃隊福山市ノ取締ス

十三日土方歳三総督トシテ衝鋒隊、彰義隊、額兵隊、炮兵隊、合シテ五百人ヲ率テ江差地名ヲ侵ス、途ニシテ大滝峠ニ戦ヒ我額兵隊険嶺ヲ遮テ敵軍ヲ横撃ス、忽ニシテ敗走ス、是ヲ攻ム、隔三四日江差地名ヲ襲フ、然ルニ開陽艦江港ニ来リ敵ノ陣屋ヲ狙撃ス、敵軍走シテ熊石ニ行ク、我軍直ニ陣屋ニ入ル、然ルニ暴風頻ニ起リ激浪天ニ漲キリ艦誤テ暗礁ニ乗シテ将ニ覆没セントト欲不得止ヲ艦ヲ捨小舟ニ乗シテ巨濤ヲ侵シテ上陸ス、艦礁上ニ在リ数日ニシテ粉砕沈没スル

十七日江差地名ヲ直ニ進ミ熊石ニ行、敵軍松前ノ士五百余人降ル松前侯此所ヨリ小舟ニ乗シテ奥ノ青森ニ渡ル途ニシテ屠腹スト云亦津軽弘前薬王院ニテ病死スト云然ルニ回天艦、神速艦江港来リ開陽艦ヲ出サント欲来ル亦激浪ヲ艦ヲ岸上ニ覆ス、惜哉若此二艦而已ヲシテ有シムト雖何速ニ斯ニ至ラン哉、時ノ至ラサルハ毎事是ノ如ク人力ノ能及フ所ニ非サル也、直ニ回天艦函港ニ帰ス、然ルニ間道ヲ進ミアツサフノ新城ヲ侵ス、一軍一聯隊百五十余有、アツサフニ至リ敵軍直ニ炮撃ス

屢互ニ打合敵ハ衆我軍寡ニシテ能戦遂ニ提力接戦ニ及ヒ我軍殆ト苦戦、両軍戦拒或ハ退キ或進ミ我数人山巓ニ登リ、敵軍ヲ下撃ス、忽ニシテ隊俉乱、我軍勝ニ乗シテ進ム、敵忽新城ニ放火シテ四散ス、日有テ此一軍熊石ニ来ル合ス、廿一日熊石ヲ発ス、松前城中ニ入日有テ土方歳三五稜郭ニ入ル、此ニ南京人四拾余米国ノ帆運ヲ奪テ海盗ヲ為シ、颶ニ逢漂流シテ函港ニ入是ヲ捕テ獄ニ繋リ是ヲ以テ土工ト為ス蝦夷全島尽ク我有ト成リ五稜郭筥館炮台并ニ各国海軍尽ク祝炮ス

箱館を襲う。本道を進む者は、伝習士官隊　隊長滝川充太郎　軍監牧野主計、同歩兵隊隊長大川正二郎　軍監同、遊撃隊　隊長人見勝太郎　軍監岡田斧吉、新選組　隊長並安富才輔で、大鳥桂（圭）介を総督とした。間道を進む者は、額兵隊　隊長星潤（恂）太郎　軍監管城善左衛門、衝鋒隊　隊長古屋作左衛門　軍監今井信郎、陸軍隊　隊長春日左衛門　軍監和田伝兵衛、総督土方歳三、隊長島田魁率いる総督守衛の新選組数人は、大雪のなか険しい山を進み、本道の一軍は峠下（地名）に陣をはった。

敵は大軍をもって暗闇に乗じて、こちらの陣にせめてきた。我は銃を放ち大いに戦い、ついにこれを破り、すぐに夜が明けた。この日は峠下に陣した。新選組と遊撃隊は黄昏に着陣した。二十四日、二軍は別れ、一軍は大鳥桂（圭）介が、伝習士官隊、同歩兵隊を率いて大野に進んだが、敵がすぐに銃砲を放ってきた。我が軍は銃を雨のごとく放ち、たちまちにして官軍は敗走した。我が軍はこれを攻めた。大野を乗っ取ったあと、新選組、遊撃隊の一軍が七重まであと数歩のところで、官軍が大軍をもって迫りきた。

我が軍は数人でこれを防いだ。ほとんど負けるとみて、我と数人が銃を捨て刀を抜いて敵数人を斬った。官軍はこれを見て大いに驚き、隊が乱れた。我が軍は勝ちに乗じてこれを攻めた。また銃を放って、数人を倒す。大川近くまでこれを追撃した。我が軍はあえて進まず、七重に陣をはった。この戦いで備前福山藩士四人、長州の藩士一人を捕え、箱館病院でけがを治療、全快したので奥州の青森に送った。

大野の一軍は進んだ。七重の一軍も大野を鎮撫するため出発した。また、間道の我が軍（土方軍）は河汲嶺（川汲）で官軍と戦い、官軍は敗走、本道の我が軍も戦わずして五稜郭を乗っ取り、すぐ馬で間道の土方軍に報告した。これを聞いて（土方軍も）すぐに進み、二十六日、五稜郭に入った。

回天艦は海軍の先鋒として鷲の木を出帆、函（箱）館の港を襲う。官軍の船は函（箱）館港にいて出航することができず、回天はこれを知り、降伏させようとして向かったが、官軍の船は夜の闇に紛れて函（箱）館港を出港した。回天は浅瀬に乗り上げ、これを追うことができなかったが、二十七日、官軍の船が我が軍がいるとは知らずに函（箱）館港に入った。回天はこれを見て、直ちに進みこれを奪った。船中のものはすべて降伏した。後に二人の乗組員を奥州の青森に送った。二十八日、土方歳三を総督として、彰義隊、額兵隊、陸軍隊、砲兵大砲二門数人、守衛の新選組数人、合わせて五百人余りを率いて松前を攻略した。

明治元年十一月一日、尻内（知内）に宿陣した。しかし敵（松前藩）は福島峠に陣をかまえていた。我が軍の先陣四百余人が出張した。敵は船に乗り、福島よりきた。険しい峰を越えて暗闇に乗じて我が陣を襲った。たちまち民家に放火し、銃を放つ。総督は陣を警戒させた。我が軍はみなこれを防ぎ、また数人を倒した。
砲撃すること数発、敵は敗走し、四散した。日が上った。この日二日、尻内（知内）を出発し、四日、福島を襲う。敵はすぐに銃を撃ってきた。我が軍はこれを攻めた。蟠竜が福島港にきて大砲を放った。いなづまのように敵が奮戦するといえども我が軍は直ちに海と陸から攻める。たちまち敵は敗走した。この戦いで松前の藩士桜井源四郎を捕える。しかし死を免じて降伏するように手紙をもたせ帰らせる。敵は吉岡に放火して松前に行く。回天が福島港にくる。五日明け方に乗じて松前を襲う。回天、蟠竜が出航した。しかし、暴風で蟠竜は遅れ、回天が一隻で吉岡峠の沖にきて大砲を撃った。
我が軍は吉岡峠を越え、回天はこれを知って攻撃をやめ、我が軍は荒谷に至って兵を二つに分けた。一軍は海岸を進み、もう一軍は山の手を進撃した。敵はすぐに銃砲を撃ってきた。我が軍もまた鉄砲を放つ。皆で大声をあげた。敵はたちまちにしてひいた。我が軍は勝ちに乗じてこれを攻め、敵はまた（松前）城中に籠もり防戦した。総督は陸軍隊、守衛の新選組を率いて城の裏に廻り、梯子を使って石せき檣しょう（石垣）を登り、城中へ潜み入る。敵の軍は未だに知らずにいた。我が軍は大声をあげて銃を撃った。敵兵は大いに驚いたが急なことなので防御することができず、城を逃げ、市中に放火して遁走した。
我が軍は二つの門を開いた。そうして本道の兵隊が城中に入った。兵はまた市中の火を防火した。兵の半分を城下に備え、半分は荒谷に陣をかまえた。六日、進んで入城した。数日して、衝鋒隊が五稜郭よりきた。遊撃隊は福山の取り締まりをすることになった。
十三日、土方歳三総督は衝鋒隊と彰義隊、額兵隊、砲兵隊の合わせて五百人を率いて江差に進軍した。途中、大滝峠で戦闘があり額兵隊は険しい峰を遮って敵の軍を横合いから攻撃した。ただちに敗走していった。それでこれを攻めた。三、四日おいて江差を襲う。開陽艦が江差港にきて、敵の陣屋へ向かって狙撃をした。敵軍は逃げて熊石に行った。我が軍はすぐに陣屋に入った。暴風が頻りに起こり、波は激しく潮がみち、船は誤って暗礁に乗り上げ、まさに転覆せんとしたので、やむを得ず船を捨てて小舟に乗り、大きな波にそむいて上陸した。暗礁に乗り上げて数日、船は粉砕し沈没した。

十七日、江差をすぐに出て熊石に行く。敵軍の松前藩士は五百人余りが降伏した。松前侯はここから小舟に乗り、奥州の青森に渡る途中、切腹したとも津軽弘前薬王院で病死ともいう。回天、神速が江差港にきて開陽を助けようとしたが、波はまた激しく神速も岸の上にひっくりかえった。惜しむべきは、この二艦のみどれほど早くてもここには至らなかっただろう。時運がないのはいつものことだが、このように人力のおよばないものだ。すぐに回天は函（箱）館港に帰った。それから間道を進み、アツサフ（館）の新城を攻撃する。一軍が一聯隊百五十余あり、到着すると敵はすぐに砲撃してきた。
つねに互いに打ち合ったが、敵は大勢で我が軍は少数で戦い、ついに力をもって接戦に及び、我が軍はほとんど苦戦、両軍はあるいは退きあるいは進み、こちらの数人が山の頂に登り、敵の軍を攻撃した。たちまち隊は乱れ、我が軍は勝ちに乗じて進む。敵は新城に放火し四散した。何日かして一軍は熊石にきて合流した。二十一日、熊石を出発する。松前城中に数日いて、土方歳三は五稜郭に入った。南京人四十人余がアメリカの帆船を奪って海賊となっていたが、台風にあって漂流し、函（箱）館港に入ったところを捕まえて牢につなぎ、このものたちを土工とした。蝦夷地はことごとく旧幕軍のものとなり、五稜郭と箱館砲台並びに各国の海軍が祝砲を撃った。

解　説

　旧幕臣の幹部は変名した。桑名の松平定敬は一色三千太郎、肥前唐津の小笠原長ながが行みちは大井餘介、備中松山の板倉勝静は渋井魯輔と称した。榎本艦隊に搭乗できる兵士には限りがあった。これらの三藩の家臣は土方の新選組に加われば蝦夷に行けるとあって桑名の森常吉ら十八人が加わり、蝦夷に入って木村忠次郎、長瀬清蔵、高木貞作、山脇隼太郎ら四人が加わり、新選組は総勢二十四人となった。

　二十二日、上陸した各部隊は本道と間道の二手に分かれて箱館五稜郭をめざし進軍した。

「間道を進む者は、額兵隊、隊長星恂太郎、軍監管城善左衛門、衝鋒隊、隊長古屋作左衛門、軍監今井信郎、陸軍隊、隊長春日左衛門、軍監和田伝兵衛、総督土方歳三、総督守衛の新選組数人隊長島田魁率いるは、大雪のなか険しい山を進み、本道の一軍は峠下（地名）に陣をはった」

　蝦夷の大雪は想像を絶するものだったにちがいない。道なき道を踏みわけ間道を進軍した。島田は新選組のことを守衛新選組と綴るが、このとき別称で呼んだのか、この記述はこの日記にしかみられない。

「新選組、遊撃隊の一軍が七重まであと数歩のところで、官軍が大軍をもって迫りきた」

　二十四日、二手に別れた一軍率いる大鳥軍、もう一軍の新選組は七重村で新政府軍と激しく交戦し勝利したが、この戦いで新選組隊士三好胖ゆたか、小久保清吉が戦死した。つづく川汲嶺でも土方軍はこぜりあいの末勝った。二十六日、大鳥軍、土方軍が共に五稜郭に入った。入城に際し、土方軍の野村利三郎が陸軍隊の春日左衛門と行軍順をめぐり口論となった。

「二十八日、土方歳三を総督として、彰義隊、額兵隊、陸軍隊、砲兵大砲二門数人、守衛の新選組数人、合わせて五百人余りを率いて松前を攻略した」

　勢いに乗った土方は一気に松前攻略に成功した。島田は土方に人一倍信頼を寄せ勝利を確信したにちがいない。

「十一月一日、尻内（知内）に宿陣した」

　この時、敵の松前藩は福島峠に陣を張った。島田ら四百人余が先陣となって二日に知内を発し三日、市の渡一軒屋で戦って福島入りした。

「十三日、土方歳三総督は衝鋒隊と彰義隊、額兵隊、砲兵隊の合わせて五百人を率いて江差に進軍した」

　土方軍の作戦はみごとに的中し、敵をしりぞけ大滝峠では額兵隊が険しい峰を遮って敵の横から攻めて破った。しかし土方本人は本隊から遅れて行軍したという。十五日には、開陽艦が江差港に入って敵の陣屋を狙撃、新政府軍は敗走し熊石へ行った。この夜は大雪と暴風で開陽艦は江差沖で座礁後沈没し、さらに救援にきた神速艦までも沈没した。乗組員はそれぞれ小舟で上陸した。

　十二月五日、新選組は箱館から五稜郭へ行く。再び箱館に戻って弁天岬の砲台でフランス軍人マルランから調練を朝六時から十時まで毎日受けた。雨の日は本営で技術の講習も受けている。

「土方歳三は五稜郭に入った」

　十五日、土方は松前から五稜郭に凱旋した。

「南京人四十人余がアメリカの帆船を奪って海賊となっていたが、台風にあって漂流し、箱館港に入ったところを捕まえて牢につなぎ、このものたちを土工とした」

　この記述は日記のみにみられる記述である。

「蝦夷地はことごとく旧幕軍のものとなり、五稜郭と箱館砲台並びに各国の海軍が祝砲を撃った」。新天地での夢を抱き、この地で新政府軍を迎えうち、勝利することを確信していた。

我軍凡三千余人軍艦回天、蟠龍、千代田、運船二番回天凾港ニテ分捕ノ舟、長鯨帆運、千秋、鳳凰、隊名左ニ記ス、遊撃隊士官隊長伊庭八郎軍監岡田斧之（）吉新選組士官隊長相馬主殿軍監島田魁神木隊高田藩士官隊長坂井良祐遊撃隊　会津藩士官隊長柏崎才一杜陵隊南部藩兵士隊長伊藤善次額兵隊仙台藩隊長星潤（）太郎見国隊同藩士官隊長二関源次四月十一日着伝習士官隊隊長滝川充太郎軍監牧野主計陸軍隊兵士隊長春日左ヱ門一聯隊兵士隊長松岡四郎二（）郎伝習歩兵隊隊長大川正二郎炮兵隊兵士隊長関広三ヱ門工兵隊土工隊長吉沢勇四郎

総裁榎本釜二郎、副総裁松平太郎、陸軍奉行大鳥桂介、本道ノ総督ヲ任ス、同奉行土方歳三間道ノ総督ヲ任ス、海軍奉行荒井郁ノ介、筥館奉行永井玄蕃筥館総督ヲ兼、同並中島三郎介千代ヶ岡総督兼、松前奉行人見勝太郎、江差奉行松岡四郎次郎江差ヲ守ル

一聯五小隊炮兵半小隊松前ヲ守ル、遊撃二小隊陸軍二小隊炮兵一小隊彰義隊二小隊吉岡峠ヲ守ル、神木二小隊吉岡ヲ守ル、会遊撃一小隊福島ヲ守ル、彰義二小隊木古内守ル、彰義二小隊有川守ル、額兵三小隊鷲ノ木ヲ守ル、衝鋒隊伝習歩兵隊二股守ル、衝鋒二小隊伝習歩兵隊二小隊湯ノ川守ル、杜陵隊筥館ヲ守ル、炮兵二小隊、新選組二小隊、伝習士官二小隊、五稜郭ニ屯スル兵五百余人分数已ニ定ル

我が軍はおよそ三千余人で、軍艦は回天、蟠竜、千代田、運船二番回天、箱館で分捕った船（高雄）、長鯨帆運、千秋、鳳凰、隊は左に記す。遊撃隊士官隊長伊庭八郎、軍監岡田斧之吉（斧吉）、新選組士官隊長相馬主殿、軍監島田魁、神木隊高田藩士官隊長坂井良祐（佑）、遊撃隊会津藩士官隊長柏崎才一、杜陵隊南部藩兵士隊長伊藤善次、額兵隊仙台藩隊長星潤（恂）太郎、見国隊同藩士官隊長に二関源次（治）四月十一日着、伝習士官隊隊長滝川充太郎、軍監牧野主計、陸軍隊兵士隊長春日左衛門、一聯隊兵士隊長松岡四郎二郎、伝習歩兵隊隊長大川正二郎、砲兵隊兵士隊長関広三右衛門、工兵隊土工隊長吉沢勇四郎。
総裁榎本釜二（次）郎（武揚）、副総裁松平太郎、陸軍奉行大鳥桂（圭）介は本道の総督を任命された。同奉行（陸軍奉行並）の土方歳三は間道の総督を任せられた。海軍奉行荒井郁之介、箱館奉行永井玄蕃は箱館の総督も兼ねる。同並の中島三郎介（助）は千代が岡の総督を兼務。松前奉行人見勝太郎、江差奉行松岡四郎次郎は江差を守る。
一聯五小隊、砲兵半小隊が松前を守る。遊撃二小隊と陸軍二小隊、砲兵一小隊、彰義隊二小隊は吉岡峠の守備。神木二小隊は吉岡を守る。会津遊撃隊一小隊は福島の守備。彰義隊二小隊は木古内を守る。彰義隊二小隊は有川の守り。額兵隊三小隊は鷲の木を守る。衝鋒隊、伝習歩兵隊は二股を守備。衝鋒二小隊と伝習歩兵隊の二小隊は湯の川に就く。杜陵隊は箱館の守り、砲兵二小隊、新選組二小隊、伝習士官隊二小隊、五稜郭に駐屯する兵五百余人の守備が定まった。

解　　説

　十二月十五日、蝦夷平定が達せられ祝砲をもって祝賀し、入札（選挙）によって総裁以下の閣僚を決めた。一回目の入札で閣僚候補者が選ばれ、二度目の入札で役職が決められたという。

　榎本釜次郎　　百五十六点
　松平太郎　　　百二十点
　永井玄蕃　　　百六点
　大鳥圭介　　　八十六点
　松岡四郎次郎　八十二点
　土方歳三　　　七十三点
　春日左衛門　　四十三点
　松平越中　　　五十五点
　板倉伊賀　　　二十六点
　牧野備後　　　三十五点
　小笠原佐渡　　二十五点
　対馬章　　　　一点

『新聞調記』によると入札の得点数はこのような結果だった。

　二十八日、閣僚選出の入札が行われた。おもな役職は次のとおり。

　総裁　　　榎本釜次郎
　副総裁　　松平太郎
　海軍奉行　荒井郁之助
　陸軍奉行　大鳥圭介
　箱館奉行　永井玄蕃
　陸軍奉行並箱館市中取締裁判局頭取　土方歳三

　入札によって序列を決めたことは公明正大というか民主的である。旧幕府時代は、とかく身分をもってがんじがらめにしてきた。幕政改革は幾度となく断行されたが、掛け声ばかりの空論に過ぎなかった。この北辺の地ではじめて実現されたのである。

時ニ明治二己巳三月九日、官艦甲鉄艦、飛龍艦朝廷御船春日艦、豊安艦薩州船丁卯艦毛利船晨風艦有馬船戊辰艦蜂須賀船右七艘品海ヲ開帆シ、即夜横港ニ入、翌十日朝陽艦朝廷御船ト八艘横港ヲ開帆ス、先後有ト雖十九日ニ至リ南部鍬ケ崎港ニ着ス、我軍是ヲ知リ、回天艦、蟠龍艦、二番回天艦右三艦ニ土方某及相馬他三四ノ輩、神木隊、彰義隊、遊撃隊数十人乗シテ鍬ケ崎ニ碇スル所ノ甲鉄艦ヲ奪ト欲シ、三月廿三日函港ヲ開帆ス、途ニシテ暴風蟠龍二番回天ノ両艦後ル
独リ回天艦而已米利堅ノ旗ヲ揚ケ、輪声ヲ急ニシテ廿五日暁天ニ鍬ケ崎港ニ入、官軍ノ八艦ヲ遮テ、直ニ鉄艦ノ中央ヲ衝キ、日ノ丸ノ旗ヲ翻シ、巨炮ヲ放、其勢ヒ恰モ雷激ノ如ク鉄艦将ニ傾キ、覆没セント欲ス、我数人白刃ヲ抜テ身ヲ躍テ其艦ニ飛入リ、烈戦殆ト奪ト欲シ、然レドモ鉄艦亦其備有リ、且他艦ヨリ巨炮ヲ放ツ
雷ノ如ク細丸雨飛ニ似リ、艦将甲賀源吾、次官矢作沖丸、土方歳三他三四ノ輩檣上ニ在リテ指揮ス、敵丸甲賀源吾ノ腕ト股トヲ貫キ、尚屈セスシテ令ヲ下ス、復胸ニ徹シテ戦没ス、矢作沖丸始ニシテ腕ニ徹シ、不撓シテ炮ヲ放ツ、然ルニ復胸ニ徹シテ戦没ス、我数人銃剣ヲ揮ヒ戦フト雖奪フ不能遂ニ退ク
野村利三郎新選組甲鉄ニ而烈戦シ、数人ヲ斬、我艦ニ入ラント欲ス、敵槍ヲ以テ其背ヲ傷キ、海中ニ没ス、官艦直ニ回天艦ノ後トヲ追フ、然ルニ二番回天艦石炭尽キ、不得已ヲ太郎港南部領ニ至リ甲鉄艦春日艦、且他艦是ヲ見直ニ巨炮ヲ放ツ、二番回天艦ヨリ少シク炮ヲ放ツト雖、固ヨリ寡ハ衆ニ敵セス、遂ニ自焼シテ上陸四散ス玆ニ人員降ル戊辰艦少シク損ス、亦死傷数十人是ヲ乗シテ東京ニ運遷ス

時に明治二己巳（明治二年）三月九日、官軍の甲鉄艦、飛竜艦朝廷御船、春日艦、豊安艦薩摩船、丁卯艦毛利（長州）船、晨風艦有馬船、戊辰艦蜂須賀船、右の七艘が品川沖を出航し、その夜横浜港に入った。翌十日、朝陽艦朝廷御船とあわせて八艘が横浜港を出港した。前後ありといえども、十九日南部鍬ヶ崎港に到着した。我が軍はこれを知り、回天、蟠竜、二番回天（高雄）の右三艦に土方公と相馬ほか（新選組）三、四名、神木隊、彰義隊、遊撃隊数十人が乗り、鍬ヶ崎に停泊中の甲鉄艦を奪うため、三月二十三日、函（箱）館港を出帆した。途中、暴風のため蟠竜と二番回天が遅れをとった。
ひとり回天艦がアメリカの旗を掲げて、輪声をはやくして二十五日明け方、鍬ヶ崎港に入る。官軍の八隻を遮り、すぐに甲鉄の中央を衝き、日の丸の旗を翻して大砲を撃つ。その勢いはあたかも雷のごとく激しく、甲鉄は傾き沈没するように見えた。我が軍数人が白刃を抜いて身を躍らせて甲鉄に飛び込み、激しく戦ったが、甲鉄艦もまた大砲の装備があり、またほかの船からも大砲が放たれた。
雪のときの細かい雨のように弾丸が降った。艦将甲賀源吾、次官矢作沖丸、土方歳三そのほか三、四人がマストの先にいて指揮をしていた。敵の弾丸が甲賀源吾の腕と股を貫いたが、なお命を下していた。が、胸に弾を受け、戦死した。矢作沖丸ははじめ腕に被弾したが、あきらめずに大砲を撃った。しかし胸に弾があたり、死亡した。我が軍の数人が銃と剣をもって戦うといえども奪う事ができずについに退いた。
野村利三郎（新選組）は甲鉄において、激しく戦い、数人を斬り、こちらの船に戻ろうとした。敵は槍をもってその背中をさし、（野村は）海中に没した。官軍の船はすぐに回天の後を追った。二番回天艦は石炭が尽き、やむを得ず太郎（田老）港（南部領）に行き、甲鉄、春日、そのほかの船もこれを見てすぐに大砲を放ってきた。二番回天も多少大砲を撃つといえども、もとより敵は多く、ついに自焼して上陸し、四散した（すでに人員は降伏した）。戊辰艦は少し損傷した。死傷者数十人をのせ、東京に運んだ。

解　　説

　明治二年（一八六九）三月二十三日に旧幕府艦は箱館を出帆した。
「回天、蟠竜、二番回天（高雄）の右三艦に土方公と相馬ほか（新選組）三、四名、神木隊、彰義隊、遊撃隊数十人が乗り、鍬ケ崎に停泊中の甲鉄艦を奪うため、三月二十三日、箱館港を出帆した。途中、暴風のため蟠竜と二番回天が遅れをとった」
　回天艦は一八六六年、プロシアのダンチッヒで建造の外輪船。二十五日未明、宮古湾の戦いで艦将甲賀源吾は戦死した。蟠竜艦はイギリス製、蒸気内車、大砲四門を搭載、三百七十トンの木造船だった。二番回天（高雄）はアメリカ建造のアシロット艦ともよばれ秋田久保田藩船で、旧幕府が占領していた箱館湾に迷い込んで回天に拿だ捕ほされていた。久保田藩ではもう一艦陽春というのを所有していて、新政府軍に供出していた。
　この宮古湾の戦いには二つの誤算があった。一つは回天は外輪船のため他の艦との平行接舷が不可能で一斉に乗り移れないことと、もう一つは新政府軍の甲鉄艦との喫水線に段差があり容易に乗り移れなかったことである。
　甲鉄は一八六四年製、フランスのボルドーで建造の木造双螺旋装甲艦だった。
「我が軍数人が白刃を抜いて身を躍らせて甲鉄に飛び込み、激しく戦ったが、甲鉄艦もまた大砲の装備があり、またほかの船からも大砲が放たれた。細かい雨のように弾丸が降った。艦将甲賀源吾、次官矢や作はぎ沖丸、土方歳三そのほか三、四人がマストの先にいて指揮をしていた」
　この時、甲賀は腕と股に被弾したがなお指揮を執りつづけ胸に弾を受け、矢作も同様に胸を撃たれ戦死した。白刃戦には限界があり蟠竜は戦列からはずれ、高雄も燃料の石炭が尽き南部領田老港に入り、この二艦が戦列からはずれたことで敗戦が決定的となった。この頃、旧幕府は兵士の月給支払額を定めている。『戊辰戦争見聞略記』（石井勇次郎著）によると次のとおり。
一、上等士官（差図役迄ヲ云）　金二両
一、中等士官（嚮導迄ヲ云）
　　差図役下役　　　　　金一両三分也
　　嚮導　　　　　　　　金一両二分也
一、下等士官　　　　　　金一両一分也

歩兵　　　　　　　　　　　金一両

また箱館と五稜郭の中間にあたる一本木に関門を建て通行料を徴収した。『箱館軍記』によると、「一本木笹屋という町代に通行小切の印鑑紙を発行させ野山に青物を摘みに出入りする者に一人二十四文、旅人には百六十文を申しつけた」とある。

廿六日回天艦函港ニ入、後レテ蟠龍艦モ入港ス、廿七日官艦悉ク青港津軽領ニ入、官軍勢凡一万五千余人二十余諸侯青森ニ泊ス、九日官甲鉄艦、飛龍艦、陽春艦、春日艦、丁卯艦、大坂艦朝廷御舟運送、米利堅艦洋名ハランス彼ノ償フ所右七艘江差方面ヲ襲フ、直ニ乙部地名ニ上陸ス、我軍一聯一小隊数人ニシテ防キ戦フ、然レドモ官軍衆ニシテ海陸ヨリ狭攻ス、我軍寡ニシテ防禦シ難シ、左ヲ支エント欲レハ右ヨリ攻ム、右ヲ防カント欲レハ左ヨリ攻ム、遂ニ退テ江差地名ニ行、然ルニ甲鉄、春日、丁卯三艦江港ニ来リ、頻ニ炮ヲ放ツ、我軍海岸ノ壁ヨリ炮ヲ放テ戦忽チ陸ヨリ迫ル、我軍防テ銃ヲ放ツ、戦ヒ数刻ニ及フト雖、勝敗ヲ決セス、東集西散銃炮瞬息ノ間休無シ、官軍亦撓色無シ、我軍苦戦亦死傷多シ、既ニシテ春日艦我後口ヲ絶チ、兵ヲ上陸サセント欲ス、我軍是ヲ大ニ労ス、退ケハ官軍躡ミ進ムヲ畏ル、退カサレハ則我後口ヨリ攻、不得止江差ヲ退ク、松前ニ行ク途ニシテ、大滝峠ニテ遊撃二小隊、炮兵数人江差方面ノ戦急ナルヲ聞テ来リ、援フヲ逢、然レドモ官軍大兵且海陸ヲシテ侵ス、亦此地形ヲ相スルニ甚悪シ、故ニ松前ニ退テ是ヲ防ク、陸軍一小隊ヲシテ地蔵山松前二面城裏手山ヲ守ル、遊撃隊ヲシテ折戸地名城下ヨリ下江半里ヲ守ル、炮兵隊ヲシテ海岸ノ炮台ヲ守ル、官軍来リ侵スヲ待

十一日夜五更ニシテ一聯五小隊、遊撃二小隊、炮兵半小隊ヲシテ官軍々陣ヲ襲ヲ、根武田地名ニテ戦ヲ、官軍五百余人銃ヲ放ツ、我軍夜ノ闌ニ従ヒ是ヲ攻ム、官軍色動ク、我遊撃隊数人、銃ヲ捨テ手刃シテ身ヲ躍テ数人ヲ斬ル、遊撃隊頭伊庭八郎先達チ大喝曰ク、此機不可失、言未タ終ラス、皆勝ニ乗シテ進ム、官軍狼狽シテ退ク、茂草地名ニテ止ル、日已ニ昇天ス、我陸軍ニ小隊来リ援、我軍気益募リ直ニ又是ヲ攻ム、喇叭ヲ吹声波浪ノ激スル如ク、官軍慴テ民家ニ火ヲ放チ退走ス、我軍躡進ム

二十六日、回天が函（箱）館港に入り、遅れて蟠竜も入港した。二十七日、官軍の船がことごとく青森港（津軽領）に入り、官軍総勢およそ一万五千余人二十余諸侯が青森に駐屯した。九日官軍の甲鉄艦、飛竜艦、陽春艦、春日艦、丁卯艦、大坂艦朝廷御船を運送、アメリカ艦（洋名ハランス、外国から借りる）右七隻が江差方面を襲った。直ちに乙部に上陸した。　我が軍一聯一小隊数人で防ぎ戦った。しかし官軍は大勢で海陸より攻めてくる。我が軍は少数で防御した。左を支えようとすれば右から攻めてき、右を防ごうとすれば左から攻めてきた。ついに退き江差へ向かう。だが、甲鉄、春日、丁卯の三艦が江差港にきて、頻りに大砲を放った。我が軍は岸壁から砲を放ち戦ったが、敵も陸から迫ってきた。こちらも防衛して銃を撃った。戦いは数時間に及んだが、勝敗が決まらなかった。忙しく息をつく暇もなく鉄砲を撃った。官軍はたわむことがなかった。我が軍は苦戦し、死傷者も多い。すでに春日艦は我らの後方を絶ち、兵を上陸させまいとした。我が軍は大いに苦しめられた。退けば官軍は進撃してくるし、退かなければすぐに後方から攻めてくる。やむを得ず江差を退いた。松前に行く途中、大滝峠で遊撃二小隊、砲兵数人が、江差方面の戦いがはげしいことを聞いて援軍にきたところに逢った。しかし官軍は多勢で海陸を攻めてくる。また、ここの地形はすこぶる悪かった。それで松前に退いてここを防いだ。陸軍一小隊は地蔵山松前城の裏手の山を守った。遊撃隊は折戸（地名）城下より半里下ったところに配備した。砲兵隊は海岸の砲台の守備についた。そこで官軍がくるのを待った。

十一日夜、五更（午前三時から午前五時）に一聯五小隊、遊撃二小隊、砲兵半小隊をもって官軍の陣を襲う。根武田で戦闘となる。官軍の五百余人が銃を放つ。我が軍は夜の闇に紛れてこれを攻めた。すると官軍の動静が変わった。こちらの遊撃隊数人が、銃をすてて刀を抜いて身を躍らせ、数人を斬った。遊撃隊の隊長伊庭八郎が先にたって大声で、この機を逃すなといい終わらないうちに、皆勝ちに乗じて進んだ。官軍は狼狽して退いた。そして茂草で止まった。日が昇り夜が明けた。こちらの陸軍二小隊が応援に来、我が軍は勢いがついてすぐにまた攻撃した。喇叭を吹く音が激しい波のようで、官軍はおそれて民家に火を放ち、逃げた。我が軍は進撃をした。

解　　説

　二十六日、回天が箱館港に入り、しばらくして蟠竜も戻ってきた。翌日、新政府軍は軍艦を率いて津軽領青森港に入り総勢一万五千余人を駐屯させていた。

　四月九日、新政府軍は甲鉄艦率いる六艦をもって江差を急襲し乙部に上陸した。『幕府実戦史』には、「官軍の人数乙部へ上陸、松前、木古内、大野の三道に分かれ進軍の趣、報告ありたれば、土方歳三は衝鋒隊二小隊、伝習隊二小隊を率いて市の渡口下股（大野口）へ出張、余（大鳥）は伝習一小隊と額兵隊三小隊を率いて木古内口に出張せり」とある。

「我が軍（旧幕府軍）一聯一小隊数人で防ぎ戦った」

　新政府軍は海と陸の双方から攻め入り、旧幕府軍は少数では防ぎきれず、ついに退却し江差に向かった。戦いは数時間におよんだといい、防戦するのがやっとで味方の兵士を多数失った。その後も旧幕府軍は苦戦をしいられ、日記にも防戦する様子がくわしい。

「我が軍は大いに苦しめられた。退けば官軍（新政府軍）は進撃してくるし、退かなければすぐ後方から攻めてくる」

　松前へ退くとき大滝峠で遊撃二小隊、砲兵数人が援軍として駆けつけたが、新政府軍の勢いに押されそれに加え地形が悪く、松前に退いて新政府軍を迎え撃つ配備についた。

　この戦いの指揮は旧幕府軍のフランス軍人ホルタンがあたり、天狗岳に三カ所、台場山に十六カ所の大小胸壁が造られた。

　十一日夜、根武田で戦端が開かれ新政府軍五百余人が発砲した。遊撃隊の数人が銃をすて抜刀して新政府軍兵士を斬った。

「遊撃隊の隊長伊い庭ば八はち郎ろうが先にたって大声で、この機を逃すなといい終わらないうちに、皆勝ちに乗じて進んだ」

　伊庭は心形刀流八代軍兵衛秀業の長男として生まれた。元治元年、将軍家茂の上洛に際し随行、慶応四年五月二十六日、箱根山崎の戦いで左手首を失っていた。隊士から隻腕の美剣士ともてはやされた。

　この戦いで進軍ラッパを吹く音が激しい波のようで、新政府軍はおそれて民家に放火して敗走したとある。

十三日清部地名ニ止陣ス、時ニ官軍間道ヲ進ミ、険嶺ヲ越シ木古内ヲ襲フ、我彰義二小隊ト戦、官軍白炮ヲ放チ是ヲ攻ム、我軍其攻ル所ニ随ヒテ能防ク、東集西散銃炮瞬息休無シ、戦数刻ニ及ト雖勝敗ヲ決セス、我数人樹木ノ間ニ潜行ス、官軍未タ是ヲ不知、既ニシテ横撃ス、忽チ隊俉乱我軍皆機ニ乗シテ是ヲ攻ム、数人ヲ斃ス、遂ニ官軍敗走、我軍敢テ不進木古内ヲ守ル、飛龍艦折戸炮台ヲ襲ヲ、炮ヲ放ツ数十ニシテ勝敗ヲ決セスシテ退ク
此日官軍間道ヲ進ミ険ヲ踰テ二股地名ヲ襲、我衝鋒隊、伝習歩兵二小隊二タ股ヲ守ル、総督土方歳三常ニ市渡地名ニ休ス、亦二股ノ地形ヲ相スルニ、道山ヲ狭ミ左右ヲ擁シ、右巓ニ登レハ樹木茂シ、旁左巓ニシテ下レハ、河流有リ、水深シテ歩渉シ難険地ニ壁ヲ築ク、十一河岸ニ築ク、三広シテ大ナル者二道ヲ狭メ築ク
天狗岩ヲ守ル一小隊、然ルニ官軍来リ直ニ銃ヲ放ツ、我軍壁ヲ守テ銃ヲ放ツ、総督直ニ馳来リ諸営ヲ戒ム、皆来リテ戦ヲ挑ム、既ニシテ天狗岩敗ス、官軍乗シテ臼炮ヲ放ツ、我壁皆銃ヲ放ツ、馳驟疾風雨如キ者ハ長藩、剽悍死ヲ畏レサル者ハ薩藩、我壁多クシテ兵少シ、唯河岸ノ三壁ニ精鋭ノ兵ヲ伏シテ不動
日没天俄ニ暗シ、忽ニシテ黒雨戦卒皆戎衣ヲ脱シテ弾薬筥ニ蒙ラセ雷管湿テ不発、皆懐ニス、官軍壁下ニ薄リ是ヲ攻ルト雖我軍不動、夜将ニ五更官軍撓色無シ、総督曰ク、官軍ハ士ニシテ衆、我軍ハ歩卒シテ寡、力ヲ以テ争難シ、総督謀事ヲ以テス、死卒廿五人ヲ募シ水ヲ游河ヲ渉リ険山ヲ越シテ官軍ヲ襲シム、日已ニ昇天ス、官軍忽チ敗走ス、我軍僅ニ百三十人、総督法令厳整ニシテ善ク士卒ノ心ヲ得ルヲ以テナリ、官軍猶天狗岩ニ陣ス、此日官晨風艦乙部地名ニテ暗礁ニ乗シテ破砕ス
十四日官軍亦二夕股ヲ襲、険嶺ヲ越シ稲倉石地名古間ニ出ル有、人蹤無キ五十年、官軍土人ヲ以テ嚮導ト為シ軽装シテ来ル、夕日西映炊烟漲キリ上ル
衝鋒隊頭取酒井兼三郎兵ヲ率テ官軍ノ営ニ望ム、然ルニ官軍前嶺ニ登ル、或ハ樹木ノ間ニ馳驟シテ銃ヲ放ツ、然レ雖敢テ不進、兵亦不多、我伝習歩兵隊長大川正二郎兵ヲ率テ戦フ、官軍夜ノ闌ニ従ヒ漸ニシテ増シ、五更ニ至リ八百人ニ下ラス、我軍河汲沢市渡地名ニ休スル者皆来リ援フト雖三分ノ一ニ不足、我軍甚タ労ス、総督能ク機ニ応シテ防ク、東方正明ナリ
伝習士官隊長瀧川充太郎、戦急ナルヲ聞テ二小隊ヲ率テ筥館ヨリ馳来リ、直ニ巓ニ登リ馬ニ鞭打先ニ進ム、其隊皆刃ヲ抜テ是ニ随フ、山下ノ官軍敗巓ヨリ銃ヲ放ツ雨飛ノ如ク、充太郎仰テ登ル不能シテ退走ス、時ニ一人ノ歩卒身ヲ躍テ後ニ随ヒ行ク、然ルニ一人

ノ士来ル、見ルニ官軍ナリ、直ニ銃ヲ放ツ、胸ニ徹シテ死ス、直ニ面皮ヲ剥キ目ヲ抉ク、見ル者正視ヲ不忍、正二郎面色怒ヲ肩充太郎ニ謂、君何ソ策無ヤ、徒ラニ殺傷シテ軍気ヲ摧ク、軍総督ノ命有ヤ、充太郎黙シテ不答、其心ヲ悔ム、然ルニ総督来リ謂、大川子ノ言固ヨリ其理有リ瀧川子ノ勇亦可感シ
営傍河ヲ隔テ陣ス、此戦十四日申ヨリ十五日末ニ至ル、此日総裁榎本釜二（）郎ヨリ急使来リ、清部地名ヲ退テ松前ニ行
十六日彰義一小隊、陸軍三小隊、遊撃二小隊、一聯五小隊、炮兵半小隊合シテ五百余人、夜五更ニシテ松前ヲ進ミ官軍ノ陣ヲ襲ヲ

十三日、（官軍は）清部に陣をはった。このとき官軍は間道を進み、険しい峰を越して木古内を襲っていた。こちらは彰義隊二小隊が戦ったが、官軍は大砲を撃ち攻めた。我が軍はその攻めているところにいって防衛した。忙しく休む間もなく鉄砲を撃った。戦いは数時間におよんだが、勝敗は決しなかった。こちらの数人は樹木の間に潜行した。官軍はこれを知らなかったので、そこから攻撃した。たちまちに隊は乱れ、我が軍はこの機に乗じてこれを攻撃した。そして数人を倒した。ついに官軍は敗走したが、我が軍はあえて進まず木古内で守備についた。飛竜艦が折戸砲台を襲ってきた。十発大砲を放ったが、勝敗を決められず、退いた。

この日、官軍は間道を進み、山をのりこえ、二股を襲った。我が軍の衝鋒隊、伝習歩兵二小隊が二股を守った。このとき総督土方歳三は市の渡で休んでいた。二股の地形は、山が道の左右を狭めており、右を上れば樹木が茂り、左を下れば川があり、水深は深く、歩行困難であり、その険しいところに障壁を築いた。十一河岸に築いた。三方に広がっているので壁を築き二道を狭めた。

天狗岩（岳）を一小隊がまもった。そして官軍がすぐに銃を撃ってきた。我が軍は胸壁にかくれ銃を撃った。総督（土方歳三）がやってきて、陣営を守った。皆集まり戦いを挑む。しかし天狗岩（岳）は敗れた。官軍は大砲を放ってきた。こちらは胸壁から銃を撃つ。風雨のように速く走っているのは長州藩、荒々しく死をおそれないのは薩摩藩の者であった。こちらは胸壁は多いが兵は少なかった。ただ河岸の三壁に精鋭の兵がいて、譲らなかった。

日没となり空はにわかに暗くなった。雨がふってきたので、戦っている者はみな軍服を脱ぎ、弾薬箱にかぶせ、雷管がしめって不発になるのを防ぐため、皆懐にいれた。官軍は胸壁の下に迫り攻めたが、我が軍は退かなかった。夜の五更になっても官軍も退くことがなかった。総督は、官軍は多勢、こちらは少数であるので、力では争えないという。総督は計略をめぐらした。兵の二十五人を集めて河をわたり山を越して官軍を襲う。日はすでに昇っていた。官軍はたちまちに敗走した。我が軍はわずか百三十人であった。総督は法令を厳しくしていたが、兵の心をよくつかんでいる人であった。官軍はなおも天狗岩（岳）に陣を構えていた。この日官軍の晨風艦が乙部で暗礁に乗り上げ破砕した。

十四日、官軍がまた二股を攻撃してきた。険しい峰を越し稲倉石にでる古い間道がある。人が通らなくなって五十年、官軍の兵は現地の人間を先導として軽装できた。夕方になって西に竈の煙が上がった。

衝鋒隊の頭取酒井兼三郎が兵を率いて官軍の陣地を偵察にいった。官軍は前の峰に登っていた。また樹木の間から素早く銃を撃つ。しかしあえて進んでこなかった。兵もまた多くはなかった。こちらは伝習歩兵隊長の大川正二郎が兵を率いて戦った。官軍は夜のうちに次第に兵を増員し、五更（午前三時から午前五時）には八百人をくだらなかった。我が軍は、川汲沢市渡で休んでいた者が応援にきてくれたが、その三分の一にも満たなかった。こちらは甚だ困った。総督は臨機応変にして防いだ。東の方が明るくなってきた。

伝習士官隊長の滝川充太郎が戦況を聞いて二小隊を率いて箱館よりきて、すぐに山に登り馬に鞭をくれて先に進む。この隊は皆刀を抜いて従っていた。官軍は山の下と上から雨のように銃を撃ってきたので、充太郎は上ることができず撤退した。一人の歩兵が身を躍らせてあとに従っていた。そこへ一人の兵がきた。見ると官軍である。すぐに銃を撃つ。胸に弾が当たり死亡した。すぐにその顔の皮をはぎ、目をくりぬく。見ていた者は正気を失った。（大川）正二郎は怒って（滝川）充太郎にいった。君には策はないのか、いたずらに殺傷をしては軍の士気を欠く。これは軍の総督の命令か。充太郎は黙ったまま答えず、その行動を悔やんでいた。そこへ総督がきて、大川子（氏）のいうことには理がある、滝川子（氏）の勇もまた感ずべきことだといった。

傍らの川を隔てたところで陣をはった。この戦いは十四日から十五日未明まで続いた。この日、総裁榎本釜二（次）郎より急使がきた。清部を退いて松前に行くことになった。

十六日、彰義一小隊、陸軍三小隊、遊撃二小隊、一聯五小隊、砲兵半小隊の合わせて五百余人は、夜の五更に松前に進み、官軍の陣を襲った。

土方歳三

解　　説

　十三日、新政府軍は清部に陣を張った。険しい間道をこえて木古内を襲っていた。迎え撃つは彰義隊二小隊が交戦、新政府軍は大砲を放ったが双方勝敗は決せられなかった。
「このとき総督土方歳三は市渡で休んでいた」
　日記ではすべての戦場に土方が参戦していたようにとれる。『幕末実戦史』（大鳥圭介）にも同様であるが『戊辰戦争見聞略記』にはこの件がふれられておらず、参戦していなかったのではという見方をする研究者もいるが、『函館戦記』にも「時総督休於市渡村」とあり、参戦していたことが裏づけられる。
　日記では新政府軍の各藩の戦闘ぶりをよく伝えている。
「風雨のように速く走っているのは長州藩、荒々しく死をおそれないのは薩摩藩の者であった」
　この戦いで土方は策をめぐらし兵士二十五人を集めて河をわたり山を越して新政府軍を襲った。新政府軍は土方の奇襲作戦におどろき敗走した。このとき、旧幕府軍はわずか百三十人であった。
　十四日、二股の戦いも前日からの十六時間におよぶ攻防戦のすえ新政府軍に勝利した。この日の戦いをフランス人ホルタンがブリューネに送った書状にも「味方之の働キ驚クベシ、一人ニテモナマケルモノナシ。味方ノ人、其顔ヲ見ルニ、火薬ノ粉ニテ黒クナリ恰あたかモ悪党ニ似タリ、四月十四日六時十五分」と旧幕府軍が善戦したことを伝えた。
　一方、非常に残忍な事件が起こった。「（官軍の）顔の皮をはぎ、目をくりぬく。見ていた者は正気を失った」。死体といえども滝川充太郎のやった行為に大川正二郎は激怒した。
　十五日、榎本から急使が届き、清部を退いて松前に行くことが決まった。同日、土方は美濃大垣藩の市村鉄之助に刀二振と品物を持たせ、箱館を脱出させた。この品を売りさばかせ、市村の旅費に充てさせたのだろう。『聞きがき新選組』（佐藤昱）に明治二年七月、日野の佐藤彦五郎の所へ、市村が身を隠しやって来て、このとき、土方の写真、髪と辞世の和歌を置いて行ったという。その後、市村は西南戦争で西郷軍に身を投じ、戦死したという風聞が佐藤家にもたらされたという。

十七日暁天江良町地名ニ至リ、直ニ官軍銃ヲ放チ、戦始ニ少シク動ク、然ルニ春日艦陸戦ヲ援卜欲シ、江港楫ヲ転シテ来ル炮ヲ放ツ、雷ノ如ク官軍益機ニ乗シテ頻ニ銃ヲ放ツ、或ハ進ミ或ハ退且侵シ臥シテ銃ヲ放ツ有リ起シテ放ツモ有リ、然ルニ春日艦岸ニ迫リ炮ヲ放ツ、瞬息ノ間モ休無シ、我軍已ニ疲ル、亦死傷多シ、遂ニ退テ清部地名ニ躡止ム、防戦スト雖官軍海陸ヲシテ挾攻ス、勢ヒ不可制、松前迄退ク、然ルニ官艦甲鉄艦、丁卯艦、飛龍艦、朝陽艦松前福山ノ海岸ニ来リ、頻リニ巨炮ヲ放ツ、独リ陽春艦城中ヲ狙撃ス、陸軍ハ追々追リ枝ケ崎地名并生府地名ニ戦卜雖官軍ハ衆ニシテ且陸海ヲシテ侵ス、我軍能防、春日艦揖ヲ転シテ根森地名ノ炮台卜戦フ、我弾亦彼ノ艦ニ少シク撃ス、然レドモ撓色無シ、官軍地蔵山ニ登リ忽チ見ヘ忽チ隠レ銃ヲ放ツ、我軍是ヲ防ク、両軍相交且集且散侵シ且支戦数刻ニ及卜雖、勝敗ヲ決セス、我軍臥シテ銃ヲ放ツ者有、或小隊ノ令ヲ下ス者有リ、両軍戦ヲ拒ム
然レドモ我ハ寡、官軍ハ衆、我軍殆卜危シ、然ルニ陸軍隊頭取山田八郎一小隊ヲ率テ官軍ニ囲マレ出ル不能、其隊皆死ヲ決シシテ銃剣ヲ揮テ戦没ス、漸ニシテ逃テ出ル者数人、官軍追々神明辺ニ迫ル、遂ニ城中江乱入ス、軍監役佐久間梯二城中ニ在テ指揮ス、官軍銃ヲ捨テ刃ヲ抜キ接戦ニ及フ、佐久間梯二槍ヲ以テ数人ヲ斃シ、敵丸腰間ヲ貫ク、尚屈セスシテ戦フニ、復タ胸ヲ徹シテ遂ニ戦没ス、岡田斧吉是ヲ見テ助ント欲シ、然レドモ官軍亦狙撃剣ヲ揮奮戦スルト雖援フ不能、遂ニ城中ヲ遁テ出ル、官軍四方ニ向ヒ亦囲マレ死ヲ決シテ戦フ、官軍銃ヲ放ツ、胸ニ徹シテ戦没ス、松前奉行人見勝太郎敵丸左ノ腕ヲ貫キ不得止シテ退ク、時ニ炮台ノ巨炮ニ鉄針ヲ穿チ用ユル不能シテ敗走ス、初更ニシテ吉岡ニ至リ直亦退テ福島地名ニ行
十八日福島ヲ不戦ニシテ退ク、市渡地名ノ峠ヲ固ム会遊撃二小隊、神木二小隊、一聯四小隊、尻内地名ヲ守ル彰義四小隊、陸軍三小隊、炮兵半小隊、額兵隊三小隊、然ルニ木古内地名ヨリ急来ル、聞ニ官軍険嶺ヲ越シテ木古内地名ヲ侵ス、会遊撃隊、神木隊、彰義隊数人ニテ此地ヲ守リ、他隊皆馳テ木古内ヲ援フ、然ルニ霧深クシテ敵不見、只銃声ヲ聞而已、忽ニシテ霧晴レ互ニ銃ヲ放ツ雨飛ノ如ク、官軍始メハ寡ニシテ我戦ヒノ労スルヲ待チ是ヲ敗ラント欲ス、遊撃隊長伊庭八郎剣ヲ揮テ諸隊ヲ勉マシム、官軍已ニ迫ル、退ク者在レハ是ヲ斬、皆進テ戦フ、諸隊憤激シテ自カラ励ム、官軍数方是ヲ攻ムルト雖我能之ヲ禦ス、炮兵差図役中川長五郎中村橋ノ側ニ巨炮ヲ備エ頻ニ炮ヲ放ツ、戦数刻ニ及フト雖官軍撓色無シ、我軍甚労ス、伊庭八郎左ノ腕ヲ貫カル、尚屈セスシテ戦フ、官軍漸ニシテ増シ、千人ニ下ラス、戦愈烈布銃炮瞬息モ休無シ、中川長五郎右ノ腕ヲ貫カ

ル、官軍気益揮我軍殆ト苦戦、忽ニシテ敗走ス、サツカリ地名ニ退ク、亦傷ス者頗多シ
、然ルニ伝習二小隊、額兵二小隊我戦ヒノ急ナルヲ聞テ直ニ来リ援フ、合シテ六百余人
木古内地名ヲ侵ス、官軍銃ヲ放ツ、我軍軽装シテ銃ヲ放、陸軍奉行大鳥桂介馬ニ鞭チ打
先達チ進ミ、然ルニ回天艦、蟠龍艦楫ヲ転シテ函港ヨリ来リ、陸戦ヲ援フ、巨炮ヲ放雷
ノ如ク我軍気益揮、然ルニ我数人尻内地名ニテ官軍ニ囲マレ出ル不能、大ニ奮戦シテ木
古内地名ヲ襲ヲ、官軍衆ト雖前後ヨリ挾攻ス、且海軍ヨリ巨炮ヲ放チ、官軍忽敗ス、我
軍進撃数人ヲ斃シ、矢フ所ノ地ヲ得ル
両艦函港ニ帰ス、途ニシテ春日艦追来リ、数十発戦ヒ勝敗ヲ決セスシテ日暮互ニ退ク
廿一日我軍当別地名并茂辺地地名ニ退ク

十七日明け方、江良町で官軍が攻撃してきたので、戦いとなった。そこへ（官軍の）春日艦が陸戦を助けようとして、江良港から舵を回し、大砲を撃ってきた。それは雷のようで、官軍はこの機に乗じて頻りに銃を撃ち始めた。進み退きしてまた伏せて銃を撃つ者あり、立って放つ者もあった。しかし春日艦は岸に迫って大砲を撃つ。息つく暇もなかった。我が軍はすでに疲労していた。死傷者も多かった。ついに退き清部で踏みとどまった。防戦しようにも官軍は海陸から挟みこんで攻撃してくる。勢いは制御できず、松前まで退いた。官軍の甲鉄艦、丁卯艦、飛竜艦、朝陽艦は松前福山の海岸にいて、頻りに大砲を撃っていた。陽春艦は城中を狙撃していた。陸軍はおい迫り、枝ケ崎や生府で戦ったが、官軍は多勢で陸海から進撃してくる。我が軍はこれを防いだ。春日艦は船を動かし、根森の砲台と戦った。こちらも春日艦に撃ったが、たわむことはなかった。官軍は地蔵山に登り見え隠れして銃を撃つ。こちらはこれを防御した。両軍はどちらも集まったり散ったりして進撃し、戦ったが、数時間たっても勝敗は決まらなかった。こちらは仰臥して銃を撃つ者や、小隊に命を下す者などがいた。両軍は決戦を拒んだ。
しかし我が軍は少数で官軍は多勢、こちらは危うい。陸軍隊頭の山田八郎が一小隊を率いて官軍に囲まれて逃げられなくなった。その隊は皆死を決し、銃剣をふりまわし、戦没した。すでに逃げ出る者が数人いて、官軍は神明あたりに迫っていた。ついに城中へ乱入してきた。軍監役の佐久間梯二が城中で指揮に当たった。官軍は銃を捨てて剣を抜き、接戦となった。佐久間梯二は槍をもって数人を倒したが、敵の弾が佐久間の腰を貫いた。なおも屈せずに戦ったが、今度は胸をやられてついに戦死した。岡田斧吉はこれをみて助けようとしたが、官軍がねらい打ちするので、剣をふるって奮戦したが助けられなかった。それでついに城を逃げ出した。しかし官軍に四方を囲まれたので、死を決して戦った。官軍の放った銃が胸に被弾し、戦死した。松前奉行の人見勝太郎は敵の弾を左の腕にうけたので、やむを得ず退いた。このとき砲台の大砲に鉄針を穿ち用いる事ができず、敗走した。初更（午後七時～午後九時）に吉岡に至り、また退いて福島に行く。
十八日、福島を戦わずして退く。市渡の峠には会津遊撃二小隊、神木二小隊、一聯四小隊、尻内（知内）を守衛するのは彰義四小隊、陸軍三小隊、砲兵三小隊、額兵隊三小隊であった。木古内より急のしらせがきて、官軍が山を越して木古内へ侵略したという。会津遊撃隊、神木隊、彰義隊数人がこの地を守り、ほかの隊は木古内を助けるため向かった。しかし霧が深く、敵が見えず、ただ銃声が聞こえるのみだった。霧がはれると互

いに雨のように銃を撃ち、官軍ははじめ少数だったので、こちらが戦いに疲れるのを待って破ろうとした。遊撃隊長の伊庭八郎は剣をふるって諸隊を励ました。官軍がついに迫ってきた。退く者あれば斬る、皆で進撃し、戦う。諸隊も憤激して自らを励ました。官軍が方々から攻めてきたが、我らもこれを防いだ。砲兵差図役の中川長五郎が中村橋のそばに大砲を備えて頻りに撃っている。戦いは数時間に及んだが、官軍は弱まることはなかった。我が軍も疲れてきた。伊庭八郎は左腕を撃たれたが、なおも屈せずに戦う。官軍の兵は次第に増し、千人をくだらなかった。戦いはなおも激しく、一時の休む間もなかった。中川長五郎が右の腕を撃たれた。官軍はますます勢いをあげ、我が軍は苦戦した。それでついに敗走した。サツカリまで退いた。けがをしている者はとても多かった。伝習二小隊と額兵二小隊がこちらの戦況を聞いて助けにきた。合わせて六百余人で木古内を攻めた。官軍も銃で応戦してきた。我が軍は小銃を装備して撃った。陸軍奉行の大鳥桂（圭）介は馬に鞭を入れて先に立って進み、回天艦、蟠竜艦は函（箱）館港からきて陸戦をたすけた。大砲を雷のごとく放ち、我が軍の気力はますますもりあがった。しかしこちらの数人が尻内（知内）で官軍に囲まれ逃げられなかったので、大いに奮戦して木古内を襲撃した。官軍は多勢だったが前後からはさみうちで攻撃し、また海軍も大砲を撃ったので、官軍はたちまち敗走した。我が軍は進撃して数人を倒し、この地を取り返した。
両艦（回天・蟠竜）は函（箱）館に帰っていった。途中、官軍の春日艦が追いつき、数十発撃つ戦いになったが、勝敗は決まらず、日暮れになったので互いに退いた。
二十一日、我が軍は当別ならびに茂辺地に退く。

五稜郭

解　説

　十七日、江良町へ新政府軍が攻撃をしてきた。
「そこへ春日艦が陸戦を助けようとして、江良港から舵を回し、大砲を撃ってきた」
　春日艦は一八六三年、イギリス建造の木造外輪船で根森の砲台を襲った。このあたりから戦況は不利となった。旧幕府軍監役の佐久間悌二は城中で槍で応戦し新政府軍数名を倒したが、敵に胸を撃たれ戦死した。
　その後の戦いは敗色が濃く、日記には善戦しているように綴っているものの、結果はかんばしいものでなかった。
「我が軍も疲れてきた。伊庭八郎は左の腕を撃たれたが、なおも屈せずに戦う。官軍の兵は次第に増し、千人をくだらなかった。戦いはなおも激しく、一時の休む間もなかった」
　伊庭はかつての戦いで左手首を失っているので上腕を撃たれたと思われる。新政府軍は援軍をおくり攻めたて旧幕府軍は二十一日、当別、茂辺地に退却をよぎなくされた。

廿三日官軍二タ股地名ヲ破ラント欲シ、烟リヲ挙喇叭ヲ吹声波浪ノ激スル如ク忽ニシテ官軍前嶺ニ登リ、頻ニ銃炮ヲ放ツ、挾攻ヲナス、我軍色動ク、総督土方歳三山巓ヲ陟降シテ諸壁ヲ戒ム、総督謂、官軍後ロヲ絶チ則チ烟挙喇叭吹テ潜ミ進ム、我軍ヲ懼レ走ラシテント欲ス、諸子駭勿カレ且退ク者在レハ是ヲ斬ル、官軍ハ謀事不成ヲ知リテ止ム、日没ニ及戦愈烈シク然レドモ我兵少ナクシテ壁多シ、官軍攻ル所ニ従ヒ能ク斃ス
亦官軍撓色無シ、東方正ニ明ナリ、天ニ点雲無シ、両軍戦ヒ数刻ニ及ト雖勝敗ヲ決セス、険嶺ヲ越シ或ハ渓水ヲ渉リ、壁下ニ薄リ銃ヲ放ツ、両軍斃テ不撓臼炮ヲ放ツ雷激ノ如ク、細丸雨飛ニ似リ、夕日西陽官軍少シク疲ル、忽ニシテ敗走ス、我軍敢テ不進、総督自カラ樽酒ヲ携諸壁シテ兵ニ贈リ謂、汝等ハ歩卒ニシテ能防リ、官軍ハ士ニシテ且衆、吾常ニ賞嘆ス、且汝等戦幾許リ、曰五十回ニ下ラス、汝等牧野駿刕公治下妙見山ニテ風雨ヲ侵シテ戦フ、昼夜其烈シクシテ久キハ奥羽越ノ三刕ノ戦ヒ此ニ過ル無シ、今日ノ戦ヒ汝等ヨリ見レハ児童ノ戯ナリ、吾重賞ヲ与フ、然レドモ酔ニ乗シテ軍律侵スヲ患、只一椀ヲ与フ而已、皆喜笑シテ自カラ勉ム、然ルニ官軍亦直ニ来リテ臼炮ヲ放ツ、我軍壁ヲ閉テ銃ヲ放ツ、或ハ薄テ戦ヒ或ハ緩々ト銃ヲ放ツ、近キハ則相距二百歩、遠クシテ五百歩ニ過ス、戦ヲ排ム
日已ニ昇天、官軍潜ミ進ミ壁下ニ薄ル、亦斃レテ撓ム色無シ、我軍数危シ然レドモ官軍亦疲ル、我伝習士官隊数人刃ヲ抜キ数人ヲ斬ル、遂ニ宮軍隊俉乱ル退キ走ル
此戦廿三日申ヨリ廿五日已ニ至ル、大小銃炮耳ニ不絶蝦夷陸軍ノ戦ヒ最モ烈布事此ニ過ルナシ
廿四日官軍甲鉄艦、丁卯艦、陽春艦、朝陽艦、春日艦右五艘函港ニ迫リ、弁天郭ヨリ巨炮ヲ発シ是ヲ防ク、我三艦回天、蟠龍、千代田隔ル数十丁ニシテ巨炮ヲ放ツ、雨飛ノ如ク互ニ炮撃スル数百発、官艦回天ヲ穿ツ三四、亦我艦ヨリ官艦穿ツ六七、甲鉄艦三百斤ノ巨炮ヲ以テ炮台ニ放ツ、百五十斤ノ炮ヲ以テ回天艦ヲ狙撃ス、甲鉄艦ノ炮郭内ニ這ル僅ニ三四、市中江乱飛スル数発、其勢ヒ恰モ百電ノ激スル如ク戦卯ノ中ヨリ未ノ中ニ至リ勝敗ヲ決セスシテ退ク
廿六日復官軍函港ヲ襲ヲ、我回天艦ト戦フ数十ニシテ退ク
廿八日官甲鉄、陽春、丁卯、春日、朝陽、豊安右六艘当別地名沖ニ来リ炮ヲ放、陸軍ヲシテ千五百余人ヲ以テ侵ス、我軍是ヲ防クト雖彼海陸ヲシテ挾攻ス、然ルニ我回天艦、蟠龍艦、千代田艦陸ノ戦ヲ援ト欲シ、楫ヲ転シテ官軍艦ト戦フ、亦当別地名釜屋地名両所ノ炮台ヨリ炮ヲ放テ、亦少シク彼ノ艦ヲ撃ス、然ルト雖我ハ寡彼ハ衆、我軍殆ト危シ、

官軍険嶺ヲ遮テ我軍ヲ横撃ス、忽シテ我一隊瓦解ス、故ニ諸隊皆崩レ総督大鳥桂（）介刃ヲ揮リ大喝シテ曰、今日已ニ迫ル皆止テ戦ヘ、退ク者在レハ斬ル、然レドモ官軍海陸ヲシテ侵ス勢ヒ不可制、皆退走ル、五稜郭戦ヒノ急ナルヲ聞テ、総裁榎本釜二郎遊撃二小隊ヲ率テ馬ニ鞭チ打来リ、援フ、然レドモ有川地名ノ海岸ヨリ巨炮ヲ放ツ、追々岸上ニ迫リ遂ニ兵ヲ陸ニ登サント欲ス、総裁自カラ令ヲ下スト雖敗兵戦ヒ成難シ、且官軍大兵ヲ以テ勝ニ乗シテ攻ム、我軍遂ニ退ク、五里ニシテ亀田新道ヲ守ル、我三艦退ク、函港ニ人ル、然ルニ間道ノ両軍相距一里余隙ヲ伺ヒ奇ヲ出ト欲スルニ本道敗ル、官軍挟攻ヲ患退ケハ則チ躡来ルヲ畏ル、擒ヲ放チ謂勝敗ハ天ニ付ス

日暮官軍ノ営ヲ襲ヲ、充太郎伝習士官隊ヲ率テ斥候ト為シ、衝鋒隊ヲ中軍ニ備エ伝習歩兵隊ヲ後陣トス、総督自カラ令ヲ下シ、粛々烈ヲ成シテ営ヲ抜テ五稜郭ニ入ル

廿九日我千代田艦暁霧ニ乗シテ官軍ヲ侵サント欲シ誤テ洲ニ上ケ出ル不能、器械ヲ海ニ没シテ艦ヲシテ用ユル能ハサラシテ小舟ニ乗シテ上陸ス、然ルニ霧晴レ官春日、甲鉄、朝陽、丁卯四方ニ向ヒ巨炮ヲ放ツ、千代田炮撃セサレハ官艦尚疑ヒ巨炮ヲ頻リニ放ツ、遂ニ其人無キヲ知リ艦ニ入リ奪ヒ去ル、然ルニ艦将森本某シ其顔無キヲ愧シ死ヲ乞許サス獄ニ繋ク、副将市川某自カラ屠腹ス

夜三更我新選組二小隊先陣トス、彰義二小隊中軍ニ備エ陸軍一小隊ヲ後陣トス、暗ニ乗シテ官軍ノ陣ヲ襲ヲ、五更ニシテ戦ヲ、官軍二百余人狼狽シテ敗走ス、我軍数人ヲ斬リ是ヲ攻、有川地名近ク数歩ニシテ退ク、日已ニ昇天復亀田新道ヲ守ル、後亦官軍ノ陣ヲ屢襲ヲ、復新道ヲ守ル

仲夏三日官甲鉄、春日、陽春、丁卯、朝陽、飛龍右六艦亦函港ヲ襲ヲ、炮台炮ヲ放チ防カント欲シ、郭炮悉ク鉄針ヲ穿チ発スル不能、郭中皆大ニ驚キ百術ヲ尽シ漸ニシテ撃スルヲ得、回天艦、蟠龍艦亦巨炮ヲ放チ炮台ト相応シテ戦勝敗ヲ決セスシテ退ク、然ルニ郭内是ヲ糺ス、砲兵隊中ニ二人在リテ為所也、直ニ捕テ獄ニ行フ

七日甲鉄、陽春復襲来ス、炮台ト戦フ、然ルニ回天艦出テ炮台ヲ援フ、春日、朝陽、丁卯来リテ回天艦ヲ狙撃ス、回天死カラ出シテ戦フ、然レドモ寡ハ衆ニ敵セス、且官艦遠クシテ郭ヲ去リ郭炮発スル不能、甲鉄艦ノ巨弾、回天艦ノ車軸ヲ撃破ス、遂ニ運転スル不能、尚屈セスシテ浅所ニ乗上ケ炮ヲ放ツ、恰モ堅城ノ如ク我巨弾数発ス、彼ノ艦ヲ撃破ス、未ノ中ニ至リ退ク

八日暁天ニ乗シテ彰義隊、額兵隊、見国隊、陸軍隊、神木隊、衝鋒隊、炮兵隊、一聯隊合シテ五百余人、総督榎本釜二郎馬ニ跨リ兵ヲ卒テ先達チ官軍ノ陣ヲ襲ヲ、大川地名ニ

至リ官軍亦千余人銃ヲ放チ、我軍大ニ奮戦、両軍相交戦数刻ニ及フト雖勝敗ヲ決セス、午ノ中ニ至リ退テ五稜郭ヲ守ル

二十三日、官軍は二股を攻略しようとし、煙を上げ、喇叭を吹き、波が激するような声をあげて前の峰を上り、頻りに鉄砲を撃つ。はさみうちされ、我が軍の様子がかわった。総督土方歳三は山のいただきを上り下りして各胸壁を用心させた。総督は、官軍が後方を絶とうとして、煙をあげ喇叭を吹いて潜行するのは、我が軍をおそれさせ敗走させようとしているからだ。諸君は驚くな、また退く者あればこれを斬る、という。官軍は謀事が失敗なのを知ってやめた。日没に及び戦いはいよいよ激しくなったが、こちらは兵は少ないが胸壁は多い。官軍の攻めるところにたいしてこれを倒した。
官軍も退くことはなかった。東の方が明るくなり、空には雲ひとつなかった。両軍の戦いは数時間に及んだが、勝敗は決しなかった。険しい峰を越し、あるいは渓流を渡り、胸壁の下に近づき銃を撃つ。両軍は死者を出したがどちらも退かず、激しい雷のように大砲を放ち、銃は弾の雨がふっているように撃たれた。夕方になり官軍も疲れがでて敗走した。我が軍はあえて進撃しなかった。総督は自ら樽酒をもって各障壁の兵に贈り、君たちは歩兵でありながら、よく防ぎ、官軍は士官でかつ人数も多いにもかかわらず、私はいつも賞嘆している。君たちは何度戦ってきたか。五十回を下らないと言えるだろう。君たちは牧野駿州公（長岡）の妙見山で風雨の中戦った。昼夜に及んだ激しく長い奥羽越の三州との戦いはこれよりもたいへんだった。今日の戦いは君たちからみれば子供の遊びである。私は恩賞を与えよう。しかし、酔いに乗じて軍律を乱すことはいかんので、一杯ずつ与える。皆、うれしそうに笑い、自らを励ました。しかし、官軍がまたきてすぐに大砲を撃ってきた。我が軍は胸壁を閉じて銃を撃ち、あるいは近づいて戦いあるいはゆるゆると銃を放つ。（両軍の間は）近くは二百歩ほど、遠くても五百歩の距離にすぎなかった。決戦を避けた。
日が昇り、官軍は隠れて進み、胸壁の下に迫った。倒れてもひるむことがなかった。我が軍も何度か危ないところがあったが、官軍もまた疲労が濃い。こちらの伝習士官隊数人が白刃を抜いて数人を斬った。ついに官軍の隊は乱れ、退いた。
この戦いは二十三日から二十五日まで続いた。大小銃の音が耳に絶えることなく、蝦夷陸軍の戦いでもっとも激しいものとなった。
二十四日、官軍の甲鉄艦、丁卯艦、陽春艦、朝陽艦、春日艦の五艘が函（箱）館港に迫り、弁天郭（台場）から大砲を撃って迎撃した。こちらの回天、蟠竜、千代田の三艦は数十丁を隔てて大砲を放った。雨のごとく互いに数百発砲撃した。官軍の船が回天に三、四、穴をあけたが、こちらの船も官軍のものに六、七つ穿った。甲鉄艦は三百斤の大

砲を砲台にむかって撃った。そして百五十斤の大砲をもって回天を狙撃した。甲鉄艦の砲撃は郭（台場）内にも三、四つはいったが、数発は市中へ乱れ飛んだ。その勢いはあたかも雷のようであり、戦いは卯の中刻より未の中刻（午前七時から午後一時）に至ったが、勝敗を決められず退いた。

二十六日、また官軍の船が函（箱）館港を襲う。回天とたびたび撃ちあって戦い、退く。

二十八日、官軍率いる甲鉄、陽春、丁卯、春日、朝陽、豊安の六隻は当別沖にきて大砲を放ち、陸軍千五百余人で進軍してきた。こちらもこれを防ぐといえども、海陸から挟みうちをされる。それで回天艦、蟠竜艦、千代田艦が陸戦を助けようと、舵をとって官軍の船と戦闘になった。また当別、釜屋の両所の砲台から大砲を放ち、微弱ながら敵の艦を撃った。しかしこちらは少数で官軍は大勢であるので、我が軍は危うかった。官軍は険しい峰を遮り、我が軍を撃ってきた。そのためこちらの一隊が瓦解してしまった。諸隊は崩れたが、総督大鳥桂（圭）介は刃をふりまわし、大声でここに皆止まって戦え、退く者あれば斬るとどなった。しかし官軍は海陸から攻めてきて、その勢いは制することができず、皆敗走した。五稜郭で戦いがきびしいことを聞いて、総裁の榎本釜二（次）郎は遊撃二小隊を率いて馬で応援にきた。しかし有川の海岸から官軍が大砲を撃ってきた。おいおい岸に迫り、ついに兵を上陸させようとした。総裁自ら命令を下したが、戦いにならなかった。官軍は大兵をもって勝ちに乗じて進撃してきた。我が軍はついに退く。五里進み亀田新道を守衛する。こちらの三艦は退き、函（箱）館港にはいる。しかし間道の両軍の距離は一里あまりで、隙をうかがって奇襲にでようとしたが、本道で敗れる。官軍のはさみうちをおそれ、人質を放し、勝敗は天にまかせた。

日が暮れてから、官軍の陣を襲う。（滝川）充太郎は伝習士官隊を率いて斥候にいき、衝鋒隊を中軍に備えて伝習歩兵隊を後陣とした。総督自ら命令を下し、粛々と列をなして陣を抜き、五稜郭に入る。

二十九日、千代田艦は暁の霧に乗じて官軍を攻めようとしたが、誤って浅瀬に乗り上げ、出られなくなってしまった。武器を海に沈め、船を使えなくして小舟に乗り上陸した。霧が晴れて官軍の春日、甲鉄、朝陽、丁卯が四方に大砲を放ってきた。千代田が砲撃しないので官軍の船はなおも疑って大砲を頻りに撃つ。ついに無人であることを知って、船に乗り込み奪い去ってしまった。艦将の森本某は面目ないと死を望んだが許さず、獄につないだ。副将の市川某は切腹して果てた。

夜の三更（午後十一時から午前一時）、我ら新選組二小隊が先陣となった。彰義二小隊を中軍にして陸軍一小隊を後陣とした。暗闇に乗じて官軍の陣を襲い、五更（午前三時から午前五時）まで戦い、官軍二百余人が狼狽して敗走した。我が軍は数人を斬り、これを攻めて有川の近くまで退く。日が昇ってまた亀田新道の守りについた。のち、官軍の陣をたびたび襲う。そしてまた新道を守衛した。
五月三日、官軍の甲鉄、春日、陽春、丁卯、朝陽、飛竜の六艦がまた函（箱）館港を襲う。砲台から大砲を撃ち防ごうとしたが、大砲にことごとく釘が打ち込まれており、使えなくなっていた。皆、おおいに驚き、いろいろと力をつくしてようやく撃てるようになった。回天艦、蟠竜艦もまた大砲を撃ち、砲台とともに戦ったが勝敗がつかずに退いた。そして大砲使用不能の件についてただした。すると砲兵隊の中にいた二人の仕業とわかった。すぐにこの二人を捕えて処罰した。
七日、甲鉄、陽春がまた襲来した。弁天台場で戦う。回天艦も出て砲台を助ける。春日、朝陽、丁卯もきて回天を狙撃する。回天は死にものぐるいで戦った。しかし少数は多勢にかなわず、官軍の船までは遠く、砲台から弾がとどかなかった。甲鉄艦の巨弾が回天の車軸を撃破した。ついに運転不能となった。しかしなおも屈せず、浅瀬に乗り上げて大砲を放った。あたかも堅固な城のようになり、そこから数発大砲を撃った。そして官軍の船を撃破した。未の中刻（午後一時）となり退く。
八日の明け方に乗じて、彰義隊、額兵隊、見国隊、陸軍隊、神木隊、衝鋒隊、砲兵隊、一聯隊合わせて五百余人、総裁榎本釜二（次）郎が馬にまたがり兵を卒（率）いて先達となり官軍の陣を襲撃した。大川で官軍千余人が銃を放ち、我が軍も大いに奮戦したが、両軍の戦いは数時間に及んでも決着がつかなかった。午の中刻（正午頃）になって退き、五稜郭を防衛した。

五稜郭周辺略図

常盤川
亀田新道
七重浜
八幡神社
五稜郭
千代ケ岡陣屋
亀田川
一本木関門
一本木
築島
弁天台場
外国人居留地
異国橋
旧奉行所
外国領事館
▲七面山
▲箱館山

解　　説

　二十三日、二股の戦いでは、逃げまどう兵士を見て、
「また退く者あればこれを斬る」
　令あやまれば千兵たおれるの諺がある。土方は兵士の中には敵の大軍を目にして臆病風に吹かれ逃走する者がいたので、毅然とした態度で斬り捨てると告げた。兵士も連日の戦いで疲労困こん憊ぱいの状態だった。
「総督は自ら樽酒をもって各障壁の兵に贈り、君たちは歩兵でありながら、よく防ぎ、官軍は士官でかつ人数も多いにもかかわらず、私はいつも賞嘆している」
　土方の労ねぎらう言葉に感涙した兵士もいたという。徳川に汚名をきせられたくないために一命を捧げて戦う土方の姿には美学があった。
「私は恩賞を与えよう。しかし、酔いに乗じて軍律を乱すことはいかんので、一杯ずつ与える」
　兵士の顔に笑顔が戻り、同志らは励まし合い土方を車座に囲み勝利を誓った。
　日記をみると四月二十四日から五月初旬にかけて、新政府軍の大軍の前に旧幕府軍は防戦するのがやっとであることがわかる。

十一日官飛龍、豊安両艦江千余人乗込、小舟数十艘ヲ引テ暁霧ニ乗シテ臥午山ノ後口寒川尻沢辺襲ヲ、小舟ヲ散布シ岸上ニ迫リ、我軍数人是ヲ防ク、左ヲ支エント欲スレハ右ヨリ攻、右ヲ禦セント欲スレハ左ヨリ是ヲ攻、遂ニ尻沢辺ヨリ上陸ス、我軍未タ是ヲ知ラス忽ニシテ臥午嶺ノ上ヨリ銃ヲ放ツ、我軍勇成リト雖寡ハ衆ニ敵セス遂ニ退ク、春日七重浜ノ陸戦ヲ援ヒ楫ヲ転シテ炮台ニ放ツ、我蟠龍艦炮台ト相応シテ戦フ、蟠龍艦ニ対スル者朝陽艦ト丁卯艦、独リ甲鉄艦彎ノ中央ニ忽然トシテ不動、三百斤ノ巨炮ヲ以テ炮台ニ放ツ、百五十斤ヲ以テ蟠龍艦ニ放ツ、蟠龍ノ一弾彼ノ朝陽艦ヲ撃破沈没ス、海轟キ雷ノ如ク炊烟漲キリ上ル、我蟠龍尚死戦スト雖弾丸已ニ尽キ亦戦フ不可、浅所ニ乗上ケ二艦回天蟠龍共自焼シテ回天ヨリ五稜郭ニ行、蟠龍ヨリ郭内ヘ来ル、遂ニ海軍ノ戦止ム、猶陸軍ノ戦烈シク忽ニシテ筥館山巓ニ小銃ノ声有リ、仰テ是ヲ見レハ官軍已ニ山巓ニ登リ、我軍七面山ニ戦フト雖支ル不能、遂ニ退ク、官軍迫リテ郭下ニ来ル、我軍二百余人炮台ニ籠ル、郭側ノ民家ニ火ヲ放チ、官軍攻ムト雖堅ニシテ不動ヲ知リ敢テ是ヲ侵サルナリ、然ルニ土方歳三馬ニ跨リ彰義隊、額兵隊、見国隊、杜陵隊、伝習士官隊合シテ五百余人ヲ卒テ炮台ヲ援ト欲シ、一本木街柵ニ至リ戦フ、已ニ破リ異国橋近ク殆ト数歩ニシテ官軍海岸ト沙山トヨリ狙撃ス、数人斃ル、然ルニ撓ム色無シ、已ニ敵丸腰間ヲ貫キ遂ニ戦没、亦我軍進テ攻ムル不能、退テ千代ヶ岡ニ至ル

軍監役大島寅雄、土方歳三没ルヲ見テ馬ニ鞭チ打五稜郭ニ至ル、皆是ヲ見テ曰ク、君来ルハ何故ソ、寅雄謂、事甚急ナリ、諸君ニ語ルニ暇ナシ、両総裁ニ逢テ筥館ノ敗ヲ語ラン、総裁榎本釜二郎曰ク、聞ニ官軍炮台ヲ侵ス、新選炮兵ノ二隊炮台ニテ囲マレ是ヲ救ハサルハ則チ心不有ナリ、吾兵ヲ卒テ之ヲ援ハン、皆馬ヲ諌メ曰、総裁筥館ニ向フ、則チ他ノ方面ヲ如何セン、総裁此座ヲ不可動、副総裁松平太郎曰、吾総裁ニ代リ駿馬ニ鞭打千代ケ岡ニ至ル、吾副総裁ノ命ヲ執ス、兵ヲ卒テ直ニ筥館ニ進ム、途ニシテ馬ニ跨リ牛刃シテ眼光人ヲ射ル、血鞍ニ流レテ赤シ、総裁ヲ呼テ曰、吾筥館ニ向ヒ炮台援フ不能、且吾ハ傷スル亦戦不可、蓋シ士官隊長瀧川充太郎ナリ

副総裁兵ヲ別チ海岸ト沙山ト進マシム、一本木街柵ニ至リ官軍忽銃ヲ放ツ、我軍起シテ銃ヲ放ツ、臥シテ放ツ者有リ、両軍相交且集且散且支且侵シ、戦数刻ニ及フト雖勝敗ヲ決セスシテ退ク、千代ケ岡ニ集ル彰義隊長渋沢清一、蓬髪面覆意色甚タ悪シ、杜陵隊長伊藤善次口吃シテ曰、今日吾甚労ス、亦吾カ杜陵隊死傷多シ、会遊撃隊長星潤太郎隊長柏崎才一黙シテ不答、額兵隊剣ヲ抜テ嘆シテ曰、諸君ヲ視ルニ面目無シ、吾額兵隊甚惰タル、

千代ヶ岡総督中島三郎介年六十余鬢髪半白巾ヲ以テ傷ヲ給ス、従容トシテ曰ク、吾此岡ニ死ス而已、夕陽西ニ傾ク、副総裁厳ニ千代ヶ岡ヲ守ラシテ五稜郭ニ帰ル

此日五稜郭西南ノ郊ニ戦フ者遊撃隊、彰義隊、伝習歩兵隊、陸軍隊、見国隊、炮兵隊、七重浜ニ戦者額兵隊、会遊撃隊暁ヨリ勇ヲ揮奮戦ス、夕日両軍河ヲ隔テ陣ス

十二日官軍市中ニ壁ヲ築キ銃ヲ放ツ、瞬息ノ間休無シ、亦甲鉄艦独リ彎ノ中央ニ来リ炮台ヲ狙撃ス、或ハ楫ヲ転シテ七重浜ノ沖ニ至リ五稜郭ヲ狙撃ス

十三日我病院ノ医高松凌雲執事小野権ノ丞竊ニ官軍ノ意ヲ受ケ、薩藩池田次郎兵衛、諏訪常吉会藩、傷シテ病院ニ居ルニ語ル所ヲ書シテ、病院ニ在ル者ヲ携炮台ニ来ラシテ且官軍ノ意ヲ伝云フ、降ル肯セラレハ和ヲ請フ、戦フモ今日ニ在リ亦戦ハサルモ今日ニ在リ、速ニ之ヲ決シ、炮台書ヲ以テ答云フ、五稜郭ニ至リ、両総裁ニ逢テ議スル

十四日新選組相馬主殿ト薩藩永山友右ヱ門自カラ先達チ令ヲ諸軍ニ下シ行ヲ開キ五稜郭ニ至リ友右ヱ門主殿ニ謂、今日ノ事実ニ義戦也、諸藩之ヲ悪ム者ナシ、諸君限リ有ノ兵ヲ以テ限リ無シノ天兵ニ敵スル一日ノ勝有ト雖終ニ其敗其意説テ降サシメント欲ス、主殿、総裁榎本釜次郎、副総裁松平太郎ニ逢テ時昔ヲ語ル、主殿帰リ友右ヱ門ニ謂、釜二郎、太郎日暮必ス書ヲ以テ高松、小野二子ニ答フ、二子ヲシテ参謀執事ニ達ス、吾亦答無キ

翌十五日友右ヱ門暁ヲ侵シテ炮台ニ来リ主殿面シテ曰、榎本、松平二君ノ答フ所ニヲイテ戦止不能、願ハ再々之ヲ思慮セ其意懇切信義ヲ以テ談ス、主殿友右ヱ門ヲシテ釜次郎千代ヶ岡ノ側ノ橋上ニ逢シム、友右ヱ門説ヲ降サント欲、釜次郎曰、官軍吾等思フ厚キヲ不感ニ非ス、釜次郎降ル不能、友右ヱ門降ル色無ヲ見テ再不説、主殿、釜二郎ニ謂、今日総裁意ヲ決セハ則チ炮台モ又決ス、然レドモ五稜郭ト炮台ト官軍ノ遮キル所ト為リ、声息相通セス、唯衆義ノ宜キ所ニ従ヒ必ス総裁ノ命ヲ奉スル不能、二人並騎シテ帰ル、友右ヱ門嘆シテ曰ク、多相殺傷益無シ、且海軍ト外国交際朝廷乏其人榎本君実ニ惜ム可ナリ、如何吾誠ノ不徹互ニ劇戦シテ別ル、当日中官軍酒肉ヲ以テ炮台ノ諸隊ヲ慰シム、且云飛箭乱弾之中ト雖行人遣白旗揮シテ進者是ナリ請是ヲ殺傷スル勿レ、実ニ古元亀天正ノ遺風有リ、皆官軍ノ贈ル所ノ酒ヲ酌テ曰ク、一酔決戦而已、已ニシテ馬ニ鞭チ打テ来ル者有リ、即チ友右ヱ門ナリ、炮台ノ総督永井玄蕃ニ逢回折弁論玄蕃諸隊ニ謂、我請所ヲ許サス、直ニ大兵ヲ以テ来リ侵ス、士ノ道トシテ不戦不可、然レドモ遠労ノ天兵ニ謝サス不可諸子如何トナス、皆色ヲ変シテ曰ク、成ハ則義名ヲ天下ニ挙、不成ハ則チ死スル而已、玄蕃諭日、諸子死ヲ以テ其身ヲ潔クセント雖官軍信義ヲ以テ語ル亦不可棄

、且徒死益無シ、皆首ヲ垂テ不答、有暫曰、僕等患所ハ此膝一屈セハ則刀ヲ帯ヲ不得、苟モ刀ヲ帯ヲ得、余ハ唯総督ノ命ニ従フ、自カラ兵器ヲ投シテ降ル、自カラ恭順シテ遠労ノ天兵ニ謝ス

日暮官軍々監参謀ノ書ヲ奉シテ来ル、其一曰ク、長官ノ者陣門ニ罷出可申事、其二曰ク、願ノ通リ台場ニテ恭順追テ朝裁ヲ相待、其三ニ曰ク、帯刀ノ外兵器悉皆差出可申事

十七日千代ケ岡江官軍迫リ部内ニ乱入、銃ヲ捨テ刃チ抜キ接戦、総督中島三郎介親子三人烈戦遂ニ戦没ス、嗚呼憐可シ、天成哉命ナル哉、此岡陥ル哉ハ遁レ哉ハ降ル

十八日五稜郭遂ニ降ル

十九日軍督又直ニ乗リ降伏謝罪ノ令ヲ下ス、其一日、諸隊尽ク双刀ヲ差出シ、其二日、長官ノ者陣門ニ降伏罪ヲ謝ス可シ、竊ニ諭シテ曰、千代ケ岡已ニ敗ス、五稜郭遂ニ降ル、榎本君ノ如ク双刀ヲ脱シ、独リ此郭佩刀恭順、榎本君ノ為ニ双刀ヲ脱シ皆愕然相見テ一語ナシ、貌ハ恭シテ心ニ憤リ夫始メニ恭順セサレハ論勿レ、已ニ恭順シテ強弁抗論軍監ノ意ニ逆ラヘハ一罪重ナリ、勢如何トモ不可雙刀ヲ脱シ囚虜トナリ

廿一日迄テ台場ニテ恭順、当日中英ノ敵艦ニ乗シテ津軽ニ航シ、青森ノ寺院ニ身ヲ慎ミ、夫レ炮台ニテ戦フト戦ヒヲ不決サルト刀ヲ帯ト刀ヲ帯サルト、其関所実ニ大井ナリ、一旦刀ヲ帯ヲ許シ尽ク兵器ヲ奉ヲシテ後突然トシテ謝罪ノ令ヲ下ス、吾等ヲ愚弄スルハ三尺ノ童子ノ如シ、抑何ソ忍ヤ、吾等自カラ蝦夷一片ノ義ニ寄セ十死有リ一生無シ、今日手足異所ト雖豈天ヲ怨哉人ヲ怨哉

廿四日大坂艦朝廷舟青森ニ来リ直ニ乗込

廿五日出航、同夜筥館ニ着ス、十一月四日迄碇泊、此日筥館出帆、同七日品川沖ノ浅所エ乗上ケ、八日朝品川港ニ着ス、夕景芝山内ニ入ル、廿日兵部省ヨリ達シ有リ、名古屋藩エ預ケニナル

官軍死人青森ニテ百余人五ケ寺ニホヲムリ有リ、亦筥館ニテ討死千九百九十八人筥館ニテ正魂社相建チホヲムリ有リ、我隊長土方公モ其正魂社ノ側ニ石墓相建候ナリ、法名歳進院誠山義山豊大居士ト云フ、参リ人タユルコトナシ

十一日、官軍の飛竜、豊安の両艦へ千余人が乗り込み、小舟を数十艘引いて明け方の霧にまぎれて臥午（牛）山の後ろの寒川尻沢辺を襲ってきた。小舟を散らし岸に迫ってきたので、我が軍の数人がこれを防いだ。左を支えようとすると右より攻め、右を防御しようとすると左より攻め、ついに尻沢辺より上陸した。我が軍は未だこれを知らず、たちまち官軍は臥午（牛）山の上より銃を撃った。我が軍は勇なりといえども少数は多勢に相手にならず、ついに退く。春日艦が七重浜の陸戦を助け、舵をかえて砲台に撃ってきた。こちらの蟠竜も砲台とともに戦った。蟠竜艦に対しているのは朝陽と丁卯艦であった。ひとり甲鉄は湾の中央にいて動かず、三百斤の大砲をもって砲台へ放つ。また百五十斤の大砲を蟠竜に向けて放った。蟠竜の一弾は朝陽艦を沈没させた。海は雷のように轟き、煙があがった。蟠竜はなおも死戦をしたが、弾丸が尽き戦うことができなくなった。浅瀬に乗り上げて二艦回天、蟠竜とも自焼し、回天の内部のものは五稜郭に行く。蟠竜の乗組員も弁天台場にきた。ついに海軍の戦いは終結してしまった。なお陸軍の戦いははげしく、箱館山の上から小銃の音がし、仰ぎ見ると官軍がすでに山頂に登り、我が軍は七面山で戦ったが支えることができなかった。それでついに退いてしまった。官軍は五稜郭下までせまっており、（弁天）砲台にこちらの軍の二百余人が籠城していた。五稜郭外の民家に放火し、官軍は攻めるといえども堅固で不動であることを知り、あえてこれを侵略しなかった。土方歳三は馬にまたがり、彰義隊、額兵隊、見国隊、杜陵隊、伝習士官隊の合わせて五百余人を率いて弁天台場を助けようとし、一本木関門（街柵）にいって戦った。ついにこれを破り、異国橋付近まであと少しのところで、官軍が海岸と沙山から狙撃してきた。数人が倒れたが、（土方は）ひるむことはなかった。しかしついに敵の弾丸が腰を貫き、（土方歳三は）戦死した。我が軍は進撃することができず、千代ケ岡まで退いた。
軍監役の大島寅雄は、土方歳三が戦死したのを見て馬で五稜郭に戻った。皆、これをみて、君が戻ってきたのは何故かと聞いた。寅雄は事ははなはだ急ぐ、諸君らに話している暇はないと答えた。そして両総裁に会って箱館（市中）の敗戦を語った。総裁の榎本釜二（次）郎は、官軍は台場を進撃すると聞いた、新選組、砲兵隊の二隊は砲台にいて官軍に囲まれており、これを救わなければいけない、私が兵を率いてこれを助けにいくといった。皆は馬を押さえて、総裁が箱館（市中）に向かって、他の方面をどうするのか、総裁はこの場を動くことはできない、といった。副総裁松平太郎は、私が総裁にかわり馬で千代ケ岡にいく、といった。私は副総裁の命を守る（島田は弁天台場組なので

、ここは総裁の命は私が守るとした松平太郎の言葉だと思われる）。兵を率いてすぐに箱館に進む。刀を下げ眼光鋭く、鞍まで血が流れている人物に会った。総裁を呼んで、箱館にむかって砲台を助けることはできず、私もけがをして戦うことができないと言った。恐らくこの者は士官隊長滝川充太郎であった。
副総裁は兵を分けて海岸と沙山を進撃させた。一本木関門に至ると、官軍が銃を撃ってきた。我が軍も銃を放った。臥して撃つ者もあった。両軍は相戦い、集まりかつ散りかつ支え、かつ進撃したが、数時間に及んでも勝敗が決まらず退いた。千代ケ岡にいた彰義隊隊長渋沢清（精）一は、髪は乱れ顔色も悪かった。杜陵隊長の伊藤善次がたどたどしく、今私ははなはだつかれている、私の杜陵隊も死傷者は多い、といった。会津遊撃隊長柏崎才一は黙って答えず。額兵隊隊長星潤（恂）太郎は剣を抜き嘆きながら、諸君を見ていると、面目ない、我が額兵隊はひどくいくじがない。千代ケ岡の総督中島三郎介（助）は六十余歳で鬢には白髪がまじっており、白い布で傷をおさえていた。落ち着いて、私はこの岡で死ぬつもりだといった。夕日が西に傾いた。副総裁は千代ケ岡を厳しく守らせ、五稜郭に帰った。
この日五稜郭西南の郊外で戦っていたのは、遊撃隊、彰義隊、伝習歩兵隊、陸軍隊、見国隊、砲兵隊であった。七重浜では額兵隊、会津遊撃隊が明け方から勇ましく奮戦していた。夕刻になって両軍は川を隔てて陣をはった。
十二日、官軍は市中に胸壁を築き銃を放ってきた。少しの間もやすむことはなかった。また、甲鉄艦が湾の中央にきて砲台を狙撃した。それから舵をとって七重浜の沖に至り五稜郭をも狙撃してきた。
十三日、こちらの病院の医師・高松凌雲の執事である小野権之丞がひそかに官軍の意をうけ、薩摩藩池田次郎兵衛、諏訪常吉（会津藩。傷のため病院にいる）の話を書面にし、病院にいる者に携えさせて砲台に行かせ、官軍の話を伝えるところによると、降伏するならば和睦をする、戦うのも今日にあり、戦わないのも今日にある、速やかにこれを決せよというので、砲台では書面をもって答えるといい、五稜郭にいき、両総裁にあって話をすることになった。
十四日、新選組の相馬主殿が薩摩の永山友右衛門（本名・田島圭蔵）とともに、自ら諸軍に命令を下し、五稜郭に至った、友右衛門は主殿に、今日までの事は実に義の戦いであった、諸藩にこれを悪くいう者はないだろう。諸君は限りある兵をもって、限りない兵とたたかった。一日は勝ったが（多少は勝ったがという意味）、ついには敗れた。そ

の意味を説明して投降するようにしてほしい、といった。主殿は総裁榎本釜二（次）郎、副総裁松平太郎にあって昔話をした。主殿が戻り友右衛門に、総裁と副総裁は日暮れに必ず書面をもって高松と小野の二子（氏）に答えるという、この二子（氏）をして参謀執事に伝える、といった。しかし答えはなかった。
十五日、友右衛門は明け方に砲台にきて主殿に、榎本、松平の二君の答えは戦はやめないということだった、願わくば再度このことを思慮し、こちらの信義をもって話したいといった。主殿と友右衛門は千代ヶ岡のそばの橋の上で榎本にあった。友右衛門は降伏するようにと説いた。榎本は、官軍がわれらを手厚く思うを感じなくはない。榎本は降伏することをせず、友右衛門は降伏する意志がないのをみて再び説得した。主殿が榎本に、今日、総裁が意を決すれば、砲台も決します。しかし、五稜郭と砲台の間は官軍が遮っているので共に行動できません。ただ我らは義のある所に従うので必ず総裁の命令に従うことはできません。二人（主殿、友右衛門）は馬を並べて帰った。友右衛門は、多数を殺傷しても無益である、それに海軍と外国との交際について朝廷は人が乏しいので榎本君は実に惜しむ人であると嘆いた。どうすれば誠が伝わるのか、互いに激しく言って別れた。この日、官軍から砲台の諸隊を慰めるため酒が贈られた。また弾が乱れ飛ぶ中でも、白旗をふって進む者があれば殺傷しない、古くは元亀天正からの遺風がある。皆官軍の贈られた酒を酌み交わして、一酔して決戦であるといった。そこに馬に鞭をくれてくる者がいた。友右衛門である。砲台の総督永井玄蕃にあい、弁を論じて玄蕃の隊にいう、私は降伏を受け入れるのを許さない、すぐに大兵をもって進撃する、武士の道として戦わずにはいられない、しかし遠労の天兵（朝廷の兵）に対しては謝罪しないのか、君たちはいかがする。皆、顔色を変えて、義名を天下にあげれば成功であるが、不成功になったのならば死ぬしかない、といった。玄蕃は、諸君は死をもってその身を潔くしようとしているが、官軍が信義をもって語っていることも破棄することはできない、いたずらに死んでは無益である、という。皆首を垂れて答えず、しばらくして、僕らの煩うところは、この膝を一度屈してしまえば、刀も帯びられなくなる。いやしくも今は武士として帯刀している以上、私はただ総督の命令に従うだけだと答えた。自ら兵器を捨てて投降し、恭順して軍門に下った。
日が暮れて官軍参謀の書状がきた。それによれば、一つは長官職の者は陣門にまかり出ること、二つは願い通り台場で恭順した者はおって朝廷の裁きを待つこと、三つめは、帯刀のほか兵器はことごとく差し出すこと、ということであった。

十七日、千代ヶ岡へ官軍が迫り、乱入した。銃を捨てて、刀を抜き接戦となった。総督の中島三郎介（助）親子三人は激しい戦いをしてついに戦死した。なんとあわれであろうか。これも天命なるか。この岡も陥落する。あるいは倒れ、あるいは降伏した。

十八日、五稜郭ついに降伏する。

十九日、軍監がまたすぐにきて、降伏謝罪の命令を下した。その一、諸隊はことごとく大刀小刀を差し出し、その二、長官の者は陣門に降伏し、罪をわびるべし、諭すように、千代ヶ岡はすでに負けた、五稜郭もついに陥落した、榎本君は両刀を脱し、ここだけが帯刀して降伏しているので、彼のためにも大小を渡せと言うと皆驚愕し、一言もなかった。顔は恭順ではあるが心に憤り、そもそも恭順しなければ言い争うこともないだろうが、しかし恭順しているので、軍監の意に逆らえばいっそう罪は重くなる、いかんともしがたく、両刀をわたし捕虜となる。

二十一日まで台場にて恭順（謹慎）、そこからイギリス製の官軍の船にのり、津軽へ行き、青森の寺院（蓮華寺）で身を慎み、砲台で戦うか戦わないかを決めたり、刀を持つかもたないかなど、その関所は実に大井なり。いったん帯刀を許し、ことごとく兵器を納めたがそのあと突然、謝罪するように命令をくだす。我らを七、八歳の童子のように愚弄した。しかし抑え忍ばなくてはならない。我は自ら蝦夷の片隅の義により、十死あり一生なし（死に場所をなくしたということか）今日、手足に異常がないといえども天を恨むか人を恨むか。

二十四日、大阪艦朝廷の船が青森にきてすぐに乗り込む。

二十五日、出航、同夜、箱館に着く。十一月四日まで停泊。この日、箱館を出帆。同七日、品川沖の近くにきて、八日朝、品川港に着く。夕方芝山内にはいる。二十日、兵部省より達しがあった。名古屋藩のお預けとなる。

官軍は死人を青森で百余人、五カ所の寺に葬った。また箱館で討死した千九百九十八人は箱館で正（招）魂社が建ち葬った。我が隊長土方公もその正（招）魂社のそばに墓石がたった。法名は歳進院誠山義山豊大居士という。参る人はたえることがない。

解　　説

　五月十日、新政府軍の箱館総攻撃を目前にひかえ旧幕府の幹部が別盃をかわすため宴を開いた。

「明日ハ官軍が総攻撃をするといふことで、別れを告けんために函館の武蔵野といふ妓楼がござりましたが、それには榎本、松平、大鳥を始め将校皆な集まって別れの盃を致しました。天明を待って榎本等ハみな五稜廓に帰り私ともハ函館の入口の七重村に打て出てる積りで別れました。果して天明に至たらぬ中から官軍の各軍艦から発砲し始めまして、艦隊残らず運転して五稜廓と函館を砲撃致し、大軍の陸兵も三方より参りまして二日の間、海陸とも大激戦でありました」（『史談会速記録』人見勝太郎談）

　参集したのは、榎本武揚、松平太郎、大鳥圭助はじめ幹部三十七、八ということで当然ながら土方も同席したにちがいない。

　翌五月十一日、早朝より総攻撃が開始された。土方は馬にまたがり彰義隊ならびに諸隊あわせ五百余人を弁天台を助けるため一本木関門で戦った。異国橋付近で新政府軍に狙撃された。

「数人が倒れたが（土方は）ひるむことはなかった。しかしついに敵の弾丸が腰を貫き、戦死した」

　土方の戦死場所には一本木はじめ鶴岡町、異国橋と諸説あるが、日記の一本木が有力視されている。土方の最期をみとった者も皆無であった。『新選組日誌』からも可能性があるのは、立川主税、大野右仲、沢忠助らと思われる。

　立川は安富才助宛で「終始付添居候」と書き送っている。大野は土方の守備していた一本木関門から出陣、敗走した千代ヶ岡陣屋で安富と大島寅雄から戦死状況を聞いている。沢は安富とともに土方に付き添っていたとされるが、安富は土方の実家宛に「遂ニ同所ニ而討死せられ」と書いたとある。

　土方の遺骸は小者小芝長之助が五稜郭内に埋葬したという。

　日記は二十五日まで綴り、この戦いで戦死した千九百九十八人を招魂社に葬った、で終わっている。

＊参考文献

『史談会速記録　合本五・十四・十五・二十一』（原書房）明治二十七　－　三十八年
『近藤勇』松村巌（内外出版協会）明治三十六年
『会津戊辰戦争』平石辧蔵（兵林館）大正六年
『京都守護職始末』山川浩（郷土研究社）昭和五年
『池田屋事変始末記』寺井維史郎（佐々木旅館）昭和六年
『池田屋事変殉難畧史』勝田良融（三縁寺）昭和八年
『池田屋事変殉難記』河上利治（池田屋事変殉難志士顕彰会）昭和三十八年
『古高俊太郎』高田文太郎（古高俊太郎先生遺徳顕彰会）昭和三十九年
『幕府と御所』京都新聞社編（京都新聞社）昭和四十二年
『新撰組顛末記』永倉新八（新人物往来社）昭和四十六年
『高知県人名事典』高知県人名事典編集委員会編（高知市民図書館）昭和四十六年
『新選組事典』新人物往来社編（新人物往来社）昭和四十八年
『斬奸状』栗原隆一（学芸書林）昭和五十年
『徳川慶喜公伝　史料篇三』（続日本史籍協会叢書）昭和五十年
『定本新撰組史録』平尾道雄（新人物往来社）昭和五十二年
『新選組始末記』子母澤貫（講談社）昭和五十二年
『天誅組』西口紋太郎（原書房）昭和五十三年
『維新暗殺秘録』平尾道雄（新人物往来社）昭和五十三年
『明治維新人名辞典』日本歴史学会編（吉川弘文館）昭和五十六年
『幕末維新京都史跡事典』石田孝喜（新人物往来社）昭和五十八年
『日本史資料総覧』村上直・高橋正彦（東京書籍）昭和六十一年
『霊山歴史館紀要　第一』（霊山歴史館）昭和六十三年
『京都市の地名』（平凡社）平成元年
『血誠新撰組』（学習研究社）平成三年
『新選組史料集』新人物往来社編（新人物往来社）平成五年
『天誅組紀行』吉見良三（人文書院）平成五年
『新選組大事典』新人物往来社編（新人物往来社）平成六年
『霊山歴史館紀要　第七』（霊山歴史館）平成六年

『新選組日誌　上・下』菊地明・伊東成郎・山村竜也編（新人物往来社）平成七年
『箱館戦争史料集』須藤隆仙編（新人物往来社）平成八年

著者紹介
木村幸比古［きむら・さちひこ］
１９４８年、京都市生まれ。国学院大学文学部卒（近世思想史）。現在、霊山歴史館学芸課長、岩倉具視対岳文庫長。幕末維新史に関する評論を多数執筆。１９９１年、維新史の研究と博物館活動で文部大臣表彰、２００１年、生涯学習推進で京都市教育功労者表彰を受ける。
著書に、『龍馬暗殺の真犯人は誰か』（新人物往来社）、『新選組戦場日記』（ＰＨＰ研究所）、『京都・幕末維新をゆく』『坂本龍馬、京をゆく』『新選組、京をゆく』（以上、淡交社）、『史伝土方歳三』（学習研究社）、『新選組と沖田総司』（ＰＨＰ新書）など多数ある。

新選組日記

永倉新八日記・島田魁日記を読む

著　者：木村幸比古

この電子書籍は『新選組日記』二〇〇三年七月二日第一版第一刷発行を底本としています。

電子書籍版

発行者：清水卓智
発行所：株式会社ＰＨＰ研究所
東京都千代田区一番町二一番地
〒102-8331
http://www.php.co.jp/
製作日：二〇一二年一〇月四日